

奇譚クラス

◆ 新しい風俗文献誌

3



奇譚クラス

3

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisynpon

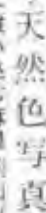
Osaka, Japan



雑誌コード 2805

3月号 ¥350

カメラ・ハント楽我記……辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る……堀本鉄三



女体緊縛の華

・本誌写真部構成

緊縛女体の光と影

點集結構成

痛柱海奔妖酒な可は美 荒柱

逆愛倫倫身求浮羅

◆本誌創刊二十五周年記念◆ 百万円懸賞原稿募集

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽ 内 容 △

一、飾りから原稿を募集した。多量の模倣作が寄せられた。これに對しては、編輯の爲に、更に一度、その力を發揮せしむる爲に、一、飾りから原稿を募集した。多量の模倣作が寄せられた。これに對しては、編輯の爲に、更に一度、その力を發揮せしむる爲に、

▽規定△

▽規定△

[illegible]

勇敢な女性の出現を望む

○本誌の内容充実に刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇氣を奮つて御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年齢、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には老万円で拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さいるようお願いいたします。御都合に依つて分譲用又は助手介添え或はブレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真と同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがないければ、なくとも差支えありません。

申込先 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
晚出版株式会社編集部宛

〔最近作緊縛傑作フオト〕

開股竹棒蓋恥責め

大手札三枚一組 略号「ねろ」 四〇〇円

逆エビ責め手足縛り

大手札三枚一組 略号「ねき」 四〇〇円

竹棒開股強烈繋り

大手札三枚一組 略号「ねく」 四〇〇円

鼻責めと鼻孔大写真

大手札三枚一組 略号「ねけ」 四〇〇円

首縛後手強烈縛り

大手札三枚一組 略号「ねこ」 四〇〇円

全裸開股膝頭縛り

大手札三枚一組 略号「ねさ」 四〇〇円

菱縄縛り竹棒責め

大手札三枚一組 略号「ねし」 四〇〇円

柔肌に喰込む縄目

大手札三枚一組 略号「ねす」 四〇〇円

豊満な全裸を弄る

大手札三枚一組 略号「ねせ」 四〇〇円

逆エビに痛める魔手

大手札三枚一組 略号「ねそ」 四〇〇円

黒髪をいたぶる手

大手札四枚一組 略号「そや」 五〇〇円

菱縄縛りにあえぐ

大手札四枚一組 略号「そゆ」 五〇〇円

強烈後手縛りの狂態

大手札四枚一組 略号「そき」 五〇〇円

牝犬奴隷の醜態

大手札四枚一組 略号「そよ」 五〇〇円

全裸二つ折り縛り

大手札四枚一組 略号「そむ」 五〇〇円

菱縄しばりの表情

大手札四枚一組 略号「その」 五〇〇円

八の字開股蓋恥責め

大手札四枚一組 略号「そか」 五〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す

大手札四枚一組 略号「そえ」 五〇〇円

奴隷捨札開股縛り

大手札三枚一組 略号「きむ」 四〇〇円

菱縄強烈開股縛り

大手札三枚一組 略号「きま」 四〇〇円

竹柱立縛り晒し看

大手札三枚一組 略号「きみ」 四〇〇円

柱宙縛り苦痛表情

大手札三枚一組 略号「きめ」 四〇〇円

猿轡股間縛り歩き

大手札三枚一組 略号「きも」 四〇〇円

浣腸にむせび泣く女

大手札四枚一組 略号「つゆ」 五〇〇円

身動き出来ぬ強制浣腸

大手札四枚一組 略号「つえ」 五〇〇円

竹棒開股苦打ち縛り

大手札三枚一組 略号「つひ」 四〇〇円

後手吊りにもがく女体

大手札四枚一組 略号「くて」 五〇〇円

逆エビ縛りの色々

大手札四枚一組 略号「つか」 五〇〇円

逆さ吊りと足吊り

大手札四枚一組 略号「つよ」 五〇〇円

片足吊り上げ縛り

大手札四枚一組 略号「つお」 五〇〇円

美しき臀部を晒す

大手札四枚一組 略号「つや」 五〇〇円

階段に晒す全裸身

大手札四枚一組 略号「つく」 五〇〇円

花瓶を太股で挟む裸身

大手札四枚一組 略号「つね」 五〇〇円

麻里子の裸身をあばく

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

柱に立縛りの全裸身

大手札四枚一組 略号「つな」 五〇〇円

絶妙の鞭打ちポーズ

大手札四枚一組 略号「つに」 五〇〇円

悶える白肌を俯瞰する

大手札四枚一組 略号「つめ」 五〇〇円

両膝頭開股宙吊り

大手札四枚一組 略号「くち」 五〇〇円

片足拳げ吊り責め

大手札四枚一組 略号「くも」 五〇〇円

両手吊りに悶える女

大手札四枚一組 略号「くい」 五〇〇円

開股責めを悦ぶ女

大手札四枚一組 略号「くあ」 五〇〇円

両手万歳吊りにもがく

大手札四枚一組 略号「くむ」 五〇〇円

静子夫人への蓋恥責め

大手札四枚一組 略号「くめ」 五〇〇円

雁字搦目縛りにうめく

大手札四枚一組 略号「くと」 五〇〇円

八カ月の妊婦に革具責め

大手札四枚一組 略号「へね」 五〇〇円

増田みゆき

大手札四枚一組 略号「への」 五〇〇円

激痛に耐える鞭打ち表情

大手札四枚一組 略号「へわ」 五〇〇円



徹底の自誌本

一、本誌は特殊な風俗文藝を研究する平和で健康な社会生活を営む真面目な成人を対象として編集しておりますが、青少年の保護育成に關する条例には抵触しないよう、十分な配慮を今後更に徹底いたします。

奇クサロン

233



マゾに徹した半生……… 関 横通
夫婦ブレイ・サロンの提唱……… 紀川 正信
サロンの素我記(第八十一回)……… 辻村 隆
愛妻の緊縛フォト……… 和歌山K生
短歌「せり市商品」……… 高村 初子
谷山久美子を誘ふ……… T・T生
「写真集」とタバコ責め……… 城野 道一
臨時増刊「写真集」特集号に想う……… 麻仁野天阿
編集部だより……… 堀 集 郎
仲間入りさせて下さい……… 土田 純一
緊縛フォト雅感……… 朝野 祐
SMジョーク……… 丸山秋目男
遅くなってすみません……… 小竹 一浩
妻の調り写真です……… 桐 青 生
随想 縄の恨み……… 早木 夢二
サド女性に憧れる……… T・日生
肥満美を恋うる……… 赤州 修造

奇譚クラブ

△第二五巻 第三号・通刊第二百七号△

(昭和四十六年) 三月号 目次

△本 文△

- 罪で一言「遊びの哲学」……… 美山源太郎(9)
意見「蟬螂の斧」△水平思考のススメ△……… セトヨシヤ(10)
フェチ告白「甘い回顧」……… 須田 章(22)
「SHOW」ほど「調教」(上)……… 野真比呂志(24)
告白 私のSM願望……… 千葉 青鬼(34)
連載小説「大噴火」(第三十四回)……… 由利美千子(42)
被虐の旅シリーズ 赤と黄の衣裳……… 六橋美代子(50)
懸賞入選告白「ハリツケ残酷記」……… 弓 敏太(64)
懸賞入選創作「人工庭園」……… 中康 弘通(72)
結晶 三島由紀夫の死……… ラムワカ(74)
助太刀娘相撲 ク梢の冒険(下)……… 奮斗士好太(84)
水田真紀子「スチチュワデイス」……… 水田真紀子(94)
文壇の閉鎖の系図 女人斬首の構想……… 南 彦造(100)
連載・アブ紳士行状記「M派交友録」(88)……… 鬼山 綱策(100)
SMカメラ・ハント△和泉弥栄の巻△……… 辻村 隆(100)
「乳房に咲くほりもの桜」……… 佐野さんに思ふ「七分咲の妊婦腹」……… 高野 原美(100)
性文壇を巡って「性典入門」(3)……… 斎藤 夜居(100)
告白 闇に咲く花(前編の夜の思ひ)……… 龍子田美夫(100)
新連載小説「パノラマ島秘譚」(1)……… 藤見 郎(100)
創作「テレパシー」……… 林 たけし(100)
創作 紳士たちのための人間浄瑠璃……… 宇光 仙(100)
ある夜のバブニング「Mの裏側」……… 馬場 好男(100)
すみ子の告白 パーティの二人のドレイ……… 清川 純平(100)
お艶奮戦 女房相撲……… 椿 寿郎(100)
連載小説「花と蛇」△読者第七十二回△……… 山本 一彦(100)
旅の収獲 寺の灸……… 中山 二郎(100)
「花と蛇」の「京子」についての要望……… 編集部通(100)
読者 通信……… 読者ギャラリー 春川ナミオ・室井亜砂路・豪 城二
岡野たかし・志羽 利也・鈴鹿野次馬・須坂 旭
目次カット……… 「吊り」緑JOE・「入場」……… 雄松比良彦
群カット……… 「美 画」……… 岡 たかし

映画紙焼付極鮮明写真

〔美人モデル緊縛フオート〕

鞭打ちによる感傷の表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めち)

股裂縛りて痛打する

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めの)

海老縛りの鞭打地獄

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めぬ)

尻立縛りて強打に泣く

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めし)

ムチは臀部の双丘に炸裂

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めけ)

鞭に悶える鉄砲責め女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めま)

逆手吊りて晒す臀部

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めむ)

鞭の縛りに夢心地表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めり)

鞭は美体にからみつく

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めも)

狂う鞭に狂い泣く女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (める)

両手吊りの女体に強打

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めさ)

鉄砲縛りに鞭打の雨

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めせ)

鞭打ちに示す感泣の極致

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めて)

逆海老開股縛りに鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めひ)

ムチに悶絶した美夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めへ)

のけぞる悦満表情の露呈

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めふ)

責めによる美的法悦表情

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
関谷富佐子 (めら)

妊婦開股縛り哀歎

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わう)

八カ月の妊婦開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わの)

妊婦太鼓腹開股縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わえ)

妊婦美人嬌態の立像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わお)

妊婦美人嬌態坐像

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わき)

両手吊り片足挙げ妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わく)

八カ月の妊婦両手吊り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わさ)

突き出した腹部の妊婦美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わし)

両手吊りの妊婦正面

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わす)

縛られた妊婦の艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わせ)

両手一本吊りの妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (わち)

恵子の妊婦美緊縛

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おに)

初妊婦の太鼓腹の美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おめ)

裸身縛りの妊婦美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おす)

身籠った裸身責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おも)

麗わしの妊婦縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おひ)

膨満の腹部緊縛美

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 (おみ)

立縛り愛責め引回し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おけ)

猿轡の裸身を晒す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おふ)

後手縛りて引回す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おく)

片足吊り上げ責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おて)

憂愁夫人の愛縛縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おや)

柱対向立ち縛りの夫人

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おあ)

片足吊り股裂き責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (およ)

逆エビ責めに泣く女

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おわ)

柱正面立ち縛り嬌態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おの)

股間縛りにもかく女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 (おう)

豊満の女体をくびる

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
愛知 葉子 (おれ)

開股前屈愛撫責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
愛知 葉子 (おね)

逆エビ縛りの愛撫

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
愛知 葉子 (おな)



岡 かし・画

“遊び”の哲学

日本人はテンション民族と言われるくらい、終始緊張しきっている人が多いようだが、モータリゼーション社員ばかりではエコノミック・アニマルとしての経済的発展はあっても、人間として生きる生活の潤いがなくなってしまう。

SMの道にしてもそうである。相手の身体に傷痕を残したり、血を流したりするのは、SMの邪道というよりも、最初から『紳士の遊び』と称せられるハSMプレイの範疇に入れるべきではない。ハSMプレイとは、飽くまでも含みであり、遊びであり、余韻でもある。深く秘められた陰翳といってもよい。

プレイも適度の“遊び”がなくては抵抗と摩擦で焼き損じてしまう。ましてや、長い人生に“遊び”という潤滑油がなくては、やがて軋轢のために重大な支障を来たすことは明らかである。

豊かな人生を有意義にエンジョイするため、SMの真髄を極めようとするれば、先ず“遊び”の哲学を理解する必要があると提唱したい。

ハSMプレイも“遊び”であるが故に溺れることもなければ流されることもない。尽きることのない甘美な樹液だけを吸収し夏を謳歌する蟬のように。

(美山源太郎)



意見……水平思考のススめ

蠐 螬 の 斧

セ ト ・ ヨ シ ヤ

のである。少なくとも、氏の皮肉に曰

く処の「流行だからといって、半可な

SM知識で矢鱈にSMじみたものを混

入しただけの小説なんぞはいい加減にしろと

言いたい、などと壮語する、エリート意識横

溢の高級ハイブローなる趣味人」だと思っ

てゐるらしい、一部読者の幼稚さ加減に比べ

ば天地雲泥の違いがある。実際、世の中には

妙な氣遣いが居るもので、テメエの氣遣い加

減をマトモな人間に向かって臆面もなく誇示

する氣遣いが居るんだから、如何にも狂人ら

しい発想であり、言動だけれど、顎がはずれ

て開いた口がふさがらぬ。

このたび、いみじくも我が尊敬しつつある

須渾氏が、一部読者の部分的愚昧ぶりを喝破

なされたので、その驥尾に附して一寸ばかり

毒づかせて戴くとするが、以下は、あくまで

一読者の個人的な意見であり全て「皐月の鯉

の吹き流し——口先ばかりで腹ワタは無し」

なので、さほど、氣に留める必要はありません。

無論、笑うか怒るかは、読んだ人の勝手

です。僕は関知しません。

半年ほど以前、何時も決まって自らを「奇

ク・オールドファン」とか誇りつつ語る、実

ろくに本の精読もせず、不勉強な私が、こ
ういうことを書こうと思うのだから、とって
も生意気で、とっても面白い……十一月号の
須渾朔氏「あるマジメなたわごと」を読み、
久方ぶりに笑った。氏の一連の「たわごと」
には、僕の軽い筈の頭も不思議に下がりっぱ
なしだが、そのノーブルな人格から滲み出た
「価値あるたわごと」は、揶揄一つ皮肉一つ
を取っても、全く以て峻切にして犀利そのも

に稚氣あふれる御仁が「世間の今更ながらの風潮は、我々のような古くからのKK読者の目から見れば、おかしくて、吹き出したくなる」とか、本当に吹き出したくなるようなオカシナ自慢たらたら「プロ作家には筆力あれども内容がなく、本誌傘下の作家陣には内容あれども表現力なしと、相方ともに相足らざる嘆きがある」とか、的はずれの許され難い冒瀆的な評を下し「目が肥えてくるとニセモノとホンモノの区別がちゃんといってくる」とか再び訳の分からぬ自慢たらたら、お気に召すまま言うまま気ままにダベくっていたがマッタク、恐れ入って、スワリションペンをチビリそうになった。

マア、御当人氏は、悪気があって言ったのではないと思うが、些か病的な言であり、悪質な評ではあった。何なら、ひとつ御自分で「ホンモノのアブ小説」とやらを書いて欲しいものだ。僕の見た限りではプロ作家の多くは本誌には余り見られぬような、実にメンタリティーに豊んだアブを描いているし、反対に、本誌傘下の作家にだって、単なるアブ小説を書かすには勿体ないほど全てに通じた高級な作家が居る。

例えば、宇光仙氏だが、氏の作品は感性的

に過ぎる、という誹謗を浴びせる向きもままあるうが、これこそアブの極致だと僕は思うし、でなくとも、個々の描写は存外フィジカルな描写をしているし、常に研ぎすまされた考察なり思想なりが潜んでいるし、表現力にしてもチンケな大衆作家など下駄を脱いで駆け出すほどだし、スタイルなども細密でロジカルで力強いし、芳野眉美氏の作品などは、極めて男性的（フィジカルかつ、ロジカル）で隙がないし、「青春の陥穽」など実に精緻な伏線を張り誰が読んでもついつい首肯かざるを得なくなるような必然性の高いプロットを組むし、そのうえオジさんとは思えぬほどの瑞々しい感覚や詩的な情感を散りばめるし折り返しに飛び出す「考察」や「学問」やウ

イット等の価値たるや、これまた大であるしその他の作家連についても、真砂氏、千葉氏、千草氏、鬼山氏、浅羽氏などなど挙げればキリがないし、一晚や二晩では語り尽くせないものがあるし、とにかく、僕は本誌の作家陣が「筆力に乏しい」などとは、どうみても思えないし、ちっとも思わないし、ぜんぜん思ったこともない。マア、それほど力を入れて読まないからかも知れないが、筆力があるかないかぐらいは、パラパラ拾い読んだだけで

も分かるはずだ。

大体「プロ作家とは筆力があるもの、アマ作家は表現力に乏しいもの」なんていう妙な先入観念を持って読むから、妙な評価を下すんですよ。音楽や文学や絵画などの所謂、芸術と呼ばれるものには、プロもアマもない。唯、それをメシの種にしているか否か、だけだ。田舎のオバさんが一躍、ベストセラーの大文学を出すでしょう。

早い話が、プロ作家の、我らが鬼六の「花と蛇」にしても、そりゃマア、何処やらがムズムズしてくるほど最高だとは思うけど、僕の場合、その「最高」はサワリの描写についてのみ言えることで、言うほどの小説ではないと思っっている。責めのための責め小説という感じが受けない。タマにはヘンテコリンな隙を作ってシラケさしても下さる。一例を挙げれば「甲の身代りを乙が買って出る」とかの手法をよく使うようだが、些か軟弱に見える。人間なんて奴は逆境の真っ只中に居る時には譬え親兄弟といえども容易にかえりみないものだ。おまけに彼女達の助け合い運動は京子と美津子を除いては全て血縁のない他人相互間で為されている。放恣三昧に育った高慢ちきな令夫人や令嬢や現代っ子達が一樣

に大時代の人情芝居的一幕物みたいな真似をするとは、ちと、お粗末に過ぎるという感じがしないでもない。恐れ多いが、一寸シロウト考えを言わせて貰うなら、タマには「自己の羞恥を減殺せんがための『ポーズ』」として、ことさら他人をかばう」とか何とかの、色々ヒネクツた心理描写もして欲しかった。その方がリアルだし、羞恥の程度も窺えるし、一部のエリート読者がよく言う処の「人間性を追求した大文学」ならばその程度のことは当然やらなければならぬと思うのだが。マア、団氏自身は「俺はエロ小説のつもりで書きなぐってんだ」とか僕好みの誠に痛快なことを言っておられることだし、僕が幾ら小生意気なことを言っても僕らなどには到底書けっこないし、第一、ここまで持ってくるだけの創作力が初めっからない。だが団氏はこの大作の他に何本も書いている鬼才だ。この辺がプロのプロたる所以であるが、唯単に一本の作品を読んだだけでは、プロの物かアマの物かは容易に判別できないものだ。「それはオメエがマジメに読まないからだ、読解力がないからだ」と言われれば返事に窮すが、この種の物はなまじマジメに読まない方がマトモな評価が出来ると思うし、とにかく、僕に

は分からないんだから仕方がない。プロかアマかは勿論、ニセモノかホンモノかの区別なんて全く出来ない。第一、そんな区別が果たしてあるのだろうか。書いた人がその方の氣違ひでなければニセモノなのか？ まさかそんな馬鹿げたことを言う筈はないですよ。もしそうだとしたら、男が女性心理を扱った物もニセモノだし、一般作家が外科医を扱った物もニセモノだし、フィクション物は全てニセモノになってしまうし、それより何よりそんな区別は、作品とは関係のない処の区別だ。とする和我々に理解出来ないものやリアルでない物をニセモノだと言うのか？ だったら「カメラハント」や「カメラルポ」だって全くのニセモノになってしまう。読者の中には此れらを全て実在の描写だと信じて読んでいる素直な向きも多々いるだろうが、僕はそうは思っていない。読ませるに足らしめるだけの努力が払われてあるだろうし、多分に誇張を含んでいると思っっている。例えば「カメラハント」に二度三度「牝犬にジャージャーひっかけて嗜虐の極に耽った」とかの垂涎的シーンがあったが、男はコーフンしている時には幾ら頑張ってもチョロツとしか出やしないということは、経験者ならば、知ってい

る。陰萎の人はどうだか分からないが少なくとも僕には出来ない所業だし、一般的にみてリアルな描写ではないし、生理学的にみれば大きな誤謬である。だが、こういったものを全て馬鹿正直に書けば、それこそお笑い物になってしまうのだ。ノンフィクション物も、或る意味では、創作物より苦勞がいるし技巧がいる。嘘をつく技巧だなんて言えばヘンだが、事実そういった技巧も大いに必要だ。写真で見れば大した女じゃねえのに、文章では恰も女神の如く感じさせるように書かなければ読者が満足しないし、不思議なことにも、被虐を欲ぶ牝犬である筈のモデルまでがエゴイステイックな文句を言うんだから。この辺が女性Mと男性Mの本質的な違いであり、M女は全て標榜上の皮相なMでしかないということなんだが、とにかく、フィクションにしろルポにしろ、読ませるだけの物を書くということは骨の折れる仕事であり、その出来る者は、文の巧拙はどうであれ、筆力ある作家だと言っていると思うしホンモノである。要は読むに足るか足らぬかということだ。筆力のない者に、読むに足る物を書けない。余談に過ぎたが、とにかく（とにかくが多

はマニア小説家として、巷間プロ作家に比しても遜色のない、否、勝るとも劣らない筆力ある作家だと思ひ、プロ作家のAの作品も、それなりに内容ある小説だと、好意的に私見する。

はつきり言つて、僕は本誌のホレたハレたで縛りまくるSMこそ、SMではなくSMまがいであり、オアソビだと思つてゐる。勿論その方がいいに決まつてゐるが、SMとはそういうものではない。本誌に於けるSMやAの多くは、我々マニアによって多分に遊戯化(日常化)されたAであり、現象的物理的Aであつて、世間一般にいうAとは性質が違ふ。そんな感覚で世間のA的作品を読んだ処で正当な評価を下す事はできない。

本来、Aノーマルな性には愛情の一片だに存在しないものであり、在るのは狂気の欲情のみであり、SMなどは憎悪に発したものであり、不平に充ちたものであり、よしんば愛情が存在しても、それは一方通行であり、又そうでなければ最早SMとは言えぬ、と解す。本誌以外の内容のない筈のA的作品の多くはそれが守られてゐるようだし、多分にメンタルな事象を描いてゐるし、SM混じりの物にしても必然性に乏しい縛りシーンなど

は出て来ない。この辺がプロ作家の一般向け作品と、マニア作家のマニア向け作品との、内容の違ひなのだ。本誌でも、真砂氏の「壺中の園」など、M的作品は全般に、一方通行の愛や、欲情のみの掘みを旨く描き、且平穩無事の裡にSM効果を上げてゐるが、単なる暴力事犯小説や縛りづくめの小説やホレホレムードのSM遊戯小説をSM小説の代表だと思つてゐる読者には苦笑を禁じ得ない。無論、そういった作品がダメな作品だということでは断じてない。僕もマニアであるし人間が素直に出来てゐるから、そういう物を好むし抵抗なく読める。だが、これはあくまで我々好みの小説であつて「これがSM小説なのだ!」と決めつけるのは些か早計だし決定的なものなど存在し得ないと思う。世のSEX小説に決定的なものがあるだろうか? つまりは種々のバリエーションの夫々を扱うのみに終るのだ。

先般、僕も洒落のつもりで本誌向けのMの駄作(本人は寓話のつもりで書いたのだが)を、チャットと発表させて戴いたが、僕はM性向も何となく持つてゐるが経験は皆無に等しい。だが、なまじの経験あるSより、白紙のMを扱ったものを書く方が、筆がよく動く

ような気がするし、まっすぐな物が書けるような気がする。読んだ奴がダメだと言っても俺がそう思つたんだから間違ひはない。作者の想像力によつて、頭の中で事実を仮設してゆく小説とは所詮そういうものなのだ。下手な経験や己の嗜好では、マトモな作品や読んで面白い物は書けやしない。必然性の高いプロットを組み、真に迫つた人殺し小説を書く推理作家やハードボイルド作家に、人殺しの経験がありますか?

要するに、狂人が狂人を扱つた物を書いた処で、狂人本意の、狂人好みの物しか書けないってことです。性向から滲み出た作品などと慰めてみた処で、それは、性向に溺れた一人よがりの自慰的作品に過ぎないかも知れない。そんなものは告白手記とかマニアの夢想としては大いなる価値があつても、小説としては大して価値がない。同一性向の者が相手をして、他からみて蒙昧さが暴露されるような物や、痴人が夢を説いただけのよなプロットの甘い必然性の乏しい物は、もはや小説とは言いかねる。我々がまっとうな物を書くには、少なくとも傍観者の考察が必要なんだ。「家畜人ヤプー」が小突かれながらも世に出たのは、筆者が、我々の知る処の

幼稚(?)なSMを抹殺し、SMというものを高次元的未来的幻想的、且、すこぶる官学的術学的に、語ったからだろう。だがしかし本誌読者の多くは「家畜人ヤプー」等よりは寧ろ実在的な「壺中の園」を好み「青春の陥穽」を愛すと推察するし、事実がそうであろう。この辺もまた、マニアと大衆の、フィードリングの違いなのだ。大衆が本誌の縛り小説を読んだ処で、面白くも何ともない。

所詮、本誌作品と巷間の作品とは比べられるべき性質の物ではないということだ。又、比べる必要すらもないでしょう。僕も戦後の教育を受けた確たる現代人なので、アナクロ的活字人間ではないが、本は乱読乍らも割と読む方である。が、それは大脳に動脈硬化を起こさせない為に読むのであって単なる興味からではない。この伝からゆけば本誌の作品などはおおむね読むに足りないものになってしまう。だが僕はマニアであるから三五〇円を惜し気もなくはたくのだ。だから僕は、この種の雑誌は、本誌以外に買ったためしがない。買う必要がないからだ。

一体、僕は本誌のアブ作品は「花と蛇」に代表されるような、卑猥で淫靡なエンターテインメントであって欲しいと願っているし、

アブ小説なんてのは一種のユーモア小説だと思っているが、本誌に隠見する縛りづくめの小説や、ホンワカムードのSM遊戯小説などは何と名付けていいのか思案に余る。前者は言わずもがな、後者は言ってみれば世に氾濫する高尚(?)なポルノグラフィにSMの毛を生やしたようなものだが、アツアツムードは告白とか体験記などに任せればいいのでSM小説と冠するに相応しい筈の、内容ある筈の本誌SM小説では、あくまでSMを追求して欲しい気がするが、どうだろうか。SMは文字によって、小説によってしか追求できないものだし、追求してはならないものなんだから。無論、告白物にはそれなりの良さがあり、文献性もあり、絶対的な興味がある。女性が書いた物は特にいい。だが、それとは違った意味のアブも成可く多く読みたいし広く知りたい。低能で初心でストイックな僕にしてこれだから、ハイブローで達人で好き者のエリートさんは尚更でしょう。

「女は受身だから、本質的にMである」てなことを本気で思っているらしい処の女性が書いた、真情味あふれる作品を読むと、相手はババアかも知れないのに、飛んで行って、抱きしめて、チュウして、永久に御一緒したい

衝動に駆られるが、やっぱし小説としては何となく頂戴しかねる。SMは能動受動などとは全く関係はなく、つまり現象的物理的事柄とは無縁のものであり、心的行動によってのみ決まるということを知らないようなエリート読者などは居ない筈だし、女は生まれ乍らに魔女性を持ち、一旦残虐行為に出れば男など及びもつかないほどオッカナイ化物であるということとは、世間一般の誰もが知っている事実だ。小学生や中学生ぐらいの娘を見れば瞭然だろう。もともと人間社会は、男より遥かに生命力に勝る女が、積極的能動的に振舞い、狩をし漁をし、支配していたというが二〇世紀の今日でもそういう生活を営んでいる部族が存在しているそう。現代の女上位は、歴史のリフレインの兆見かも知れぬ。何処をどうつついても、本質的に受身だの、Mだのなんて馬鹿げた結論は導き出されない。大体、何でもかんでもSMに結びつけようとする処が氣違いの氣違い沙汰なのだ。我々が氣違いになったのは、生まれ落ちた以後の、学習によるものだ。遺伝ということも考えられなくはないが、病質的な遺伝因子や形質の遺伝以外は、全て学習によって左右される。それでは学習を否定すればどうかと言えば、

学習を拒否した人間は、人間はおろか、動物にもなれぬのだ。

ともあれ、本誌には、自己の性向に溺れきったような人間が書いた処の、狂人流自意識過剰型我田引水風自慰的考察をふんだんに取り入れた小説でも、小説として罷り通る。これはとりもおさず僕らがそういう作品を好んでいるからに他ならない。何となれば「耳ざわり」がいいからであり、そう信じたいからだが、畢竟するに、僕らはあくまでマニアであり、本誌作品は殆ど全て、マニアが書いたマニア向けの物であるということだ。

だからですね、狂人なら狂人らしく、もっと謙虚にものを見て、よく考えた上で評すべきなんですよ。いくら「我が子可愛や」でも一寸おかしいんじゃないですか。そりゃア、僕だって人に負けぬだけの本誌ファンだけれど、盲愛はしていない。我家の物でもダメな物はダメ、他家の物でもいい物はいんだ。世の中はキビシイですよ。昨今の本誌は、世間の物好きなオエラ方(?)にもチラホラ読まれているとか聞く。マトモな人間相手に気遣いの気遣いらしさをひけらかすなんぞは気遣い沙汰もいい処だと言える。そんな幼児的マニアが居るから、アブ行為そのものを幼

児SEXと呼ばれ、割とマトモな気遣いまで蔑視されるんですよ。「おかしくって吹き出したくなる」のは、間違っても、我々じゃないでしょう。

ついでに言えば、僕は元来、映画評論家とか音楽評論家などのような、テーマでは何も創らないし弾かないし、創れもしないし弾けもしない癖に、他人の創った物や演奏を云々して生活している寄生虫的人種は余り好きではない。批評家は犬も食わないという言葉があるが、本誌にはそれに似た人間がウヨウヨしている。此れが本誌最大の特徴だ。もっとも中には馬鹿丁寧につらねて、こと細かに評している興味深いものや、汗を流して材料を求めなければ書けないような批評もある。そういうのは譬え短い物でも一つの告白的作品として歓迎するが、批評のための批評や鼻唄まじりで書いたような「批評もどき」には辟易する。読者通信の小さな感想の方が遥かに心が籠っている。鼻唄まじりでホメるなら愛嬌にもなるがケチるのはどうかと思う。本誌作品の殆どは我々と同じ読者が書いた物なんだ。プロ的な作品ならまだしも、読者が創った物をケチるとは言語道断だ。僕は他人の論に賛否を傾けるのは人間として自らを確立

するための不可欠要素だと思っているから平生より大いに実行しているし不惑四〇迄は直行しようと思っているが、作品と名のつく物は小説にせよ絵にせよ、一切触れないことにしているし、評定した憶えもない。マア、ホメたい物は余り多過ぎて面倒臭いからだし、ケチりたくなるような物は、はなから問題にしないからだ。が、今回、語りの都合上、はしなくも信条を破ったので以後はどうなるか分からないけれど、個人の批評くらいアテにならないものはないんだから余り真に受けなさんなよ。前記の批評らしきものにしても全く個人的な単なる洒落に過ぎないんだから。批評なんてのは所詮そういうものなのさ。経済評論やスポーツ評論などには真理があるが音楽や絵や小説などに対する批評は個人の感覚だけだ。理論づける事からして、そもそも間違っているんだ。僕らが幾ら難しそうな言葉が無理して使って、まことしやかなことを言っても、気遣いは気遣い流の上にテーマ本意の物の見方しか出来ないし、幼稚な者は幼稚なんです。SMの如き不可解な性をとらまえて、美の芸術のと、前後を転倒した寝言を口走って悦に入っている僕らの何処が、エリートでありハイブローなんですか。美を探

求するためにわざわざ気違いになったんですか？ 気違いだから美しく見えるだけでしょ。S女性が男を縛って「美しいワ」などと気違いじみたことを言いますか？ こんな我々こそ「生かじりなSM知識でSMを云々するな！」と言われるべきと違つかしら？

我々は何処まで行っても単なるマニアに過ぎないということを忘れてはならぬ。僕にしろ、自分の気違い沙汰を判っきり知ってから二〇数年、ひたすら考え、調べ、経験して来たが、今だにSMの何者かは分からない。気違いに、テメエのやってることなど分かる道理がない。分かっているつもりでいるだけだ。唯単に学問的にしか知る術はないが、今日ある学問的事実には嘘が多く、個人の夫々の性向とも凡そかけ離れたものでしかないから、これまた大した役にも立たぬ。

とにかく、マニアはマニアであり、マニアの程度には強弱の差こそあれ上下の隔てなどはないということだ。十年二十年と本誌に親しんでいるオジさんオバさんも、今日をはじめて本誌を開いたボクちゃんやカワイコちゃんも、同じ「マニア」であり、情緒に歪みを持つ人間であり、精神的な不具者なんだ。人間は意志や感情が欠如すると、犯罪や暴力行為

も平気でやるようになる。ベトナム帰りの米兵が残酷な性犯罪を犯すのも、一時的な情緒のひずみからだということ、アメリカさんの方でやっとな対策を立ててくれたらしいけどそうなることは遠の昔に分かっていた筈だ。

戦乱の世には身の毛もよだつ残酷劇も平然と為されている。憎しみに染まった人間や、喧騒の中に居る人間や、愛に飢えた人間や、生き甲斐を欠落した人間は、人間的な意志が欠如し感情が退化し、必ず狂犬になるんだ。

だから僕らは、どんなに偉そうなことを言っても、幾分なりとも情緒にひずみを持っているのだ。SにしろMにしろ他のアブマニアにしろ、情緒にひずみを持つ精神的な不具者なんだ。精神異常者ではなく、精神的な不具者だ。馴致されたM的女性等は別な解釈が為されるが、とにかく、精神的な不具者という奴はなまじマトモな考えや言動が出来るだけに余計に始末が悪いとも言える。不具者の中でもSMistは最も強度の不具者なのだ。同性愛などは軽い方だ。日常生活に於ける権力欲や支配欲や、征服感や優越感や、それに伴う快感などは、我々の持つSMとは凡そ関係のない処のものなのだ。我々の中には、それらをSMとは紙一重だとか、我田に水引く者も

居るが、まるで見当はずれだ。譬えそれがSMじみて見えても、我々のSMとは、出発点にも到着点にも、天と地ほどの違いがあるという事は学問的に証明されるし、僕ら自身が最もよく知っている筈だ。又、正常人に折ふし見られるハレンチ行為は単なる突発的な行為であり、偏執的なものではない。無論、中には我々よりマニアックな狂人も居るだろうが、殆どは単なる猟奇心や一時の迷いであり常人が一時的にアブの境地に迷い込んだ時の心理は、我々の心理とは別個のものである。

だが僕らは常に欲求を持っているマニア（偏執狂）なんだ。この辺がつまり、正常と異常との分岐点だ。「正常と異常との間」が分からないとか仰有る狂人さんも、これでよく分かったでしょう？ それを自覚してれば、三文週刊誌の捏造記事などを拾い読んで、そうそう馬鹿げたことは口走れない筈です。

もしも、馬鹿なことを口走りたくなったら先ず「心身の平衡を失った者の感激生活は健康者の平凡なるに如かず、病み疲れた頭でする理解は健やかな者の無自覚にも及ばない」という理法だけでも、頭に置いてからにすることです。僕らが喜んだり感じたりすることは、イザリが車椅子に乗って喜び、五体満足

な者へ「お前さんも、ひとつどうかね？ 便利だよ」と言うのと同じことなのです。マトモな者から見れば、それこそ「おかしくって吹き出したくなる」でしかないのです。

我々が地球上で、人間として生きるためには常に、その場その時に在る真理を頭上に掲げて生きなければならぬのです。否、全ての人間はそうして生きています。又、そうしなければ生きてゆけないのです（その出来ない人や厭な人は、即刻、世捨て人となって人間を廃業しなさい。そうすれば誰にも文句は言われません）。無論、今日の真理は明日に変化するでしょう。しかし、それを我々の手で、我々の方向に持ってくることは凡そ不可能なことなのです。何故なら我々は人類生誕より今日迄の長きに亘る真理に於いて不具者であり異端者だからです。イエス・キリストを我々と同じに見立てた大馬鹿者が居ましたが、キリストは神の化身ではあっても不具者や異端者ではありませんでした。彼は己の為にではなく、他人の為に、人類全体の為に、自らを犠牲にしてまで事を成したのです。我々の中に一人でもそんな人間が居ますか。狂気の快楽に溺れるのみならず、その気違い沙汰を正当化するのに躍起になっている

デメエ本意で姑息な気遣いばかりでしょう。私利私欲では、決して真理は曲がりません。

欄筆に際し——普段は至って従容な凡夫なのですが、一旦行動に出ればトコトンまでやらずにはおさまらない異常なタチなので、気の向く尽に色々と支離滅裂に言いたい放題を申しましたが、僕は何も本誌の内容をアツプしろとか、陰湿なアブをきわどく追求しろとか、メンタルなものを増やせとか、純文学に肉薄する小説を載せろとかの、たわごとを言っているわけではありません。語りの都合で偶々そうなっただけのことで、もしもそんなことになれば本誌の存在意義は少なからず喪われるだろうし、第一僕自身「文献誌」などという表題までを横眼で見るほどの下衆マニアなので、本誌はあくまでポルノグラフィックな色調を持つエンターテインメント誌として、絶対多数の読者を欲待すべきだと思いますし、又、そう願っています。唯、以上の無礼極まる妄言は、一人の不遜なマニアが一部の傲慢なエリート読者に蠅螂の斧を振り、或は、泣いて馬鹿を斬った、というだけのことです。

尚、文中、前半部に於いて、ややソフィスティックな論法を弄した個所が二、三ありま

すが、これはカマキリの斧の切れ味を少しでも良くする為に、敢えて使用したものです。お気付きになられた向きもあろうかと思いますが、下手な演説に上手な詭弁口調はつきものである、御海容のほど——。

附 録

「水平思考のススメ」

時に皆さん。余りつまらぬことを言いつつに皆さん。又ぞろオマワリさんに睨まれることになるかも知れませんよ。本誌が投獄されるようになれば、その前に弾劾されるのは他ならぬ皆さんなんですよ。

歴史というものは、或る程度まで飛躍すれば、必ず立ち戻り、繰り返されるものなんです。如何に科学が進み、文明が開けようとも全人類の過半数の本性が一時期に、根底的にくつがえされない限り、新たな歴史は生まれないのです。SMの歴史は何千年何万年、いや、人類生誕とともに在る筈です。それが未だに陽の目を見ないので。つまりSMは、人間の日常生活は勿論、性生活の技巧としても必要性に乏し過ぎ、背德的に過ぎるからなのです。全ての生物が持つ「あくまで自己を護る」という根源的な本性や、多くの動物が持つ「仲間を助け合い傷つけない」という社

会的な本性等をくつがえすほどの力がないのです。そして人間の持つ、それら各種の本性がくつがえされる見通しは甚だ暗いのです。人間の歴史は常に繰り返されるのみだからです。人間には常に、一定の地点に戻ろうとする本能も働いているのです。今や猥雑な性の氾濫を嫌った人間が増え始め、性からの解放自由からの遁走が叫ばれているでしょう。

フリーSEXやフェラチオやクリニクスなどにしても、何も新しく生まれた性ではありません。原始SEXであり、動物のSEXなんです。動物は相手の匂いを嗅ぎ分けてから行ないます。第一、日本でいうフリーSEXなどは欧米あたりのものとはまるで考え方が違います。「愛する人には上げましょう」というのがアチラの考え方なのです。

又、昔の姦通や男の浮気は、今のアウトSEXですが、これは決して一般化しない筈です。何故なら、そんな必要があるのなら、その前に「結婚」という大古の因習が否定されるべきだからです。結婚したアトでヤイノヤイノと言うのなら、結婚なんかしなければいいし、結婚する必要もない筈です。テレビや週刊誌などでアウトSEXを唱えているのは全て既婚のイイトシ食った人間ばかりでしょ

う。あんなのはずれのことを言うのなら、その前にテメエ達が犯した大きな誤謬を謙虚に反省し、次代の者へのプレゼントとなる結果を出すべきなのです。余りに泥縄的利己的衝動的に過ぎます。奴らが幾ら口角泡を飛ばした処で、地球上から結婚という因習が消えない限り、フリーSEXもアウトSEXも一般化は致しませんし、新たな歴史は生まれません。でも、結婚という因習は決して消えることはないのです。何故なら、人間は独占欲という甚だ強い本能を持っているからです。原始時代のフリーSEXが廃され、結婚という物が生まれたのも、種保存の欲求に相乗する処の、この「独占欲」によるものなんです。

いいですか、いいですね。結婚というのは社会秩序の意味から誕生した思考ではありません。禽獣の本能に基づいたものなんです。分かりますね、小杉さんどこの素敵な千恵さん？ じゃあ、スペッシャルな貴女の為にスペッシャルサービスとして、別な考え方もしてみましようね。いいですか、男は性欲を所有していますが女は性欲に所有されているとか言います。つまり女は己の性欲を、己でセーブできないのです。そして女は生理的精神的に、常に一人の男にしか愛を傾けること

ができないのです。そのうえ女の独占欲は男のそれより遥かに強いのです。だから何時の世にも、女の火遊びは、唯の火遊びでは済まなくなるのです。だから、アウトSEXなどは決して一般化はいたしませんし、認められはしません。いいですか、いいですね。

じゃあ、もっと別な考え方をしましょう。決定的なヤツを行きましよう。いいですか皆さん。来年のことを言えば鬼が笑うとか言います。未来の希望的観察をする前に、過去の事実を知ることです。我々の未来で分かっていることは「死」のみなのです、否、それすら確かだとは言えません。明日のことは誰にも予測がつかないのです。逆説的に言えば、人間の一生がどうにかこうにか救われているのは、その生涯の予測がつかないからなのです。明日の予測を少しでも確かなものにする為には、先ず過去の事実を知ることです。人間の歴史というものは、眼に映る部分は些かに変化しますが形而上のものはそのまま残り繰り返されているのです。ハカマもモンペイもスラックスもパンタロンも、つまり処は同じものなのです。ミニが過ぎればマキシになるのです、まるで明治大正の装束です……コンチクショウ、ビリビリひんむいて、ギリギ

リふん縛って、ビシビシぶったいて、グビグビ注ぎ込んでやろうかッ、長くするならするで、チャイナ風にしろー！なんてことを言っただけ、いけないのです。いいですか、いいですね。世間の奴らのすることは、うっちゃらかしておかなければ、こっちがバカをみるのです。世間には我々よりバカなことを口走って喜んでゐる医者や女作家や評論家やチンケなタレント達が居ますが、奴らはマスコミに騒がれることを喜ぶ、全くの変質者なんです。或は、性能力の衰頹した者達がやってゐる処の、単なるマスターベーションに過ぎないのです。だから相手にする必要などありません。無論、そんな奴らが我々のことをのしければ断乎闘うべきです。でも、今暫く黙って見ていましょう。

でもネ、本誌愛読のお嬢さん方は、何時までもミニでいましょうね、パッチリ目立つようにね。いい提案でしょ、約束ゲンマンね。いいですか、いいですね。分かった人は逆立ちして両脚をウーンと開きましょう！ハイそのまま。あら、オタク穿いてないじゃん、ひっぱがす愉しみが減るじゃんかよ。ほんじやマ、ひっぱがす代りに、ひんむしって土器にして、クレパスでもジツクリ覗いてみると

すっか。てなことを言っても、本誌愛読の女性性は男のジョークが解せるハイレディーだから、決して、絶対に……多分、怒らないのです。言葉一つにもTPOがあるのです。いいですか、いいですね。

分かりましたか皆さん。以上のようなのを水平思考というのです。碁を打ち将棋を指す時に使う、あの、コンピュータにも出来ない、柔軟で臨機応変で推理的でキメ細かな考察です。一部のエリート読者が仰有っていらっしゃるのには狂人独特の、高い処から一気にドボンと落ちる垂直思考なんです。だから余り真に受けてはいけません、本当の気遣いになってしまいます。水平思考というのは教養や知識の有無には関係ないのです。大衆の思考であり、学習に因るものなんです。人並の知性を持っていれば誰にでも出来るものなんです。男の人や若い人には特に簡単です。近頃では、エリート読者にヘツラって、何の考えもなしに雷同している青年を折ふし見かけますが、愚かなことです。そんなことでは、SMは決して伸展しません。もうそろそろ、SM遊戯とかの、道理にはずれた幼稚な呼び方をやめて、SMセックスと改名すべきなのです。ホモプレイとかレズプレイなんてバカ

な呼び方はしないでしよう。ホモSEXでありレズビアンラブでしょう？プレイとは即ち、単なる遊びに過ぎず、ラブやSEXとは即ち、人間にとって最も意義のあるビューティフルなものなんです。以前、SMPの提唱とかいう評論を眼にしましたが、プレイなどと呼ぶのは、自らの手で自らの首を絞めてるようなものです。譬えコイトスが介在しなくとも、SMセックス——SMSと呼ぶべきであり、それが当然なのです。口に出して呼ぶ際には「プレイ」でいいですが、意識の裡では、あくまで「SMS」としておくべきなのです。そうすれば幾らかでも道が開けてくる筈です。いいですか、いいですね。このことは、いずれ気が向けば思いっきり毒づかせて戴きますが、とにかく、今こそ、幼稚で猥雑なるSMPは伐つべし！なのだ。

——しかし、俺も相当幼稚だねえ、相当なんてもんじゃねえや、すこぶるつきだわ。何時も脱稿寸前に、自分のやってるムダなことに気付いて自己嫌悪に陥るんだけど、性こりもなくやらかすんだからねえ。この辺が氣違いの氣違いらしい処なんだよな。誰かさんや誰かさんに「名の本も鼻につくやんか！」なんてブツ叩かれそうだけど、俺は名の本でも

名香でもねえもんな。悪臭ふりまくスモッグだ。はなから鼻についてる。

ほんだけど、ムダムダと仰有いますが、考えてみれば、現代のようにムダを嫌った生活ほど味けないものはないんだよな。そこへ行くとオメエさん方は、全くムダな文章を腹も立てずによくマア此処まで読み通し、随分と人生を潤おしているじゃんか。それでこそ俺っちもムダのし甲斐があったってえもんだ。ほんじゃマ、ムダのしついでに、気分直しに少し有意義な話でもしようか。断わっとくけどオメエらの為の気分直しじゃねえよ、俺自身の気分直しだよ。いきなり乱れるけど、ビツクリしなさんなよ。

ほんでもってよオ、書く奴がバカなら、載せる奴も幾らかバカで、読む奴だって一寸ぐらいはバカだよな。アンタかてアホやろ、ウチかてアホや。ウチがアホならアンタかてアホや。お前のカアちゃん、デーベソ……子供は幼稚だけど、無邪気でいいねえ。最近の俺は、ニンフにまでも非常なる興味を持って、本当に、困っちゃうなア、なんだがねえ。誰か、小学六年生くらいの可愛いコをソートと紹介してくれよ、MでもSでもシロウトでもいいからさ。A感覚の優秀なコなら、メッタ

メタに惚れちゃうよ。もともと些かのニンフ趣味はあったんだけど、この夏、図らずも、図らずもだよ、年頃の少女の排泄シーンにバツタリまともにぶつかって、その純粋な、手放しの周章狼狽ぶりを垣間見て、余計に狂っちゃったのよ。死ぬまでに一度でもいいから初潮前後の、感受性の最も強い時期の娘を徹底的に玩弄して、狂い死にするまで泣き喚かしてやりたい、てなことは言っただけなかつたのですね、子供は国の宝ですもんね。ならぬ堪忍、するが堪忍。俺は元来が飽きっぽいタチだから、そのウチ忘れるさ。心配なくともいいよ、世のオッカさん。

とは言え、九月号の室井とかいう奴の「誘惑」とかいふイメージ画の少女は最高だったよな。以前、奴には何となくザンボウゾーゴンを浴びせたような気もするが、流石に画の方は抜群の感覚を持ってるねえ。些か幼児性に溢れすぎてるくらいはあるが、描線一つにもホレボレするほどの情感が秘められてるよな。本誌に芸術があるとすれば、先ず第一に奴の画が挙げられるだろうが、もしも仮に奴がテメエを芸術家だと思って、芸術作品を創るつもりで、芸術的に描き、故意にエクセントリックな筆法で殊更ディフォルメしてる

とすれば、もうダメなんだよな。芸術というのはそういうものなんだ、氣違ひじみた芸術の場合は特にだ。全ての迎合も銜気も捨てて恬淡として理屈抜きで、好きでやっていてこそ自分の芸術であり、世の芸術ともなり得るんだ。狂気の芸術を生み出すことは生易しいものではないんだ。ひとつ室井さん、頼みます。その昔、誹謗を浴びせたのは、銜気に充ちた芸術家を皮肉っただけの事なのよ。

俺だってこうみえても御幼少のみぎり、プロの芸術家になろうと思ったこともあったんだから、最も氣位の高い処のアーティストに。ほんだけど、芸術家なんてのはマトモな人間に劣る人間がやる商売だということに氣付いたのでスナリやめちゃった。俺は芸術であろうがナンセンスであろうがドタバタだろうがエログロだろうが、そんなことは一向に意に解さないからねえ。須渾氏流に言えば「どうだって、かまやしめえよ」なんだよ。好きなものは好きなのよ、室井さんの画でも城二さんの画でも、「花と蛇」でも「被虐の旅」でも、団鬼六でも由利美千子でも……いえ、この場合に限り、由利さんの方がズーツといいです、ハイ。

処で近頃「真紀子のエチュード」とかのイ

カシたのが現われたけど、女性が心で書いたものは、創作にせよ手記にせよ画にせよ、そこはかとした春情味があって結構ですなア。

台詞の羅列の「オフィスガール」もオツな味でした。オフィスレディをオフィスガールとした処なんざあ、ニクイねえ、もう少し経てば、ビジネスガールになるんですネ。え、そこまで深くは考えなかったって？ でもマア頑張って下さい、僕一人の為に。

これで女王様がお書きになられたものが増えれば、もっと欣快なんだけど、女王様には実践型のお人や、横着なお人が多いよってに仲々書いては呉れはりはらへんやろなア。以前、女王様方を揶揄った不埒な男がいたようだけど、それでツムジを曲げてんのかしら？ 当人は随分と反省してるのにねえ。どうでっか、女王様方も、おひとつ。由利さんあたりもどうでっか、小杉さんなんかもどうでっか。何とかカンとか言ってはるけど、オタクらからて、そのケがおまんねやろ？ 俺は超能力を持つエスパーだから、何でも分かるのよ、ちっとも当たらないけれど。

大分前、通信欄か何かで「あたくしは、半分半分の女の子です」とか仰有る可憐なるも活潑なお嬢さんがいらっしやったけど、誠に

爽快の極みでしたねえ。一寸お名前を失念しましたので後ほど調査の上お報らせしますがともあれ、次代を担って立つのは貴女です！

何ならひとつ苦痛を悦ぶ美千子の方は手首足首のみの極端な大の字縛りで晒して、くすぐり責めA責めにして、羞かしいのが好きな千恵の方は全身縛り、強烈駿河責めの百叩きの拷問にかけて、ドロを吐かしてやろうか。

サディズムとは、責めとはこういうものなんだよ。これでもまだ初歩的約束事に過ぎないのよ。お分かりか、エリート旦那方よ。

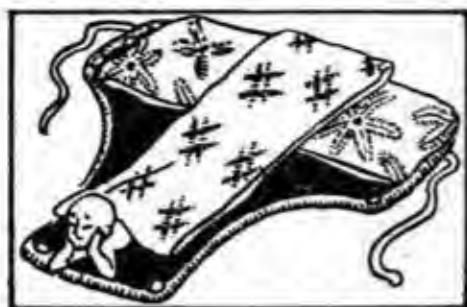
けど、俺は単なる下衆マニアだから、淫靡なSMでも熾烈なSMでもナアナアでやるSMでもホンワカムードのSMでも、SMならば何でもいいのよ俺様は。オメエさん達だってそうだろう？ マニアなんて奴は、気取ってみた処で、結局はそうだったものだと思うんだけど、とにかく煩惱多き動物だ。仏陀の教えには涅槃（ねはん）とかニルバーナとかいうのがあるそうだが、俺みてえなアニマル人間には凡そ縁遠い処の境地だ。悪い事をしたアトで、アーメンとか何とかを唱えた方がいいや。そんな訳で、隅から隅まで「アーメン」と言っても俺は耶穌でもないし、悪い事をしたとも思っていないよ。感情に歪みを持

った狂人なんだからね。他人の思惑なんぞいちいち考えてたら、眠い眼をこすってまで、こんな馬鹿げたものが書けるかよ。本誌に投稿する人間は、投稿しない人間よりもイカレてんだ。エリートなんてもんじゃねえやな。

こんなこと言えば、ヤサシイ編集長さんやオカタイ寄稿家諸賢が眼をむくかも知れないけれど、事実なんだから仕方がない。事実はいくまで正しいのです。正義は勝つ！ サインはV！ ああ、しんどーこれは関西あたりの方言で「草臥れた」という意味ですが、九州あたりでは「きつかア」と言い、我が故郷の四国あたりでは同じく「しんどい」とか或は「えらい」とか申しますが、平たく言えば「疲労が疲れた」とか「苦痛が苦しい」とか「辛抱が辛い」とかいう意味なのです。また、頭につける「ああ」というのは「嗚呼」であり、本来は感動詞のうちの「感動」を表す不意の声ですが、この場合は寧ろ「苦痛」とか「悲嘆」を表した、謂わば、アナタ好みのインタージェクションです、念の為。

しかし、よくもマア、シリメツレツなことが言えたもんだ。すっぐに乱れるで、いかわ。やっぱり狂っとるんだわ——これは我が第二の故郷の名古屋あたりの訛りで、僕の最

も愛好する訛りなのですが、こうなると最早水平思考ならぬ思考散漫なのです。でも思考散漫こそ水平思考に通ずる道なのです。それを分かり易く説明する為に、敢て乱れてみせたまでのことなのです。これだけ八方破れに乱れるのは、ちっとやそっとじゃ出来ないものです。それに、出鱈目なことを口走ってる割には何となく体裁が整ってる感じでしょ？これは日頃の思考散漫を以て、思いつくまま書きつらねたものですが、これを意識的に演繹し、或は、帰納してゆけば、水平思考になるのです。皆さんも以後は毎朝、テレビを見



フエチ告白

甘 い 回 顧

須田 章

私が、何時の頃から、現在のように女性下着やゴムのオムツカバーに魅せられるようになったのか？と問われると一寸困るが、やはり幼少の頃からの生活環境が大きく作用し

ながら新聞を読みながら煙草を吹かしながら食事をしながら、夫婦ゲンカもしましょう！アタシの言ってることは、どんなにナンセンスに思えることでも、常に深遠な意味が潜んでいるのです。

ホンマかいな？

いいえ、単なるジョーダンなのです。それが分からないのは、アナタが垂直思考だからです。アタシが「遙かなる馬鹿」であるということは、世間の一般ジョーシキです。

「ああ、しんどかった。無理して馬鹿なこと

を言うのも、楽じゃねえや……！」

(了)

〔追〕先に申し上げた「半分半分の女の子」なる人物は、富山の曾根葉子様でした。調査の結果が出ましたので御報告致します。因みに申し上げますと、この調査に費やした時間は約一時間でございました。約束を守ることとは仲々骨の折れることでございます。でも一旦、口にしたことは責任を持って、あくまで守るのが、馬鹿でも男なのです。いいですか、いいですね、エリート皆さん——。

祖母、両親、二人の姉、私、妹、女中（当時はその呼んでいた）の八人で、高級船員だった父のお蔭で、中流程度の暮らしが出来た家庭だったらしく、私は、父の留守中は唯一の男性というわけで、我儘いっぱい甘やかされていたそうである。

まず私の幼稚園時代の記憶を辿ろう……と思うのだが、どうも、いかに天才児？を自負する私をもってしても確かな記憶はない。ただ、天才の故をもって、閃きに似た断片的印象があるようなので、それを以て、幼稚園時代のものとしたい。

…… オネシ ョ ッ子 ……

幼い子供の場合、下の子が生まれると上の子がオネシヨを始めるケースが多いとかいう事が、小児科医等によって論ぜられていた。うだが、児童心理学者によれば、この現象は母親の愛情が一時的にはあるが下の子に傾き、それまで独占していたものが分散される為に生ずる、一種の欲求不満の行動表現であると分析されるそうである。

私の場合も幼児の時に妹が生まれているので、これにあてはまるのかもしれないが、とにかく当時、毎夜の如くやらかしていたようなのである。妹の分と共に干場はさぞいづもおしめの満艦飾であったことであろうが、私の記憶にあるのは、オムツカバーのゴムの感触なのである。

当時はどのようなオムツカバーの種類があったのかは知らないが、私のさせられていたのは全面ゴム貼りのものだったようだ。あるいは総ゴム製だったかも知れないが、あのヌメヌメしたゴムに包まれることを嫌がった思い出がない。尤も冬などは炬燵かなにかで暖めてくれたらしく、さして冷たかった覚えもないのだ。あるいは、その頃から暖かいゴムが気に入っていたのかもしれないと思う。オムツカバーのゴムと共に印象にあるのが毛糸のパンツである。たぶん母が、冷えるのを防止するために穿かせてくれたのであろうが、神経質なのか病的なのか、この折角の思

いやりの効果はあまりなく、昼間でもよく漏らしたそうで、このパンツとオムツカバーは離れなかつたものらしいのである。

おむつが臭うのかゴムが臭うのか、とにかく通園中に犬につきまといて恐ろしかった事は忘れられず、通園のいつも誰かに付き添ってもらっていたようだが、それ故にかどうか、濡れたオムツカバーを外して、母に投げつけた覚えがあるから、ゴムに憎悪じみた気持を持ったこともあるようだ。

はっきりと、幼稚園内での出来事であると認識できることに、私と同じようにネルのズロースにオムツカバー装着の子を発見したところがある。いきさつはボヤけているが、とにかくその子がしゃがみこんで泣いていた。私はたぶん「どうしたの?」とでも訊いたことであろう。その子の「出た、出た」という泣き声は今だに覚えていて、その時の私自身の奇妙な感激? を忘れることが出来ない。それがオシッコであると知った時、そして、その子のズボンの下に白いズロースとゴムのオムツカバーを発見した時の気持……。遠い記憶ながら、異常な興奮と安心感、親密感と羞恥感、それらが一挙に吹き上ったものと思うのである。いずれにしても、その時、私のおむつもジックリと濡れ始めたことが忘れられないのである。親近感に喜んでの「ツレシヨンベン」であつたのだろうか?

同病愛? というものか、以後その子との仲は、急速によくなつたのだつたが……彼は今、どうしているのだろうか。

あるいは、私同様のコースを? と思わぬでもないが、わが田に水の引きすぎは慎むべきだろう。ただ、今でも、私の家へ遊びに来て、裏庭の干場に並んでいたおしめや、姉の赤いズロースを、まぶしそうに眺めていたあの子の顔を、なつかしく想い出せるような気がするのである。

三つ児の魂百までとか。よくいったものだと思う。

べつに昔を懐しむほどのトシではないのだが、ことフェチ趣味に魅せられるとき、つい過ぎ去った事柄が甘い想い出として浮かび上ってくるのである。大の男が……と思いがらもその魅力には勝てず、密かに着装してみるゴムのオムツカバーやズロース、生理バンド。奇妙な性癖だとは承知のうえで、太腿を締めつけてくるゴムのソフトタッチと臭気には、不思議な愛着を感じるのだ。そして、それに陶酔するにつけて浮かび上る幼少からの数々の思い出なり印象を、出来るだけ順を追って書き記してゆくのも、意義あるとまではいかなくとも、まるきり無駄とも思えないので、折々に、続けてみたいと思っている。

『畜SHOW』ほど素敵な商売はない

(上)

調

(ちようきよう)

教

麒
田
欧
二



日本武士・画

軽快な回転音を立て始めた。

オレはといえば、何とも惨めな恰好で、そこだけが自由を許された首を、亀の子のように振って、言語に絶した屈辱から逃がれようと、空しい努力を続けていた。両手首と両足

首の鉄枷に接続した鎖で、X字型にひろげられ、引き絞られた両足の関節が、無気味な音を立てて、オレの絶望感を深める。

全裸——という嘘になるが、その僅かにオレの体を覆ったもの自体が、実は全裸より更に、耐えがたい屈辱の姿態をオレに強制する目的で着けさせられたものなのだ。しかもそれは、オレの肉体に、自分の意志とは全く無関係な浅ましい姿を露呈させる役目を忠実に果たしていた。

両側から、斜めに照射される眩いライトがオレの無残な姿を浮き上がらせ、そのうちの一個の強烈なスポットが、まさに屈辱の頂点を、しっかりと捉えている。

ブロンズのような黒い肌をした背の高い女と、白い肌の小柄な女が、動物標本でも検べるように、オレを視つめている。黒い女も、白い女も、革製のコルセットと長手袋、それに踵の高いロングブーツをびったりと身につけているのは、惜しげもなくその肌を露わにしていた。しかも黒い肌にはすべて白革、白い肌には黒革と、鮮やかなコントラストを見せていた。

撮影機の背後に立った黒い女が合図を送ると、白い女がオレに歩み寄って来た。

16ミリ撮影機の非情なレンズが、約三メートルの距離から突き刺すようにオレを捉えて

その右手に、細いがよく撓う鋼の鞭が握られていたのを見たとき、オレは思わず目をつぶった。

2

一体、何がどうなって、こんな羽目になったのか、正直のところ、自分でも、よく判らない。

ともかく、順を追って想い出してみると、ザッとこんな具合である。

昨日の午後、ウェート・リフティング部の道場で、例によってトレーニングしているオレのところへ、同じゼミで顔馴染みのNが、ぶらりとやって来た。

「ちょっと話があるんだ」

一〇〇キロのバーベルを下ろして、じっとりと汗を浮かべたオレの胸のあたりに、チャリ、チャリと視線を走らせながら、彼は言った。こいつの目つきは何となくホモのにおいがする——とオレは、かねがね思っている。

「話って——金のことじゃあるまいな」

「お前のゲルピンは先刻、承知さ。——そこで話なんだが……内職をやらんかね」
「そいつは耳よりだな」

「しかも、ちょっとした、ごきげんのバイト料が、ただけのせ」

「へえ」

実を言うと、このところ、めっきり懐が淋しくなり、下宿代にも事欠く状態だったオレが常になく真剣な表情を見せると、Nは勿体ぶった口調で、「君も初めての経験じゃなからうが……」そう言って、ニヤリとした。

「実は、モデルなんだ」

オレは、軽い失望を感じた。

「なんだ、モデルか」

「がっかりするのは早いぜ。一時間で五〇ドルといったら、君は断わるかい」

「こいつはオドロキだ。とても信じられないが……ドルということは、相手が日本人じゃないんだな」

「その通り、アメリカの婦人だ」

「ますます夢のような話だが、それで一体、オレは何をすればいいんだ」

「何をするともない。この素晴らしい肉体をレンズの前に置くだけでいいのさ」

「写真家か」

「そんなところだろう。ぼくとは人を介しての知り合いなんだが、その婦人が、日本人の青年で筋骨たくましいモデルを探していると

聞いた時、ぼくは真っ先に君を思い出した。君は、まったく素晴らしい」

Nの妙に湿ったような目差しが、再び舐めるようにオレの皮膚を這い回った。オレは、悪寒に似た不快を感じながらも、この朗報をもたらしたNに、感謝しないではいられなかった。

男のアルバイトとしては、あまり愉快なものではないが、モデルは過去に何度か経験している。ある画塾では、モデル台のオレを囲んだのが殆ど若い女生徒ばかりで、この時くらい、サポーターがありがたく思われたことはなかった。また、ある女流写真家には全裸を要求されたが、この時は相手の御面相のおかげで、鼻唄でもうたいたいほど気楽にやったのけられた。だから、たとえ雇い主が日本人ではなからうと、多少の自信はあった。

「まったく、君は素晴らしい」

また、Nが言った。

オレは、その場でオーケーした。

3

Nに指示された通りの時間に、「Mrs. B」と横文字の表札がかかった瀟洒なポーチに、

オレは立っていた。

勇躍して出て来たものの、アルファベットの表札を見た途端、何となく気遅れを感じたのは、かねてから英会話には全く自信がなかったからだ。こんなことなら片言ぐらい喋れるようにしておけばよかったと後悔したが、そこはアルバイト擦れの図々しさで、ベルを押すと、小柄な三十がらみの女が現われた。どうやらメイドらしく、それが日本人であることを知った時、オレは内心ホッとした。

若いとはいえないが、色白で整った顔立ちをした彼女は、オレが来意を告げると、すぐ心得て招じ入れ、何の飾りもない小さな部屋へ案内した。

「御主人にお報せしますから、しばらくお待ちください」

ニコリともせず、一旦姿を消したが、すぐ顔を出すと、

「御主人は直ぐかかりたいそうですから、此処でお召しものをお脱ぎになって、そちらのドアからお入りなさい」

事務的にそう言い残しておいて、再びささと出て行った。

オレはふと、いやな予感がした。これから一体どんなことになるのか、何となく不安な

気持ちになったものの、といって今更、引き返すわけにもいかない。ままよ、オニが出ようがジャが出ようが、たかだか一時間の辛抱だ。一時間後には、大枚五〇ドルを懐に、大手を振って此処を出られるんだ。

そう腹が決まると、オレは半ば自棄のように衣服をかなぐり捨て、今日卸したばかりの純白のブリーフ一枚になった。勿論、下にはサポーターをしっかりと締めている。

(これも、脱がなきゃならないのかな)

オレは、ふと迷った。どっちにしても、たいた違いはない。脱げと言われれば脱ぐばかりだ——度胸を据えようと、そのままメイドに言われたドアをあけた。

ドアの向こうは、かなり広い長方形のスタジオだった。一方の壁と、床の一部に石膏を張り、すべての照明が其処へ集中するように配置されている。部屋の中央に、ハッセル・ブラッドと思われる大型カメラと、ローライフレックスが三脚に据えてあったが、人影はなく奇妙にひんやりとした空気が、オレの裸体を包んだ。

——と、オレの入って来たドアとは反対側のドアがあいて、見上げるほど大柄な女が姿を現わした。

(おや?) オレは意表を衝かれた思いで、相手を視つめた。

「アメリカの婦人」ということはNから聞いていたが、それが黒人であることを、オレはたった今、知ったのだ。

長い足の線をくっきりと見せたスラックスに、丈の短い闊牛士まがいの上衣を羽織った女は、軽快な足取りでオレに近づいて来た。瀬戸物のように白目が光るチョコレート色の顔が、オレの裸体に添って二、三度、上下したが、やがて、その厚い唇から白い歯をチラリとのぞかせると、咽喉の奥で、「ワンダフル」と呟いた。

オレも、自分の肉体には、いささか自負を持っている。肩から腹へかけて、鍛え抜いた筋肉に構成された逆三角形のプロポーションが雇い主の氣に入ったことは、当然とは自惚れながらも、やはりオレをこきげんにした。

冷やりとする石膏を踏んで、ホリゾントの前に立ったオレに、黒い雇い主は次々とポーズを注文し、その度に、爪を銀色にマニキュアした黒い指先が、まるで品物でも吟味するかのように、オレの筋肉のあちこちに、遠慮もなく触れて来る。

二台のカメラを駆使してどのくらい撮った

ろうか、オレと三脚との間を忙しく往復していた彼女は、どうやら一服といった様子で椅子に腰を下ろし、煙草を啜えた。

と、それを待っていたように、最前のメイドが出て来た。

「お疲れさま。どうぞ、お掛けになって」

メイドはオレにも椅子を勧め、銀盆に載せた紅茶を二人に差し出した。

強烈なライトに照らし続けられたのと、多少の緊張とで、オレの咽喉は涸上っていた。

(美味い)

と思った。——が、それからあと、オレはわからなくなった。

4

意識を取り戻した時、オレは、冒頭に書いたような状況下に全く自由を奪われていた。

ピーンと張った鎖に繋がれて、X字型に引き伸ばされた四肢は、両爪先だけが僅かに床に触れているだけで、宙に固定されていた。

まだ朦朧としているオレの目は、しかし、いつの間にかサポーターもろともブリーフを取り除かれた自分に気がつく。次に、叫ぼうとした口が、異物に満たされて、その道を絶

たれていることを知る。それは、生ゴムのような弾力で、内側からオレの口腔を圧迫し、口を動かすとそれも一緒に形状を変えはするが、どうしても、吐き出すことが出来なかった。

オレは、Nに紹介されて、モデルとして此処に来たことを、やっと思い出した。だが、そのオレが、何のために、こんなぶざまな恰好をさせられているんだろう。メイドに勧められて紅茶を飲んだことまでは憶えているがそのあとの意識の断層で、一体何が起こったのか——。

オレの正面には、たしかに三脚に据えたカメラがある。しかし熟く見れば、それは先刻までのハッセルやローライではなく、長尺用のマガジンをセットした16ミリ撮影機に変わっているのだ。

突然、ドアがあいて、黒い主人と日本人メイドが現われた。だが二人の姿は、最前とは全く一変した白と黒のコルセット・スタイルだった。

メイドが主人に、何か囁く。多分、へ目が醒めたようですわとでも言ったのだろう。二人はブーツの音を響かせて、無残なオレの前に歩み寄った。解剖前の点検でもするよう

に、四つの目が、完全な無防備状態にあるオレの全身を舐め回した。

やがて、黒い主人が短く命令すると、メイドは部屋の一隅から奇妙な品を持って来た。

見れば、三角褌と貞操帯のあいこのような形をした革製品で、幅の広いベルトの中央に、逆三角形の化粧革がピカピカと美しい光沢を放ち、さらにその三角形の頂点に三十種あまりの革紐が接続され、革紐の三分の一ほどのところには、プラスチック製と思われるピンポン球大の玉が通されていた。しかも不可解なことには、三角褌にしる貞操帯にしるその中心部ともいふべき位置に、丸い小さな孔が穿たれていることだ。

「ムム……」

異様な猿轡の奥で、声にならない声をあげて抗議しようとするオレの腰に、日本人メイドは、いとも無造作にベルトを巻きつけ、背中で強く引き絞った。さらに、仮面のような無表情を崩すことなく、事務的ともいえる冷淡さで作業を続ける。そしてそれは三角形中央の小さな孔の目的を、オレの意志を無視して教える結果となった。その時になって、オレは、孔の周囲が弾力のあるゴムで縁取してあることを知った。それが固定されると、次

には例の玉を手際よく（といっても、オレにとっては瞬間的だが激しい苦痛を味あわねばならなかった）処理して、余った革紐を締め上げ、背後でベルトに結びつけた。姿を消したピンポン球は、オレにいたたまれない程の不快感をもたらした。

この奇妙な三角禪のセットが完了するや、オレはたちどころに、その持つ意味を、さとした。それは、オレの羞恥を柔らげてくれるためのものではなく、一層露わな姿に強調するためのものだった。

強い収縮力を持った三角禪の孔の効果は、たちまち顕著にあらわれた。純粹に物理的な結果が、オレの意志とは全く別のところで起こり始めたのだ。

オレの三角禪装着を確認すると、黒い雇い主は、ゆっくりと撮影機のシャッターを押したのだ。

突然、オレは「ウッ」と呻いて、反射的に身を反らさなければならなかった。灼けるような一瞬の衝撃が、臀部を走ったのだ。気がつく、メイドの手に、細い鞭が握られている。……

ここまでは、冒頭に書いた状況にいたるまでの、思い出せる限りにおいての経過だが、

それは謂わば、このあとにオレが出遭うことになる運命の、ほんの序幕に過ぎなかった。

5

誰かが欲^すりなような声で、オレは目を覚ました。無意識に起き上ろうとしたが、オレの周囲には空間が無かった。

オレは、後手錠のまま、両膝を胸に押しつけ、海老のように全身を丸めて横になっていたが、その恰好だけが、現在のオレに許された唯一の空間であることを、すぐ思い知らされた。高さ五十種、一米四方ほどの平べったい檻の中に、オレは居るのだ。

臀部全体が、火焙^{あぶり}りにされたように、熱い痛みにうずいている。あのメイドの鞭が、オレの皮膚をスタスタにしまったのだ。

16ミリ・シネの始動と同時に、日本人メイドの力を罩めた鞭がオレの臀部に集中し始めた。灼けるような激痛の連続に、オレは咽喉の奥で悲鳴をあげ、自由にならぬ全身は、痛覚に痙攣するのさえ止められなかった。しばらくすると、流石に鍛えぬいた皮膚も無残に裂けて、一搏ちごとに鮮血を噴き出したが、その頃になると、オレは殆ど無感覚になり、

虚ろな呻きと力ない悶えを繰り返すだけとなった。それでもメイドの鞭は歇まなかった。

——と、どうしたことだろう。突如として想像もなかった事態がオレの肉体に起こったのだ。オレはとまどい、一瞬、獣のような呻き声を発した。五体から総ての力が脱け、全身が粉々になるような錯覚と、五色の虹に包みこまれた想いがしたからだった。

次第に意識の遠ざかるオレから鞭が歇み、同時に、16ミリの回転音も止まった。

オレは意気地なくも、あのまま気を失っていたらしい。（何という華々しいショウだったろう）

オレの全身が、今更のように火照った。

（?……）

最前聞いたと思った歓きは、耳のせいではなかった。たしかに人間の——それも女の声、さほど遠くない処から聞こえるのだ。

暗がりに眼が慣れると、オレは首を捻じ曲げて周囲を見た。オレの檻から二メートル程離れた床に、もう一つ同じ檻があり、その中に白いものが蠢いていた。歓きの声は、其処から聞こえて来ることがわかった。

（女だ——）

オレのほかにも、もう一人、同じ身の上の人間がいたのだ。猿轡が無かったら、声をかけたい———と思っていると、いきなり光線が差し込んで、ドアがあいた。

メイドがスープ皿を二つ持って現われた。

「さあ、食事ですよ。疲れたし、おなかも空いたでしょう。今、口の中の物を取ってあげますが、大きな声を出しても無駄ですよ。此処からは絶対外へは洩れませんか。さ、その孔から首だけ出しなさい」

気がつく、檻の下部に、首だけがぐれる程の孔があった。恰度、ネズミ孔からネズミが首を覗かせる恰好だが、その姿勢をとるまでには、かなりの努力が必要だった。

メイドは、オレの猿轡を引き出すと、

「さ、おとなしく食べなさい」

鼻先にスープ皿を置いた。シチューのようなものが芳香を立てている。それに、犬のように鼻面を突っ込んで、口だけで食べるというところらしい。

「こんなものは要らん」

はじめて口が自由になったオレは、激しい口調で食ってかかった。

「それより、何だっただってオレをこんな目にさせるんだ。約束が違ふし、第一オレは……」

「約束ですって？」

「そうだ。オレは、こんなことをするために来たんじゃない。早く此処から出せ。いったい、いつ帰してくれるんだ」

「帰る？ 誰が、帰るんですか」

「決まってるじゃないか、オレだ」

「あなた方は、帰らないんですよ。あなたを帰すなんて約束は誰がしたんです？ あなたは、ずうっと此処に居るんですよ。正確にはあと二週間——二週間後に、御主人はお国へ帰ります。その時、あなた方二人——ああ、二人というのは、そっちの檻に居る、とても綺麗なお嬢さんとあなたですが——を連れて行くことになっているので、それまでに充分訓練をしなければならぬんです」

「訓練——だって？」

「明日になれば引き合いますが、あなた方は夫婦になるんですよ。勿論、ただの夫婦ではないけれども、アメリカへ帰るまでには、御主人と私が、立派なペアに仕立てて上げます。向こうへ行ったら、それこそハリウッドのスターより人気者になりますよ。さあ、おあがり」

メイドはそれだけ言うと、オレが何を叫んでも喚いても取り合わず、隣の檻へスープ皿

を運ぶと、さっさと出て行ってしまった。

オレは、しばらくの間、呆然としていた。

ふと見ると、隣の女は、檻から首だけ出して、ピチャピチャと音を立てながら、皿の中のものを吸い上げている。蒼ざめた横顔が、犬のように忙しく動いている。

「ねえ、君」

オレは声をかけてみたが、女は答えないばかりか、浅ましい動作を止めようとしなかった。オレより早くから此処に居た彼女がオレの存在に気がつかない筈はないのだ。

「君——」

「……」

「君は一体、どうしてこんな処に居るんだ」全く反応はなかった。女は相変わらず、スープ皿に顔を押し入れたままだ。

オレは、まだ夢を見ているような気持ちだった。こんなことが、現実になり得ようはずがない。あの女とオレが夫婦になる——そんな馬鹿な。フロイド流に言くと、すべてはオレの欲求不満のなせるわざに違いない。臀部を鞭で打たれて五色の虹を連想したのも、謂わば夢精というやつだろう。それにしても、もう沢山だ。早く醒めてくれ。

そう思って、オレが再び女の方を見た時、

すでに食事が終わったのか、女の首はもう其処になかった。

6

それが夢でなかったことは、一夜明けるとはつきり思い知らされた。

翌日から、メイドの言った通り、オレとパートナーの女によるデュエットの訓練が始まった。檻から出され、後手錠に繋がれた鎖をメイドに執られて、屠場ならぬスタジオに曳き出されたオレとパートナー（なるほど、メイドの言葉に嘘はなく、グラマラスな美女だった）は、其処で、凡ゆるポーズの演技を強制された。

その美しい顔に、殆ど感情をあらわさず、まるで木偶のように、命令のままに羞恥の姿態を見せるパートナー。だが、そうした屈辱の調教に易々として応じるほど、オレには心の準備が無かった。当然のこと、激しい抵抗を試みた。

一度は、檻から引き出されてスタジオへ向かう途中、オレを追い立てるメイドに思い切り体当たりを食わせた。ウェート・リフティングで鍛えた鋼鉄のような全身の筋肉を、総

ぐるみでぶつけたのだから、小柄な日本人女などは、ひとたまりもない筈であった。だがオレのからだは虚しく空を切った。目標を失って大きく蹣跚き、アッと思った瞬間、首筋に鋭い打撃を受けて、頭の中までジーンと痺れた。電光のようなメイドの手刀だった。

「断わっておきますが、わたしは唐手の範士です。その気になれば、指一本であなたを殺せる。徒勞なことはおやめなさい」

呼吸ひとつ乱さない冷たい声であった。

見事な猿芝居を演じたオレの敗残の姿を、パートナーはまるで無感動な表情でながめていた。

二度目は、排便の時間を狙った。

オレとパートナーは、日に一回だけ、全裸——と言っても、それがオレたちの日常の姿なのだが——でシャワー室に入られ、其処で排便後シャワーを浴び、全身を洗い流す時間が与えられていた。もちろん、猿轡、後手錠のまま、窓の無いシャワー室には外から鍵が掛けられていたが、この時だけは、オレたち以外に監視の眼はない。

パートナーは、事務的とも言えるほど黙々と、便器に蹲踞み、それが済むと、シャワーに臀部を突き出して洗い流し、それから汚辱

の汗にまみれた全身に飛沫を上げている。

オレは、渾身の力を罩めて、肩からドアにぶち当たった。オレの筋肉にとっては、メイドを相手にした時より遥かに造作のない仕事で、拍子抜けするほど簡単にドアは外れた。オレはそのまま、弾丸のように走り出そうとした。後手錠であろうと、全裸であろうと、この建物から一步外へ出さえすれば……。

だが、オレの勢いこんだ足は空気を踏んだだけだった。ドアの外側の床が消えていたのだ。次の瞬間、オレは数メートルも落下していた。気がつくのと、眼の前に、黒い女主人と鞭を手にしたメイドが立っていた。

その夜、オレは窄衣というものを初めて着せられ、一晩中、呻吟しなければならなかった。筋肉で固めた自慢の体軀が、幼児ほどに圧縮されるのだから、窄衣の恐ろしさは言語に絶したものだ。

総身の膏汗を絞り尽くし、窒息寸前で解放された翌朝のオレは、再びかれらに抵抗する気力も体力も失っていた。

オレのパートナーである女も、現在の木偶同然になるまでには、きっと何度かこういう経験を重ねて来たに違いない、と今更ながらオレには納得できる気がした。

真黒な絶望が、オレをもまた木偶にした。

7

オレは、もう抵抗しなかった。そうなるのかれらのいう訓練は、きわめて順調に進み、はじめの一週間でデュエットはかなりのレパートリーを消化した。

その二つ三つを記すと――。

オレは、例によって奇妙な三角禪に腰部を締め上げられ、両手両足をX字に吊られたポーズ。一方、パートナーの女は手足を鎖つきの枷で繋がれたままでオレと向かい合わせにしかも逆様に吊られる。――これはオレが、彼女に対して奉仕するのに最も適わしいポーズだ。こうした単純なデュエットのSMプレイから、男女の立場を変えた性の逆転プレイ二人が宙吊りにされての空中プレイ、相互浣腸、相互便器プレイ、また、ベッドに寝そべった黒い主人の前からはパートナーが、背後からはオレが、同時に奉仕をする間、メイドがオレたちの臀部を交互に鞭撻したり、さらに、主人と日本人メイドとが抱き合っている（この兩人がレスビアンふたりの関係にあるらしいことは、かねがね気づいていた）ベッドの裾

で、オレとパートナーが許しの出るまで、彼女らの命じる奉仕をしなければならぬといった四人プレーなども含めて、オレたちは短期間のうちに熟達した演技者となった。

そして、オレはといえば、犬のように奉仕させられることの虜とりことなってしまうていた。ブロンズのような光沢を持った妖しい肌の色も、羚羊のように伸び伸びした四肢も、またどんな小さな動作にも美しい曲線を描く無駄のない締まった肉づきも無論オレの心を奪いはしたが、それよりも何よりもオレを夢中にさせたのは、その黒い皮膚から馥郁と発散する体臭であった。それは、洗っても、香水をふりかけても消すことの出来ない、黒い肌が生まれ落ちた時から運命づけられた、人種そのものの烙印である。

もし、この黒い体臭が存在しなかったら、オレはどんなことをしても、逃げ出すことを諦めなかったろう。死にもまさる屈辱の境遇に、自分でも不思議なほど簡単に甘んじたのも、いわばこの体臭のためだった。黒い主人の在るところ、必ず其処にただよう魔力に、オレはガンジ掬めにされてしまったのだ。その微かな余香を嗅いだだけで、オレは忽ち屈辱を希む獣になり下るのだった。

仮令、海を越えて何処へ運ばれようと、オレは、この黒い魔力から一生離れることは出来まいと考えた。

「二週間の予定だったけど、それだけの必要はなかったようね」

オレたちを檻に戻しながらメイドがそう言ったのは、ちょうど一週間目のことだった。

8

細いゴム管の先の微小な孔から、針程の繊細さで噴き上げる一条の液体――それも、ただの温ぬるま湯に過ぎない――が、男女ふたりに同時に呻きをあげさせ、悶絶させたと言ったら、信じてもらえらるだろうか。現実に、それが行なわれたのだ。

帰国が数日後に迫ったある日、オレとパートナーは、ぴったりと背中合わせに両手で吊られ、二人の両足首は片方ずつが一緒に括られて左右に引き伸ばされる――ここまでは何の変哲もないポーズで、レパートリーの中には、この姿で二人がタイミングを合わせて種々の演技を強いられるといったものもあったが今日のはそれらとは全く違った新しい実験であることを、メイドが説明した。

オレとパートナーの肉体そのものによる相互接触を一切必要としない「連鎖ショウ」だと彼女は言った。

「その秘密は、これ」

メイドがオレたちの眼の前に差し出したのは、U字型をした奇妙な道具だった。全長三十糎ほどの、パイプを折り曲げたような形だが、素材には柔軟でかつ弾力のあるラバーか合成樹脂が使われているらしい。しかもUの字の二つの先端には、それぞれ丸い瘤がついている。メイドは、その瘤を撫でながら笑った。

「これは、昔の御殿女中が愛用した千鳥からヒントを得たものでね、極く単純な形をしているけど、ちゃんと、あなた方のサイズに合わせてあるのよ」

人の字型というか、逆Yの字というか、ともかくオレとパートナーは、辛うじて床に届く爪先だけで身を支えていたが、お互い同志といえ、その背面の一部が僅かに接触しているに過ぎない。

メイドはその二人を、U字型のパイプで固定し、完全に接続したのである。まるでシャム双生児みたいに……。

次に、パートナーの前面の床に、小さな噴

水装置がセットされた。これで、準備はすべて整ったらしい。これ以上、手を下すことを必要としない女主人とメイドは、ゆったりと長椅子に腰を下ろした。あとは、待つだけだという顔付だった。

やがて、噴水装置の先端から、一条の銀色の線が斜めに噴き出した。針のように細いぬるま湯の噴水は目標を的確に捉えた。それはおそろべき単調さで、しかし、いつ果てるともなく続いた。

接続されたパートナーが、微かに動きはじめたのは、かれこれ十五分も経った頃であらうか。

だが、一度動き始めると、それはもう止まるところを知らず、しかも、忽ち振幅を増して行った。

動きとともに、猿轡の奥から洩れる声にならない呻きが、断続的にオレの耳をくすぐり、救いを求めるようにオレを圧迫する。必死になって何かに耐えようとする、そのパートナーの悲痛な努力が、U字型のクサビを媒介に、直接オレに伝わって来る。

上体を反らし、首を振って、「ウッ……ウッ」という呻きとともに昂まって行く彼女の波長は、やがてオレの波長を引き込み、一本

のクサビに連続された二個の肉体を、完全に一つに融合合わして、その奇妙な苦悶を強いてゆく。

三角錐に締め上げられたオレもまた、パートナー同様の悲しい忍耐をあからさまに曝している。

ついに、内臓ごと吐き出すような一声が、彼女の猿轡の奥で発せられ、一際激しい振幅を巻き起こした。同時に、苦悶を強いられたオレもまた嘶くように喚き、暗黒の闇に引きこまれて行った。

この情景を細大洩らさず16ミリに納めた黒い主人は、新しいアイデアの成功に、メイドともども歓声をあげて拍手した。

「よくやったね。ご褒美に、お前の好きなものを味あわせてやるよ」

いつになく上機嫌の黒い主人は、ブロンズの裸身を長々とベッドに腹這わせた。丸々と輝く黒い肌と、そこから立ちのぼる濃密な体臭——今しがた意識を取り戻したばかりのオレは、自分でも滑稽なほどケロリと苦悶を忘れ去り、手錠のまま、ベッドの裾に攀じのぼった。

——(この章おわり)——



告——白——

私のS M願望

羽 真 比 呂 志

カット・あらいかず

幼い時に小児マヒに犯され、右手及び両足障害」という肢体不自由者となった私が、S Mマニアになったのは、いつの頃からか自分でもハッキリしたことはわからない。

母に付添われた九年間の通学中に、文筆を持って身を立てられたら……と、文芸の特別指導も受け、あらゆる出版物を可能な限り読み漁ったが、不自由な体で本屋廻りをしていて見付けたKK誌には、思いがけない衝撃を受けた。それは、たんなる特殊世界を覗いたという驚きとか、特異資料として参考になるというような種類のものではなかった。正に心の隅に既生していたものの具象化に行き当たった想いのするショックだったのだ。付添いしてしてくれる母の目を、ウロタエを以て本能的に避けたくなる性質のものだった。

それまでも「人間の美しさ」の真価を求め年不相応の軟派ものや、女性ヌード写真にも母の目を意識することなく買求めてもらって

いたのだが、この時ばかりは、母に差し出すのに勇気が要った。

丁度、十年前の36年9月号であった。

以来、はつきりと意識して、参考よりも、自らの欲望を慰めるための方が、より比重のかかる読み方でS M的なものを漁るようになっていく。そして、自分の願望しているものの正体ははつきりするにつけ、自身で不思議に思い、悩みに襲われることが、少なくともあった。「おれは、どうして女性が縛られたりイジメられたりしている場面に憧れをもつのだろうか? そんな写真やさし絵に、どうしてもこんなに血が騒ぐのだろうか? これでは、身障者としてではなく、常人と違ったことに興味をもつ人間として、結婚などとても出来ないのでは無いだろうか? ……」と。

肢体不自由者であっても、幸いにも男としての機能は犯されていないので、時には処理に困ることがあっても、恋愛感情の働くこと

を嬉しく思っている私なのだ。だからこそ、こういう危惧で悩みもするのだ。ことS Mに關しての心配は、誌上の夫婦プレイ記事によって救われ、望みも持っているのだが、やはり気掛りは捨てきれない。

ある身障者の会の県支部長をしている関係で、知り人はわりと多く、女性との交際もあるが、S Mのこととなると、私の場合は特に理解されるのが難しいように思う。事実、数年前に、将来を誓い合った女性にKK誌を見せて打明けたことがあるが、彼女はびっくりした表情で「こんな暴力的なことをして楽しんだなんて、とても信じられない」というだけで、私がいくら説明しても理解しようとせず、協力どころか、それきりで再び姿を見せなくなってしまうことがあるのだ。

そのショックから、他の女性にはとても話す勇気を失ってしまったが、近頃のようにS Mが各方面で取り上げられる世の中になっても、まだその底にあるものを曲解し、表面上だけで犯罪的な見方をしているらしいことや、S Mマニアの真意を誤解しているらしいことに、人間の持つ「潜在意識」を掘下げてみたいと思い、又、卒直にプレイをしてみたいと願っている者として残念でならない。単独外出も出来ない身障者なるが為に、その悩みも余計に深いのだろうか……?

魔 女 探 針

審問は延々と続けられていた。

覆面の審問官たちが取り巻いている小さな円型の台には、つぎつぎと全裸の女囚がセリ上って来て、型通りの肉体番号確認から始まる、あの恥かしい屈辱的な審問を強制され、その結果、いずれかのクラスに判定されてしまふのであった。

大抵の女囚たちは、ここへ来るまでに原潜ネプチューン号内で、予備的な体験をさせられていゝし、第一、あの人権など、まるで無



第三十回

視しているようなレセプションでは、たとえ多少の反抗心を残していたものでもヘナヘナと、なってしまうのが普通だった。あとは泣く泣く、自らの不幸を嘆きながら、この国で夫々に、あたえられる運命の流れに屈従して行く他は、なかったのである。

まして、この審問の中世的な雰囲気は女囚たちを怖れおのかせずにいない。豪華だがワザと薄暗くしてある室内に、凝然と取り巻いている覆面の審問官たち。そして、自分だけに向けられているスポット照明は、赤禪の隅々までも曝き出してしまふ。

ジャンヌ、すなわち小林敏子は、お手付き

だったから多少、手心があつて、比較的、楽にパスしてしまつたことは前に述べた。

赤禪を無理に剥がされて、赤の屈辱に失神してしまつた張恵華（F五五三号）とて、気絶したからといって、そのままでは済まされなかった。息を吹き返した彼女は、再び台上に立たされて判決を受けた。判定は拷問檻送りだった。失神したこと自体が反抗と見做されたのである。

今、台上に立たされている女は、ひどく強情だった。いくら審問官が囁んでふくめるように原罪認容を求めても、頑として承知しな

い。さすがの審問官連も少々持て余す気配が出て来た。

今まで、黙っていた首席審問官が、よく透る声で口を切った。

「どうしても、お前は自分の罪がわからないのだね」

例のヴィーナスの姿勢をとり、自然に前かがみになりながら、それでも憤りに燃えるまなざしをキッと首席審問官に向け、その女は叫ぶように答えた。

前号まで「ただひとりの絶対者、有明に支配される秘密の地下国家では、原潜ネプチューン号から陸揚げされた世界の美女達を、仕分ける作業に忙しかった。彼女等は予備審査で金、銀、銅、鉄の四クラスに分類された。鉄のクラスは又、畜位、物位に両分され、前者は家畜として後者は家具として夫々の調教を受けることになる。銀、銅のクラスは最初はずべて銅の奴位、つまり奴隷の階級に入っ徐々に上って行くのである。これには中世風のインキジートル、すなわち異端審問のシステムが応用され、女囚達は原罪認容を告白することを迫られる。認容したものは懲治檻へ、反抗したものは拷問檻へ送致される。」

「どうしてわたしが罪を犯したなんて、おっしゃるんですか。わたしは何も悪いことなんかしてやしません」

うわずった声が余計、尻上りとなった。

「さっきから何度も言い渡した通り、お前は自分が人間だと思っている」

首席審問官が、わざとゆっくりした口調で言う。

「そうですともッ」

ヒステリックな声がハネ返した。

「ところが、そうではない。お前は、もともと、この国へ来て、マスターのペットとして飼育されるために生まれたのだ。そして、マスターの限りないお恵みとお前の努力で、はじめて、いやしい奴隷としてでも人間の最下位に引きあげて下さる時を祈らねばならなかったのだ」

「ウソ、嘘です。そんなこと。まるでデタラメです」

憤怒にわれを忘れた女が叫ぶ。

「そう、そのように否定することが証拠なのよ。お前の心には悪霊が巣喰っているのよ。つまりそれが、お前は魔女なのだということを示しているのです」

「……」

あまりの馬鹿らしさに女は声も出なくなてしまった。二十世紀の現代に、今更、魔女などという概念を、まことしやかに言っている方の頭が、どうかしているじゃないか——と思う。しかし、彼女には、このようなレトリックが現実どんな危害を彼女に及ぼそうとしているかを想像することさえ出来なかった。もし出来たら、はやばやと降伏してしまったにちがいない。要するに、理窟などは全くないので、女囚の完全な屈伏だけが要求されているのだから、馬鹿馬鹿しさ自体が非常な拷問を意味しているのだった。

「お前の心から悪魔を追い払って、あたらしい希望に蘇らせてあげるのが私達のつとめなのです。いいですね」

「わかりません、そんなこと。わたしは、わたしです。わたしの心に悪魔なんか、いやしません」

「どうしても否定するんだね。よろしい。それを証明してあげよう」

筋書きはチャンと定まっている。二人のアマゾン女兵が近づいて、女の両手首を天井から下っている二本の鎖に固定してしまった。はじめ一寸、抵抗を見せた女も、すぐそれが無駄だということを覚ったらしい。案外、お

となしくバンザイの姿勢をとった。

「これは一六四五年、マシユー・ホプキンスが使ったのと同じ魔女探針だよ」

首席審問官が笑いを含んだような声で言った。

清水由香、というのが、この新しい女囚の名前だったが、彼女の知識ではマシユー・ホプキンスの名も、又、魔女探針の意味も、まるでわからなかった。彼女にわかったことはそれが何かおぞましい、黒を白としてしまうような、よこしまな、おとし穴を意味しているということだけだった。

「わからないらしいね。じゃあ、説明してあげよう。魔女には、悪魔が血を吸ったときにつけたシミが、身体のだこかに必ずある。そして、その部分は針で刺しても痛くないし、血も出ないの。マシユー・ホプキンスというイギリスの坊さま



は、その原理を使って、大いに魔女発見の実績をあげたんだって。ねえ、とらえられた魔女は、みんな火あぶりにされてしまったんだよ。わかったでしょう。だから、これから、この針でお前の素肌から魔女のスポットを探し出そうというわけ……」

といいながら立ち上って、由香の前に回った。まっ白な長いガウンと、目だけを出した覆面を目の前にすると、けな気にも今まで頑張ってきた由香だったが、総身、水を浴びせられたような気がして、歯の根がカチカチい

うのを、どうすることも出来なかった。

憎むべき敵である筈なのに、ま近く見る首席審問官の目は、意外と優しいのに驚く。覆面に包まれて目だけしか見えない故か、何かこの世のものでないような美しさが、かえって凄絶な圧迫感を由香に与えて、彼女は思わず、うつむいてしまった。これは、微妙な心理的效果を彼女に与えることになった。つまり、由香は始めて敗北を意識したのである。

ハラリと顔の前にたれた美しい由香の髪をワザと乱暴に掴んで、首席審問官は、再び顔を上に向けさせた。頭のテッペンから始まって足の爪先まで、丹念に所謂「魔女のシミ」をさがす。細っそりした滑らかな指が、それに負けない由香の柔肌の上を這い廻った。氷ったような恐怖は、クスグッたさを覚える余裕すら、あたえなかった。

清水由香が入れ墨された肉体番号はF七五一号だった。ということは、F七五三号となったジャンヌに、きわめて近い。それもその筈で、例の脱走兵B二〇三号、す

なわち杉本美知子の事件に巻き込まれて、こへ来る羽目になってしまったのである。全くのところ、有明の予定表に彼女は載っていなかった。杉本の脱走を知って有明が引き返したとき、彼女の不運がスタートしたといえよう。

馬鹿正直といえるくらい純真で一本気な彼女は、とんでもない男にダメされて親元を飛び出し、あげくの果て、その男にも棄てられ以来お定りの経過を辿った末、金東一の経営するナイトクラブのホステスとなったばかりだった。その美しさに目をつけたキャバレー王は、彼女を自分の女にしようと企んだ。

そこへ、チャーター機で小笠原へ飛ぶという計画が、たまたま実現したので、好機逸すべからずと、これも同じ欲望の対象として目をつけていた杉本等を加えて乗り込んだのであった。それが、有明の仕組んだ罠だということとは露知らずに……。

金が死に、女たちだけが捕獲されたことは既に書いた。こうして清水由香、二十三才はF七五一号として有明のコレクションに加えられる。(第二十一、二十二回参照)

水商売に落ちたからといって、彼女はまだ崩れていない。いや、こうした立場の女性に

は、かえって下手なBGなんかより遥かに純真なものが少なくないのである。逆説的だけれども、馬鹿正直だからこそ、転落して行くともいえるかも知れない。モーパッサンがよく書いている。

嘘をつけないという由香の美点が余計、彼女を苦しめることになる。

どんなに責め虐げられても、身に覚えのないことを認めることができないのだ。女どもは九分九厘まで、泣く泣く、長いものに巻かれて行ってしまう。あらぬ罪を認めて、その罰に服することを肯定するのである。ところが由香だけは違っていた。どうしても、それができないのである。

「ヒューッ」

と、のけぞる。

首席審問官が由香の熟れきった右乳房をギョツと鷲掴みにしたからである。彼女の胸元に小さな黒子があった。胸ぐりを大きくはだけたルイ王朝の貴婦人だったら丁度よい付け黒子の位置だと羨ましく思ったに違いない。首席審問官は、先ずその黒子に目をつけたのであった。なさけ容赦もなく、そこへ針を突き立てる。みるみる血が噴き出してきた。魔女ならば血も出ないというのだから、このこ

とは彼女が魔女でないことを自ら証明したような訳である。

「オヤ、これはちがった。悪魔のシミじゃないらしいね」

落ちついた様子で首席審問官が由香の前に蹲み込んだ。

「イ、イヤです。よしてッ」

身もだえをして由香は身をよじった。

「ここだ、ここだね。ホラ、突き刺しても血も出ないし、痛がらないじゃないの」

事実、探針が柄元まで押しつけられているのに、由香は全く痛みを感じていない。まして一滴の血さえ、こぼれ出ていない。

これにはカラクリがある。柄を掴んだ首席審問官の指の加減で、針が柄の中に吸い込まれるような仕掛けになっていたのだった。肌にささらないのだから、痛みを感じるわけではない。

そんなことと知らない由香は動転した。

「痛くないね」

と言われて、反射的にうなずいてしまう。

「審問官諸君！」

すかさず首席審問官が叫んだ。右手に持った探針がキラキラ光る。由香の肌を離れた途端、バネ仕掛けで針はもとへ戻っていた。

「悪魔のシミが発見された。これは、とりも直さず、この者が魔女であることを証明している」

これは決定的な証拠だった。

由香が、どう否定しようとも、彼女はF七五一号として「悪魔払い」のための拷問檻に送られる判決を覆すことは出来ない。

女 体 家 具

鉄のクラスでも容貌体型がよく、且、運動性能がすぐれているもの、たとえばF五五四号のような女囚は畜位にランクされ、相当の調教を受けるようになるのだが、畜位に洩れたものは物位、つまり「もの」としてしか価値を認められない集団に収容される他はなくなってしまう。つまり、この国での最下等の階級に入れられてしまうのだ。

物位の女は主として家具に使役されるのだが、矢張り「肌質」が大きく問題となってくる。肌の質がよいものは、この国の貴族階級が直接、皮膚に触れる部分、言いかえれば、椅子やベッドの材料にあてられるが、所謂、鮫肌などでは、これも無理だということになる。そんな連中には、テーブルの足とか

燭台とか、又、食器代わりのデコレーションにされるとかの向け口が残っている。

レセプションで物位に決まって、下層にある家具整型工場に渡されてくると、先ず物品簿に登録され、夫々の特長、特質に応じた向け口が与えられる。

椅子は椅子、ベッドはベッドで、トレーニングが異なるから、一旦、向け口が定まると原則として移動することはない。

次に共通的な手術が加えられる。

首、両手首、両足首のリングと、口中のギヤグは既に装着されてしまっているが、物位の女囚だけに加重されるものは、先ず視力を奪ってしまうことである。

これは大型のコンタクトレンズを不透明にして眼蓋のなかに嵌めこむということで目的を達成することができる。器具を使わなければ取り除くことが出来ないのだから、一種のギヤグであることには交わりない。不透明とはいっても、多少の明暗を感じることは不可能ではない。したがって、強い光線で誘導することが、あり得る。

つづいて両耳が封鎖される。つまり、極小型のレシーバーを内蔵したプラスチックの耳栓を特殊な糊で耳道内にピッタリと貼りつ

けてしまうのである。物位の女囚たちは、こうして自然の会話や物音から隔離されるけれども、調教者の出す命令や何かは、レシーバーによって強制的に聞かされることになる。ストレス解消に少しでも役立てるため、ソフトなバックミュージックを適宜、流す方法も効果をあげている。

美しい家具どもは、以上のような処置が済んだところで、これから彼女たちの居住する区画に追い込まれた。もはや、手足は全く自由にされている。しかし、このような状態にされては、たとえ手足が解放されたからといって何の価値があるだろうか。にわかメクラとは、何と心細いものか。悲痛な思いに溢れ出す涙はコンタクトレンズの間からコボれ出して、その頬を濡らした。

「十七列二十一番。わかったね、これがおまえの物品番号だよ。いいかい、忘れないようにおし」

ガンガンと、レシーバーが鳴った。

「この番号は又、おまえの寝る位置の座標でもある。一列二十五匹ずつ、二十列だから、合計五百匹の家具を収容できる。列の二十五匹が一組となって調教を受けることになる。」

まず位置につくことから教える。耳をすませて聞け。リーン、リーンと鈴の音が聞こえるだろう。その方向が、リード壁だ。サア、音のする方へ進め」

美しい裸メクラは、ヨロヨロと、つまずきながら、左手の方へ移動して行った。

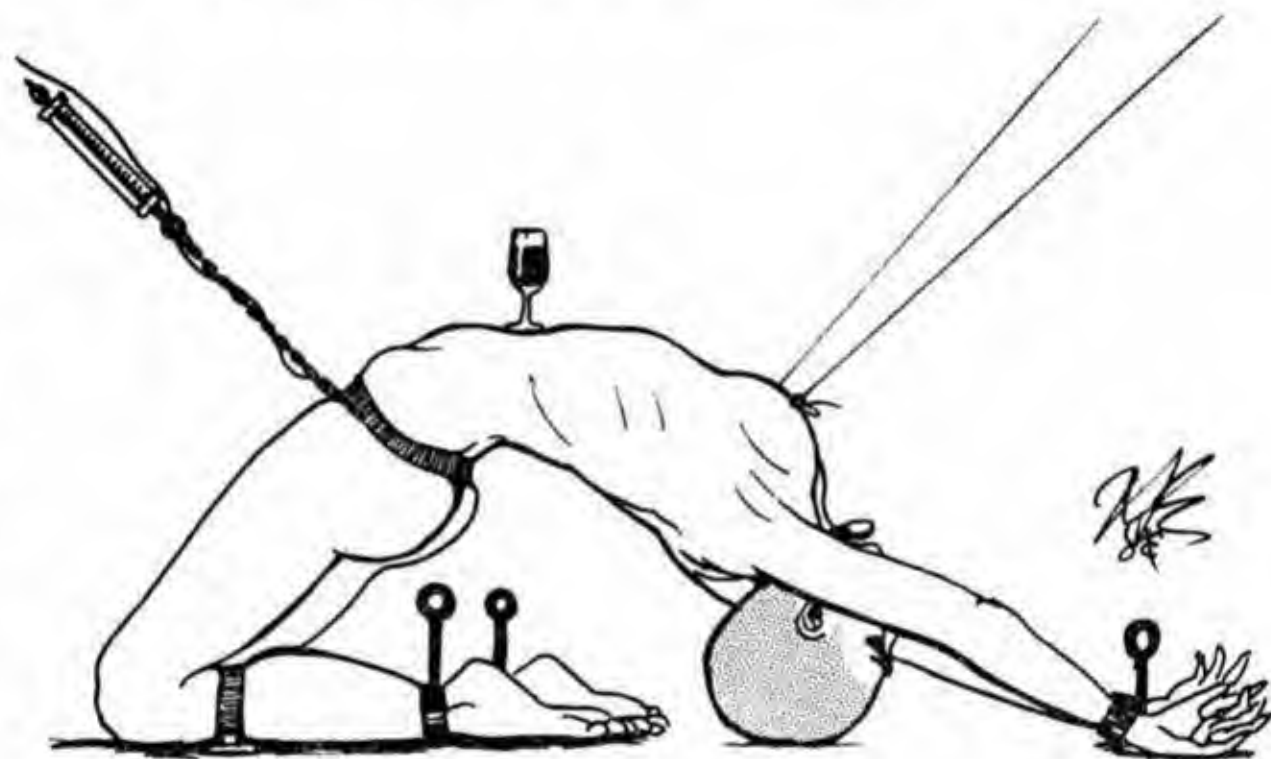
「よろしい。では、壁にさわってみろ。二メートルおきに、溝が掘ってある。そして床上一メートルの高さのところに列番号を示す鉄が出ているから、触ってみろ。大きい鉄は五の位をあらわす。つまり、大きい鉄三つに、小さい鉄二つが十七列を表わしているんだ。サアさがしてみろ。そうそう、わかったね。そしたら、壁に直角に進め。通路に沿って右手に並んでいるウレタンマットが、おまえらの寝台だ。これも五つ毎に、鉄が床に埋めこんであるから、足のうらで数えればいい。やってみろ。そうだ、そこがこれから、おまえたちの寝る場所だよ」

白い裸身が所在なげに、フワフワしたウレタンの上に、あがった。

「皆んな、位置についたな」

マイクが共通波長に切り変えられたので、全員が同じ声を聞くことになる。

「そのまま正座して聞け」



それは、原稿用紙を上から見たような床配置だった。碁盤目の一つ一つに美しい裸女が正座させられていた。

モタモタしていた女は、とび出して来たアマゾン女兵に小突き廻されて、無理矢理、ウレタン上に正座させられる羽目に陥る。抵抗しようとしても、メクラのつんぼでは、どうなるものではない。

「勤務時間は不定である。マスターがお使い下さる間は勤務時間と思わなければならぬ。勤務時間中は、おまえらは人間ではない。家具でしかない。家具は音をたてない。おまえらも声を出してはいけない。家具は生理を要求しない。おまえらも勤務中は、絶対に排泄することは許されない。そこで、おまえらは毎日、午前四時に一回だけ用足しが出来る。午前三時三十分に、コンベアーで各々の前に一回分の食事が出てくる。それは大きなボールの中に入れてある。不必要な排泄を防止するため、宇宙食の研究結果が高度にとり入れられている。食事をすませたら、ボールの中に遅滞なく排泄しなければならぬ。四時過ぎには、コンベヤーが動き出して汚物を運び出してしまふからだよ」

声にならないウメキ声が一斉に起こった。今更ながら、自分たちの惨憺たる現状が思い知らされたからであろう。

「これから家具整型に入る。十七列、立ち上れ」

再び耳のレシーバーがガンガンと鳴った。古い家具たちは夫々勤務か調教を受けているので、この部屋にはいなかった。したがって十七列だけしか、つまり新入りだけしか、いなかったのだけれども、彼女らは、それすら分らないのである。

再びヨロヨロと裸女の群れが立ち始める。剃き出しの乳房や腰が隣のそれにぶつかる。始めてのそうした感触にギョッとなって、ひるむ。しかし、冷たい調教師の声はレシーバーを通して、いっそう機械的に命令を伝えるばかりであった。

「左向け左。リード壁の方を向くんだ」

両耳に詰め込んだレシーバーが、方向感覚を与えるような仕組みになっていたから、三重苦の肉体家具でも、どうやら壁の方に向くことができた。

「右手を前に伸ばせ。そうすると、一番の手はリード壁に触れるはずだ。そうそう。あとの者は前の者の首輪をつかめ」

模索して這いまわる二十四本の右手が、それぞれ前に位置する首輪をさぐり当てようとして動く。ある手は、剃りとられた円い頭部

に触れて、ハッと縮んでしまった。ある手は又、下から女らしい豊かなカーブをなであげて、知らず知らずに、くすぐるようになってしまったのでスリリと逃げられてしまった。

何しろ、にわかメクラでは、こんなことさえ容易なことではない。それでも暫くたつと全員が言われた通り、相手の首輪を掴むことができた。

「おそい、おそい。今度、また遅れたら懲罰だよ。つかまえた首輪は、許可なしでは絶対に離すんじゃないよ。サア、一番から壁に左手をつけながら、右へ進んで行きなさい。グズグズするんじゃない」

叱咤するようにレシーバーが鳴った。裸女の群れが、徐々に動き始めた。

そこは「家具整型工場」としてしか呼ばれていなかったけれども、実は物位に認定された裸女たちを夫々好みの「家具」に仕立てるための訓練所に他ならなかった。犠牲者にとっては、地獄のような責め苦を耐えなければならぬ場所であった。

家具は①椅子②机③ベッド④オブジェの四通りに大別される。それが更に、いくつかの種類に分類されている。たとえば、椅子では

第一種椅子と呼ばれる一匹組みから、第四種椅子という玉座用の六匹組みまで、四種類がある。第一種椅子は、わかりやすいいえば、四つん這いになって背中に腰をかけさせるだけの単純なものだが(第七回挿画、参照)第四種の玉座となると、六匹の裸女を複雑に組み合わせ、柔らかない部位、乳房や腹部などで主人の身体を支えるように、デザインされているのである。各自の位置は記号番号であらわし、あらかじめ肉体家具のユニットに覚え込ませてあるから、各ユニットにそれを指示するだけで、簡単に組立てることが出来る。各ユニットは又、命令次第で、どんな姿勢、どんな位置でも即座に採れるように調教してある。この調教を、ここでは整型と呼ぶわけである。

新米の肉体家具たちは勝手がわからず、ただオロオロするばかりだった。それでも、小突き廻されながら、一列に並べられる。固いコンクリートの床であった。

「膝立ッ。わからないの?……こう号令がかかったら、足を折って膝で立つのよ」

補助のアマゾン女兵が片端から号令を実行させていった。あらかじめ床にセットしてあった金輪に膝を膝裏がつくところまで、さし

込ませ、足輪を固定してしまおうと、もう立ち上ることが出来なくなってしまう。膝と膝との間隔は四十センチほどであった。

「今度は、後ろへ大きく反り返れ。頭を床につけろ」

恥かしい姿を見せつけながら二十五人の裸女たちは、いっせいに上体をそらせる。まごまごしているのは、アマゾン女兵に引き倒されてしまう。両手の金輪をまとめて、床に縛りつける。

「バカ。寝ろといったんじゃあないよ。腰をいっばいに浮かせて大きく反りかえるんだ。頭も反らせて、頭で上体を支えろ」

モゾモゾと白い肉塊が動く。それは最早、人間であるというより、生きた肉のかたまりであった。あまりのことに、あり来たりの羞恥心なんか吹っとんでしまっている。身体の少しでも柔軟な者は、腰をありったけ突きあげて見せた。すかさず、アマゾン女兵が背中の下に、針を上向きに植えた台をさし込む。この台は、上下させることが出来るようになっていて、肉体系具の整型度に応じて調節する。ウツカリ身体をゆるめると、忽ち多くの針が背中や腰に突きささるのである。

中でも哀れをとどめたのは、柔軟でない肉

体の持主だった。彼女等には特別製の皮パンティを穿かせ、その前につけた金輪を、天井から鎖でギリギリと吊りあげるのである。骨がギシギシいって、家具は膏汗を噴き出して呻き苦しむ。これだけでは腰だけが上って、上体とのバランスがとれないので、今度はタコ糸を左右の乳首に結び合わせて、乳房から上へ引っ張り上げるのである。生娘で、まだ乳首の出ていない一匹などは、無残にもそこに針が突きさされ、タコ糸に結えつけられてしまった。

こうして二十五匹が二十五匹とも、弓反りに胸から腹をせい一ぱい、突き出した姿勢で強く身体を、固定させられてしまったのである。こんなことがどうして永つづきできるだろうか。しかし、ここでは不可能を可能にすることが要求される。これからの彼女たちは時には、こんな姿勢のまま数時間、いや一日でも、じっとしていなければならぬ。それだけに、苛酷な訓練が連日、展開されて行くわけだ。訓練が終わった者たちだって、いつも辛い苦痛を忍ばねばならないことなのに、まして、今ここにいる二十五匹にとっては、未曾有の体験だった。またたく間に局限にきってしまう。腹筋がピクピク痙攣を起こしてい

るのが、ありありとわかって、哀れな肉体系具の切ない我慢が、もうギリギリに達したことを示していた。それなのに

「これからお前たちのオナカの上にグラスを置く。中には濃硫酸が満たしてある。こぼしたら最後、大火傷をするし、一生、痕が癒らないよ。覚悟してお受けするのよ」

実際は硫酸なんか入れてはいない。自分の財産を自分でキズ物にする馬鹿は、いないのだから。ところが、当人たちには分からないから、大変な恐怖となる。ヒヤッとしたグラスの底が、臍の辺りに触れると、疲れ切った筋肉を、けなげにシャッキリさせて、少しでもグラスをゆるするまいとする。

一体全体、いつまで、この難行苦行がつづくのだろうか。

声が出せれば皆口々に哀願し、有免を乞うのだろうが、啞では、それも出来ないのだ。

「ウーッ」

「アーッ」

などという単音だけが、断続的にシジマを破るばかりである。

— (未完) —

×

×

×

×

×

×

— 被 虐 の 旅 シ リ ー ズ —

赤と黄の衣裳

由 利 美 千 子



そして、それと同じように、しあわせな思
いが体中へひろがるのを感じた。

(私はとうとう、あの人に飼ひ慣らされてし
まった)

そう思った。

随分ひどいめにあわされているのに、それ
を喜んでゐる。普通の人なら、一度でこりて
逃げて廻るだろう。それを、その行為ゆえに
愛を深めていく私なのだ。

そのくせ、正常な愛の行為はまだ私たちの
間におこなわれていなかった。私の体はアブ
ノーマルな愛の表現のあとに、ノーマルな愛
の行為がくることを望んでいる。

それなのに、舌がしびれるようなキスをし
ながら、それ以上には進んでいない。これは

どういふわけなのだろう。

今日はお湯の中でいじめられずにすんだ。
建て増した新しい客室なのに、トイレは
ついていても、バスはついていない。家族風
呂もなかった。湯殿へは長い廊下を渡って行
く。

男性用と女性用はわかれていた。

昔の湯治場といった湯殿だった。

湯舟には水の栓がなく、洗い場にも水や湯
は栓で引かれていなかった。お湯が熱かつた
ら、水をたたえた水槽からくんでくる。お湯
がぬるかったら、熱湯が注ぎこまれている湯
槽からくんでお湯を足す。だから、湯殿の中
には湯舟が一つと、男女の境の両方にまたが
る水槽と、もう一つ小さな湯槽があるだけな
のだ。

多分、水槽で水をくむ女の影は、男湯の方
から見られるのではないだろうか。こんな風
呂は、もう珍しい部類に入るのだろうと思っ
た。

お湯の硫黄の香りに包まれながら、私は本
当にたのしかった。多分このあとに、私には
苦しいことがあるだろうに、その苦しさを待
ち望んでいる私……。

隣の浴室で、お湯をあびる音がする。彼が

溪谷で冷え切った体を温泉へつけた時、体
のはしから中心へ、小波のような戦慄が走っ
た。

温泉の温かさが痛いように感じられた。

お湯へ入っている姿が目の前にうかぶと、私の体はしびれるようだった。

(愛している……)

その気持が本当に痛いほどに感じられた。

(いじめて……もっといじめて……)

私は心の中で訴える。

それが私の愛の表現なのだ。

そして、私は風呂の中で自分の体をいとおしむように撫でた。

いじめられるためにこの体を洗い。抓られるために腕や胸に、香りの高い石鹸の泡を立てているのだ。

これを変態というのだろうか……。

変態という言葉は私には好かない。誰だって

好かないにきまっている。

何かいい言葉はないのだろうか……？

アブノーマルという方がまだひびきがやわらかい。しかし素敵な言葉ではないと思う。

私は湯舟の中で、ない知恵をしぼって考えていたが、

「あがるよ」男湯から声をかけられた。

多分、男湯にも、誰もいないのだろう。

「ええ、私も……」

さあ、いよいよこれからだ……。そう思う

と、何と表現したらいいのかわからないさざ

めきが体中へ流れて行った。

部屋へ戻ると、炬燵の上の食卓に夕食の膳が並べてあった。

スキーにはまだ早いし、紅葉にはおそいせいで、泊り客は少ないのだろう。季節的に雇う女中の数も少ないのか、ごはんのおひつまで、すでに、はこばれていた。おつゆだつてさめてしまう。

本当は、こういうひまの時ほど、サービスがよくなるはずなのに、母屋に遠い新館の客室へ、何度も足をはこぶのが、ひまだけに面倒なのだろう。食後のフルーツまですっかり食卓にのっていた。

私たちにしては、この方が気楽だった。それを承知でアベックにはこういうサービスの仕方をするのかもしれない。そうなるのもサービスの一種なのかと思った。

「何を感じた顔をしてるんだい？」

彼がきいた。

「ううん、何でもないの」

「キミの食いしん坊が、又、食事にありつけないかと思って心配しているんだな」

彼は笑うと

「そう心配しなさんな、おひるに釜めしを沢

山、食べたじゃないか」

と、からかうように言った。

「さあ、裸におなり」

「厭！」

私は、わざとさからった。

「ダメだよ、そんなジェスチャーは……。さあ、てまをかけずに裸におなり」

「だって……」

「そうだ、ドアの鍵をかけておいで。ついでにトイレへも行くんだろう」

何もかも見通しでは、さからっても無駄だった。

私は次の部屋の椅子の背に、ぬいだ服をかけた。下にはまだスリッパを着ている。

「ボクの目の前で裸になるんだ」

私はスリッパを下へはずした。

「だめだ。ボクの目の前でそれをぬぐんだ。もう一度それを着て、ここへおいで」

私が躊躇していると、

「はい、といえ」

と彼はいった。

「はい」

私は仕方なくいうと、ぬいだスリッパをもう一度着て、彼の前へ立った。

「さあ、おぬぎ」

私はスリッパをスルツと畳へおとした。

「パンティもおとり」

「厭！」

「はいと、おいしい。おとなしくするんだ」

「はい」

私は生まれたままの姿になった。

「よし、ぬいだものを、ちゃんと戸棚へしまっておいで」

素裸で動き廻ることに私は羞恥を感じた。

私はスリッパと、パンティを部屋のすみへおいた。

「いわれた通りにしないね。よし」

彼は立って行くと、スーツケースから犬の首輪をとり出して、私の首にはめた。

「あっ、痛っ！」

私は思わず叫んだ。その首輪は中に向かって、トゲのように尖った金属が何本も突き出ていた。

「脱いだものを、かたづけるね」

私は、うなずいた。それも、そっとしななければ痛かった。

それは大きな犬の首にはめるのだろう。だから、尖ったさが、いつも私の首を突くわけではなかったが、首を動かすと、その先端にふれて痛かった。

「ボクの服も、かたづけるんだよ」

「ええ」

私は、いわれた通りにした。

首輪のさきには長い鎖がついていた。それがジャラジャラと鳴った。

「炬燵に入っていたら暑くなった。靴下をぬがしてくれ」

彼は言った。

私は、うずくまって彼の靴下をぬがそうとしたが、首が痛かった。

「何をぐずぐずしているんだ」

彼は首輪についている鎖を引いた。

「痛っ！」

私は悲鳴をあげる。

私は、やっと両方の靴下をぬがした。

お風呂から上って、新しい靴下をはいたのだろう。厭な匂いは一つもしなかった。むしろ、風呂の匂いがそのまま彼の足の指のまたの間から立ち昇るようだった。

私は彼の足のおや指を口にふくんだ。そして軽くかみ、ペロペロとなめた。犬にされた女の、それは愛の表現だった。

「何するんだ」

彼は私の鎖を引く、

「痛い……」

言いながら、私は彼の足の指をなめるのをやめなかった。

首輪を引かれながら、主人の足をなめている犬のような私を、自分自身、気に入っていた。多分、彼も気に入ってくれるだろう。

首はしまるし、尖ったさきに突かれて痛かったが、それが心地よかった。

「もういいよ、やめろよ」

彼は苦笑した。

「いじめられなくなるじゃないか」

そういわれて私はやめた。

「そんなことすると、キミを普通に愛したくなる」

「普通について……どういう風に？」

私は息をはずませた。

打たれなくてもいい縛られなくてもいい。

私は彼の腕に抱きしめられたかった。

彼はだまって、私の首の鎖を炬燵の脚になぐとトイレへ立った。

多分、彼は自分で自分を制してきたのだろう。

「さあ、めしにしよう」

わざと乱暴にいうと、室内電話をとって私にきいた。

「ビールにする？ お酒にする？」

「どっちでも……」

といいながら、いったいこの姿で、女中さんがきている間、どこにかくれようかと思つた。そして、よく、部屋へそなえつけてある風呂場で息をひそめていたのを思い出した。

今日はトイレより仕方ないだろう。

しかし女中さんが、トントンとノックして注文したビールとお酒と両方をはこんできた時、彼は私の鎖をといてくれなかった。

「その中へ入れ」

「炬燵の中？」

「うん」

私の首はその脚につながっているのだ。鎖をといてくれなければ、私はその卓の下へ身をかくすより他に術もない。

私は体を丸めて、モソモソと炬燵の中へ首をつっこんだ。卓の裏側がヒーターになっている電気炬燵だから、体をペタンコにすればかくれることは出来た。しかし、電気のスイッチを切る暇はなかった。

ほんの短い間だったが、その苦しかったこと……。窮屈なポーズをとっているから、首輪の尖ったさがどうしても肌を突いた。そして、体はたとえ素裸でも、カッカッと暑かった。

(痛い……苦しい……暑い……)

私はフーフーと声に出そうになるのを我慢した。

女中さんはお酒とビールをおいて去った。

「出ておいで」

彼は鎖を引いた。

「痛い！」

私は叫んだ。尖ったさが、肌にぎゅっとくいこんだ。

フサフサした毛におおわれた犬でさえ、痛さを感じるから、従順に鎖をもつものという通りになるのだろう。まして、毛におおわれていない女の肌に、その尖端がどんなに痛いのか、とても言葉ではいえなかった。

「暑かったろう。涼しくしてやるよ」

彼は冷たくいうと、鎖を鴨居へ放りあげ、鴨居を通して引いた。

私はそれにつれて立ち上がった。恥かしい所を手でおおった。

外国人はこういう時、乳をかくすというが私はやはり日本人らしく、乳よりも、もっと恥かしい所をかくした。

彼は私の姿を見あげ見おろしていたが、「まあ、めしにするか」

ジャランと音を立てて、鎖をゆるめた。

私はほっとして炬燵へ近付き、下半身をかくした。

私が箸をとりあげようとすると、彼は又、鎖を引張った。

「いつものことだ。いわなくても解っているだろう。獣が箸を使うかい？」

そして彼は、鎖を引いたりのばしたりして私をもてあそんだ。

私が吸物に口をつけて、口でそのフタをとり、唇と舌でそれを吸おうとすると、急に鎖を引く。

「痛い！」

言いながら、私は思わずおわんを引っくりかえしてしまった。

その罰に、私は口でお膳がきんをとって卓をふくだけではなく、彼の方へ顔を向けて、両頬に平手打ちをくらわなければならなかった。

おさしみをお醤油につけて食べるのにも、私はこぼした。

彼は私の鼻づらを無理に、お膳へこすりつけた。

私はもう人間ではなかった。犬であり、猫であった。そして、猛犬のような首輪をはめられているのだ。

それでも、食事は終わった。
女中さんのくる間、私はトイレへ入ることを許された。

「さあ、寝る前の運動だ」

彼はというと、スリッパから細引をとり出して畳の上へ投げた。

細引が畳の上で、蛇のようにとぐろを巻くを見ると、私の体がキューツと締まる。縄で締めなくても、目に見えない縄が私の体を締めるのだ。

彼は私の片方の手首に縄を結びつけた。

そして床の間の上の、棟木のようになっている板へ縄のさきを通した。

首の鎖は、またジャランと鴨居を通す。

もう片方の手首も縛られて、そのさきも鴨居へ通された。

彼はその三つのさきを一つに持つと、引張った。

「痛い！」

私は、つい叫んでしまう。

私は座敷と、入口から入った所のロビーのような部屋の間へ棒立ちになった。

片手は床の間の上へななめにのばされ、片手は首と同じように、部屋のしきりの鴨居へ

のばしている。

爪先立って、やっと首輪にゆとりをもたせているが、足がぐらつく、首輪の先端が肌をさした。

打たれなくても、くすぐられなくても、ただそれだけで苦しかった。

彼は縄や鎖のさきを一つ一つ、柱や椅子に結びつけて固定させた。

「少し太ったんじゃないか？」

彼は私の胸へ細引をまきつけた。

そして、その片方のはしを床柱にゆわえつけると、片方を反対側からぎゅうと引いた。

「ああ……」

私は身をよじって悲鳴をあげた。

「声を立てると、もっと締めるぞ」

彼は、なおも力を入れた。

「ううっ……」

私は、こらえた。

けれど、呻き声はどうしても口からもれてしまう。

胸が大きく波打った。

「く、くるしい……」

私は小声で訴えた。大きな声を出して、なおも締められたら、胸がちぎれるのではないかと思った。

「大丈夫だよ、死にゃあしないよ」

彼は平気な顔で、私の苦悶でゆがむ顔をみていたが、そのはしをロビーの卓の脚にむすんだ。

今度は足首だった。

彼は足首へ縄をかけた。

片方の足首を不意に引かれ、私は体をぐらっと崩しそうになった。

首輪の先端が痛かった。

「ああ……」

叫ぶなといわれても、叫んでしまう。

私は、わずかに片足で立った。転んで両脚を宙に浮かしてしまったら体の重心が首輪にかかる。したら首輪の先端は肌に突きささってしまいうだろう。

「その首輪、よく似合うよ」

彼は言った。

「あんまり肌を突きさすなら、キミの首にタオルでも巻いてやろうかと思ったが、まあ、そのくらいなら大丈夫だろう」

「大丈夫じゃないわ、痛い……お願い、タオルをまいて……」

「すぐ甘える。タオルは他の使い方ががあるんだよ」

彼はというと、タオルのさきを結んでコブを

作り、私の後へまわると、いきなり背を打った。

「ああっ……」

私は片足で泳ぐように、体をくねらせた。

片足へ結んだ縄尻は、彼が手の中に握っているから、私は片足でピョンピョンとぶよぶよにして、背を打たれる衝撃をこらえなければならなかった。

「フフ……。いい恰好だよ」

彼は笑う。

両手をななめ上に一杯にのぼし、首ものばせるだけのぼして、たえずチクチクと肌を痛められ、胴は胴で、これ以上はくびれないというほどに締めつけられている。

その上、片足は片仮名のレという字のよううしろへ引かれ、もう片方でやっと立っているのだ。たしかに、はたから見たらいい恰好に違いない。

けれど、そんな恰好で背中やお尻にピシッピシッとタオルの鞭をふられて、どうやってこらえたらいいのだろう。

思わず大きな声が出るほど、タオルよりは首が痛かった。

「はあ、はあ……」
僅かに彼の打つ手が休む間、息をつく。

「ピシッ」

と打たれると、又、

「ううっ……」

と、痛さをかみこらす。

けれど外の谷川の音が雨のように響いていても、私たちの立てている物音は異様に外へ聞こえそうに思われた。

それほど静かだった。

温泉湯といっても、三味の音一つ聞こえなかった。

彼は私の足首を結んだ紐のさきも鴨居を通して椅子の脚にくくった。

「もう一寸、音のたたないものにしよう」

そういうと彼は作りつけの洋服筆筒をあけて何か探しているようだった。私には、うしろなので何をしているのか、よくわからなかった。

しかし、突然、うしろへあげている足の、あしのうらをサラサラと何かでこすられた。

「あっ！」

と、足をひっこめようとしたが、体が泳いだけだった。

「旅館の前で、いいもん拾ったんだよ」

彼は私の目の前へ山鳥のらしい羽根をみせた。

「このあたり、きっと猟にくる人があるんだね」

キジの羽根だろうか、それだけ見ていれば「まあ、きれい」と、いいたいような羽根だったが、それで何をされるかと思うと、きれいなんて言うていられなかった。

いつものように後手に縛られていれば、腋の下は胴との間にあまりすき間がないが、今日は両手を思いきり上へのぼされている。腋の下も二の腕も無防備に、くすぐって下さいといわんばかりの姿にされているのだ。

「それを拾ったんで、こんな縛り方をしたのね」

ものをいうのも苦しかったが私は言った。

「フフフ、まあ、そういうわけさ」

彼はそれでスーッと私の腋の下をなぞた。

「ああっ……」

声を立てまいとしても、声が出てしまう。彼はその羽根で私の腋の下や、二の腕のやわらかい所をスーッと撫であげ撫でおろす。

「うふふう……ああ……ううふう……」

私は身をよじった。

首が痛い。

「ううふう……ひひっ……あふう……」
声にならない声で私はうめいた。

うしろへあげている、あしのうらも、いい責めどころになる。

裸なのに、私はじと汗をかいてきた。

「もうやめて、かんにんして……」

私は訴えた。

彼は乳首のさきもその羽根でいじった。

羽根の先端でくすぐるように乳首をいじられると、快さにくすぐったさが一つになって体中の血が、あっちこっちとバラバラに流れ出すような気がした。

私はもっともっと、めっちゃめっちゃにいじめてもらいたいような気がしてきた。

けれど、それを絶つように室内電話が鳴った。

私たちは、寝床を敷きにもう一度、女中がくることを忘れていたのに気がついた。

私は随分長い時間いじめられたように思ったが、一時間たらずだったのだろうか。

燃え出した火にいきなり水をかけられたように、私たちは急にシーンとしてしまった。

私の手や足を吊っていた縄をとくに、そうひまはかからなかった。

けれど、ドアをノックする音に、私は又首輪も縄も体につけたまま、その縄尻を全部かかえて、トイレへとびこんでかくれるのが

やっとだった。

○

翌日私たちはタクシーで蓼科湖まで出た。

彼の見たいと云っていた唐松が、湖にその細い葉を散らしていた。

恰度、大きな草簾を逆さに立てたような姿

だった。その葉の一枚一枚が細い金色の針のように光って風に舞うのだ。唐松という名はきいていたが、目近に見るのは、はじめてのように思った。

「これが唐松なのね」

詩人がうたいたいくなる美しさを、その木はもっていた。

「これが見たかったんだ」

そういう彼のどこに、あの冷ややかな血が流れているのだろう。

私たちはそこからレンタカーを借りて、横岳のロープウエーへ向かった。

山の頂きが白く見えるのは、雪のせいかと思っただが、近付いてみると、それは木のせいだった。

白樺や岳樺たけかんばの多い山は、その白い木の肌が

連なって、遠くから見ると、まだらに雪が残っているように見えるのだった。

唐松の林は山裾にひろがり、上の方は白い

肌の本が多かった。

この清浄な空気の中では、彼が私をいじめる方法もないと思っていた。

しかし、彼はどこまでも加虐を追求した。

「靴をお出し」

彼は言った。

「こう広々とした所では、まさかキミを縛って歩くわけにもいかないだろう。けれど、ここまできて、キミにただ景色をみせてやってはじまらない。キミだってつまらないだろう。だから、ドレイはドレイらしくハダシで歩くんだよ」

「だって……」

と言っているうちに、彼は道から少し入った所へ車をとめて、私の靴をぬがした。

「でも、それこそ人目のある中で、まさかハダシでは歩けないわ」

「だから、こうするのさ」

彼は私の靴を片手にもつと、片手でズボンのポケットをさぐっていたが、ナイフをとり出した。そして、パチンと刃を引き出すと、いきなり私の靴のうらへそれをつき立てた。

「何するの？」

「こうして裏を切っておくんだよ」

ブスブスと、ナイフの刃は靴の裏革を裂い

た。

「さあ、そっちもおだし」

どこまでひとをいじめることが好きなのだろう——。

私はあきれるような、感心するような気持ちで、もう片方の靴も彼の手に渡した。

横岳のロープウエーを上がると、坪庭といわれる頂上に出る。

いつ降った雪か、真白く、岩の間に凍りついていていた。

何千メートルかの頂上に出たわけだ。白樺も岳樺も少なく、あるものは岩と、這松だった。

私は靴ははいていても、ハダシ同然で、そ

〔伝言板〕○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

の岩の道を歩かされた。薄い靴下はすぐ破れた。

あしのうらは冷たく、痛かった。

「なにを、ぐずぐずしているんだい。早く歩けよ」

彼は、うしろから、せきたてる。

頂上をひとまわり出来るように道がついているのだが、やわらかい土の道ではない。私のおしのうらはヒリヒリと痛みが増した。

「早く行かないと、うしろから人がくるよ、せつせと歩け」

私は縄こそまわっていないが、山道を売られていくドレイのように、ヨロヨロと歩かされた。

時には岩角のとがったのがもろにあしのうらをさした。

「もう引き返しましょう」

私は言った。

「ダメだ。そのまま、この頂上をひとまわりするんだ」

「でも、あしのうらから血が出ているのよ、私が歩いたあとに血がついていたら、おかしいわ」

「大丈夫だよ、ボクがそのあとをふんで消してやってるよ」

「ひどいわ」

「とうとう、又言ったね、ボクの好きな言葉を……。縛られていないだけましなんだよ。」

さあ、歩け、さっさと歩くんだよ」

私は言われてヨロヨロと歩いた。

誰も私の靴の裏が切られてなくなっているなんて思わないだろう。

私のあしのうらから血が流れているなんて思わないだろう。

「さあ、歩けよ」

彼は人の少ないのいいことに、小枝を拾って私のお尻をついた。

縛られていなくても、私はやっぱり彼の囚人なのだ。

あしのうらから血を流し、お尻を小枝で突かれながら、岩から岩へ渡ったり、ゴリゴリする小石の道を歩いていった。

遠くの白い雲が綿のように思われたのも、その綿で、あしのうらを包みたいと思ったほど、痛みがひどくなっていた、せいかもしれない。

そして、唐松の林は下の方に、ひっそりと静まってみえた。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

ハリツケ残酷記

大橋 美代子

(1) プロローグ

「大分できあがったわ」

カーテンのすき間から、ソツと窓越しに庭を見ながら、私はつぶやきました。

今日は日曜日。ほかほかと暖かい、小春日和ののどかな午後です。いつもですと、休日には午前十一時頃まで寝ている夫が、今日は朝はやくから庭に出て、日曜大工に余念がありません。

秋もすっかり深まり、そこはかとなく、冬の訪れのけはいさえ感じられるようになった庭には、一面に散った落葉にまじって、風に

吹かれたカンナくずが、いっばいに舞い散っております。そのなかで、晩秋のやわらかい陽ざしをいっばいに浴び、額に汗をうかべながら、ノコギリやカンナを使っている夫の姿は、いかにも楽しそうです。

夫がつくっている品物を、皆様は何だと思いにありますか？

それは、犬小屋でも、お風呂場のすのこでもありません。それは平和でしずかな周囲の環境からは、想像もできないハリツケ柱なのです。前もって私の身長や、手や足をひろげたとときの長さを計ってつくった設計図をもとに、ハリツケ柱を作っているのです。

すでに作業は完成にちかく、ちょうど今、柱につけた切り込みを合わせて、十字形に組立てているところなのです。

「今夜はあの柱に縛りつけられて、どんなにひどく責められ、そしていじめられるのかしら？」

十字架にきびしく縛りつけられた自分自身の姿を想像しただけで、私は身体中が熱くなり、じーんと背中を走るマゾの血が押えようもなく燃えあがって、心は、はやくも被虐の世界をさまよっているのです。

と、その時。いつも出入りしている植木屋さんが、突然、庭に入ってきました。



私の家は、邸外の小高い丘の上にたてられた一軒家で、周囲を塀や植込みでかこまれていて、他人からのぞかれることがないので、夫は安心していたのでしょう。あるいは作業に熱中していて、植木屋さんが下からあがってきたのに、気がつかなかったのかも知れません。

「旦那。こりあ、いったい何ですか？」
「うん……いや、なに……それより何かご用ですか」

組みあげた十字架をあわててはずしながら夫は、しどろもどろの返事をしています。私は夫のその狼狽した恰好がおかしくてたまら

ず、思わずふき出してしまいました。

植木屋さんが帰っていったあと、夫は額のひや汗をタオルでふきながら、家のなかに入ってきました。

「いやあ、まったく弱ったよ。まさかハリツケ柱ともいえないし、なんとも説明のしようがなくてね」

「いい気味。私をいじめようとするから、神様が、ばちをあてて下さったのよ。さっきのあなたの恰好といったらなかったわ」

「こいつめ、よくも言ったな。今夜は思いきりいじめてやるから、覚悟しておけよ」

「あまりひどいことをしちゃ嫌よ。どんなにしていじめるの？」

「それは言えないね
まあ、今夜のお楽しみというところだ」

夫のことが、悦
虐の甘美な期待とな
って私の心をうずか
せます。今夜は徹底
的に責められるらしいわ。どのように責められるのかしら？
というおそれの反面

思いきりいじめられてみたい被虐の衝動がつきあげてきて私の胸は、その責めへの不安と期待がめまぐるしく交錯し、妖しくふるえるのでした。

夕方になって、ようやくハリツケ柱はできあがりしました。

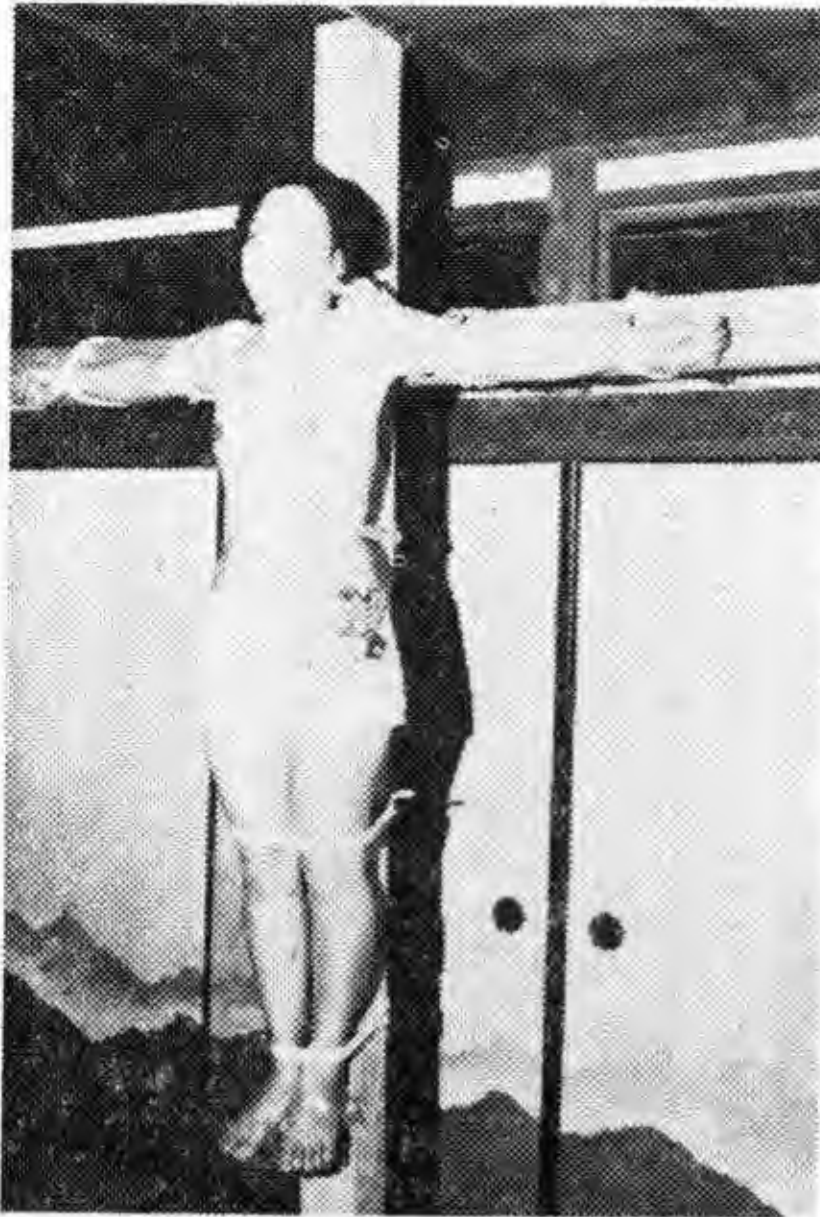
八畳のお部屋の畳の上に板をおいて、その上に真っ直ぐに柱をたて天井のサンに釘をうって、柱がたおれないように針金でとめます。そして、四角く切込みをつけた横木をはめて、んで針金でむすびつけますと、立派なハリツケ柱ができあがったのです。

その夜は、夕食もそこそこにすませると、はやめに入浴をいたしました。

透明なお湯の中に、ほの白く浮かんだ手足をみていますと、これからハリツケの極刑をうける自分の身体がいとおしく、せめて洗ひ清めたきれいな身体で処刑台に上りたい——との思いから、私はゆっくりと時間をかけ、全身に石鹸の泡をまぶして、念入りに身体を洗いました。

(2) ハリツケのお仕置

お風呂からあがり、バスタオルに身体を包んでお部屋に入りますと、夫はすでに縄や手



拭を準備して待ちかまえていました。

「おそいじゃないか。いったい、いつまで待たせる気なんだ」

「すみません。身体をよく洗っていたものですから」

「すみませんで、すむとおもうか。はやくそこにすわれ！」

嗜虐の想念に、逸りに逸るおもいを待たされて、夫はイライラしていたのでしょうか。私の身体から、バスタオルを乱暴に引きはがしてしまいました。湯上りの火照った身体が

あますところなく空気にさらされて、かすかにふるえます。

「お前は昼間、植木屋さんがきたときに私を笑い、私を侮辱したから、ハリツケの前に付加刑として引き廻しの刑にする。手をうしろにまわせ」

(いよいよお仕置だわ。今日は徹底的に責められるに違いない)これから始まろうとするはげしいお仕置を想い、その責めへの期待に私の身体は小刻みにふるえていました。

私は、すべてをあきらめきって観念の眼を

とじ、夫に背をむけて正座し、

両手をうしろにまわしました。

背中に組ませ

られた両手首に縄が巻きついて

ギリギリと巻きしめられてゆき

ます。手首にく

いこむ、縄の感

触！縛られる

よろこびが湧き

あがり、それが

陶然と、全身にひろがってゆきました。

長いロープが首にかけられて、のどのところで結ばれ、二十糎ほど間をあけて、ふたつの結びめがつくられます。背中からまわされた別の縄が、腕のつけねと肘の上をまきしめ体の前側に菱形をつくりながら、ていねいに菱縄をかけられていきます。

この縄は、白い綿ロープを夫がわざわざ染粉で黒くそめたものですが、みるからにおぞましい真黒な縄を直接素肌につけられて、ひしひしと縛りあげられるのは、視覚をすぐく刺激して、被虐感がよりいっそう高められるのです。

私って、胸にはぜんぜん自信がなくて、劣等感さえいだいているのですけれど、黒い菱形の縄にしめあげられた乳房は、すこしは大きく見えて、恥かしいなかにもうれしい気持ちになります。

つぎに、膝をすこし開いて中腰にひざまずかされ、もっとも恥かしい股間縄が、かけられます。胸にふたつの菱形をつくり、ウエストをきつくふた巻きした縄が、おへそのところから一気にさがって、おしりの方にまわされていきます。

「ああ……」

その縄を思いきりつよく締めあげられて、私は思わず声をあげてしまいました。

太腿の間におされた縄が、いっばいに引きあげられて、後手の結びめと、かたく一つにされますと、私の身体は、菱縄にギッチリと固定されてしまい、寸分のゆるみもなくなってしまうのです。

私は、身体中をしめつける縄目の快さに頭が、ぼうっとなってしまう、思わずフラフラと夫の方に倒れかかりました。夫はその私を分厚い胸でうけとめ、しっかりと抱きしめると、あごに手をかけて顔を仰向かせ、あつい口づけをするのでした。幸せが全身をつつまるで雲の上ののったような夢心地のひと時——。夫の唾液のなかで、私の舌はしびれていました。

「お願い。いじめて、いじめて……」

責めのムードが高まり、私は、せつなくあえぎながら、うわ言のように言いました。

「よしッ、いじめてやる——。うんといじめてやる！」

私は、あらあらしく畳の上に突きたおされました。きびしくかけられた縄が、一ぺんにぎゅーッと締めまり、私はその痛さに苦肉のうめき声をあげました。

「さあ猿ぐつわだ。顔をあげて口をあけろ」

「ハイ……」

私は不自由な身体をおこして坐りなおし、目をとじたまま顔を仰向けて、命じられたとおりに口をおおきく開きました。

「もっと顔をあげて」

夫の手が私の髪の毛をつかんで、グイッと乱暴に、うしろに引きます。顔が水平になるぐらいにまで仰向かせられると、口のなかに布切れがギュウギュウ詰めこまれ、その上から豆シボリの手拭できつくおおわれて、猿ぐつわをはめられてしまいました。そのうえ、さらに黒い布で厳重な目かくしまでかけられてしまったのです。

「立て！」

私は、しばらくして不自由な身体をおこしてヨロヨロと立ちあがりました。

「さあ、引き廻しの刑だ。キリキリあるけ」

夫は、後手のむすびめに別の縄をつけるとその縄の端で私のおしりを叩きながら追いつてくるのです。

上半身をひしひしと締めあげている菱縄。口には、うめき声すらたてられないほど、完全にはめられた猿ぐつわ。そのうえ、黒布の厳重な目かくし。これが、引き廻しをうける

ときの私の姿なのです。私は、ハリツケに処せられる女囚が、きびしい縄目をかけられたまま馬の背にのせられ、人びとのあわれみやさげすみの声をききながら、江戸のまちを引き廻されてゆく——。という情景を想像し、マゾヒスティックな引き廻しの気分にはたりながら、台所や廊下から、すべてのお部屋をグルグルと何回も引き廻されました。

よく知っているはずのわが家の間取りなのですが、目かくしをされますと、方角がわからないので大変不安ですし、そのうえ、わざと意地悪く、あちこちに椅子や箱などがおいであるのです。そのため、何度も足をとられて前のめりにつまずき、倒れそうになるのを必死でこらえながら、引き廻しの刑をうけたのでした。

時間がたつにしたがって、腿の間におされた縄がすれて、だんだん痛くなつてまいります。きつくしぼられた後手の手首などは、もうすっかりしびれてしまつて、まったく、感覚がなくなっています。

昼間は暖かかったのに、夜にはいつてから気温がぐんとさがってまいりました。外にはつめたい木枯らしが吹きあれているのでしょいか、ガタガタと雨戸をゆする、はげしい風

の音がきこえます。

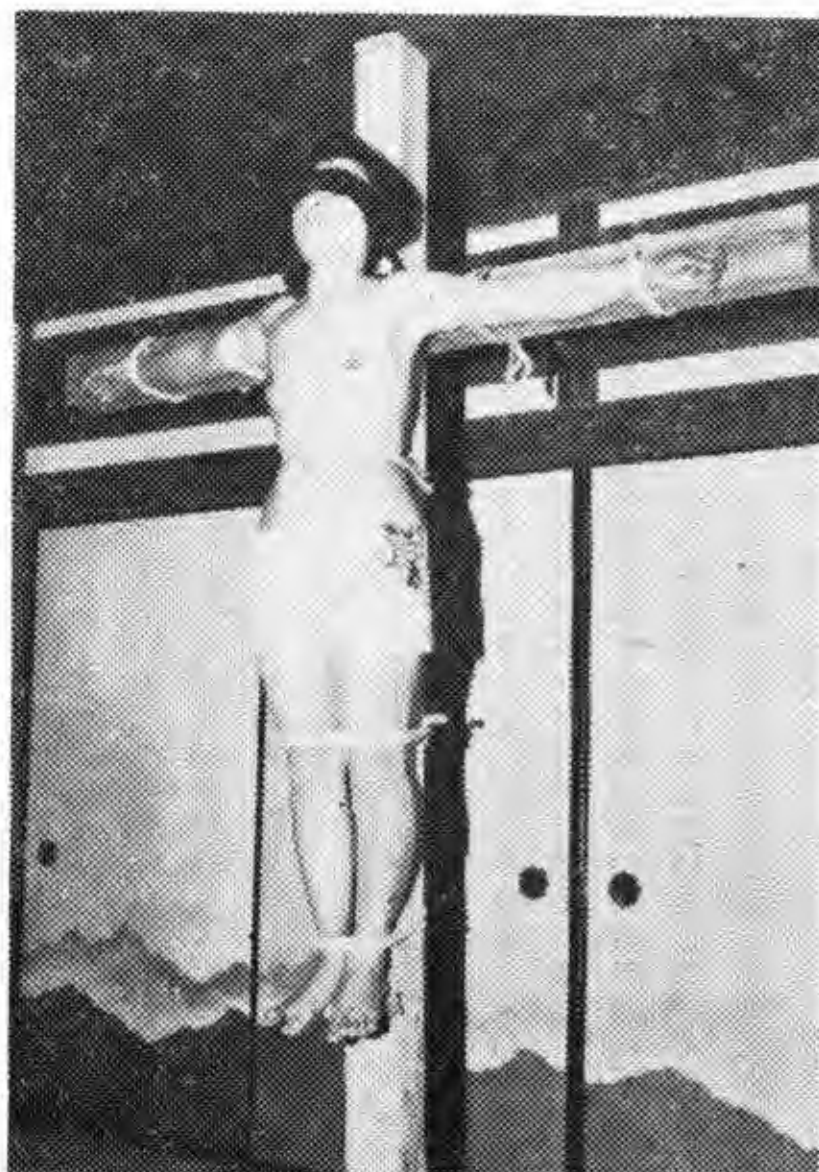
お風呂であたたまった身体も、すっかり冷えてしまい、縄目の痛さに加えて、たまらない寒さが私を責めはじめました。

(ううッ、寒いわ……はやくお仕置にして)

私は、一刻もはやく引き廻しを終わって、ハリツケの処刑をうけたい。と、心のなかで念じました。

まだストープを出す時期ではないのですけれど、はだかのままでお仕置をうける私のために、処刑の部屋には、早くからストープが入れられて暖められているのです。

三十分ほど引き廻されてから、ようやく処刑の部屋にいられたときには、ほんとうにほっとしました。目かくしと菱縄がとかれます。手も足も氷のようにひえきって、まるっきり感覚がなくなっていました。



ひと息つく間もなく、ハリツケ柱の前におかれた踏台の上に追いあげられてしまっています。

私は、夫に命じられるままに、踏台にあがって十字架を背にしてたち、両腕をまっすぐ横にのばしました。

はじめに、この腕のなかほどに三巻きほど縄がまかれたあと、今度は、横木といっしょにグルグル巻きに括りつけられます。あまた縄は切りすてますので、これには、そめていない白のままの綿ロープが使われました。つぎに、左右の手首にもおなじようにロープ

が巻かれて、横木にしっかりと括りつけられますと、私の上体は、両腕をいっぱいにのばしたまま柱に固定されて、微動もできなくなっていました。

「ホラ、この足台の上に足をのせるんだ」

夫は、しきりに私の足首をつついてせきたてますが、こわくて、なかなか足をうごかすことができません。

柱の中途につきでている足台は、長さが四纏ぐらいの小さなもので、かかとのうしろの方が辛うじてのせられるぐらいですので、大変のりにくく、また、柱が前にたおれそうな気がして、こわくてたまりません。

「体が宙に浮くような心もとなさ」ということばがありますけれど、ほんとうにそのとおりで、柱の上にたかく縛られるのは、とてもこわくて心細いものです。人間は、もともと地上に体重をあずけて生活するようになっていいますので、引力にさからって宙にたかいたところに縛られたり、吊るされたりすることに本能的に恐怖感をいだくのかも知れませんわね。

ようやくの思いで足台にのせた足首に、ロープが巻きついて、柱にギリギリと縛りつけられます。さらに、膝の上とおなかを厳重に

しぱりつけて、夫のハリツケ作業はようやく終わりました。

私の身体は十字架にギッチリと固定されてしまい、どんなに身もだえをしても、もはや動かせるのは、手足の指と首だけになってしまったのです。

「ウーン、すばらしい——。最高にかっこいいよ」

天井ちかくにたかだかと、全裸のままハリツケられた私を見あげながら、夫は満足そうにいいました。そしてカメラで、私のあられもない姿を、あらゆる角度から写真におさめるのでした。右から、左から、下から——。シャッターの音が続けざまにひびき、かたく閉じたまぶたを透して、フラッシュの光るのを感じられます。

「さあ、突くよ。覚悟はいいね」

いよいよ、お仕置です。

私は全裸のあさましい姿のまま、群衆の前で、むごたらしく処刑されてゆく自分自身の姿をおもい、めくるめくような被虐の世界に没入してゆきました。

「エイッ！」

夫の手にかまえられた槍がひらめいたかと思うと、サッとくり出され、左側の腋の下が

突かれました。この槍は、竹棒の先にナイフを括りつけてつくったもので、ナイフの刃はつぶしてあるのですが、腋の下にチクリと痛みを感じます。

——本物のするどい槍の穂先が、私のやわらかい皮肉をやぶって、左側の脇腹ふかく突きささり、真赤にそまった穂先が、右の肩先にまで抜けてゆく——。という妄想に、私は掌をかたくにぎりしめ、顔をのけぞらせて身もだえをしました。

「ウーム」

と、悲痛なうめき声が、嚴重な猿ぐつわから洩れます。断末魔の激痛！

死の瞬間のはげしいケイレンが、身体中をふるわせました。

真赤な血しおがほとぼしり、それが肌をつたわってながれ、両足のつま先からタラタラとしたたる幻想に、私は酔ったように恍惚となっていました。

「エイ、エイ……」

左右の腋の下を、交互に数回ずつ突かれたあと、とどめ槍としてのどを突かれて、ハリツケのお仕置は終わったのです。私は全身朱にそまって息たえはてた死がいたった想いで、首を前にたれて、グッタリと全身のちか

らを抜きました——

(3) 柱 縛 り

ここまでは、あらかじめ夫とうち合わせていた筋書きで、プログラムどおりに「裸女のハリツケ刑、一幕一場」のお芝居は終わったわけではありません。

私も、はじめからこれだけで許してもらえなどとは思っていませんでしたけれどもそれから、夫の演出による独演で、いろいろな縛りかたの研究がおこなわれたのです。

ハリツケ柱を最大限につかって、いろいろな形に何回も縛りなおされては写真をとられまた、ギッチリと縛りつけられて、身動きもできない身体をさんざん責められ、さいなまれて、それは、えんえんと明方ちかくまで続けられたのでした。

十字架にかけられたまま、足首と膝の縄をとかれ、べつの太いロープで足首からおなかの辺りまでグルグル巻きにされたポーズや、猿ぐつわをはずされて、かわりに黒布の目かくしをされたポーズなど、十字架ハリツケのいろいろな姿態を写真にとられたあと、今度は柱縛りが行なわれたのです。

十字架の横木をとりはずし、足台もとりさ

って一本の柱にすると、私の身体は柱の前に立たされました。

背後にまわした両腕が、柱のうしろで×字に交叉されて、両手首がきつくしばられ、さらにロープが乳房の上と下にかけてられて、柱にギッシリと縛りつけられます。つぎにおなか、太もも、膝の順に、縄はまるで荷造りでもするように、グルグル巻きにかけられて、かたく締めあげられました。

私は、だんだん自分の身体が柱にしっかりと締めつけられてゆくのが、何ともいえない心地良さで、思わず身をよじって、悦唐のうめき声をあげてしまいました。

一番おしまい、両方きちんと並べてたっている足首を縛りつけられて、柱縛りは完成しました。

何という、つよい緊縛感でしょうか！

私の身体は、柱にピッタリとついたまま身動きもできず、全身を棒のようにしめつける縄目の快さに、私は頭がぼうつとなって、気もおくなる思いでした。

（ああ、すばらしいわ。身体がしまって凄くいい気持……。このままいつまでも放っておいてほしいわ）

私は、いつまでもこのまま縛られていたい

と願ったのですけれど、夫は、あわただしく数枚の写真を撮ると、すぐに縄をといて、つぎの形に縛りなおすのでした。

こんどは、両腕を上にあげて、両手首を頭の上にそろえて柱に縛りつけられました。

私は縛られながら、ずっと前に読んだ「肉の賛」という本を思い出しました。

むかし、美しいお姫様が悪人一味に拐わかれ、山奥につれこまれて、さんざん責められたぶりつくされた後、悪人たちの信仰する邪教の神様のいけにえに捧げられる——。

というストーリーなのですが、その、いけにえにされる場面のさし絵が、すごく印象にのこっていました。

まるはだかにされたわかい女性が、ふとい樹の幹にしばりつけられているのです。

腋の下をすっかり露出させられ、両腕を頭の上にたかくのばしたまま、両手首をキッチリと組まされて、まるで吊りあげられたように、樹に縛りつけられているのです。柔肌にギリギリとくいこみ、無残に乳房をくびりあげている縄。ふくらした頬に、痛々しくくいこんだ猿ぐつわ。観念しきっているのか、静かにとじあわされた臉——。これから、いけにえとして殺されようとする殉教者の、あ

きらめきったあわれさ、美しさが、滲みでているような、さし絵だったのです。

（ああ……私はあの物語のヒロインのように悪魔の神様のいけにえに捧げられてしまうのだわ……）

自分をその美しい受難のお姫さまにおきかえて、悪人たちに山奥にさらわれて責めさいなまれる幻想に、私は肌にくいこむ縄目の痛さもかえって心地よく、じーんとしびれるような被虐の陶酔に、思わず知らず、うっとりとしてしまったのでした。

(4) タバコ責め

ハリツケ柱をつかったの緊縛プレイに、すごくハッスルして、まるで、疲れを知らないかのように、エネルギーに動きつづける夫——。私は、ただお人形さんのように、夫にされるがままに柱に縛られ、とかれ、そしてまた縛られつづけたのでした。

つぎは、柱に後手縛りにされたうえ、ふといロープで足首から胸まで、グルグル巻きに編みあげられてしまいました。

猿ぐつわは、ずっとはめられたままで、ますます息ぐるしく私の口と鼻をおおっています。柱のうしろに、キッチリと合わされた両

手首。縄は、私の爪先立った足首から脛、膝、太もも、おなかと、まるで網のようにガシガラメに強くかけられて一分の動きも許されません。

「さあ、一服しようか」

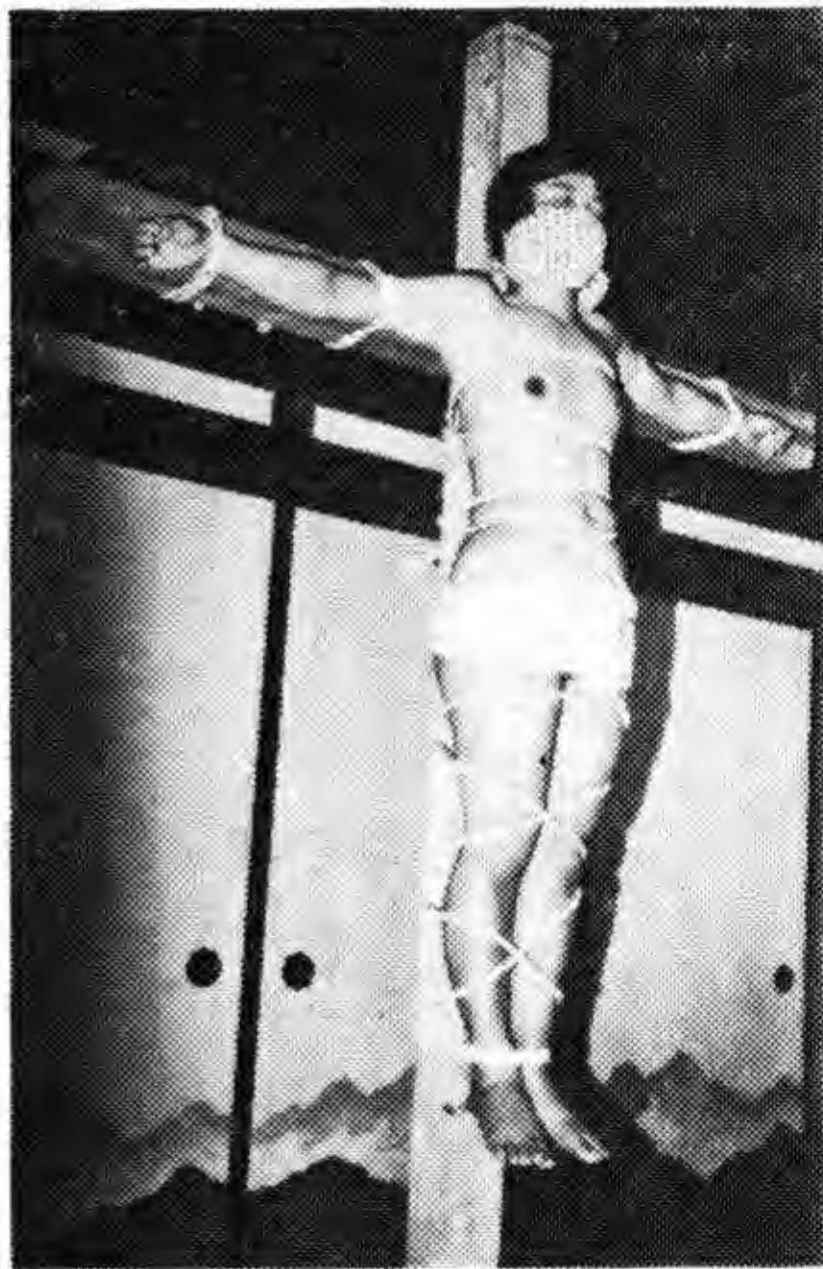
夫は、私の鼻口をおおっている猿ぐつわの手拭をずらして、口だけをかたく締めあげると、鼻の孔にタバコを二本さしこんで、火をつけたのです。

そのときの苦しさ！

たちまち呼吸がせかれ、私はからい煙にむせて、もだえ苦しみました。

口は嚴重な猿ぐつわで封じられており、呼吸は鼻孔からするよりほかはありません。しかし、その鼻孔に火のついたタバコをふかく挿入されていますので、いやでも鼻から煙を吸いこんでしまうのです。

呼吸をするたびに、鼻の孔の先にあるタバコの火がぼうっと明るくなり、鼻から入りこむ煙は鼻腔粘膜やのどを刺激して、その一息ごとに深まり高まるくるしさは、まさに言語に絶する残酷な地獄の責め苦です。



タバコを取りのぞこうとしても、両手は柱のうしろで縛られておりますし、全身にきびしくかけられた縄目は、のたうつ自由さえも許しません。

やがて、鼻孔のすき間から、猿ぐつわの間から、逆流した煙がもうもうとふきだしてまわりました。

「ム、ム、ム……」

苦しきは絶頂にたっし、柱のうしろで、私の指は、せつなく悶えていました。

「どうだ。いい気持だろう」

夫は、自らは指一本動かすことなく、私に最大の苦しみを味わわせるのです。煙にむせ脂汗をながして、もだえ苦しむ私をひややかに見あげながら、夫は自分もゆっくりとタバコをくゆらせるのでした。

○

——ふり返ってみますと、私のマゾヒズムは鼻責めの折檻によって開花し、そして完成していったと申すことができるでしょう。

結婚して間もなく、異常性愛というものにまったく無知であった私が、夫のたくみな調教によってしだいにMに飼育されていった過程は、三月号の「被虐鼻」に述べさせていただいたとおりですが、美貌の中心であり、自尊心を代表する鼻を責められることによって私は心底から夫に屈服させられ同時に、縛られるよろこび、責められる快感というものを知らされたのです。

私は、夫に鼻腔を責められているうちに、身内が燃えあがるような、ふしぎな陶醉をおぼえ、いつしか、鼻責めの妖しい感覚のとり

こになってしまったのです。

どなたでしたか、V感覚にたいするA感覚の快美さについて、ご意見をのべられた方がいらっしやいましたが、私は、V感覚・A感覚のほかに、N感覚？（ZOSO——鼻）とでもいうものがあるのではないかしら？ と思うのです。

いずれも共通しておりますのは、身体のおくふかくに通じている孔口で粘膜におおわれており、神経が発達していて、わずかの刺激にも敏感に反応をしめすということです。またVやAに羞恥があるように、鼻腔にも、微妙な羞恥の感情があるのではないかと思えます。まさか、そんな失礼なことをする人がいるはずはありませんけれども、かりに、鼻に目をちかづけられて、鼻腔のおくをしげしげとのぞきこまれたりしたら、背筋がムズムズするような恥かしさを感じるのではないでしょう。

ただ違うところは、VとAが、下着のおくふかく秘めやかにかくされているのに、鼻は顔の真中の一番、目だつところにあつて、表面的である、ということでしょう。

もっとも、こんな考えは鼻腔粘膜に異常な感覚を感じるように飼育されてしまった私だ

けのことで、他の正常な方々には、鼻など全く興味がないことと思います。せいぜい、より美しくなるために、もっと高くて恰好のよい鼻になりたい、ぐらいに思う以外は一向に関心がなく、N感覚など意識の底にもとどめてはいらっしやらないだろうと思います。

お話が横道にそれて、大変理屈っぽくなつてしまいました。

私は心から夫を愛していましたし、夫もまた、私をこよなく愛してくれました。喰べてしまいたいほど可愛い、可愛いからいじめるのだ——と申します。おのろけみたいになつてしまつて、ごめんなさい。

でも、愛し信頼している夫に手足を縛られ無抵抗の状態でうける、サジスチックな鼻いじめのかずかず——。それは、身体がじーんとしびれてしまうような、たまらない感覚があつて、その責めがはげしければはげしい程その後の夫婦の結合に、狂おしいばかりのエクスタシーが得られるのでした。

私は夫にしばられ、責められることによつて、夫の愛情をたしかめ、かたく結ばれることを知つて、ますますきつく縛られ、責められることを願うようになりました。私自身の心の底にも、被虐を望む本能がねむっていた

のかも知れません。

私たちのSMプレイは、だんだんに、そのはげしさを増してゆきました。

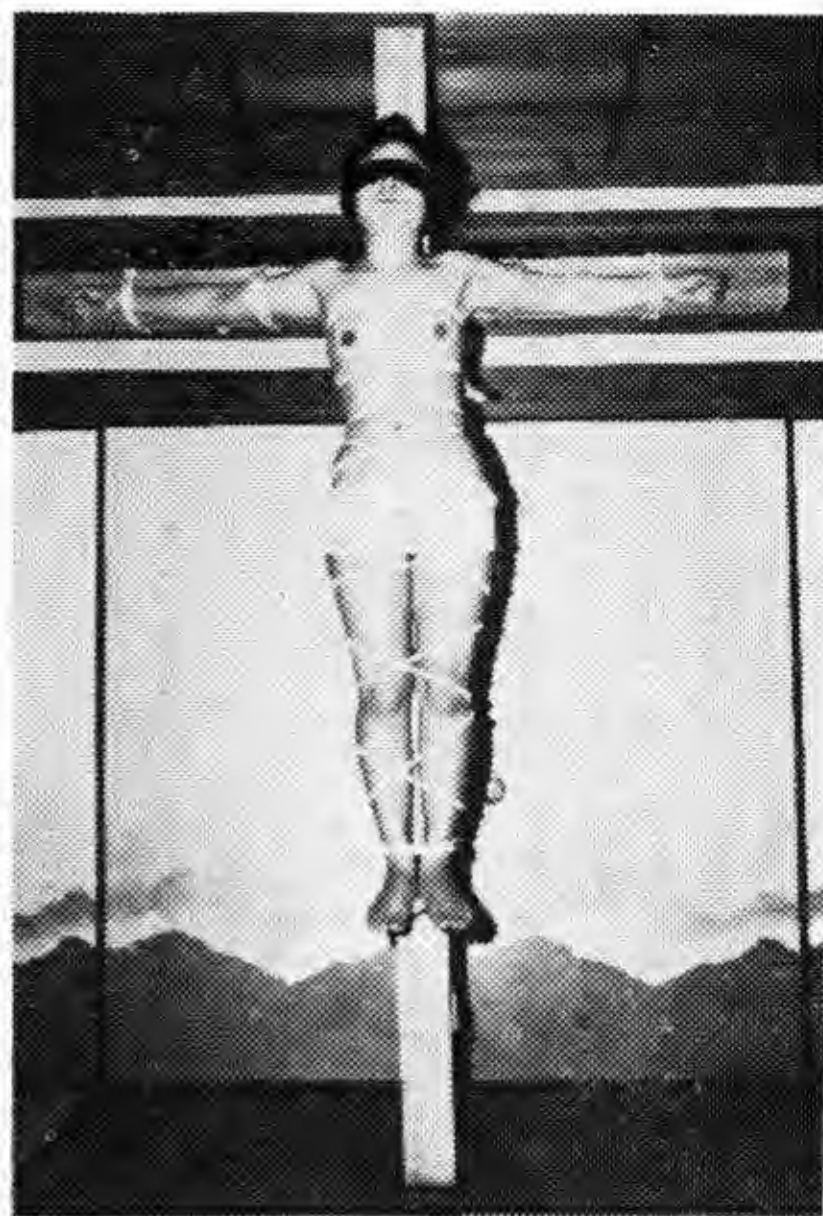
全裸にされたうえ、身体中をまるでも虫のように、ギッチリと縛りあげられ、すべての自由をうばわれて、鼻を、乳首を、アヌスをはげしく責められていくうちに、責めそのものに最高のよろこびを感じるようになってしびれるような耽溺の世界に没入していったのです。

その後、あたらしい刺激をもとめて、プレイは浣腸責めや、梯子などを用いた縛りや、さらには、逆さ吊り責めなどへと、エスカレートして行きましたが、どんなプレイの場合でも、必ず一度は、はげしい責めが鼻腔にくわえられるのが常だったのです——。

○

タバコは、だんだん短くなって、私の鼻に火がつきそうになるまで、ほうっておかれたのです。

タバコの火が鼻に近づき、鼻がじいんとするほど熱くなってきました。呼吸のくるしさに加えて、耐えられない熱さのタバコの火が鼻翼を灼きつくすいきおいで、鼻に迫ってきたのです。



(5) 大の字

もっとも苦しかった責めからようやく解放されて、グッタリと虚脱状態になっている私に、

夫は

「柱縛りはこのくらいにして、次は大の字ハリツケをしよう。柱の準備をする

間に、もう一度お風呂にはいってきなさい」

と、命じるのです。

時計をみますと、時刻は、もう一時ちかくになっております。

「もうおそいわ。どうせされるのなら、このまま続けてしてちょうだい。そして、はやく終わらせてください」

「縄のあとがついていると、写真をとるのに具合が悪いんだよ。だから、お風呂にはいって縄のあとを消してきなさい」

夫の命令には、絶対にしたがわなければなら

りません。

私は、あまい疲労に、身動きするのさえけだるい身体を浴室にはこび、ガスに火をつけて、ふたたびお湯のなかに裸身をしずめました。

肌には、無残な縄のあとが、かぞえきれない程たくさん刻みこまれています。湯ぶねのなかで、その縄のあとをさすりながら、私はゆっくりと手足をのばし、つかの間の安息を楽しみました。

ふかく刻みこまれた縄のあとが、あついお湯でいやされますと、気のせいか、疲れもほぐれて消えたような感じで、すこし元気が出てきたようです。

お風呂からあがって、処刑の部屋にもどりますと、すでにキの字型のハリツケ柱ができあがっていました。

こんどは、いよいよ大の字ハリツケにかけられるのです。

ふたたび猿ぐつわをはめられ、さきほどと同じように、両腕を上横木に縛りつけられると、両足を無理やりに左右に引っばいられ、下横木に足首を括りつけられてしまったのです。

こんどは十字架ハリツケとちがって、身体

(ああ……鼻が焼けるわ)

しだいに遠のいてゆく意識のなかで、かすかに感じたとき、ようやく左右の鼻孔からタバコが引きぬかれました。

とたんに新鮮な空気が、ドッと鼻腔にながれこんでまいります。その空気のおいしいこと！ 私は鼻孔を大きくひろげて、胸いっぱい

に空気をむさぼり吸いました。猿ぐつわと縛しめをとかれて、私はグッタリと畳の上のびてしまいました。

をのせる足台がありませんので、両腕を括られたロープがこの腕と手首につよくくいこみます。胸とおなかにかけられた縄がギュッとしまつて、両足には、さらに広げるように力がかかりました。私の無防備な体は、夫の目からかくすすべもありません。

私は、気が狂うほどの羞恥にさいなまれ、胸は大きく波うって、左右にピンと広げられた太ももは、ピクピクとはげしくケイレンしていました。

「奥さま、いかがですか。大の字ハリツケにされたご気分は？」

夫の手がのびて、苦痛と恥かしさのためにかたくしこった両方の乳首をつまみ、指先でなぶります。

「ウ、ウ……」

電気にふれたときのような強烈なショックをうけ、たまらない感覚が、乳首から全身にはしりぬけました。

「僕は、女体の最高の美しさは、ハリツケにされたときの姿だと思ふ。十字架のハリツケもいいけれど、大の字の方がまた一段とすばらしいよ。そのすばらしい姿を、君にも見せてあげよう」

夫は、となりの部屋から姿見の鏡台をはこ

んできて、私の前におきました。

鏡のなかにうつった私の姿！ 何というあさましい、恥かしい姿でしょうか。一糸もまとわぬ裸身を、手足を左右にいっぱい引きのばされて、ハリツケ柱にきびしく縛りつけられていた姿が見えます。文字どおり大の字なりの、あられもない姿です。

あまりの羞恥と屈辱に、私は思わず目をつむってしまいました。

「せっかく鏡を持ってきたのに、どうして目をつむるんだ……。コラッ、目をあけろ……。あけないか」

夫は、私のあごをつかんではいくさぶり、鏡を見るように強制するのです。そして私が目をあけないでいると、太ももや脇腹をつねって、執拗に責めたてたのでした。

「ウー、ウウ……」

灼きつくような痛みが、太ももや脇腹にはしって狼ぐつわのなかから、こらえきれないうめき声が洩れます。でも、でも……、そんな恥かしい姿を、どうして見ることができのでしょうか。

私は、はげしい痛みをこらえて、強情に目をつむったままでいました。

「どうしても目をあけないな。ようし！」

夫の残酷な指先が、私の無抵抗な脇腹をくすぐり始めました。

「ウツ、ウツ、ウツ……」

つねられる痛さは我慢できても、くすぐられる苦しさは、とうてい辛抱できるものではありません。私はその強烈な責めに耐えられず、とうとう目をあけてしまいました。羞恥の炎につつまれた姿態が、ふたたび目にはいつてきました――。

ものの本によりますと、きびしかった昔の罪人のお仕置でさえ、ハリツケ柱に縛られるときは、衣服を着けることを許されていたそうですし、また、男は大の字ハリツケですけれど、女性には、十字架が用いられて、両足をそろえて括られた、ということでした。

（それを、女の私を大の字に……しかも全裸のままハリツケにかけるなんて……ああ、私は、何も悪いことをしていないのに！）

ハリツケ柱を背負ったまま、鏡のなかの自分自身の無残な姿を見ながら、私は狼ぐつわのなかで叫びました。

シャッターの音。フラッシュの光――。私のむごたらしい姿は、余すところなくカメラにおさめられてゆきました。

これが終わると、いったん縄をとかれて柱

からおろされ、つぎは下の横木を三十糎ぐらいさげて固定し、手足を×型にひろげるハリツケにされました。

これは、殆ど、吊りあげられた手首だけに体重がかかるため、まるで、手首がちぎれそうに痛みます。そのうえ、手足をいっぱいに広げられ、完全に無防備になった身体を、夫の残酷な指先がなさけ容赦なく責めさいなんなのです。

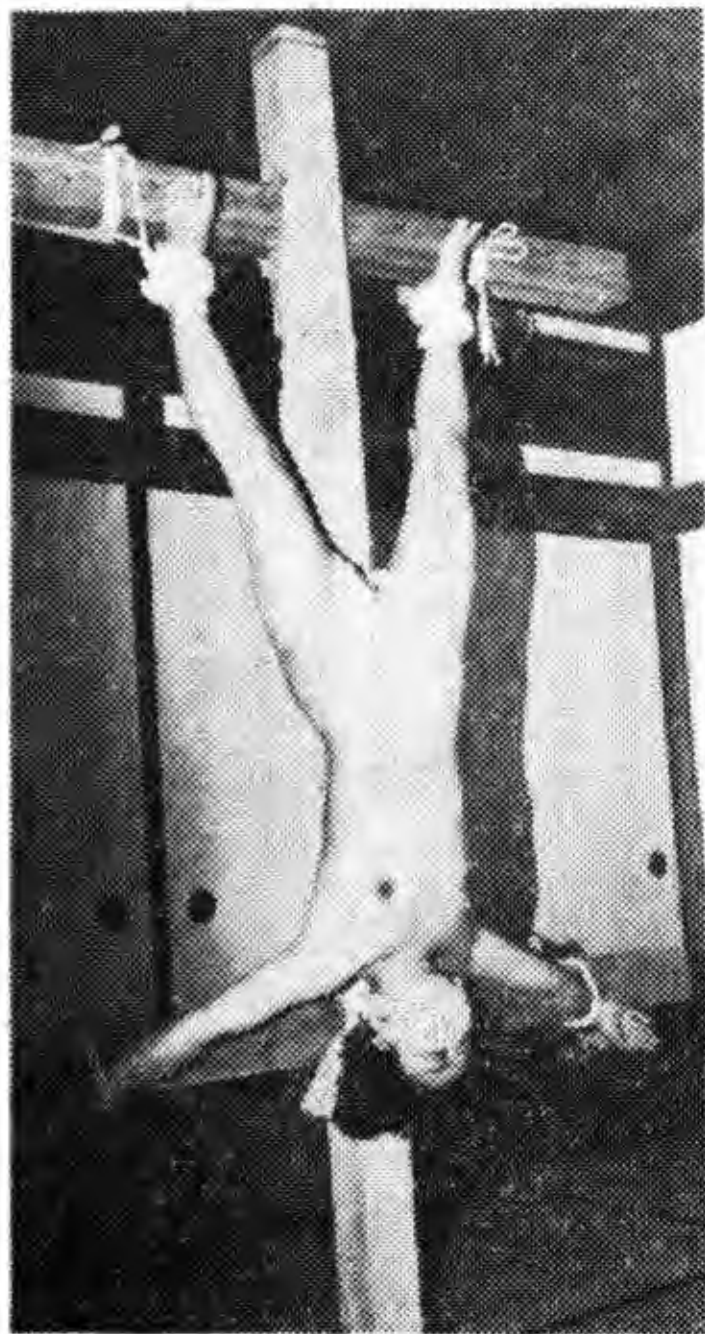
ロープのくいこんだ足のうらの、土ふまずのやわらかい部分を、夫の指先が、くすぐり始めました。私は、足指を曲げたりのぼしたりしながら、必死になって、そのたまらない感覚をこらえました。

「ホラ、こういうのはどうだ？」

足指をそろえてつかむと、力まかせに逆方向にそらせ、足指のつけ根のうら側を指でくすぐるのです。

「ウム……」

ふくらはぎがつってしまい、思わぬ痛さに



苦悶のうめき声が、嚴重な猿ぐつわから洩れました。

「ここはどうだ？ 返事をしなさい」

足のうらを交互に、執拗にもてあそびた指が、こんどは両腋の下、のびきったところをくすぐり始めました。

気も狂うような、たまらない感覚が全身をつらぬき、私は、はりつけられた裸身を波のようにもたえさせて苦しみ続けました。全裸の身体を引きのばされ、まったく無防備にさらされる羞恥もさることながら、今にもちぎれそうな手首の痛み。のっぴきならない腋の下や足のうらをくすぐられる苦しさは、とて

も口では言いあらわせません。

私のもたえ苦しむ姿をみて、すっかりエキサイトし、いよいよ嗜虐の血をかきたてられた夫は、こんどは猿ぐつわをはずして、私の絶叫を堪能するのです。

「ホラ、こんどは返事ができるだろう……。どこが一番感じる？」
「苦しい……。もう許してください」

「ここはどうだ」

太ももの内がわの、一番やわらかい所を残忍な指が責めはじめました。

完全に自由をうばわれた身体は、どこをどうされても、どうすることもできません。夫の意のまま、なすがままにくすぐられるより他はないのです。

「お願い……。やめて、やめて！」

呼吸もできない苦しみに、私は、身も世もあらずのたうち廻りました。被虐の快感などとくにとおり越してしまい、そこには、ただ責められ、もてあそばれる現実があるだけでした。くすぐり責めが、こんなにも苦しいものであることを、はじめて味あわされたのでした。

(6) 人間燭台

全身くまなくいたぶられつくした私は、縄をとかれて柱からおろされたときには、もう息もたえだえになって、畳のうえに長くのびてしまったのです。

「すごく疲れたわ。もう死にそう」

つぎつぎと、果てしもなく続けられる責めに、肉体は疲れきり、心は放心状態になってグッタリと横たわっている私でした。

戸外の木枯らしは、ようやく治まったよう
で、しんしんと更けてゆく夜のしじまに、柱
時計の音だけがきこえてまいります。プレイ
に夢中になっていて、時間のたつのも忘れて
いましたけれど、時計の針は、すでに三時を
すぎています。

責めぬかれて精根つき、何もかも、ものう
い、けだるいような忘我のひととき！

「もう一回だけ、最後に逆さ大の字をやっ
てみたいんだけど——」

静けさをやぶって、夫がいました。

「えっ、まだ責めるの？」

「もう、これだけおしまいにするよ」

「もうかんにんしてください。時間もおそ
い、疲れて明日起きられませんか」

「明日は、勤めをやすむことにするよ。君も
一日ゆっくり寝ていいから、最後の協力
をたのむよ」

「でも……。逆さハリツケなんて……。わた
しこわいわ。それに、どうやってするの？」

「こんな具合に、さか立ちをしてくれればい
いんだよ」

夫は、床の間の柱のまえに横になると、柱
にそって足を上にあげてゆき、両肘を突っぱ
って、肩でさか立ちをしてみせるのでした。

私は、夫の強引さに負けてしまい、とうと
う逆さハリツケにされることを、承諾してし
まいました。

まず、片方ずつ足首にタオルが巻きつけら
れ、そのうえから、長いロープの中段でかた
く縛られました。ロープの両端は、足首から
一米ぐらいの長さであまっています。

ハリツケ柱のまえに机がおかれ、両足首か
らロープを引きずった情ない姿のまま、その
上に追いあげられた私は、せまい机の上で仰
向きに横たわりました。身体は、わたのよう
に疲れていましたが、最後の気力をふりしぼ
って柱にそって両足をあげ、両肘を突っぱっ
て肩と首だけで倒立したのです。

夫は机の上にあがって、まっすぐ上にのび

ている両足を左右にひらかせ、上の横木に足
首を括りつけました。そして机からおりと
肩でかろうじて身体をささえ半吊りになっ
ている私の首をもちあげて、机をはずしてし
まったのです。両足を大きくひらいたまま完全
に逆さ吊りにされた私は、両手を下の横木に
縛りつけられて、逆さ大の字ハリツケにされ
てしまいました。

五月号の奇クサロンにも書きましたように
私は、いままでも何度か逆さ吊りをされまし
たが、両足首をしばられて、宙に逆さに吊さ
れる場合とくらべますと、この方が背中に柱
がありますし、両手も下の横木に固定されて
いますので、身体が安定していて、あまり恐
怖感はありません。

また、足首にはタオルが厚くまかれていま
すので、足の痛みもありませんけれども、心
理的に、すごくいじめられている——という
気持がします。羞恥と屈辱の極限——とでも
申しましょうか。ハリツケのなかでは、最高
に被虐感の味わえる、凄烈なポーズだと思
います。

それから夫は、逆さまになった私の顔を
かえこんで念入りに猿ぐつわをはめると、ど
こにかくしていたのか一本のローソクを持ち

出してきたのです。

「あっ……」

意外ななりゆきに、私はおどろいて、反射的に身をもがきました。

「いや、いや……やめて……」

完全にはめられた猿ぐつわのなかで、声にならない声でさけび、首を左右にふりながら腰をよじって拒もうとしましたけれど、手足をいっぱい伸ばしたまま、逆さにハリツケにされていますので、どうすることもできません。

必死の抵抗も、しょせん、むなしいあがきに終わりました。

「ホラ、あばれると、ローソクが倒れて火傷をするよ」

ローソクに火がつけられて、私は人間燭台

にされてしまったのです。

私は、抵抗してもすべて無駄だとなしくあきらめ、グッタリと全身の力をぬいて、被虐の陶酔に身をゆだねました。

「両足のうらと、鼻の孔にも二本ずつローソクを立てると、もっと明るくて豪華なシャンデリヤができるのだが——今日は、ローソクの用意がしてないから、仕方がない。つぎの機会にしよう」

夫の残念そうな一人ごとが、何か他人の声のように聞こえました。

電灯が消されました。

くらやみに目がなれると、ゆらゆらとゆれるローソクの、ほの赤い火が、室内を妖しく照らしだしました。

クラクラするのを我慢して目を開けてみま

天星社刊 《限定版グラビア写真集》 在庫案内

山原清子『刺青の魅力を探ぐる』一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集『女王様に飼育される日々』一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

すと、夫は息づかいもなく、加虐の興奮に酔ったように、くらやみの中に浮かびあがった人間燭台を、じっと見つめております。

やがて、全身の血が頭にさがってきたためでしょうか、頭がじーんと重くなってきました。

夫の加虐による悦楽と、私の被虐の陶酔がはげしく交錯するSMの絶頂のひと時！ 私には大変な感じがりましたが、あるいはほんの数分であったかも知れません。

そのうちに、とけた蠟涙がトロトロと肌にながれてきて、その熱いことといったらありません。

「ウウッ……ム、ム、ム……」

私は、顔をガククリとのけぞらせ、口のなかいっぱい詰められた布切れをかみしめて肌身をさいなむ甘美な苦痛に、身をまかせきりました。

はげしい熱さにうめき、猿ぐつわのなかで絶叫しながら、熱さに耐えているうちに、ローソクの火より、なお熱い、官能のよろこびが全身にわきあがってきて、気のおくような、悦虐の恍惚境へと惹きこまれてゆきました。

——（おわり）——

懸賞入選創作

人

工

庭

園

弓

敬 太



カッタ・西 名 鶴

この世に桃源境があるとすれば、わたしはそこにいたのである。だが、桃源境とは言葉の上でしか知らないし、初めての体験は、わたしを、より大きな陶酔の世界へ誘っていたのかもしれない。

記憶では室内のはずであったが、柔らかな陽光と快い温もりの中で、微風が初夏の香り

を漂わせていた。わたしの視界の中は、全てが薄紅色と薄緑に埋まっていた。そして、鼻孔をくすぐる甘い香りは、オレンジに似た果実のそれであった。わたしは気持のよい疲労に酔っていた。この快楽が、いつまでも続くことを願っていた。しかし、美少女の口うつしによるワインを飲み干すと、何度目かの失神をして、惜しくも歓喜を逃がさなくてはならなかった。

○

Sとは中学校の同級生であった。彼には金持の子息にありがちな傲慢さはなく、むしろ温和しすぎるくらいのものである。さすがに

色白の肌をした整った容姿は、育ちのよさを物語っていたが、どちらかといえば、目立たない存在だったのである。その後、彼は美術学校へと進んだ。わたしは彼が画業を志しているとは夢想だにしなかったが、思えば、それなりに才能の一片をのぞかせていたような気もする。わたしが彼と気があったのは、案外そのあたりに原因があるのかもしれない。サロメで有名なギュスターブ・モローの絵画について熱っぽく語ったのを覚えている。しかし、その彼とは大学入学とともに連絡を断ち、十数年ぶりで再会したのは、六月の梅雨にけむる六本木の夜であった。

わたし達は、再会を喜んで小さなバーで酒をくみ交したが、彼は絵は趣味にすぎないと笑い、自分の生活は、とぼけて話そうとはしなかった。画業を、一生の仕事とするはずであった彼が絵の道を断念し、それほど興味があったわけではないわたしがイラストレーターになってるのは奇妙といえたが、物静かで、しかも何か自信あり気な彼の態度に特異な雰囲気を感じた。それが、何故なのか理解できなかったが、数日後に自宅への招待を受け、はじめて知ることができたのである。彼の家は海に見える丘の頂上にあった。小

さな山荘風の、しゃれた家である。だが、外観はあくまでも見せかけのものであって、地下室へ案内されるにおよんで、わたしは幻想の世界へと足を踏み込まざるを得なかった。

室内は夜をあざむく照明にさらけ出され、初夏の爽やかな風に包まれていた。モローを好む彼の趣味は装飾に活かされて、金細工の繊細にして華麗な、からみあった糸のような飾りものが、いたる所にあつた。唐草模様と呼ぶには、あまりにも軽々しく思えるその金細工のローソク台は、ゆれ動く炎に照らされて幾重にも輝き、私を、いやがうえにも幻想の世界へと導いていったが、彼の操作するボタン一つで無限に変化する照明と温度は、この世のものとは思えぬ変幻の妙をつくり出し、壁、床、天井等も簡単な操作で開閉しながら可能な限りの形をつくっていた。

驚嘆したわたしは、中世の王宮にしても、これ以上のものはなかったであろうと思ったものだった。

わたしは軽い眩暈を覚えながら、Sを眺めた。わたしの動揺を見ても、彼の表情は変わらなかった。いや、先刻より冷静に思えたし無気味なほどのおだやかさで見返していた。冷静というより、冷酷といったほうが、ふさ

わしかった。

わたしは、もつれる舌で質問をした。が、彼は答えようとはしなかった。何度か同じ言葉をくり返し、好奇心を満たすべく、動きの鈍くなった足で彼に近寄ったが、そこには透明な硬い幕が張られてしまったかのように、彼に触れることはできなかった。しかも、彼の姿は次第に薄くなり、その場所だけが暗闇になったが、やがて、そこには白い女の裸身が浮かびあがったのである。

だが、わたしは彼女の姿をしっかりと見られなかった。むしろような強い花の香と、きらめく光線が全身を襲い、遠い意識のない世界へと、のめり込んだのであった。

○

意識を回復すると、わたしは別の部屋に寝かされていた。

そこにも先刻の部屋と似たような装飾が施されていたが、より複雑な細工物に覆われ、中央にはロココ調の家具らしきものが数種類置かれてあった。が、それらは家具としては奇妙な形であり、むしろ、凝った模様を彫刻した機械のように思えた。よく見れば、アー・ル・ヌーボーの頃の、そのようでもある。金色に輝く機械である。

わたしは身体を動かそうとしたが、腕はしびれて動かなかった。むしろに水が欲しかった。喉の渇きが苦しかった。すると、わたしの願望を感知したように、白い陶器が目の前に現われたかと思うと金色に反射する一条の水が噴き出して、わたしの口に入ってきたのだ。ハツとなるほど冷たい水であったが、甘い香りを含んで舌に形容しがたい刺激を与えた。

水が咽喉に落ち込むとわたしは急にクラクラッとしたが、次に気付いた時には意識ははっきりとしたものになり、周囲の情景も確かなものとなっていたのだが、見廻して愕然とならざるを得なかった。驚いたことには、わたしのまわりには全裸の美女が十二人もいてわたしを眺めているではないか。彼女達の肌は、あくまでも白く、全員が金色の長い髪をたらし、両手を後ろにまわしていた。

わたしは驚きと共に、ふと、さっき白い陶器の水差しと思ったのは間違いで、水は女の小便ではなかったかという想いが脳裏をかすめた。しかし、たしかにあの水は冷たかったのだ。

女達は若かった。少女と呼ぶほうが相応しいようである。一人々々眺めると夫々に違い

はあるのだが、一緒に見ると一つの型でつくったロボットのようには思えた。が、甘い体臭が漂っていたし、人造にしては、あまりにも精巧すぎる。しかし、無表情な顔は感情の起伏を現わせない動物に近かった。

しかも、無残にも彼女達の形のよい乳房には、金色の鎖がまきついて歪んでいた。金鎖の首環をはめられた者がいた。足環をした者もいた。腕環をはめられた者もいた。

わたしは努めて冷静になり自分の置かれた立場を眺めてみた。そして驚いた。わたし自身も裸にされ、両腕は背中で金鎖にくくられていたのである。

思わず身悶えをしている時、静かに一人の女が近づいて来て、わたしに柔らかな肌をすり寄せてきた。動けぬわたしの全身に甘美の嵐が襲った。かつて味わったことのない陶酔が求められそうであった。しかし、その途端に柔肌は離れた。わたしは女の後姿を呪いたい気持ちで眺めた。すると、次の女がやって来て器用に膝ではいずりながら、ふき出たわたしの汗を柔らかい唇で吸いにとって離れた。三番目の女は背中にくくられた手を上手に使って全身をマッサージしてくれ、四番目と五番目の女が自分達の肩と首でわたしを起こし

壁際に連れて行ってシャワーを浴びせた。六番目の女が器用に洗ってくれた。八番目の女が不自由な手で巧みにタオルを使い、九番目の女がベッドへ案内して、仰向けに寝かせつけた。十番目と十一番目の女が両側に寄り、一人が丸薬を口移しにし、別の女が水を含ませた。吐き出すのは簡単であったが、もはや本来の意志は遠い彼方へと去ってしまった。わたしは、無抵抗に飲み込んだ。薬を飲んだのを見とけると二人の女は去り、十二番目の女が頬を寄せてきた。わたしは再び吹き始めた甘美な嵐にうろたえながら、彼女の乳房の間に小豆大のほくろのように12と描かれた刺青を認めたのだが、同時に猛烈な睡気に襲われ、あの丸薬のセイかと思ひながら深い眠りに落ちた。

○

若やいだ女達の笑い声で目が醒めた。まだベッドの上であったが、両手は背中ではなく引き伸ばされて、金色の花模様のベッドの足に、くくられてあった。そして、わたしの横には9の刺青の女が坐っていて、ベッドの周囲には乳房と腕を金鎖にくくられた十一人の女達を取り囲み、何か喋っては笑い合っているのである。わたしが眠っている間に何かが

あったらしいのだ。

突然、耳をつんざくドラの音とともに照明が変わった。十一人の女が、あわててベッドの周囲を離れて部屋の中央に一列に並んだ。が、9の女だけはどうしたのか離れず、縛られた上体を悶えさせて低く呻き、喘いでいたかと思うと、やがてぐったりと、わたしの胸に倒れこんだのだった。激しい呼吸がわたしの胸に伝わった。

すると、どこから命令を受けたのか、三人の女が一斉に走って、金模様の何かの機械を運んできて、ベッドの脇に置いた。三人の女は、笑い声をあげていたときの顔をどこかに忘れてきたように無表情であった。

音波によるのか、それとも光線によるのか室内に設置された機械と同様に、彼女達も、一人の人間によって自由に操作されているにちがいない。おそらく、神経系統に命令機能を与えているのだ。もちろん、それは非常な訓練が必要だろう。

わたしはSの存在を思い出し、脱帽せざるを得ない気持ちだったが、その段階では、わたしは、まだSの創造した世界に浸りきっていなかったようだ。彼について少しでも考える余裕があったのは、その証拠である。彼にと

読者ギャラリー『準備OK』春川ナミオ



ってのわたしは、一つの実験台にすぎないようであった。これからどのようなことが起こるのか想像できなかった。

一人の女が機械のボタンを押した。すると機械の頭部から三本の鞭が伸びて宙を舞い、そのうちの一本が激しい音とともに、わたしの胸に倒れこんでいる女の尻を打った。9がうめいた。二本目の鞭が、女のしっかりと金鎖で結ばれた両腕と背中を打った。三本目の

鞭が彼女の腿を打った。三本の鞭は夫々のリズムで同じ動作をくり返し、9の背面を隈なく打った。鞭があたらないのは、頭だけである。

鞭が鳴るたびに、9はうめき、身をよじった。その苦悶は、当然わたしにも伝わった。うめき声は、かすれた悲鳴になり、鞭から逃れようともがいている。が、彼女はわたしから離れようとはしなかった。

鞭打ちは絶え間なく続いた。かすれた悲鳴はいつの間にか吐息に変わり、9の身体は、ぴくぴくと痙攣するだけになった。だが、鞭は動きを止めなかった。9の動きはもはや鞭による動揺にすぎなくなった。彼女の背面は血に濡れ、その飛沫は、わたしの身体にふりかかった。ついに意識を失ったのか、9の身体がずっしりと重くなった。

非情な責めであった。しかし、不思議にわたしは、彼女を哀れと思う気持は湧かなかった。ごく身近かなところで起こっている残酷な現象にもかかわらず、夢を見ているような遠い感覚で受けとめていたのである。

やがて、鞭打ち器は作業を止めた。先刻の三人の女が機械を元に戻し、別の二人が気絶した9をわたしから離れた。

9は床に寝かされて血にまみれた身体を拭かれた。香水に似た薬液をかけられ、マッサージをされた。意識が戻ったようである。が彼女は休息を与えられたわけではなかった。背中で結ばれた両手のいましめが一旦、解かれ、ベッドの近くの天井から、ぶらさがる二本の金色の鎖に夫々の手首を縛られて吊りあげられた。彼女は無言で従って、つま先立ちになった。第二の責めの準備が終わったらし

いのである。

だが、責めはすぐには始まらなかった。女達は機械を使ってベッドを起こし、わたしを9と向かい合わせにして同じ格好にさせ、細い金色の鎖で繋ぎ合わせた。それが何を暗示するものなのか判からなかったが、わたしはそれらの作業を冷ややかに眺めるだけの余裕が出来ていて、全員が後手に縛られているにもかかわらず器用なものと、奇妙な感心をしていた。

誰かが機械の始動ボタンを押したのか、9を吊っている二本の鎖が極くゆっくりと上り出した。鎖の動きにつれ9の足が床を離れ、身体は次第に高くなり、それに調子を合わせるように、足があった床からは、赤い舌のような炎が見え出した。みるみるうちに炎は、足と一定の距離をあけて大きくなり、同時に天井を這うパイプから糸のように細い一条の水が彼女の金髪の頭に注がれ出した。

9は火と水から逃れようと、身体を揺すった。その度ごとに、わたしに繋がれた金の鎖がぴくぴくと動いて、彼女の苦悶を伝えてきた。そして、その鎖が一直線に張りつめた時彼女の吊り上げは止まり、火と水の勢いも弱くなった。終始、無言だった彼女の唇の端か

ら、よだれが垂れ、ぐったりとブラ下っているだけとなった。

9を吊っていた鎖が降ろされ、彼女はいましめを解かれた。

わたしもベッドから解放され、金の手錠をかけられた。アラビアン・ナイトを素材にした外国映画の中で奴隷にかけられるのと同じ形のもので、9にもはめられて、わたしの手錠と連結され、長い鎖で曳かれた。

わたしは雲の上にいるような気持で歩かせられた。行く先を知っているのか、9は顔を伏せたまま歩いていったが、相変わらず無表情であった。わたしは、奇妙に不安も恐怖もなかったが、誰にもなく目的地を尋ねた。しかし、誰も答えてはくれなかった。

わたし達二人は壁際に立たされていた。すると、その部分がぼっかりと口を開き、強い風の力で中に吸い込まれた。二人は風の中を舞い、きりもみをしながら遠い地の底へと落ち込んで行った。いや、天空へと昇っていたのかもしれない。いずれにせよ、暗闇の中でわたしは完全に方向感覚を麻痺させられてしまったのである。

そして、数十秒の後に二人が放り出されたところは小さな部屋で、全てが白い羽根で埋

まっていた。やがて、照明がパープルになり同時に無数の羽根が動き出し、わたし達の身体をとどこかまわらずに撫でまわし始めた。わたしは羽根の中を駆けまわった。9も同然であつたらしく、二人は全身に汗をふき出し、苦しさの中で悶えた。

だが、責めは終わろうとはせず、それどころか、部屋の温度は次第に高くなるのだ。喉は渴いてひりつき、頭は地鳴りがして痛かった。が、それも少しの間だけで、わたしは全ての感覚がなくなつて、麻痺状態におち込んだのである。その中ですでに9は失神したらしく、彼女の動きのない体重がわたしの手錠をかけられた手首にかかった。わたしは彼女と同様に早く気絶したいと願い、やがて、その希望が叶えられた。意識が遠のいて行く世界は、幸福そのものであった。

○

気が付いたのは、虎の皮の敷物の上のクッションの上であつた。

裸には変わりはないが、手足は自由であつた。動かしてみると爽快であつたが、奇妙な虚脱感があつて、動きまわる気にはなれなかった。疲労からではなかった。肉体は、むしろ軽やかである。既に考える能力は失っ

てしまったようだし、心なしか、頭も軽くなつたように思える。

わたしは空腹を覚えた。と、それに応えて一人の女が果実を与えてくれた。彼女も両手は自由であつたし、乳房を締めつける金鎖はなかった。周囲を眺めると、十二人の女達は揃っていて、相交わらずの無表情で、わたしを眺めていたが、彼女達は誰もが鎖のいましめから解かれ、美しい裸身を自由に動かしていた。

が、わたしは彼女らに対して、自由な意志の働きはなく、自分の顔も無表情であるらしいのに気がついた。わたしは、創造の世界の客人から住人へと変化する、過渡的な状態にあつたようなのである。

3の女が、オレンジを絞って果汁を舌の上に滴らせてくれた。目の前には、いつの間にか焼肉、ワイン、パン、野菜等が、うず高く積み重なった大きなテーブルが出現し、初夏の陽光の中で薄紅と薄緑の照明に彩られ、やさしい微風が、それらの甘い香りを運んでいた。遠くかすかに、ドビッシの音楽が聴こえていた。夢の世界でしか描けないような桃源境が、そこにあつた。空腹が満たされると、わたしは快い疲労を味わった。もはや現実の

世界は、わたしの脳裏から消え去っていた。

ふと、気が付いて見回すと、全身は金色の体毛に覆われていた。肌は群がる女達と同様にぬけるような白さになった錯覚を覚えた。わたしはSのペットと同じようになろうとしているのだ。だが、嫌悪感はなかった。いや、人間的な感情に既に失っていたようなのである。

わたしは自身の腕でも抱くような調子で、近くにいる女を抱き寄せた。弾力のある。柔らかな肌の表皮は、桃のようであつたが、官能が騒ぐことはなかった。彼女の胸の刺青は4であつた。わたしは、もう一人の女も抱いた。1であつた。両腕の中の女は、わたしに抱かれながら表情も変えず、ブドウを喰べ続けていた。

Sの創造した世界には季節がないようである。同時に、人間も存在しないようなのである。彼の世界の中にいる住人は、動物的感情さえも失っているようなのだ。

わたしにしても、女を抱く行為そのものになんらの意味も感情もなく、ただそこにいたから腕を伸ばしたのにすぎないし、彼女らにしても、あらためて意識するべきことではないので、それまでの行動を継続しているのだ。

ある。

やがて、女達は一個所に寄り集まって、トランプを始めた。わたしが知るかぎりにおいて、そのカードはベルリン・オリンピックを記念して創られたクラシックな図柄のもので絵札の人物画は非常に精巧に描かれたバロック風のものである。カードそのものにも、ゲームそのものにも意味はなくても、彼女らの握るトランプは、由緒のあるものののだ。

ゲームは無表情の中で進められ、勝負が決まった。負けたのは、5である。口々に女達が意味のない言葉を吐いた。いや、言葉というよりも、それは動物的な音声にすぎないものであつた。そして、子供達が遊びながらするように、逃げ出した5を追って、数人の女達が部屋中を駆けまわった。

彼女達は5を捕えると、よってたかつて金鎖でがんじがらめに縛りつけ、大テーブルの上から食物を取りのぞき、そこに彼女を仰向けに寝かせつけて、しっかりと固定した。さらに彼女の腹や乳房の上に食物を乗せて、ナイフやフォークを使いながら食欲を満たした。

5は時折、うめいた。その度に彼女の白い肌に細い血の糸が流れた。勢いのあまったナ

イフが、彼女の肌に突き刺さるのだ。その傷ついた肌の上に一人の女がワインをそそぎかけ、血と共にしたり落ちる混合ワインを別の女がすすった。頽廃したローマ帝国の酒宴を称して酒池肉林という言葉があるが、それに似たような風景であった。

12の女が5の足の鎖を解き、あらためて足首と腿を固定し、膝頭に別の鎖を通して天井から吊るされた鎖に繋いだ。天井からの鎖が吊りあがり、5の尻がテーブルから離れると止まった。5はうめいた。が、ほかの女達は無関心に、彼女の身体の上で食事を続けていた。

女の一人が、わたしをテーブルに誘った。しかし、その誘いは、わたしに食事をさせるためではなかった。

わたしは女達によって両腕を背中にまわされ、骨が折れるかと思うほどねじあげられて首の近くに固定された。鎖が幾重にも身体にまきつき、上半身が完全に動けなくなると、5の頭の方につれて行かれて跪かされ、彼女の頭越しに接吻させられ、そのまま二つの顔を鎖で縛りつけられた。そして、床についた膝は大きく広げられ、腰にピンポン玉ほどの鉄球がついた細い鎖を結ばれた。もはや、

わたしは人間の男でもなければ、動物の雄でもなく、たんなる動く物体にすぎないし、女達も同様なのである。だが、いまの彼女達には、わたしにはない両手両足の自由がある。

5が、わたしの顔の下で首を動かそうとした。長い接吻で息苦しくなったのだろう。わたしは唇を離そうとした。だが、顔は少ししか動かなかったし、唇を離しても、息苦しさには変わりなかった。鼻がひしゃげて、思うように呼吸ができないのだ。それでも、わたしは気絶をしなかった。いや、もっと別な方法で責め続けられるのを、望んでいた。5の顔も、無表情の中でわたしと同じ願望にあるように思えた。

責めが終わると、先刻、満たしたにもかかわらず、空腹を覚えた。それに応えて、女がわたしの口に小さく切った果実を入れ、口移してワインを飲ませてくれた。

舌の上でとろける甘酸っぱい香りは、この世のものとは思えず、別世界にいるわたしをさらに遠い世界へと運ぶ不思議な魔力を持った酒であった。わたしは、ワインを腹にしまふのが惜しかった。が、口に含んでいても自然と流れ込み、同時に全身の知覚が消え始めた。暗黒の中に輝く金色が、私を招き寄せ、

吸いこむように思えた。

再び目を覚ますと、わたしはX字型に縛られて、壁際に立たされていた。

わたしの目の前には噴水のあるプールがあって、水が湧き出る彫像のまわりでは、十二人の裸の女達が、水遊びをしていた。遊びが一段落すると彼女達は水からあがり一人々々楽しげに金鎖でお互いの身体を縛りあい、最後に12が残った彼女は金模様の機械の力を貸りて、自らの身体をくくった。

女達の縛られ方は、いろいろであった。乳房がひしゃげるように縛られた者、菱型に縛られた者、十文字に縛られた者、一文字に縛られた者と様々であったが、皆、足は自由であった。彼女達は一列に番号順に並んだ。

おそらく、これから何かの儀式が行なわれるのだろう。だが、わたしには、不思議なほど興味は湧かなかったし、身体がくびれるまでに、いましめを受けたエロティックな女体にも関心がなかったのである。

プールの水は赤かった。照明も変わり、部屋中が赤くなった。温度もあがったようであった。が、それもすぐに変わり、部屋が蒼く

なると、急激に温度が下がり始めた。裸でいるのは寒すぎて耐えられなかったが、突然、音もなく金色の装飾が落ち始め、壁が崩れ出し、土煙とともに床に散り始めた。

わたしの頭上にも壁は落ちた。頭に強い衝撃をうけて、わたしは初めて不安と恐怖を覚えた。

必死になって四肢を縛る鎖を引いた。手首

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、かいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。

局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

から血が流れたが鎖は千切れた。わたしは夢中で地下の長い横穴を逃げた。その後を土煙が追った。

どう走ったのか覚えていないが、いつのまにか地上に出ていた。

ホッとして見返る目の前には、Sの家は消え失せていた。

十二人のあの女たちはどうしただろうか? という気持が、わたしの脳裏をチラッとくすめたが、さして深刻な打撃ではなかった。

眼下に広々とした三浦半島の海があった。身体を眺めると、来たときと同じ衣服を着けていた。腕時計のカレンダーが、十三日の金曜日を示していた。わたしは夢を見ていたのだろうか。

わたしは奇妙な気持を拭いきれぬままに丘を降りた。途中で川をのぞくと、金髪の男がじっと、わたしを見つめていた。それが自分自身であるのに気がつくのには、いささか時間が、かかった。

そして十二人の女と、自分との関わりを漠然と思い返して、十三という数字がわたしのペット化番号であることに気付いて呆然としたのであった。



映画「憂国」の三島由紀夫

三島由紀夫の死

中 康 弘 通

昭和四十五年十一月二十五日午後零時十五分、三島由紀夫は逝った。それも、割腹自決という、思いがない形で——享年四十五才であった。

三島由紀夫は逝った——書けばわずかこれだけの文字である。しかし書いている筆者の胸中には、うねり高まる万斛の思いがある。

三島由紀夫氏は、ただ一度お会いしただけだが、「憂国映画版」のご本を頂いたり、「人斬り」のステルを頂いたり、一介在野の学徒へのご厚誼の思い出は深い。三島氏と切腹を論じたとき、氏は、

「切腹は男のやるものですよ」と微笑された。それは、比較的女性の切腹

を論ずるのに力を込める筆者を、諷される言葉であったかも知れない。しかし、その言葉を三島氏が、身みずから立証されるとは凡愚の筆者には当然思い至らないことであった。

三島氏が「憂国」で、青年将校の割腹とその夫人の自刃による殉義の死を描いたとき、華麗な文体で克明、かつ論理的に描写された「男の切腹」の壮烈さに搏たれた筆者は、盛名をなしてなお精進を怠らない三島氏の偉大さを感じたものである。

それが三島氏の自作自演で映画になると聞いたときは、その多彩な活動ぶりに再度駭かされたものである。三島氏みずから演じた青年将校の割腹シーンは凄まじさで「愛と死」

のテーマとともに海外映画評論家の高評を得るとともに、フランスでは女性観客のなかに卒倒者を出したことでニュースとなった。

純粋に日本人的な三島氏としては、外人の度肝を抜いた点で、痛快事であつたらしいのは筆者の祝意を述べた書信へのお返事で、「フランス人を切腹で卒倒させたのは、堺事件以来のこと」という、ご書翰の字句から察せられた。

「憂国」については、創作と映画を引くくめて、三島氏が全身で表現した総合芸術と筆者はみなしていたから、「憂国」私観を草したいと思って、三島氏に原作の要約や一部原文引用などにつき、ご諒解を求めたところ

快く諒承する旨の、お返事を頂きながら、とうとう筆者の怠惰から、未だに一文を草することを得ずに終わっている。

「人斬り」もまた、三島氏の田中新兵衛割腹のシーンが、まことに男らしい割腹の状を呈するところから、五社英雄監督や勝新太郎さんはじめ名優の出演と相まって、封切前から評判が高く、実際、殺陣と割腹シーンには三島さんならではの迫力があつた。

こうして、ボディビル、剣道、映画スター、シャンソン歌手、男性ヌード写真集、楯の会、東大全共闘との対話など、ここ十年余り、毎年、文学者としての創作評論以外に多彩な活動で話題を呼んで来た。それは、今年は何を見せてくれるか、という期待を伴う、年々の楽しみでさえあつた。全身で芸術を表現し、芸術生活を生きる人であつた。

三島氏が一九七〇年というエポックメイキングな年を無為にすごすとは、誰しも思わなかったであろう。しかしまた、楯の会員四名を引きつれ、自衛隊で改憲演説ののち、割腹自決するという壮烈な行動を、誰が予期し得たであろうか。

文士としては死にたくない、武士としての死を……といていた三島氏の、すぐれた文

学的資質と強健な意志が結びついたとき、考えてみれば一身を犠牲として、憂国の割腹をとげることは、氏の必然であつたかも知れない。映画における再度の割腹シーンの演技は三島氏にとって、その最期の日のためにした周到なりハースルであつたかも知れない。

たとえその死が日本の文学界にとって大きな損失であるにせよ、純粋な日本的美意識を東西融合したレトリズムで包み込んだ三島文学の評価は、すでにノーベル賞候補になつたことだけでも定まっているといつていい。

しかし、文学的行きづまり、あるいは狂気の沙汰などとさまざまな評価は三島氏の自決の原因にからんで流布されている。反面また冷静な計画と強固な信念にもとづく憂国の至情の発露とも評価されている。

国事にかかわる行動と手段についての、是非善悪は批判を差し控えたい。しかし三島氏が日本的美意識を氏独特の美学で表現した、ともいえる最期は、三島氏が信奉する吉田松陰の刑死とひとしく、百年ののちに歴史によって評定されるであろう。

三島氏の最期は、誰方かが書斎でも割腹すべきだ、と週刊誌に書いておられたような「私」の死ではなく、国家百年ののちを憂う

る「公」の死でもあつた。

そして筆者は、三島氏が最期に当たって、古式に則し真一文字に五寸近く臍下を割き切つて介錯を受けた、という壮烈な状況をニュースで知って、その憂国の至情と武士道に則した志の高さを信ずる。

また氏が、その志操と生命を賭した演説が傾聴されなかったことをニュースで知って、内容の如何にかかわらず、三島氏の無念さを察し涙なきを禁じ得ない。是は同じ世代の間としての同情であるかも知れない。

筆者の数少ない理解者でもあつた三島氏を失つた日以来、ショックに一時は一切の休筆を考えた筆者であつたが、三島氏がライフワークを完成したその日、憂国の至情を説いたのち割腹した大勇を思い、筆者は筆者なりの勇を以て、終焉の日まで、切腹の歴史と文芸についての研究著述を、古き日本の心を伝えるものとして続けるであろう。

三島氏の最後の作品となつた「豊饒の海」にある輪廻転生を信ずるならば、三島氏は昭和四十五年十一月二十五日、どこかに次の人生を歩み出しているであろう。願わくはまた三島氏自身が愛する日本に生を享け、筆者と切腹について論じて頂きたいものである。

このイレズミやくざが、自分達の組織の成員たる印としてコール・ガール達にいたものなんであるが、あまり実際のでない、こんな「私ってあれよ」式のネームプレートを下げてたんじゃあ、取調べで一網打尽にされちまう。研究不足の作品である。サド効果半減。

× × × × ×

②「ミストレス」

物語は、ラスヴェガス最後の独立経営者フレッチャーが、シンジケートに自分のカジノを売り渡し、アル警部の御座すパイン・シティにやって来る。彼はこの地で新しいカジノをご開帖におよぶつもりである。

ところが彼は引きぎわに八百長バクチをやらかし七万ドル(二千五百万円ばかり)を荒かせぎしてきたのである。カンカンになったシンジケートは、彼をつけ狙う。

それにストリップパー、ボデー・ガード、殺人事件、情婦達、かあちゃんにいつもしぼられてる警官、新聞記者などがドヤドヤ出てきて話をこんがらかせる。サドッ気があるのは、ストリップパーのガブリエル、マゾはニーナという女とアル警部である。

○

「あんたになんか、話すことばはないわ」
ニーナはつめたくいって、ドアをしめようとした。

「あたしをみれば、なにか思いだすんじゃないかと思ってきてあげたのよ」

ガブリエルはいいさま、腕を一ぱいにひいてニーナのみぞおちをまともに一発くらわした。赤毛のニーナはひくくうめいて、からだを二つに折りかけた。ガブリエルはそのブラウスの胸もとをひつつかむと、ずっとバスルームのほうへひきずっていった。

「すぐすむわよ。アル。待ってちょうだい」といって、彼女はバスルームへ消えた。

ぼくは(註・アル警部)

「かしこまりました」と答えたものの、いささか不安になってきた。

バスルームのドアが二人のうしろにしまった。それから格闘の物音。悲鳴につづいてびしゃりと平手うちの音。そのあとは水道の水音があらゆる物音をのみこんでしまった。ぼくはバアへいって、もう一杯つぎなおした。またあらたな殺人事件? 止めにいくべきだろうか? けっきょく、その度胸はないということがわかった。

五分ほどしてバスルームのドアがあき、ガ

ブリエルが来客用のタオルで手をふきながら居間へもどってきた。

「帰りましょうか?」

と、いやにいていねいな口調できく。

「ちょっとのぞいても、かまわないかい?」

「どうぞ」

と彼女は肩をすくめた。

「あまり手間どらないでよ。お腹がペコペコなのよ。晩御飯はあなたに奢ってもらうからね」

ぼくは用心しながら、バスルームのドアをあけて、なかをのぞいた。床に衣類が積みあがっている。シャワー室のドアはしめてあり、滝のような水音がぼくの耳をつんざいた。真っ紅な水が流れているありさまを想像して、ぼくはぞっと胸震いをおぼえた。ドアを一そっくろく押しあけた。

鳥肌だつような物体がシャワーの下からよるめきで、そのままそこに顔をえながら立っていた。ぼくはシャワーのスイッチをきくと物音はやんだ。

「これはずしてよ!」

ニーナがしゃがれ声でいった。

ちらっと見ただけで、ぼくは目をとじた。

ガブリエルはどこで囚人の拘禁服を手にいれ

たんだらう。だが、よくよくみると、拘禁服
 ではないことがわかった。ガブリエルはニ
 ナのコルセットを胴の上までずりあげて、そ
 の中に両腕を押しこんでおいたのだ。なるほ
 ど、これは拘禁服よりも効きそうだ。

ニーナはヒスを起こしていた。

「ぼさっとつたっていいですよ！ 肺炎で死にそうなのよ！ はやくはずして！」

星よスミレよといっている場合ではなかった。ぼくはコルセットの下端に指をさしこんで、鳥肌だった腿からくるぶしまで引っばりおろした。彼女はそれを脱けだすと、バスタオルをとって、からだに巻きつけ、げんなりして浴槽のふちにへたりこんだ』（宇野利泰訳「ミストレス」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第五九〇号八六～八七頁）

これは自分の情人をニーナに奪われたガブリエルがアル警部を引きつれ、憎さにくしと、なぐりこみをかけた処である。しかもアル警部が一生けんめいニーナをかいほうしてゐる時、当のガブリエルはニーナの部屋にある十五本ものウィスキーへ、そこにあったライター・オイルを注ぎたしてゐるのである。こんなのを飲まされたら死んじまう。

こういう希少価値を持った女は、ぜひとも汚職好みの政治家に世話したいものだ。

彼女の得意中の得意技は、相手が男であらうと女であらうと、まず、誘導弾ミサイルのような突進。次いで、右ストレートから向こう脛への足げりなのである。時には、ウイスキーグラスを、中味入りのまま投げてよこすし、ホットコーヒー入りのティー・カップの場合もある。

×

×

×

×

③「悩ましい死体」

物語はチャーム・スクール（花嫁学校）でアル警部が講演する処が発端である。

その学生たるや18才から22才にかけての美人達で、ものすごい質問をしては、アル警部を困らす。

「犯行の跡をまるっきりのこさず、近くから男性をころす、もっとも効果的な方法は、なんでしょうか？」とか、父と義母殺しで訴えられた女の殺人者の心理について

「ただ、退屈してあんなことをやったのかしら？ それとも、氷屋さんと、ポーチでふざけてる時にパパがかえってきたので、頭にきて——」なんてやらかす。

なかには「あなたのご意見がうかがいたい

わ。わたし、部屋の室内装飾をかんがえてますの。わたしひとりで住むお部屋よ。エッチングなんか、どうかしら？ 見て下さるといいんだけど……。アパートは、ウィルトン・アヴェニュー五〇——」なんて誘いの手をかけてくるのもいる。

女に強い筈のアル警部も、たじたじの大攻勢なのである。

サドツ氣を若干なりと感ずるのは、健全なる精神は、健全なる肉体に宿るとばかり女学生をしごく健康のかたまりのような女体操教師が、やや、それにあたる。

——これより六〇行ばかしは大演説につき
飛ばして下さって結構——。

俺は思うんだが、健全なる精神は健全なる肉体に宿る」というのは間違ってるんじゃないかねえ。

健全なる肉体を持った若者は、当然、性欲なんかも旺盛である。(この性欲だがバツカにしたものではない。フロイド大先生も言うところ、性欲こそは人間が天寿をまっとおする為のつかい棒なのだ。人生の意義の隠れたる土台石なのである)

ところが若者の性の発散の場など、昔も今もありはしない。

昔は売春制度があつたなんていってても、た
いた金もない若者がそれを利用も出来な
かつたろうし、そこへかよう為には、犯罪に
もはしって、自分の未来と引きかえに金を手
にするか、親兄弟を泣かせる方法しかなか
たであらう。

すれば売春制度なんてあつた時代の方が若
者の不良化は進んでいたろう。それにドロ
ロしたこぎたないかんきょうや、それや、こ
れやで、健康な肉体を持ち、性的な抑圧が強
い若者ほど不健全な精神の中に、のたうちま
わっていたのではなからうか。

若者特有な乱暴狼藉、喧嘩口論、自動車事
故等は健全なる肉体のもたらす不健康さのあ
らわれであらう。

拓殖大学唐手愛好者の拓忍会が起した六月
十五日の死のリンチ事件。特に主役を演じた
と伝えられる斎藤憲治や寺田清一（45年六月
十九日付朝日新聞）に、つくづくそれを感じ
る。

しかし今の時代は昔のように、男女七才に
して席を同じゅうせず、なんていって、東洋
五百年の停滞を生み西洋文明に追いこされた
時効ものの儒教思想は引退したから、若い男
女はフランクに付き合う事ができるし、お互

いの悩みをうち明けあい、自分にあつた相手
をみつけれ出し、精神的なたちで性欲を満足
させ、かつ、仕事や趣味、スポーツ、学問、
社会活動に昇華させている。

今のいわゆる大人たちが若者のほんぼうな
交際を見るにつけ感じる不道德感や、セック
スを売春婦によって満した自分の過去の不潔
感からくる罪の意識は、現代の若者にはない
のである。

現代を昭和元禄として見、かつ、味わって
いるのは大人たちであり、若者たちは21世紀
の新しい宇宙文明に向かう胎動期として、く
るしんでいるのである。

それに今の若者は昔の若者ほど病んではい
ないのである。乱交時代ではなく、プラ
トニック・ラブ全盛（ヤヤ広義ではあるが）
時代なのである。

こんなわけだから現代感覚自身には問題
はないのだが、今もっておこなわれている処が
ある昔風の精神教育の裡に矛盾が堆積し無残
な事件が起こるのである。―演説おわり―

④「ダムダム」

この舞台は売れなくなった芸人達の避難
所の古屋敷である。

住人には骨無し芸人のブルネットや身の丈
二メートルになんなんとする女ターザン――

これらの形容がおもしろい――虎の皮でつく
ったビキニスタイルのブラジャーに、パンツ
だ。やはり、ジャングルでターザンを追いか
けてる時、すれちがった虎の皮を、生きたま
まひっぱがしたんだらう。すんなりスタイル
のいい女なら、ビキニスタイルも、わるくな
い。だけどアントニアみたいになにもかも
超大型だと、すごいみたいだ。こんなに広々
とはしてなくつづく健康な女の素肌は、おれ
もはじめてだった（田中小実昌訳「ダムダ
ム」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブッ
ク第七六二号五七頁）――といった具合であ
る。

フライ級作品であるからサド・シーンは特
にないが、ややサドツキのある場面としては
アル警部とボルニック部長刑事が、死体あり
との通報を受けて、お化け屋敷におっかなび
っくりはいつて来た処にある。

○

「警部……」ボルニックはしゃがれ声をおし
だした。「あ、あつた！」……略……「こ、
ここに……床の上に……」ボルニックは口を
パクパクやうてる。「死体が……」……略……

死体は絨毯にうつぶせになっていた。

まちがいなく女の死体だ。ビロードのようにつやのある、まっ黒な髪が死体にきせるシユラウドみたいに肩をおおい、肌にぴったり、の深紅のリオタード（パレー用稽古着）が、深くきれこんだウエストと、誇り高くまるくつきだした、はりきったヒップの曲線を、いやでも見せつけている。腿のつけ根から左右直角にグロテスクにひらいた両足。だから、完全な逆T字型になっている。

「こんなスタイルのいい女を殺しちまうなんて、まったく、もったいない」……略……

「両足を、胴体にくっついたところからへし折って、むりやり左右にひらいたりするのはきつとキチガイだ」

「やっぱり骨が折れてるかい？」おれは本気にできなかった。

ポルニックは背中をかがめ、ちかくの足首をつかんだが、ハッとからだをひいた。「ヒヤッ！……略……」「さわったら、う、うごく……」

なるほど、足首がうごいてる。それにつれて、足首から上のほうも優美に九十度の弧をえがき、胴とストレイになった。つづいてかたっぽうの足もうごきだし、左右の足首がそ

ろうと、死体はクルッとあおむけになり、野性のすももみたいなまっ黒な目が、つめたくおれとポルニックを見あげた。

「女に飢えたノゾキ趣味のひとにじゃまされて、おけいこもできないわ」

死体のお嬢さんは、ハスキー・ボイスでわる口をいった。

「あれ！」ポルニックの声が三オクターブばかりさがり、いつものディー・バスにもどった。「この死体、死んでないのかな？」

（前記一二―一三頁）

○

もう一カ所、こんな処があるが、あんまり書いてしまうと本屋に悪いから、この辺でとめておく。何にしてもこの本はカーター・ブラウンの作品中では俺が好きで本の一つだ。
「コマーシャル」ハートのある作品だ、読んでみてみ。

× × × ×

⑤「男好き」

これにはサドツ気のある男としては労働組合のボスが登場する。先妻と死別し、元ストリップパーをひろって自分の女にしている。腕一本でのし上って来た男だから暴力的な処もあり、女房替りの女との喧嘩もはである。

○
かれはまたドアをあけてどなった。

「パール！」

二、三分たって現われた彼女は、ウッズの肩ごしにおれをながめた。そして、あざけるようにニツと笑いかけた。

「まあ！ 人身攻撃屋さん、まだ帰らなかったのね。G ストリングに手をかけるまでは待てないっていうの、坊や？」

ウッズは、どなりつけた。

「つまらんまねはよせ！ ストリップショウで服をぬいでいるんじゃないんだぞ。とつくの昔にすんじまったことなんだ！」

女の眼は、パツと輝いた。

「わたしがもうだめになったとでも思ってるのね！」

彼女は指先でしばらくブラウスのボタンをいじくり回していたが、やがてさっと前を大きくひきあげて、小さいがみごとにまんまるくそびえ立った裸の乳房をむき出しにした。

「いかが、警部さん？ わたしお婆さんだと思う？」

彼女のかすれた声がした。ウッズは、だみ声でどなった。

「この売女！」

こいつはパールの横面を手の甲で残酷にひっぱいた。彼女はくるっと一回転して、ひらいたドアから廊下へころげ出た。

彼女の姿は見えなくなったが、声は聞こえてきた。信じられないといったように、夜道に迷った子供のように、しくしくと泣いているのだ。……略……

「コーヒーを入れるー!」ウッズはそう言ってまたドアをしめた。……大巾に略……

ドアがひらいて、パールがコーヒー・ポットなどをせた盆を持って入ってきた。その顔は、そ知らぬように丁重にしていた。

ブラウスのボタンはきちんとかけられていた。右の頬にぼんやりと赤いあとがなければ、何かあったなどとは思えないくらいだった。

彼女は小さなテーブルに盆をおき、クリームと砂糖の分量をたずねて、ステンセンとおれにコーヒーを注いだ。彼女は最後にウッズに注ぐと、その前にしばらく立つて、やっと思おろした。

「ほかに何か……旦那さま?」

……略……

「コーヒーがきたら、もうそれでいいんだ」

「コーヒー以上のものがあるのよ、あんた、

厄介なことがね!」

……略……(ここでウッズのアリバイをくずす)

……「この嘘つき女が!」

ウッズは椅子から身体をおこしかけたが、立ち上がることはできなかった。

パールは勢いよく腕をふって身がまえ、手の甲で、やつ横の横面をはりとばした。

爆発するような音がひびき、やつはよろよろと椅子に倒れこんだ。

「わたしの身体にさわりでもしてごらん……殺してやるから!」

彼女は低い声でさういふと、嘲笑するようにお尻をゆらせながら、ゆっくりと部屋を出ていった。……略……

おれは拍手をしないですませるのに、ずいぶん骨を折った。

ウッズは全身をゆさぶる激しい怒りを、なんとかしておさえようとしながら、ゆっくりと、まっすぐすわりなおした。

おれは……略……上品にコーヒーをすすった。(矢野徹訳「男好き」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第七七九号五一〜五五頁)

女なんて、このくらいの覇気がなくちゃあ

てんで魅力がない。これくらいやってこそ女も人間の部類へはいるのである。それに男たるもの女にはったおされても平然としているくらい度量がなけりゃあだめなんじゃあないかな。女に反撃するのを許さなかった貝原益軒なんてやつは今の基準から見れば女のくさったのだな。

以上はアル警部が弁護士立会いの許にて調べ中における夫婦喧嘩の場面でした。

しかしここへ出てくる労働組合はモーレッツですな。日本の労働組合も殺し屋くらい雇うようにならなけりゃあ社会に定着したとはいえないのかもしれん。募集広告でも出せばフランスあたりからジャン・ギャパンやリノ・パンチュラ、フィリップ・クレイなどがとんでくるぜ。

いやあ! こりゃ、失言だなセニョール。

× × × × ×

⑥「死体はヌード」

事件は猫の面をかぶせられたヌード死体が精神病院の構内で発見される事に端を発す。

アル警部、心中おおいになげいたね。

「なんたること、かかる貴重品を」

「悪魔の黒ミサになったのかい?」

ニーナは、うなずいた。

「アリストは、お坊さんがきくような黒いローブをつけて、お酒と女が好きな半人半獣の化物の仮面をかぶってたわ。見ただけでもおそろしい角がはえたお面なの。そして、しずかに、と言うと、すぐ地下室のなかは物音ひとつしなくなったわ。アリストは、わけのわからない祈りの言葉をつぶやき、きたない、いやらしいさげび声をあげ、悪魔の前衛にくわわる新しいしもべを、どうぞ歓迎してください、と黒い大王にうったえてるの。わたしは、べつに気にもしなかったわ。へんなクスリをまぜた飲物のために、抑制といっしょに意志の力も、どっかにいってしまっただけのもの。」

しばらくすると、雄羊の仮面をかぶった、れいのきみのわるい男に、アリストは手をふり、地下室の奥にいき、祭壇をはこんできたわ。そして、祭壇のまわりに黒いローソクをたて、火をつけおわると、今夜はじめてきた者が悪魔大王に生贄をささげる、とアリストはいい、はじめに、わたしをゆびさしたの。……略……気がついたときには、ジョニーときみのわるい男に足と肩をつかまれ、黒い祭壇のほうに運ばれていった。……略……

二人はわたしを祭壇におろしたけど、まだきつく肩と足をおさえてるので、ぜんぜんうごけないの。

そのあいだ、アリストのあのいやらしい仮面が、ずっとのぞきこんでるんでしょ。いくらへんてこなクスリを飲んでても、こわくて……。やがて不意に、アリストが、黒いローブの下から、長い、するどい刃のナイフをとりますと、わたしの足をつかんでた気味のわるい男は手をはなし、祭壇のうしろにきえたとおもったら、生きてるニワトリをぶらさげて、アリストにわたしたわ。なにがはじまったのか、こっちがまだぼんやりしてるうちにアリストは、生きた鶏をナイフでザクッとやり、わたしのむきだしの肌に、血がとびちって……。ああ！……略……

わたし悲鳴あげ、祭壇からおろして、と泣いてたのんだけど、鶏の血がみんななくなるまでおさえつけられたきりなの。

でもダイアナもジョニーも平気だったわ。うすきみの悪い男なんか、すぐたのしんでるのよ。……略……マーギイは……略……わたしよか、もっとたいへんだったわ。ほんとに気が変になったかと思っただけ。ダイアナまで手伝って、ジョニーやきみのわるい男

と二人がかりでおさえつけても、マーギイはじっとしてないの。からだをねじり、くねらせ、ひどい声でさげびつづけ……。せ、ひどい声でさげびつづけ……。

マーギイがあらばればあらばれるほど、アリストは、興奮してね。こいつは、黒ミサにはもってこいの巫女だなんていつてるの。やっとな祭壇からおろしてもらっても、あるけなかったわ。アリストが、へんなクスリをまぜた飲物をついでやると、マーギイは、それを顔にぶっかけ、しばらく、アリストは本気にできないみたいだったけど。ズカズカ祭壇のうしろにまわり、馬のムチをもってきて……。

ジョニーが、いっしょうけんめいなだめ、やめさせたの」(田中小実昌訳「死体はヌード」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第八〇五号一〇〇〜一〇一頁)

○

結局、この黒ミサの主催者アリストが十五万ドルの金とからみ、ファースト・シーンの死体を製造した事が判明する。つまりニワトリの替りに彼女の胸にナイフをつっこんじまっていたわけである。

このサド・アリスト氏最後に恐妻家のポールニック部長刑事に撃たれてしまう。目と目の間に第3の目をあけられちまうわけである。

芸術的な殺人犯が芸術的にかたづけられたわけである。もって冥すべし。

サド・マゾ族は本能的なだけに一般人よりも動物的になる。そこに落とし穴がある。世の規範を破りやすい状態になる。ものの考え方が変わるわけだ。だから、サド・マゾ族たるもの常に、自分の心に問いかけねばならぬ。
「俺はまだ人間か！」

この世界には、よい例がある。シャロン・テート事件だってそうだし、ボストンの絞殺魔だってそうだ。彼等は人間の世界から、けだものの世界へ大きくふみこんでしまった。錦ヶ浦じゃないが、「チョット待て」の立てふだが必要だ。

⑦「エンジェル」

× × ×

「エンジェルや！」ホフナーは威厳をこめた声で言った。

深く嘆息をつく、ブロンド美人はホフナーに背を向け、すなおに上体を前へたおして両ヒザに手をあてた。学者風な表情がホフナーの顔からとつぜん、消え失せた。

多色水玉の生地の中へ、かくも甘美なる曲線を描いてつつみこまれたエンジェルの丸い

腰をじっと見つめること数分。ややあって、彼はおもむろに右の手を振りあげると、水玉模様がピンと張りつめたそのまん中へ、思うさま平手打ちをくれた。

「幸運のオマジナイだよ。エンジェルや」ホフナーが重い声で言った。

「ああ、痛かった」ブロンドはからだを起し、平手打ちを食らったくだんの個所を優しくいたわった。「無事で行ってらっしゃい」

ホフナーはくると向きをかえると、再び飛行機の方へ歩いて行った。おれは口にすべき言葉すらなく、ただただブロンドを見つめるばかり。

「これは一体、なんと言う——」（片岡義男訳「エンジェル」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第八三九号一四―一五頁）

これは前大戦や朝鮮戦役での戦闘機屋達になつかしき青春の血を大空に燃やした頃以来つたえられている搭乗前の儀式なのである。

この儀式の熱烈な讃美者であるアル警部がこれにやっとありついたのは、調書を取りながらせまったものの散々に反撃され、せいでいにヒジ鉄を食った後の事である。

「幸せを祈りたくないの？」
顔をめぐらせ、それに一瞬おくれて、おれは凍りついた。

エンジェルはと見ればおれに背を向け、しおらしく上体を倒している。両手をヒザに当てているので、おれはいやがおうでも見ないわけにはいかない。黄金色に輝いて張ち切れんばかりのふたつの小山。飛行機なんかなくとも、この光景をひと目みただけで、おれのからだは蒼空のあなたへ飛び去らんばかりの反応を示してくれた。それに、こればかりはまたと再びないチャンスであり、どうしても逃がしたくない。

「幸運を祈りますわよ、アル」と、エンジェル。下を向いているから、あまりはつきりはないけど、おごそかな声で言ってくれた。
「同じくきみも幸せにめぐまれますように」
陽気におれはいった。

右の手を高くとるかあく空中にかかげ、しかるのちにちよっとした雪崩れのごとき勢いで振りおろせば、本物の、大砲を使って演じた「一八一二年」（交響曲の名）の最高頂にも似た音がする。

絹を裂くような悲鳴をあげてエンジェル、おれの右手の威力のすべてを、形よく張った

お尻に受けとめ、四つんばいとなって床の上を手足入り乱れて転がっていった。

「前のほうが破烈しなかったであろうことを切に祈るよ」(前記六〇頁)

○

なんともはや、うれしい光景ではある。最近ではスパルタ教育等と称する言葉が盛んになったから、口実にはことかかない、社長や重役や市長など、ナルベク高貴な生まれの大先生の娘を嫁っコにもらえば最高だぜ、しいくしがいのあるのを狙おう。我等若者、はっぶんしようではないか。

× × × × ×

⑧「この女百万ドル」賭博師マイク、ファレルが主人公なれど、サド・シーンはなし。

× × × × ×

⑨「チャーリーの使い」

テレビのシナリオ・ライターのラリー・ペーカーが狂言廻し。

犯罪者には、売れっ子で気狂いのコメディアンがでてくる。

このコメディアンが狂うきっかけは、アメリカ西海岸で名高いギャングの情婦を自分の妻にした為、ハネムーンの途上において、ギャングに笑いものにされた事による。

○

「チャーリーは、子分二人に州警察のお巡りの恰好をさせ、結婚初夜の、その女とコメディアンがいるところにやって」……略……

「二重結婚だって、女のほうをつかまえ、ひっぱっていったらしいの。」

冗談やイタズラをやらせれば、チャーリーにかなう者はいないわ。そのときも、こまかなことまで、ちゃんと考えてたのね。

花嫁さんがつれていかれ、一時間ほどして花婿さんが、爪をかみながら、たったひとりのこされたモテルの部屋に、チャーリーは、人喰いじゃなくて、男喰いのすごい女をやってたんですって。背の高さは六フィートちかく目方は百五十ポンドぐらい……チビのコメディアンには、はじめっから勝負はなかったわけよ

エラが、ものもいえず、笑いのヒステリーをおこすのを、おれは、むっつりとながめた。……略……

「そして、クライマックスにたつたときに花婿さんをモテルにつれてかえり、人まちがいでしてわかった。二重結婚は、男喰い女のほうだ、とお巡りに化けた子分にあやまらせ新婚初夜の花嫁、花婿をのこし、ジャイアン

ト・サイズの女を部屋からひっぱっていかせたの。ドアがしまったとたん、新婚の二人がどんなにはでなけんかをおっぱじめたか、わかるでしょ？」(田中小実昌訳「チャーリーの使い」ハヤカワ・ポケット・ミステリー・ブック第八二九号六五～六六頁)

× × × × ×

吉原玉屋の二階にて坊主禪超と大通津藤の会話

「酒色を恣にしている人間がかかった倦怠は酒色で癒る筈がない。こう云うはめから、二人は何時になくしんみりした話をした。すると禪超は急に何か思い出したような様子で、こんな事を云ったそうである。

仏説によると、地獄にもさまざまあるが、およそ先ず、根本地獄、近辺地獄、孤独地獄の三つに分かつ事が出来るらしい。

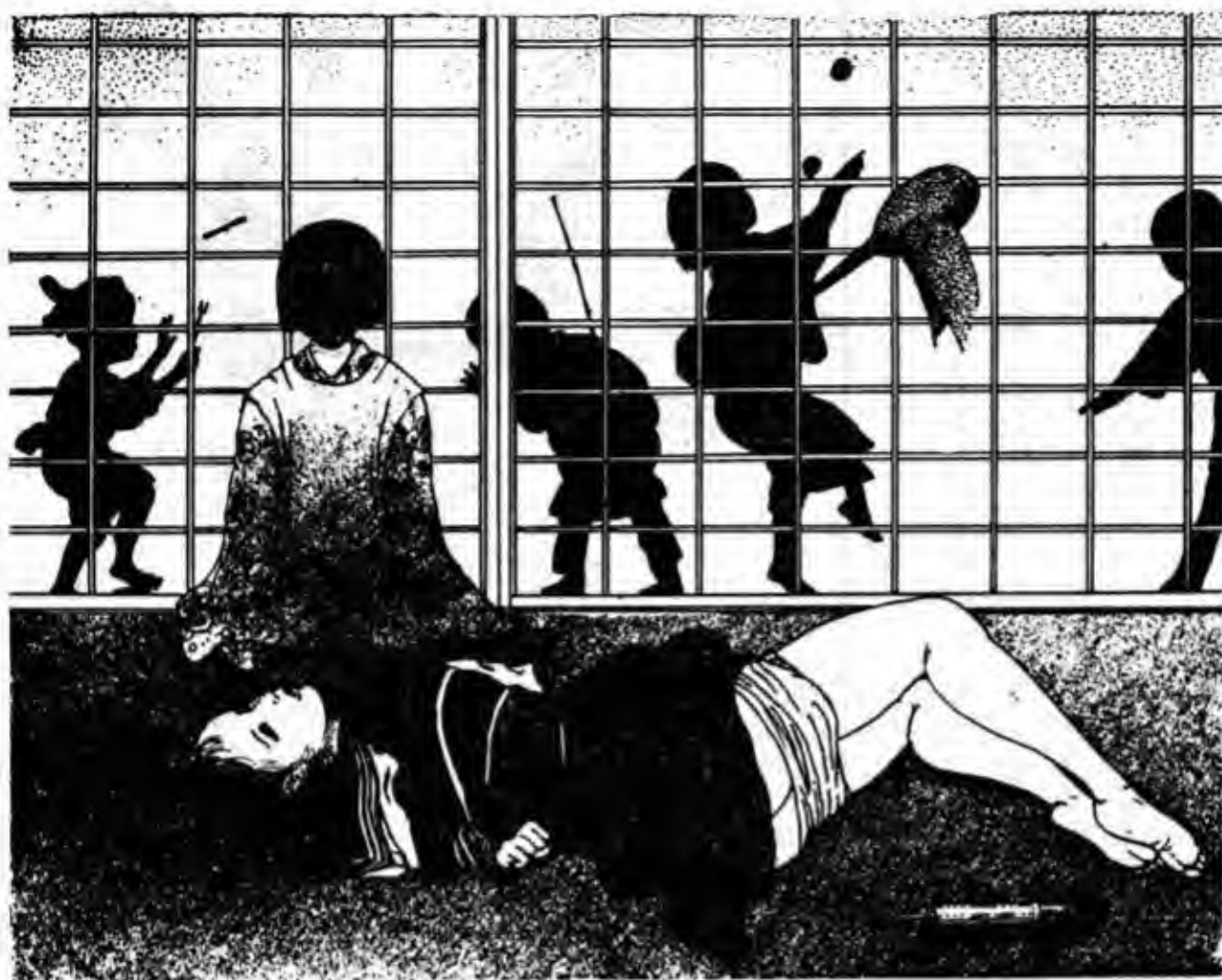
それ南瞻部洲下過五百踰繕那乃有地獄と云う句があるから、大抵は昔から地下にあるものとなっていたのであろう。

唯、その中で孤独地獄だけは、山間曠野樹下空中、どこへでも忽然として現われる。

云わば目前の境界が、すぐそのまま、地獄の苦艱を現前するのである。

自分は二、三年前からこの地獄へおちた。

僕のイメージ画『時間の習性』室井 亜砂路



流腸に伴う切なさには、一種独特の時間感覚があり、そこには、幼児時代への退化願望のようなものが下敷きになっている場合も多いのではないかと、愚考してみました。

受身のA感覚というのは僕にはわかりませんが、僕の性意識自体は、どうもノスタルジックや懐古趣味と接近しやすい傾向にあるように思います。

以前にサロン欄を飾った吉村英子氏の短歌は、流腸の切なさといふ幼児願望との結びつきが実に美しく気品に満ちた表現でなされていたようで、今でも強く印象に残っておりますが絵にするとなると、テーマの性質上どうしても常識的な設定になつてしまします。

一切の事が少しも永続した興味を与えない。だから何時でも一つの境界から一つの境界を追って生きている。

勿論それでも地獄は逃れられない。そうかといって境界を変えずにいればなお、苦しい思いをする。そこでやはり転々としてその日の日の苦しみを忘れるような生活をしてゆく。しかし、それもしまいに苦しくなるとすれば、死んでしまふより外はない。昔は苦しみながらも、死ぬのは嫌だった。今では……」(芥川龍之介作「孤独地獄」河出書房現代文豪名作全集(1)一六頁)

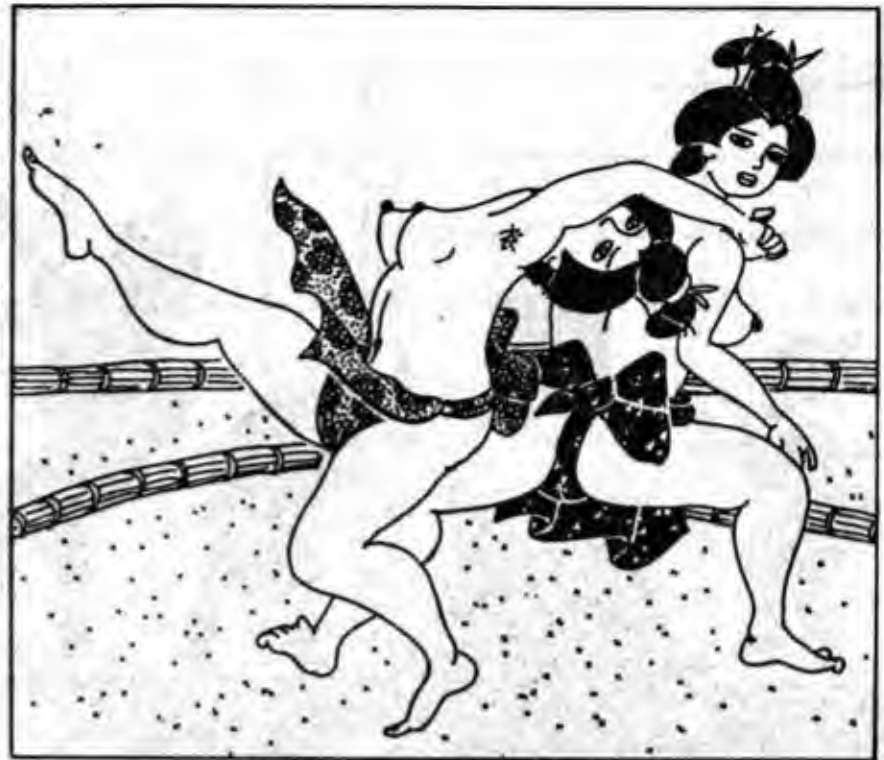
○ 禅超はあいかたの錦木のしかけをはおって三味線をつまびきながら、しずんだ様子で話すのである。

なんせ、大正語で書いてあるんで読み易いように書き抜かせてもらいました。原文をぶっこわしたなどとかたいこと言わんでつかあさい。俺は彼しにほれとるきに。

なんにしてもこれは、さまよえるサド・マゾ族の心理に一脈通ずるものがあるんじゃないかね。

フライ級のあとをヘビイウエイトでしめくらせていただいた。

カット・雄松比良彦



遂におとさきの出陣――。

すつくと立ったおときは、土俵下で軽く右左と力足を踏みしめ、縦みつをひとつしごいて土俵へ上る。気合いのこもった足どりだった。堅締まりの若々しい双臀が躍った。

若駒もさすがに疲れを感じていた。長びいた勝負はないとはいえ、三人を相手にしてはその緊張からくる気持ちの疲れもあった。素人の村娘相手では勝って当然。そのことが、

助太刀娘相撲

梢

の

冒

険

奮斗士好太

(下)

かえって気を重くする。

きれいな立ち合いだった。

互いにまわしを引き合って、がっぷりの四つ相撲。若駒の早い動きを封ずるには、四つに組んでじっくり腰を落ちつけてとった方がよい――と、おときは考えたのだった。

目立った動きもなく、一呼吸、二呼吸。

「はっけよい！ のこった！」

行司の声にも熱がかかる。

若駒、このままでは不利とみて、攻めに出る。まず体を押し出して、内がけ、これが空ぶりに終わるや、蹴かえし、二枚蹴りと足わざの連発。おときは腰をひき、ひざを

ゆるめて、うまくこの攻撃をそらす。若駒今度はひねりから投げの連続わざ。しかしおとさきの重い腰は崩れない。若駒はやや焦ってきた。何とか動きまわってすきを作らせなくては……。素人の一番の欠点である足の運びを乱れさせてそれにつけこむ、というのが姉力士花錦からの作戦であり、おまさとの勝負はそれが図に当たったのだけれど、この相手はその狙いを読んでいるのか、こっちの動きに乗ってこないのだった。汗が背中を流れ下って、締め込みと肌の間にじみ込んでいくのがわかった。まわしをひいた指先の力も少しにぶったように感じられる。何とかしなくて

は……と、若駒は、控えの花錦や、梅香森の方へチラリと視線を走らせた。

頃はよし、とおときは攻めに出了。ぐいと腰を落としての吊り。若駒もまた懸命に吊り返す。しかし、この力くらべはおときがやや優って七分三分に相手土俵へ追い込む。若駒投げをうって廻り込み、また土俵中央。おときに引きつけられた若駒の前みつが大きくずり上がって、前袋のゆるみが目立つ。肉乗りがして丸味を帯びた腹が大きく波をうって、かなり苦しそうだ。おときもまた、優勢とはいいながら息が抜けなかった。前まわしをひいた腕に力をこめ、自分の胸でその動きを封ずる。ちよつとでも油断をすれば、足わざ、投げわざがとんでくる。玄人相撲のうまさとおそろしさだった。おときも疲れた。けれども、相手はそれ以上に疲れていると思つた。若駒の荒い息づかいが耳のすぐそばで鳴っていた。おときは前みつをひいた左をジリジリと横みつの方へ移動させた。大きく波を打つ若駒の腹の、激しい動きが指先に伝わった。

再び吊りぎみに寄るおとき。若駒の足が土俵の砂に線を描きながらずると後退。前の勝負とは逆に、今度は俵に足をかけてねば

る若駒。すかさずおときは上手から投げをうつ。がくつと膝が折れかけて、大きく傾く若駒。ここでもう一つ追いうちをかければ、若駒は土俵の砂に埋まるのだけれど、おときにもそのゆとりはない。

顔を朱に染めて凄まじい表情のおとき。苦戦と疲労に蒼白となって悲愴な斗いを続ける若駒。思わず双方の土俵下から声援がとぶ。しかしその声も、ふたりの耳には入らなかった。一呼吸ののち、おときの勝負をかけた最後の攻め。必死にねばる若駒の胸を双手で押し上げる――。

「それまで！ それまで！」

なおも死斗を続けようとするふたりへ行司があわてて駆け寄った。若駒のかがとがわずかに俵を踏み切ったのだった。

土俵を下りる若駒に中柳村側から拍手が湧き、かわって立ち上がった花錦が、肩をたたいてねぎらった。

けれども勝ったおときにしても、疲労の極にあることは誰の目にも明らかだった。

相手の花錦は、盛りを過ぎたとはいえ、鍛え込んだ体の張りはまだ充分残されていた。肩口から腕にかけての肉のつき具合や、ずっしりと張った腰から太腿にかけての、たくま

しさは、やはり若駒らの及ぶところではなかった。せり出した腹を支えるように、臍下二寸ほどから腰の背へかけ締め廻した横みつと長めに引き上げた縦みつのゆったりとした程のよさが、裸体美を売りものの女力士らしい味を巧みにつくり出して、年期の長さを物語っていた。悠々とした手さばき、踏みしめる四肢のたびごとに、豊かな胸のふくらみがゆれて、それをまた充分に計算した身のこなしが、見る者の気持ちをもそそった。

「おときがかわいそうなのう」

付き添ってきた岡野村の人たちの間からもそんなささやきがもれる。

「まあせめて、けがでもしてくれねばいい」

善左衛門の目にも諦めの色が濃かった。

おときも、もう作戦などのゆとりもなく、ただ玉と砕けるのを覚悟してぶつかただけだった。ぬぐうあとから吹き出る汗――。くじけそうな氣力を震い起こして突っぱった。

さすがに小結を張る花錦、おときの必死の突っぱりも余裕を持ってあしらい、素早く踏みこむと見るや、右上手、左下手をがっちりといいた得意の体勢に組み止めてしまった。若駒との死斗に疲労の色濃いおときは、同じく両まわしをひいて構えを立て直しはしたも

の、それは望み薄い抵抗だった。大きく上下する肩先から背中にかけて水を浴びたような汗。乱れた髪が額にべったりと貼りついて責め苦に耐えるそれにも似た悲痛な表情。両足を踏み開き、まわしをひいた両腕に懸命の力をこめて相手の攻めをこらえているもののもうそれだけで精いっぱいであることは誰の目にも明らかだった。

花錦もまた、この疲れ切った相手に対して一気に勝負をきめようとはしなかった。じつくりと呼吸を計りながら、両まわしのひきつけをきかして、おときの体を徐々に起こし、ながびいておときが耐えきれなくなるのを待とうという構えだった。じわりじわりといったぶって、愛弟子若駒の仇をとってやろう。若錦は呼吸を計りながら軽く寄り身をみせる。たじたと後退しながらも、必死に盛り返すおとき――。

おときは、すでに半ば意識を失っていた。目がくらみ、胸が裂けそうなくらい苦しかった。ふんばる両足も、土俵の砂の中に引き込まれて行くような気がした。指先の感覚も殆どないようだった。たまりかねて声が飛ぶ。「意地の悪いことせず、早う勝負をつけろ」「猫が鼠いたぶってるようなことするな」

土俵下で見上げる女力士たちの間からも、見かねたかのような声が上がった。

「花ちゃん、もうそのへんでいいだろ」

花錦の腕に力がこもり、それでも腰を落として最後のねばりを見せるおときの両足が土俵をはなれた。

精根尽きたおときは、土俵を下りるとそのまま控えに崩れるようにうずくまった。火を吐くかと思うような荒い呼吸がのどもとを火照らせ、胸が張り裂けそうだった。目がくらみ、地面がゆれた。堅く締め込んだまわしも乱れ果て、乳房にふれんばかりにずれ上がった無残な姿――。

がっくり傾いたたぶさ。肩口から胸許へ、背へと流れ下る汗が、水から上がってきたかのようにだった。けれども、それは、己れの力の限りを斗い抜いた者の、崇高な姿でもあった。

岡野村側にあきらめに似た空気が流れた。土俵正面の席についている善左衛門も、表情こそ崩さないものの、明らかに肩のあたりに力を落とした様子が見てとれるのだった。それに引きかえ、隣にいる中柳村の庄屋は手ばなしの喜びよう。自らあれこれと指図して、手桶の水をかえさせたり、控えの女力士たち

をねぎらったりするのだった。

「商売人を連れてきたりして、卑怯だと思わねえのか」

「何だって、勝ちさえすりゃア理屈はどうだってつくってことさ」

岡野村の人たちのつぶやきに、おときが唇を噛んで、うつむいた。光るものが二、三滴むしろの上に落ちて、吸い込まれて行く。

「あたしたちの生活がかかってるんだから」あの稽古場でそういった彼女の声が、梢の耳の奥によみがえった。

おとき、そしておまさたちの、縋りつくような視線に軽く応えて、梢は土俵へ上った。「ふうっ」と息を吸いこみながら、梢はふとどこかで父の声を聞いたような気がした。

「勝とうと思うなよ。邪念を去れば、体が自然と動いてくれる……」

梢は一瞬目を閉じて、この言葉を繰り返した。体のしこりが解けるようだった。足もとの砂までが清々しく見えるようだった。

梢の視線の中には、もう花錦の姿だけしか映らないようだった。

花錦は、梢の妙に腰の高い仕切りを見て、突っ張ってくるものと見た。前の相手は、じつくりとつかまえて楽しんだので、今度はひ

とつ、きれいに勝って、鮮かなところを見せ
てやろう。この相撲の勝ちが決まった以上、
手間ひまをかける必要はない。花錦は、やや
下がって仕切り、梢の動きをささいながら、
ゆっくりと手を下ろした。こうやって、ゆっ
くりした動きから急に速度を早めて立つ気を
それば、相手はそれにつられて、あわてて
飛び込んでくるもの。その出てくるところを
一瞬の変わり身で片付ける……彼女は自分の
作戦に満足していた。彼女の脳裏には早くも
祝宴の光景がちらついていた。

花錦の作戦は見事に成功した。

「よッ！」

軽く誘った声に、梢は思わず突っかけてい
た。中途半端な立ち合いだった。

してやったり、と花錦は、低い姿勢からす
ばやく梢のふところに飛び込んだ。双差し、
そして、すかさず肩口へ頭をつける——。梢
は両上手を門にしてこらえるけれども、ほと
んど棒立ち、控えのおとき、おまさは、思わ
ず目を閉じた。

間をおかさず花錦の寄り身——。そのとた
んだった。両腕を門に抱えた梢の怪力に物を
いわせた強烈なふりまわしの逆襲——。花錦
の丸い体がふわりと浮いて、ほとんど土俵を

半回転して、あっという間に俵につまった。

さすがに老巧の花錦は、体勢を大きく崩すよ
うなことはなかったけれど、この梢の怪力は
花錦の胆を冷やすに充分な偉力があつた。う
っかり寄って行つては、またふりまわされる
——と花錦は考え直した。こうなると二本差
しはかえって動きにくい、花錦は右の下手を
浅くとり直すと、その腕をこじ上げるように
しながら巧みに梢の門を脇で切った。すかさ
ず出し投げの強襲。梢が大きくのめる。辛く
も残るところを足をとばしての蹴返し——。
年期の入った玄人らしい流れるような連続わ
ざに梢は、みじめにほんろうされた。

中柳村方の村役たちは、この花錦の鮮かな
相撲ぶりに相好をくずし、悦に入つた。

もう、勝負は問題ではなく、花錦がどんな
技をつかつて、梢を転がすか、彼等は、梢が
よろめき、傾き、そしてぶざまにのめるたび
に失笑をもらしていた。

梢はしかし、この花錦の猛攻に喘ぎながら
も一瞬の機会を狙うことを忘れたかった。勝
勢におごる敵には、必ず隙が生ずる。その時
——。梢は必死に耐えた。

花錦もまた、このしぶとい相手にややじれ
始めていた。投げわざ、足わざ、捻りわざと

手のうちを披露しているうちに、いつしか自
身の疲れを感じ出したのだった。まるで鼻面
をとって、引きまわされているような、そん
な哀れな相撲なのに、なかなか体勢をくずし
切らぬこのしぶとい娘は、こっちの攻めの止
まるのを待っているように耐え残している。
花錦は抱えられた左腕を預けるようにし、右
の前みつをこじ上げながら寄り立てた。たち
まち梢は土俵ぎわ、追い詰められた必死の表
情が凄艶だった。

勝ち誇る花錦が体を寄せて押し倒そうとす
るのを、梢は両手で抱えた花錦の腕をわずか
に左へ振る。先刻承知とばかりに花錦が、梢
の右足へ外がけをかけてくるのを、梢は満身
の力をこめて右へ振り戻した。逆の逆を衡い
た美事な反撃だった。花錦の丸い体は宙を飛
んで、梢の倒れるよりも早く土俵下へ転落し
ていった。

狂喜するおとき、おまさたち。善左衛門の
硬直した表情もゆるみ、頬に血が戻った。

けれども、勝負はこれから、戦いはまだ序
の口だった。

梢は大きく肩で息をしながら控えを見おろ
した。おときたちの喜びを素直に受け入れる
には、なんだか面映いのだった。

「なんて体裁が悪い勝ち方だったんだろう。でも、まあ、いいワ。これでひとつ責任を果たしたんだから……。あとは梢流の八方破れあたしに運があれば勝てるでしょう」

八分通り負けていた相撲を拾っただけに、梢の気持ちは、かえってさばさばしていた。そして、そこに捨て身の強さも生まれてくるのだった。

ひとり相撲をとった形で勝負に敗れた花錦の消沈した姿を見ながら、梅香森は内心自分の出まできたことを喜んでいた。

「あの相撲ぶりでは、いささかも足りないけれど、この小生意気なふんどしかつぎの小娘をどうしてやろうか」

梅香森は、すっかり頭から呑んでかかっていた。

「花錦の負けたのはもののはずみ。わしならば、こっちの体に指一本触れさせるもんじゃない……。向こうの控えの後ろまで飛ばしてやろうか……。まあ二突きと保ったらほめてやろう」

五尺八寸、三十貫の巨軀。弁々たる太鼓腹を、やく幅広く折り畳んだ黒襦子で引き締め首の埋まるような肩を聳かし、丸太のような腕を大きく振って、のっしと登場する。のっ

けから威圧して、梢の戦意を挫こうという作戦なのだった。

踏み締める四股に土俵も揺らぐかと思われよう。手毬を割って伏せたような、双のふくらみが胸の上で躍った。

のしかかってくるような巨軀だった。

唇をむすんで、悪びれず、この大敵に立ち向かう梢。ずり上がった締め込みを押し下げ整えたものの、熱戦に乱れた胸の動悸はまだおさまり切らず、早くも首筋から肩のあたりに汗がにじんだ。

花錦の敗戦に嘆声をもらしたものの、中柳村方はこの梅香森の巨軀に目を細めていた。その前には、梢など童車に刃向かう螭螂の姿にも見えるのだった。

立ち上がり、梅香森の猛烈な双手突き。やや立ち遅れた梢だったが、そのことがかえって梢に幸いしたのだった。丸太を突き出したような梅香森の双手突きは、わずかに梢の肩先をかすめ、そして梢は両脇ががら明きになった相手のスキにうまくつけこんでズブリと双差し、すぐに両まわしをガッチリと引きつけ、まずは願ってもない体勢となってしまう。作戦のはずれた梅香森は明らかに動揺した。見る見る顔に血がのぼり、眉が寄った。

ぴったりと胸が合って、しかも、相手の双差しは、ほとんど肩口まで入っている。何とか一方の上手でも……と伸ばす指先も空しく相手の背をなでるばかり。そして上手をさぐるその努力がかえって自らの腰を浮かす手伝いともなるのだった。梅香森はあせった。あとは自分の体重だけが頼りだった。相手をろくに見ないで双手突きに出た軽卒さをくやみながら、何とか持ちこたえていれば……と空しい願いを捨てなかった。

梢の額に汗が光った。双差しを果たし、しかも相手にまわしを許していない絶対の有利さながら、じわりと全身に伝わる梅香森の圧力は、かなりのものだった。

「ぐずぐずしては……」

梢は相手のまわしと肌の間に差し入れた指先の一本一本に更に力をこめ、ぐっと一腰入れると渾身の力で梅香森の巨軀を吊った。

梢の白い肌が桃色に染まり、高々と浮いた梅香森の足が宙を蹴った。

「残った、残った！」

敵味方の見物のどよめきに、行司の声も上ずり、控えの女力士たちも息を呑んだ。

二歩、三歩と吊り進んだ梢。さすがにこの巨軀は一息には運び切れず、足をばたつかせ

て懸命に残そうとする梅香森をおろす。しかし、もうそこは土俵際だった。なおも残そうと梢の首に手を巻いて頑張るのを、体をつきつけるようにしての寄り切り。

全身にくやしさを表わして土俵を下りる梅香森。疲れも忘れて、躍り上がるおまさ、おとき……。

梅香森の壁のような背を見ながら、梢は、自分ながら、よくあの巨体を吊れたものだと驚く気持ちだった。

「はずみで勝っちゃった」

なんだか梅香森に悪いみたいな気のする梢だった。

照れたような梢の顔を控えから見上げる緋緘は複雑な気持ちだった。梅香森にけりをつけてもらいたくはなかったけれど、といって現実に仲間の女力士の敗退してくるのを見るのは、正直いっていい気持ちではなかった。けれども、また、この娘の勝ってもなんだかすまなそうな顔をしている態度には、好意に似たものを感じる緋緘でもあった。

この娘は明らかに他の四人のような村娘ではない。といって、町娘にしては、身のこなしがちがうようだ。武家娘だろうか？……しかし、あの作法にうるさい武家娘が、こんな

締め込みひとつの裸相撲に出てくるようなことはあるまい。緋緘は、この梢の正体をつかみかねていた。紫の締め込みがよく映えて、匂うような若々しい裸身だった。

花錦を振り飛ばした腕力と腰の粘りといいあの梅香森の巨軀を高々と吊り上げた怪力といい、この娘の力は、素人とはいえ、甘くはみられない。だけど、それだけのことで、ここで、あたしが、この娘を片付けられれば、女相撲の面目も立つし、梅香森への返答にもなる。ちようどいいようになっただけだわ——緋緘は考えた。

遂に、最後の名乗りを受けて緋緘が立ち上がる。場内が声もなくどよめいた。熱気が殺気までをはらむようだった。

緋緘は、それがくせか、控えに立って、前まわしを両手でぐいとひとつ押し下げ、ゆらりと土俵に上った。整った顔の切れ長な目が真正面から梢を見すえていた。

好意の持てる相手だけれど、それと勝負は別もの。土俵へ上がったなら、余念は捨て去って、勝負一筋にかけるのが女ながらも力士のつとめ。緊張した緋緘の表情は、きびしくもまた美しかった。

四つ相撲の持久戦にひき込んでやろう、と

いうのが緋緘の作戦だった。元来が素人娘。いかにあなどり難い力とはいえ、まともな勝負で負けよう筈はない。それに相手は先刻からの二番の相撲で疲労がありありと見てとれるだけに、早い勝負で決めようとするにちがいない。腰高で脇の甘い立ち合いをついて、双差しをねらい、がっちり両まわしを引きつけてしまえばこっちのもの。土俵の砂に埋まるほどにたたきつけてやって、玄人相撲の恐ろしさを思い知らせやろう。そうすれば不覚をとった梅香森や花錦たちの胸のうちもおさまるだろう。

緋緘としても、この一座の大関を張る第一人者として当然の意地でもあったし、絶対敗けられぬ立場でもあるのだった。

素人の村娘相手とあっては少々後ろめたいのが本心だが、はずんでもらった御祝儀の手前、若手力士たちの稽古がわりというのが本心だった。しかし、もうそんな軽い気持ちは捨てた厳しい表情を見せる緋緘だった。

さすがに、この一座の大関を張るだけに緋緘の土俵さばきは堂々としたもの。悠々とした動作の一つ一つにも重みがあり、そしてそれが対する者に無言の威圧感をもって迫ってくるのだった。

もはや一步もひけない梢。疲れのみでとれる体に氣力を奮い起こし、乱れた呼吸を整えながらいさぎよく俵の中へ。十にひとつの勝ち目もあるとは思われない強敵ながら、こうなると捨て身の闘志がわいて、不思議に心が澄むのだった。父に教えられた「平常の心」——その心境とはこうしたものか——と梢は極意にふれ得た驚きと喜びとを素直にかみしめるのだった。まわしひとつをまとっただけの裸身を恥じる氣持ちは、先刻からの激斗によって全く拭い去られていた。残ったのは裸身のすがすがしさだけだった。

肌と肌とをぶつけ合い、身につけた技と力を競い合う、この相撲こそが武道のほんとうの姿なのじゃないかしら……。梢は新しい境地を知り得た喜びを感じていた。梢は丹田にぐっと力をこめ、締め込みの支えを腰のまわりに力強く感じながら、心澄んだ眸で相手の緋緘に注目した。

体つきこそ前の梅香森よりはひとまわり小柄とはいふものの、均整のとれた豊かな肉の乗り、女相撲の力士にしては、やや色白の肌ながら磨きあげたような美事な艶の張り。ふつくりと柔らか味のある肢体は今が盛りの女の魅力があふれていた。胸の奥底からつき上

げてきた女の命のたかまりを、両手のてのひらで盛り整えたような、ふたつのふくらみの美事さ、豊かに張った腹の中心のくぼみ。たくましい腰を飾る黒襦子に彼女の裸身を一層りりしく引き立てていた。

高々と足を上げて四股をふむ。そのキリリと締め込まれた縦みつが、妖しくもまた烈しい女のたたかいを象徴するように、見る者を魅了した。

梢の初々しい裸身が、ほろびかけるつまみならば、緋緘のそれは、まさに咲き誇る満開の花のあでやかさ。何れを散らすにも惜しい勝負の世界の非情さが、場内の人の胸を衝いた。

土俵中央で相対する二人の姿は、勝負の哀しさを花やかにも、また痛切に感じさせた。

「はっけよい！」

行司の思いつめたような甲高い声が響いて二つの美しい裸身が激しくぶつかり合う。

緋緘のむつくりと分厚い胸もとへ向かって梢は思い切った体当たりの戦法に出た。相手の突張りをハネ上げて、双ざし有利な体勢に組もうとした緋緘は、その作戦をはずされた形で、一瞬の迷いに梢の突込みを許したものの、さすが玄人相撲の貫録。すばやく左

を巻きかえて左四つ、上手下手の両まわしをがっちりひいて万全の構えに入った。梢も同じく右上手、左下手をとって型どおりの体勢。柔軟さの見える梢の裸身と、はち切れそうな緋緘の裸身ががっちり組み合い、緋緘の腰を飾る黒のまわしが、女相撲のたくましさを表徴すれば、早くも桃色に染まった、やや小ぶりながら統肌に堅く締まった双臀をキリリと彩る紫の締め込みが、初々しい娘相撲のあでやかさを見せて、土俵下を囲む視線を酔わせていた。

齒をくいしばって見つめるおとぎの全身がわなわなと震えていた。

素人目に見ても、緋緘の体勢はどっしりと安定してスキがなかった。これに対する梢の体勢といえば、腰も高く、そうでなくともすらりとした足をつっぱっているようで、何とも不安気だった。

おときは見ているのが苦しく切なかった。

こう充分に組み合っては、梢のとくいの投げわざも出しようがない。そして、相手もまた、その投げを封ずるべく、むりな攻めに出ない様子。さっきの自分と花錦との一番のよう……。

梢もまた、緋緘の作戦を覚ってはいた。

柔らかに、そして厚味を感じさせる緋緘の構えだった。がちりとまわしをとられた太い両の腕を引きつけられると、まるで、その広やかな胸に包み込まれてしまうような気持ちにさせられるのだった。力いっぱいぶつかって行った氣勢をそがれ、自分の力が相手に伝わっていかないようなもどかしさを感じるのだった。肌を通して次第に緋緘の大きさと重さが増してくるのを梢は感じていた。このままではジリジリと圧迫してくる相手に、何の手もうたないままに敗れ去ることにもなりかねない。やや焦りの出た梢の気配を察した緋緘。やや強引とはいえ、斬れ味鋭い上手投げ。あやうく左ひざが崩れそうになった梢。しかし必死にこれを残しながら右下手投げのかえしわざ……。

けいこの時は、おまさを宙に舞わせ、おてるを土俵の砂に埋め、そしておときまでが残すすべのなかった、あの必殺わざだった。さすがの緋緘の巨体も大きく傾き、左足が高々と宙を蹴って、一瞬、土俵周囲がどよめいたけれども、さすがは一座の大関を張る緋緘。きたえ込んだ強靱なねばり腰で、この強襲を辛うじて残したのだった。

どよめきは讃嘆の声に変わった。緋緘の大

業を耐え抜いた梢と、その梢の逆襲を残した緋緘——その双方の健斗を讃える声だった。

互いに投げの応酬のあと、土俵中央へ戻ったふたつの女体は、その美事な裸身を惜しげなくさらしながら、その動きを止めた。一呼吸、二呼吸——、緋緘の腹が波うち、その広い背筋に汗が浮かんだ。

「のこった！ のこった！」

熱っぽい空気の中に、行司の声も上ずってかすれた。

汗に光る二人の裸身の生々しさ。ジリッと隙をうかがって小さきみに動く度に、みずみずしい太腿がふるえ、双臀の半球がゆれて、キリリと締め込んだ縦みつが一層緊張した。

娘相撲の醍醐味——若い女体の最高の美しさだった。

どんな錦絵も浮世絵の名画をもってしてもこの斗う二人の裸身の美しさに及ぶものはないだろうと思われた。女体のやさしさと荒々しさ、柔肌の奥にひそむ烈しさが、この最高の美を構成していた。

くずれた梢の前髪が、汗にぬれた額に貼りついていていた。疲れの色はもうかくしようがなかった。前二番の激斗がなかったら、あの必殺の下手投げは確実に勝利を決めていたもの

だった。梢自身も、あの瞬間、勝機をつかんだと思ったのだった。緋緘のねばりはあったにしても、梢の疲労がああ必殺わざの威力を減少させていたことは否めないのだった。

再び左四つがっぷりの体勢。

ぴったり合った胸肌を通して相手の鼓動が伝わってくる。当然のことながら、梢の胸の早鐘のような動悸も緋緘に知られているわけなのだった。

緋緘もまた焦り出していた。意外にしぶとい相手、それどころか、あの手投げには一瞬やられたかと思ったほどの強烈なものだった。充分の四つに組んだものの、うかつな攻めに出不然ない……。動きがなくなっては水入りになる恐れもあった。

いやしくも玄人の大関が、素人娘を相手に水入り相撲をとったとあっては面目ない話。

梅香森が敗れているといっても、これでは大きな顔はできない。卑怯のようだけれど、素人相手の奥の手を……と、うしろめたい気持ちを無理に押えて緋緘は次の攻撃に出た。指先に力を込め、相手のまわしを充分に握る。

相手の指先が、まわしを握り直す、その動きを意識しながら、梢はもうそれをどうしようという気力はなかった。

引きつけられる締め込みが、強く食い込んでくるのは辛かった。

それを充分に計算に入れながら、吊りぎみに攻めてくる緋緘。

必死にこらえながら、腰を落として、その出方をうかがう梢。さすがに、自ら攻勢に出るだけの体力は残っていなかった。

さしも堅く締め込んだまわしも、緋緘の引きつけにあつて、前袋はのび、埋まるような縦みつが痛々しく目に映った。

ジリッと寄り進む緋緘。こらえかねて梢がさがる。手応えありとみた緋緘が追い寄る。

布地がさらに深く柔肌を責め込む。一瞬、梢の頬に紅が走った。瞬間につき上げてきた衝撃が稲妻の閃光のような凄まじい迅さで背筋をしばれさせ貫いた。梢の経験にない激しい戸惑いが、梢の氣力をよみがえらせた。なえかけていた手足にふしぎな力が更生し、全身に熱っぽいものが湧き出てくるようだった。

梢は、まわしを握った指先に新たな力をこめ、最後の機会を狙った。

かさにかかって寄り立てる緋緘。彼女もまた最後の勝機を賭けていた。しかし、梢はこの瞬間を待っていたのだった。

緋緘の寄りに合わせるようにして後退しな

がら、その最後の一步を自ら一瞬早く足を開く。やや甘く見た緋緘が、その瞬間、力をはずされてハッと腰が浮いた。

ほんの一瞬の隙だった。しかも、梢の最後の狙いは、この一瞬の虚をつくことだった。

梢は、とっさに引いた右足を軸にしながら両まわしをひいた腕に渾身の力をこめ、緋緘の巨体を振り捨てるように右後ろへ投げまわした。

◇

「おかげさまで、今年の暮も、どうやら見とおしが立ちそうでございます。なんと御礼を申し上げてよいやら……」

善左衛門が深々と頭を下げた。

次の日の朝だった。

武家娘にもどった梢と、老僕の源蔵の旅姿があった。ふとしたことから深い縁を結んでしまったこの村の人たちに、梢は運命のふしぎさをつくづくと感じていた。

もしあの時、爺やが腹痛を起こさなかったら……。そして、またあの時善左衛門たちに出会わなかったら……。この村は永久に梢の記憶に入り込んでくことはなかったらう。

「ふしぎな御縁でございました。あれは私だけの力ではなくて、皆さんのお気持ちに私に

勝たせてくださったのです」

梢は心からそういった。おときたちの激しい氣迫が、あの女力士たちに勝る唯一のものだった。

「私は、あの娘たちの姿に真の武道の心を教えてもらった」

梢は満ち足りた気持ちで娘たちに視線を移した。

おとき、おてる、おまさ、そしておえい。

だがしかし、今朝の彼女たちは、純朴ではにかみやの村娘でしかないのだった。

まわし一筋に裸身を飾って、あの強敵に立ち向かって行った昨日の凛々しさとはまるで別人のように、控え目な態度であいさつをおくる平凡な村の娘たちにすぎないのだった。

「またきてください」

ようやくのことで口が動いた感じで、おときがいった。

「ええ、来年もきっと来ます。またいっしょにけいこしましょう」

「はい、きっと……」

「今度は、私の締め込みも用意しておいてください」

梢はそんなことをいって、

「あら、これじゃあ当分お嫁に行けそうもな

いわ」と、クスリと笑った。

一丁ほども歩いて振りかえると、まだ皆はさっきのままで見送っていた。

善左衛門が頭を下げ、娘たちもそれにならった。

今日も雲一つない青空。しかし、もう天候を気にする必要はないのだった。

黄金づいた稲穂の間で水がキラキラと反射した。稲穂が風に黄金色の波を打った。

「しかし、梢さまの相撲ぶりは見事なものでございましたな」

源蔵がいたずらっぽい目を向けていった。

「まあ、爺や、見ていたの？」

「はい、留守番をしているのも退屈でございましたから、あとから連れて行ってもらいましたな」

「いやだわ……」

「いやいや、そうではございません。あの最後の大関を倒した一番などは、全くお見事な気力でございましたな。日頃の御練磨の贈物とつくづく感服いたしました」

「ひやかさないで」

「とんでもない。これは、是非、旦那様にも御報告しなければ……」

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては枚数に應じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに對しましても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事差し上げます。

「ぶつわよ」

梢は真っ赤になって源蔵をにらんだ。

あの勝負のあと、梢とおときの二人に、女相撲一座からの誘いがあったということをおとときが聞かしてくれたのだった。もちろん二人とも応ずるわけはなく、笑い話に終わってしまったのだったけれど、梢はふと、二、三年くらいならあの一座で暮らしてみようかしら……などと半ば本気で考えてみたりした。締め込みひとつの裸商売で、旅から旅を続けるのも面白いかもしれない。

梢は、あの一瞬のふしぎな興奮を思い出していた。花錦や、梅香森や、そして緋緘たちの肌のふれ合いが生々しく蘇ってきた。

裸と裸の真剣勝負が、梢にこの上なく好ましい体験を残していた。

「あの人たちと、またいつか取り組んでみたいわ」そんなことを考える……。

「お嬢さま、どうなさいました？」

夢を破られた梢は、ハッとして源蔵を振り返った。

「ううん、なんでもないの。さあ行きましよう」

紅潮した梢の頬に風がすがすがしかった。

(終)

カット・龍 檀



□ 水田真紀子習作シリーズ □

スチュワデイス

水田真紀子

土曜日の704便がサンフランシスコについたのは10時15分であった。

ここからニューヨークまでは8時間であったが、ここで搭乗勤務の交代になっている。

次の西行便の日曜日の12時30分まで桃子はスチュワデイスとしての勤務から解放された。

宿舎はシーサイドアベニューにあったが、ここでいろいろな手続きや準備をして、ほんとうに自由の身になったのは午後であった。

「あら街へおでかけ？」

同僚が尋ねたが、桃子は

「ええ、ちょっと。ディナーまでには帰ってくるわ」

行き先を云わなかった。

「買物？」

「ええ、まあね」

シスコの街は、もう何回もきているので大体のところは知っている。同僚も馴れたことなので桃子の外出を別にたいして気にもとめなかった。

しかし、桃子の外出は買物なんかじゃなかったのである。五番街のプレジデントホテルのロビーが待合わせ場所であった。

桃子が入ってゆくと、もう相手はさきほどから待っていたようである。

「おう、桃子さん、よくきてくれましたね」

中国人のヤンであった。ヤンは東京にも事務所をもった男で正確な商売は桃子も知らなかったが、太平洋航空路には何度も乗り合わせていたので、よく知っている。

いつも桃子の美しさをほめるし、最近ではプレゼントをしてくれたり、食事にも二度ばかり誘われるようになった仲であった。が、それ以上の関係はない。ただこの前から再三桃子に勧誘しているファッションショウに約束したので、今日シスコで落ち合ったのだ。「あなた、とても美しい。私、是非あなた、アメリカの本場のファッションモデルに紹介したいね」

「モデルの仕事たのしい。美しいドレス、イブニング着る。舞台でただ歩くだけね。お金どっさり入る」

「あなた、きつとよく似合う。ビューティフルね。わたし、賭けてもいい」

さんざんくどかれた。桃子としても、ほめられて悪い気がしない。それにスタイルにも自信があった。ファッションモデルにもあてがれがあった。

それで誰にも云わずにやってきたのであった。シスコ服飾界のショウは今日4時からあるという。舞台は2時間ぐらいだそうだから充分宿舎に帰られるという安心感もあった。

「オー桃子さん、今日は特に美しいね。ベリナイスよ」

ヤンは大きなゼスチュアで言った。

「紹介する。この人シスコのモデルクラブのミスター・ヘイストンね」

傍の背の高いアメリカ人が手をさしのべてきた。

「Oh How do you do ?」

桃子も馴れた握手であった。

「your Name Miss Momoko ?」

「yes I am, sir」

「oh good, my name J. Heiston」

桃子の微笑は充分相手に好感をもたせたとようであった。

「すぐ、車のるね」

ヤンは中に立って世話をやく。

桃子はホテルの前からビュイックにのせられた。

「あら、ヤンさん、ご一しょじゃないの？」
どうしたのか、車にのらないヤンを見て云うのを

「あとでいく。すぐいくよ」

ヤンは、あとに残った。

ビュイックはすぐ走り出して坂の多いサンフランシスコの街をいくつも曲った。桃子の知らない通りであった。車が止まると

「After you. Please」

桃子をさきに降ろしてヘイストンは赤い建物に入っていく。チラッと桃子はその入口を仰いだ。別にファッションショウがひらかれるようなシアターでもないようなので、ちよといふかったが、ショウは小さなサロンでも開かれることがあるので、このときは、さほど気にも止めなかったのである。

何処からかミュージックが流れてきて多少華やかな感じもしたが、廊下で踊り子のような衣裳をつけたヤンキーガールとすれちがっ

た。その女性が桃子に何か投げずてるように云ったがスラングらしく桃子には分からなかった。桃子は楽屋のような部屋につれてこられて待たされた。その部屋の中にはいろんな衣裳がかかっていたり脂粉の香りがして如何にも女の控え室という雰囲気があった。

そこで桃子は着更えたのである。

水着ショウということが、ちよと抵抗があったがスタイルには自信がある彼女には落着きも出た。ただあらかじめ水着ファッションだということを知らされてなかったのが、ちよと不満でもあった。

「May I help you ?」

衣裳をもってきたブロンドの女が云うのを

「No thank you I can do my self. please

get out way」

一人になって着更えた。

水着ショウであるからには全部脱がなくてはならない。パンティまでも一旦脱いで着更える必要があるもので出て行ってもらった。

いくら同性でも、全裸をみられるのは羞恥がある。

ビキニスタイルの花模様であった。ブラジャーをはずしてつけかえた。下着もはきかえたが、ぴったり腰に喰い込むくらいにゴムが

全体に織り込まれていて、桃子の若さにあふれるデルタのふくらみの型が布地の上から喰い込んでいる。

鏡にうつすと、あまりにはっきりするので桃子は一応それを脱いで、ナイロンのストッキングの、もの上部の二重になった箇所を化粧台のかみそりで手頃に切りさいて、それをそっと素肌のふくらみにあててから改めて水着をつけた。

こうすると、全体にしわもよらず、まとまった形になることを、いつか本で読んだことがあったのだ。

準備ができてからブロンドの女に舞台へつれていってもらったのであるが、水着の上からケープをまとったまま素足にハイヒールをつけた姿でつれてゆかれたのであった。が、つきそったブロンドの女は歩きながら桃子の手首をつかんだと思うと、いつの間にか持っていたのであろうか、革の手錠を素早く手首にかませたのである。

「why? will you doing about?」

桃子は驚いて叫んだ。が女はニヤリと笑うだけで、その桃子を引きたてるようにつれてゆくのである。

「where are you going take me?」

身の危険を感じ、ひきずられまいと尻ごみするのを、ずるずる引きまわされて階段をころがるようにしてドアの中へ押しこまれた。

うしろからつかれて、不自由な身体で桃子は、じゅうたんの上にくるんでしまった。

はっとなって、あわててその部屋を見渡すと桃子は「あっ!」と驚いた。

ほんとうに大きな声をあげた。

天井からいくつも垂れ下がっている太いロープ。

木製の大きな十字架。

奇妙な形をした台。

壁にいっぱいかけられている幾種類もの革の鞭。

想像もつかないような衣裳、それも女性用の下着に似た革製のもの。

それは、まるでいつか話にきいたことのある魔女の拷問部屋ではないか。

ついてきたブロンドの女が、

「Binding you yonder」

そのひとつを指さした。大きな滑車が天井から下がっていた。

「oh never I am……」

桃子が真ッ青になって叫んだが、ずるずると引きずられて手首を結んだ革バンドに、そ

のロープを通すと、もう桃子の身体はギシギシと音をたてて吊りあげられてゆく。

身をもがいたが無駄であった。

やがて爪先までが僅かに床を離れると、もう完全に宙吊りになって、もがく桃子の身体が空間に廻るばかりであった。

「No! No! let off me please!」

桃子は必死になってもがく。

そんなことはおかまいなしに、ケープをはぎとられて水着だけの裸身が宙に浮いた。

それっきり、桃子は失神してしまったのである。

どれくらい時間が経ったのであろうか。手首の痛みにもふっと気がついたときは、正面の両側から明るいライトをあてられていた。

その明るさに目がくらんだが、よく気をつけてみると、前にズラリと椅子が並べられていて、既に多勢の人が自分を見上げているのを知った。

「ああッ!」

桃子は本能的に身をよじった。が、爪さきは徒らに空間を蹴って長々と伸ばされた手首は、そのたびに体重を喰いこませて疼痛が走るばかりであった。

幾十人という人が、それをみていたのであ

る。桃子を囲むように椅子で席が作られていて、その眼が一斉に桃子に向けられているのであった。

桃子はそれを知り、全身の血がスウツと失われてゆくようになったが、すぐにカアツと顔が真っ赤になった。

「No! No!」

言葉がでなかった。ファッションショウとばかり思って無難作に誘いにのったことが今更悔まれる。これから、どんなにされるのだろうか。しばらくはいるだけに、そして、この部屋のいろいろな道具を思い出して恐ろしくさえなってきたのである。

これからがショウであった。まず桃子のブラジャーがはずされて乳房がライトにむき出しになった。

「No! what a Shame!」

身をよじって背を向けようとしたが自由に動かない。パットを入れなくとも充分に形よくふくらんでいる桃子の乳房は、惜しげもなく皆の眼の前に晒されてふるえていた。

その乳房に革のブラジャーがはめられたのである。ブラジャーといっても、奇妙に真ん中だけ穴があいていた。それが乳首だけをみせるのである。そんなブラジャーをはめられ

ると、うしろ側でぎゅっとしめつけられたのである。

「うっ!」

その苦しさに桃子が呻く。ちょうどコルセットをしめるようになっていたのか、尚もぐっぐっとしめつけられると、その圧迫感に息がとまりそうであった。

「うーっ!」

長い吐息をもらして、桃子の眉間にしわがよる。乳房をあまり圧迫されると、女の身として苦しいされ方であった。

まず乳房が責められた。苦しげな表情の桃子の裸身が明るいうしろの正面から照らされて、それに妖しくも無残な情景であった。

88、56、92のプロポーションの裸身は、短いウール地の水着パンツをつけただけで宙に浮かんでいる。

爪先を床につけて、身をよじろうとする動作が足首をたてて、スラリと脚を伸ばす姿勢になっているので、正面を向いた股間のふくらみが、よけいライトに映えて見えている男たちの視線を浴びているのであった。

桃子がもがいているとき、舞台の上手から黄色い悲鳴がきこえて一人の女がひきずられてきた。

きれいな金髪をふり乱した外人の女であった。それが、ほんとうに一糸も許されず全裸にされて、白い肉体を鉄のくさりでからまれている。両手をくさりでしばられて、上半身胸のところで、ウエストのくびれたところもくさりでしめられていた。

「Oh! No!」

ライトの中へつき出されてうめく。と、下手の方から別の女、これは赤毛の女性であったが、同じようにくさりで自由を奪われて入ってきたのである。

やはり全裸であった。そしてこの女の方はウエストをしめつけている、くさりからたてに別のくさりで股間を、うしろに吊りあげるように縛られていた。

この光景に、桃子は自分の立場も忘れて「あッ!」

と、驚きの声をあげた。

二人ともまだ若い、そしてともにスタイルの素晴らしい女性であった。しゃれた服装で街を歩いたら、さぞすばらしいと思われるような身体の女ばかりである。それが二人とも全くの赤裸で、それも痛ましく、くさりで縛られてつれ出されてきたのであるから驚くのも無理はない。

赤毛の方はそうでもなかったが、金髪の女性性は羞恥に全身が染まり、早口でわめいて身をよじっていた。

しかし二人をつれてきた男、これは兩人とも黒い目かくしをして顔立ちは分からなかったが、やはり背の高い外人ばかりであった。

そして、この女たちをほぼ中央にある小さな台の上に裸身を曲げて動けないようにとめると、揃って壁面から革の鞭をとり出してきて、それぞれ自分のつれてきた女をぶち始めたのである。

「Oh!」

「wooh!」

ぶたれると、女の白い肌に赤い筋目が走って、それぞれ呻き声をあげた。

「ああッ!」

宙につられながら、桃子は目をそむける。ファッションショウなんてとんでもない。ここはサジストたちのシークレットショウであった。その中へ桃子は知らずに入ってきてしまったのであった。

くさをるわらせて痛みに悶えている女たちの動きにつれて、見ている男たちの座も次第に興奮して異様な雰囲気を感じられるのが桃子にもよく分かった。

金髪の女は、もう身も世もない悶え方で鞭の下で呻いていたが、赤毛の方はぶたれ続けられているうちに何か変わった声をあげて、よくみるとその鞭のなかで身をくねらせてはいたが、それがさも心地よさそうな風に見受けられた。共にくさりで固定され休みなくぶたれ続けながら、それが非常に対照的であった。

女の悲鳴と呻きがしめきったこのサロンの中に充満して、男たちのため息に似た声がそれに一層の妖しげなムードをかもし出してくるのが桃子にはたまらなく恐ろしい。

そのうちに、やっと鞭打ちがすむと、二人とも台から外されたが、金髪の女のほうは、もうぐったりとなって男に支えてもらわなければ立ってられない様であった。身体一面に無数の鞭のあとが痛々しく衰れである。

しかしそれで終わったのではなかった。今度は胸を回したくさに、滑車からロープがおりて、この金髪の女は目よりも高く吊りあげられる。そしてその下に大きな木製の台が運ばれてきた。それは木馬のような形をしていたが、首や尻尾の部分のないもので、背にあたるところが三角形をした器具であった。

赤毛の女のほうは、ウエストから股間を縦にしめあげてあるくさはそのままであった

が、両手のくさを外されて、金髪の女性の傍にきて、滑車がキシキシと音をたてて降り始めると、うしろからこの同性の両脚を開かせて、うまくその木馬の上に跨がってのせられるように手を貸しているのである。

「Oh! what a pitiable!」

桃子は思わず声を出した。全裸のまま、あんなところに、股を開かされておろされたら、どんなことになるか。血も凍る思いであった。

胸を縛ったくさりで身体をもちあげられているので、その部分の二の腕の柔肌にくさが喰いこんで、それだけでもたまらないと思えるのに、滑車が繰られてその喰いこみがゆるんだと思った瞬間、

「what!」

金髪の女のするどい悲鳴が起った。赤毛の女がまだ足首をひきさげるようにしているのである。桃子はそれを見て

「ウーン」

自分自身が全身を凍らせて、失神したのであった。

金髪の女は再びもちあげられ、三、四回のせられて、これも気を失って降ろされると、今度は木馬のかわりにベッドが運びこまれて

きて、その上にぐったりとなった身体を寝かされたのである。もうすっかり意識を失ってまるで死んだようになっていた。

その裸身へ赤毛は身をすりよせて手のひらや舌の先で器用にマッサージを始めたのである。痛めつけられたところは特に念入りに行なった。

「she is soon get used」

金髪がやがてつれ去られると、今度は桃子の番がやってきたのである。桃子は水を浴びせられて気がついた。いきなり上半身に、水をかけられたのである。

ハッとなって気がついたときには、金髪の女性も赤毛の女性も既に居なかった。自分だけが元のままで、ただ一人宙吊りにされているのを知って覚悟をしなければならぬことを、いやでも知らされたのであった。

しかしその間に、今、水をかけられたことで桃子をしめつけていた革のブラジャーがだんだん収縮し始めて一段と胸をしめつけてくるのに、たまらない息苦しさが起こり、身をよじって、この苦しさをゆるめようとしたが圧力は加わってくるばかりで、身をよじったことにより手首がちぎれそうに痛んだ。

全身の体重を、かばそい手首だけで支えて

いるのだから無理もない。このときほど自分の体重がうらめしく思えたことはなかった。が、そんな桃子の苦しみなどには関係なく、いや、もがき苦しむのが却って面白いというように声がした。

「Now I whip violent in turn,」

その声に桃子は戦慄を覚えた。何と今度は見物の男たちが順繰りに自分を鞭でぶとうとしているではないか。だが逃げられないのである。

ピシッ！

最初の男の鞭が、容赦なく宙吊りの桃子の裸身に鳴った。

「あッ！」

焼火箸をあてられたような激痛が、全身に走る。

ピシッ！

続けて鞭が鳴る。

「Bind more !」

「ううッ！」

打たれたひょうしに身体が廻る。そのところを更にぶつ。

ピシッ！

「ああッ！」

初めて味わう鞭の責めに、桃子はのたうっ

ているのである。

ピシッ！

くるくる裸身が廻る。

ピシッ！

「ううッ！」

ピシッ！

「ううッ！」

次の男に廻されて更にぶたれる。

ピシッ！

背と云わず、お腹と云わず、太腿のやわらかい部分にも鞭がとぶ。

「ゆるして！」

日本語になっていた。身も世もなかった。

はげしく鳴る鞭の下で、桃子はもがくばかりであった。

ピシッ！

「いやッ！」

ピシッ！

「やめてよ」

胸が益々締まってくる。

ピシッ！

ウエストに長い鞭がまきつく。

ピシッ！

もがきぬいているのに、まだ止まぬ鞭。

ピシッ！

鞭は休みなく次から次へと渡って、桃子の裸身を打ちのめす。

「ああ、アッ！」

「うううっ！」

絶えまなく呻きがもれる。

ピシッ！ ピシッ！

鞭が舞う。

異郷の空で、こんな責め苦にあおうとは考えられなかったことだ。桃子の顔がゆがみ眉間に苦しみのしわが刻まれている。

ピシッ！ ピシッ！

もう桃子の素肌は、一面に赤く染まって息も絶えだえになっていた。

ピシッ！ ピシッ！

そんな桃子に、まだ鞭が飛ぶのある。この東洋の美女の悶えるのが外人には新鮮な魅力を与えるのであった。

ピシッ！

「ゆるして——」

ピシッ！

「かにんして——」

ピシッ！

「あ、あ、あ」

全身が火であぶられているようだ。男たちはもう完全に興奮の極みに立って、あとから

あとから鞭を揮う。

ピシッ！

「うっ！」

股間へうちおろされた。

[Incon solable]

[Biter!]

無意識に、こんな言葉が出た。

ピシッ！ ピシッ！ ピシッ！

鞭の洗礼に、もうぐったりとなった桃子に尚もひとしきり鞭が与えられて、やっと終わったときは、もう首をがっくり落として殉教者のように宙に浮いている桃子であった。

そんなになった桃子であったが、すっかり興奮してしまった男たちは、さっき赤毛の女が金髪の女をなぐさめたように今度は自分たちで、この東洋の美女をもてあそばさうとしたのである。

もう、どうされようと抵抗する力のない桃子ではあったが、男たちが水着まで脱がそうとし始めたときはあわてた。

「あッ、かにんして——」

もがいてみたが、もう身体は動かせなかった。うしろ側をまくられるとヒップの支えが切れてスルスルと脱がされた。

「うーっ」

見まいとあごをもちあげて唇をかみしめたが、桃子の一番恥かしいところは、すっかり男たちの前にまともに投げ出されたことになり、太腿のやわらかい曲線や、形よくもり上ったふくらみは、外人の眼には珍しく映るであらう姿を、現わしたのである。

[Oh wonderful]

[very nice]

口々に喜びの声を発した男たちの前で桃子の全身がふるえていた。

桃子は、そのまま更に少しばかり上に吊りあげられ、丁度男たちが立ち上った顔の高さにそこが位置するところで止められると、今度は両足首にロープがかけられ、なさけ容赦なく左右にひきつけられたので思いきり肢を拡げた姿になってしまった。

脱がされるだけでも恥かしいのに、こんなに肢を大きく拡げさせられて男たちの好奇の眼前に晒された女の身として、これほど恥かしいことがあろうか。

「アアッ！」

それだけで桃子は恥辱に全身を凍らせるのであった。

ふくよかな丸味を帯びた腹部が、可愛く息づいていた。

S・コレクション『美容の時間』豪 城 二



そこへいつの間にか例の赤毛の女がやってきて化粧し始めたのである。

クリンシンでぬぐわれてパフで、はたかれた。柔らかいが弾力のある肌がパフで叩かれて可愛い音がした。

男たちが呻いている。

そのあとヘオードコロンがまんべんなくふかれて完全に化粧されると、男たちが次々にそこへキッスを始めたのである。

「いやッ！」

「よしてエ」

桃子が、その気持悪さにうめいた。

赤毛の女は脱がされた桃子の水着のところ
にナイロンのストッキングの片方があるのを見つけると

「Just. moment, I have good idea」

男の一人の肩車にのせてもらおうと、その片方を桃子の口の中へ押しこんだ。

「むうっ！」

それが、何であるかを知って桃子は呻いたが、赤毛は更に革製のさるぐつわのようなものを桃子にかませた。

その片が桃子の舌を押さえ、それが動かせないように棒状の革をかまされたのである。それで桃子は声をあげることさえできなくなって、男のなすがままに次々に吸われて行った。

殊更に太腿の、むっちりした肉をつかんでのどを鳴らせて吸う男もあった。

化粧されて香気を放つのと、桃子自体のまだ男を知らぬ肌の香りに男たちはむせんだ。

「むう、ウウッ！」

さるぐつわの中で桃子が呻く。そのうちに幾人目かに見るとはなしに近づいてきた男をみて思わず桃子は叫んだ。

「あ！ ヤン」

その声はただ「むむむ」と、うなっただけ

であったが、その男には、その言葉が分かったのかも知れない。

あのヤンであったのだ。桃子をだまして、つれてきたあの中国人のヤン。彼はニヤリと笑った。

「おお、わたし、うれしの心ネ。桃子さんとてもすてき。すばらしいポーズネ。今度わたしの番。じっとするネ」

「あ、いやよ、いやだわ。いやっ」

さるぐつわの中でもがいたのだが、桃子はどうしようもない。

もう既に幾人かの男の唇でべっとりしている桃子の柔肌は、ヤンの厚い唇で一面になめられた。

ヤンのキスは長かった。舌のさきが器用に動きまわるのである。

「むう、うっうっ」

桃子は呻き声を一段と強くしたが、その呻きが次第に切ないひびきを帯びてくる。

さんざん鞭うたれて痛いはずが何故かしら、しびれてくるのを覚えるのであった。

こんな気持になったのは、初めてのことであった。

「うーっ、はあっ」

クリクリと舌をまわされた。拡げられた両

脚の太腿が、突っばってくる。

ヤンの舌の先が、まるで生きもののようリズミカルに動いてゆくのであった。

むっちりした、ふくらみから伝わってくる甘酸っぱい感触。念入りにほどこされた化粧の香り。この二つのミックスされた心地よい感覚にヤンは酔ったようになって桃子をもてあそぶのである。

「フーウ、ウーウッ」

さるぐつわのため、声にはならなかったが桃子の息づかいが次第に荒くなってくるのが分かる。

[open: her breast]

誰かの声が生きて、桃子の乳房をしめつけていた革の責め具が、どうやら外されたようであった。

強い圧迫から解放されて桃子の乳房はプリンのようにふくらんだ。

しかし、それを桃子は、大きな吐息で受けとめたのであって、今はもう、次第にもうろうとして、意識もさだかではなかったのである。

このしびれは全く経験のないものである。

もう恥かしい姿態で居るのも忘れてあごを突きあげているのであった。

「うーっ！」

切ない呻き声をあげた。

「あっ！」

ひととき大きな声がもれて桃子の全身がぐっと硬直し、やがてがっくりとなった。もう体中の力がぬけ果ててしまっている桃子であったが、更に化粧され直して次の男にまたしても、もてあそばれるのである。

「ふううっ」

いやでも力を入れなくてはならず、はげしい去脱状態に落とされる。

こんなくつかえしが何回も続いて、宙吊りからやっと降ろされたときには、もう肌をかくす元気もなく、ぐったりと床に崩れてしまったのである。

それっきり桃子は、再びスチュワディスとして働くことができなかった。

桃子は、このサジストグループのモデルとして、全米のあちらこちらを廻されて、遂に日本へは、帰ってこなかったということである。

—— (おわり) ——

…… 女責め図絵の系譜 ……

女人斬首の構想

文 と 絵 南 彦 造

女人斬首の典型的なものとして、高橋お伝があげられる。彼女ほど芝居、映画など人々に膾炙され、曲解され、その上伝説的なヒロインにまで、まつりあげられ、タネのつきない女囚も少ないであろう。

たしかに、お伝は美人だが、残されている絵画や写真などを眺めると、私の主観かもしれないが、たいして美人ではなく、庶民的な主婦の感じで、眼尻の吊り上り加減とか、上下唇の薄い貧相な形態からすれば、むしろ、気性の激しい、淫欲な女相で、全体的に「男好き」のする、ちょっと手をつけたくなるような、親しみ易い「飲み屋の女将」といったタイプに受けとれた。

彼女が、首の座についた時の模様について出版されている伝記などによれば、当日の検視——大警部囚獄署長安村治孝に「まって下さい。申し上げることが御座います」と云いだし、情夫の市太郎に一眼あいたいと云う。そのうえ身を捻って藻掻き、荒れ狂って、男の名を連呼した。首斬り役の浅右衛門は意を決し、刀を振り上げると、手元が狂って後頭部に当たったらしい。

「ヒューッ」と絹を裂くような悲鳴に、浅右衛門もすっかり逆上して——お伝の首に刀を

押しつけ、ネジリ切った——と云う。

その姿態たるや「凄惨」——女の業たるや「無惨」——の極みと云うほかはない。

御承知のように、斬首の方法としては、囚人の両側に押え人足が二人つき、囚人の体を左右で固定する。お伝の時には——仙吉、定吉の二人だったが、後方の一人が、お伝の足の親指を一本ずつ握り、足膝を拡げて、しっかり固定した——斬られる襟足を鶴のように、長々と突き出せるように膝頭を安定させるため——男は勿論だが、女の場合——足の親指を掴まれると、蛇になめくじ、青菜に塩——のたとえ通り、自由行動が束縛され、身動きが出来なくなる。

私も、特定の女性に因果を含めて実験し、その説の正しいことを知った。

○

ところで、お伝の実記録で有名なのは、何と云っても、アルコール漬けの「女性自身」だ。東京大学医学部に保管されているとか、戦時中は陸軍病院にあったとか——さまざまに噂されているが、現在いったい何処にあるのか——明らかでないのは不思議だ。

あるいは、戦時中の空襲騒ぎにことよせ、奇特な粹人が持ち出し、秘密に保存している



のかも知れない。
だいたい女性、自身のアルコール漬けなどと
云う代物は、何処の大学病院の標本室にでも

あり、決して珍しいものではない。誰のでも
「お伝の代物」だと名前を貼ってもおかしく
ないし、何時しか、そうなってしまうに違
ない。

だいたい、こんな代物は顔と違って
標本にしてしまえばどれも同じような
もので、多少の差違は認められても、
医学用語で説明する部分の形態変質な
どだけでは、個性もなければ特徴も認
められないので、誰の代物だと云って
鑑識の仕様もないと云うものだ。

続いて、思い出すのは、一九四三年
(昭和十八年)十二月二十一日——戦
時下の南ボルネオで起こった「現地人
スパイの斬首事件」だ。

泥沼に落ち込んだ太平洋戦争で日本
軍が、まだまだ意気盛んだった頃——
南方僻地のスパイ容疑者の検挙にから
まる血腥い惨殺事件の顛末だが、当時
現地で報道の任務に当たっていた私に
は忘れ去れない悲惨な処刑として、い
まだに記憶に生々しい。

事件の概要は、日本軍が中国大陸や
満蒙の戦場で、日常茶飯事に行なわれ

ていた極くありきたりの「死刑執行」のあり
方だったが、戦場殺傷の経験を持たない民間
人の私にとっては、あまりにむごい軍の仕打
ちとして、戦慄を禁じ得なかった。

場所は、旧オランダ領ボルネオ(今のイン
ドネシア領カリマンタン地方)の静かな小都
市バンゼルマシんだ。後に連合国軍の軍事法
廷では一括して「バンゼル事件」と呼んでい
たが、当時の「ボルネオ新聞」(朝日新聞社
が発刊していた現地新聞)に掲載の記事を調
べてみよう。事件の全容を端的に知ることが
できると思う。

『海軍特警隊発表! 首謀者全部を銃殺!
旧蘭領ボルネオ総督ハガを始め、皇軍に降伏
したオランダ軍将兵および官吏、その家族等
は、恩威並び行、わが武士道的取扱いによ
り、〇〇の軟禁所に収容、保護してきた。然
るに敵米英の謀略戦に踊らされたハガ等は、
日本の実力を過小評価し、米英の来攻救援を
信頼、収容所内外の親蘭分子と巧みに連絡し
つつ不遜にも武装蜂起計画をととのえ、一挙
に南ボルネオを奪還せんと企図した抗日陰謀
計画をバンゼルマシン海軍〇〇隊が探知、本
年五月以降四次にわたり、関係者二百余名を

検挙し、嚴重なる取調べを行った結果、極めて悪質なる罪状明白となったので、この程海軍軍法会議の公判に付し、首謀者以下に対し死刑を宣告、二十日銃殺を執行した』

と云うものであった。こうした軍の機密に関する事件は、すべて秘密裡に処理されるのが多かったので、私は、その死刑の模様について、担当者以外の何者からも、現場の真実を聴き正すチャンスは持てなかった。が、ある時——『どうやね？ あんたも戦場に來たのやさかいに……度胸だめしに、首斬り現場を見とかんかね？ 知らせるさかいに……』と、海軍特警隊の上等兵曹から笑い半分に唆かされた。

特警隊とは、陸軍で云えば悪名高い「憲兵隊」のようなものであって、海軍の占領地域では「泣く子も黙る」新選組的、恐怖の存在だった。

私は好奇心も手伝って、是非一度は軍の「斬首の場」を見たいと思っていたので、大いに期待し、チャンスとばかりにその時を待つことにした。

数日後、夜遅く——兵曹から「明早朝、特警隊に出頭せよ」との通知があった。いざと

なって私は、大いに迷った末……酷い罪悪感に襲われた。

結局、腹痛を理由に断わったが、想えば、それはまことに僥倖というもので、やがて敗戦となった時、私は「戦犯者」の汚名を負わずにすんだ。

後日談だが、この斬首事件に居合わせた者達は、例え興味本位の見学者といえども、オランダ軍事法廷の裁判で「死刑」を宣告されたに違いないのだから、行かずに見逃がしてよかったと云える。

斬首の模様について、愉快げに語り、私を唆かしたこの兵曹も、戦犯として処刑され、今は亡き人だが、彼の語り草を、次に述べてみよう。

○

この日の処刑は、前記の「バンゼルマシン事件」の関係者ではなく、もう一つの陰謀計画であった『ボルネオ王国建設』と云う夢のようなユートピア郷建設を企てた、というので捕えられたインドネシア男女、十三人の斬首だった。

『ふつう、あまり銃殺はやらのです。銃声が聴こえて、大袈裟すぎますけの……』

『場所は、飛行場付近の草っ原や、オランダ

時代から薄気味の悪い土地での……連れ込まれたもんは一人も帰らんかったちゅう曰くつき場所じゃが、底なしの原っぱでの……そこが刑場……』

『最初に引っぱり出されたのは、たった一人の女王様や。まだ二十代やな……小肥りの男好きのする女やった。眼隠し、後手に縛られたままの……跣足や……斬り役は……WH兵曹長、首斬り穴の前に坐った女の髪の毛を……ぐるぐるツと巻きあげ、バジュ（女の上衣）の背中をビリビリ引き裂きおっての……首を丸出しにしおっての……すると女は……おじけおっての……肩を波うたせての……ハアハア呼吸づかいが荒うな……お乳ンぼ（乳房）が波打つての……気の毒やが……しょうがない……じゃが……きつい女子でのう……泣かん……』

『濡れ手拭で、叩くような……いやな音や……女は……ピコンとぶっ立ち……くるツとひとまわりして、穴ン中へ仰向けにしゅぽんと落ちよったがの……』

『太い足を上げよっての……白い肌が……だんだん……茶色くなりよる……首の穴からドクドク噴き出しおってのう……酷え血やったわい……次の男は……斬りよると……ピッと素ッ飛びよったがのう……』

『そんな男は……ゴツくての……肩の骨に当たって……刀がくの字に曲りよった……血の泡ふいて……穴の中で生きちよる……すかさず止どめの一発や！』

聴いているだけで、好奇心を動かしたさすがの私も失心しそうだった。

現実に見なくてよかったと思う。善悪はともかく、人間の生命が、あっさり消滅させられる時の瞬間というものは、あまり美的ではないものらしい。

○

話は前後するが昭和十七年二月十五日——日本軍の攻撃によって、シンガポールのイギリス軍が降伏。

その後、占領地たるシンガポールでは「武断政治」と云おうか、日本軍政は現地人に対し、一方的な押しつけ政治を敷いていた。しかし、日本国や日本人のあり方に初めて接した現地人にとって、皇軍の武勇は「野蛮と残虐」としか映らなかっただろう。その典型的な例が「曝し首事件」であった。

——日本軍の倉庫に、現地人の「八人組の窃盗団」が押し入ったのを捕えたが、直ちに処刑し、シンガポールの目抜き通り（たしかキヤセイ・ホテル前のパークの角だったと思う

が？）と、他の目抜き通りの二カ所に、四ツずつの生首を晒した——のであった。

しかも英語・マレー語・中国語・ヒンドスタン語——などで書かれた斬奸状（悪者を斬った理由がき）の立札には「日本軍歩哨を殺害した」と書いてあった。

それは、ちょうど徳川末期——勤皇の志士たちが首棚上に、ずらりと晒し首になったのもかくならんと思われたものだったが、ずいぶん長い間、放置された筈になっていたのを想い出す。

シンガポールでのそのネガは、もし、現存すれば貴重な文献となつたろうにと残念だが戦犯の確証となつては大変と思い、敗戦時に焼き捨ててしまった。

野蛮な封建時代なら、いざ知らず、昭和時代の二十数年前——実際にあった事件なのだから、戦争と云うものは、いかにも狂気の沙汰に違いない。

人間の首と云うものは、切断されても手足以上に気味の悪いものだ。それは個性証明のシンボルだからであらうし——死して怨念がまだ宿っているように眺められるからだ。

斬首は、刑囚に対し最も苦痛を味あわせない殺し方なのだそうだが見た眼には大変残酷

だ。西洋と東洋の宿命的な思想の違いで、日本人は切腹した瞬間、介錯して相手の苦痛を絶滅させようとする親切心、武士道精神に沿った方法なのだが悲愴極まる見物なのだ。死の最後を立派に飾るために、どうしても必要な助太刀なのだ。介錯が少しでも遅れたら、折角の腹切りが絶命まで藻掻き苦しみ、青白い静脈の浮いた大小腸を垂れ流し、血の海の中で、のたうち呻くであろう。そこには自刃前の強固な精神力の片鱗も見られず、第三者は、その人間的な耐苦の弱さを嘲笑するであろう。「斬首」はそんな人間的な醜悪さを隠し、崇高な精神と尊厳を守ろうとする処に意義があり、介錯は第三者が加える美的行為として伝承されて来たのだ。

しかし、罪人の「打首」の場合は、やはり何となく屠殺の臭いがして哀れである。

○

最後に、この稿を書き続けた——十一月二十五日の正午——作家三島由紀夫氏の、「切腹」をテレビニュースで知った。

その後の新聞で、武士の作法にない、仲間間の権の会員が、切腹した三島氏と森田必勝氏の首を斬り落とした——と知って、ますます愕いた。理由はともあれ、太平の眠りをさ

ましたような凄惨なシヨックを受けたのは、私だけではあるまい。あまりに日本的なノーベル賞候補者の死ではあった。新しい思想の持主であるべき天才作家の死にしては、あまりに古風すぎるけれど——やはり一皮はがせば天才も凡人も、やはり同じ日本人であり、日本的な血の伝統の中に生きていたのだな——と思う。

報道陣の記事は、まちまちだが——総合すれば惨憺たる現場の光景に、眼をそむけたくなる。やはり彼等の死は美しいものではなく醜悪なもので、インテリのとるべき姿ではなかったようだ。

検証の結果——割腹自殺の舞台になった総監室は窓ガラスの破片が一面に飛び散り、足の踏み場もないほどで、総監の机は向きを変

え、受話器は床に落ちて、部屋の左隅は自決した二人の血で絨氈が赤黒く染まり、廊下にも二人に斬りつけられた自衛隊員の血痕が、点々と残り、事件の凄惨さを、物語っていた——と云う。

検視の結果——三島氏は臍の下、約四センチの処に、長さ十三センチの、真一文字の傷跡。深さは四、五センチ。大小腸が飛び出しており、相当の力で左から右へ作法通りの切腹をした模様。

なお、介錯の傷は首に三ツ。右肩に一ツ。首は一刀両断の形で落ちて居り、死因は二人とも「首の切断」によるものであった——と云う。

また、ある新聞には——介錯の際、残ったものと思われる刀の破片が、三島氏の頸骨に食い込んでいた——と生々しい報告。

覚悟の上で介錯を受けたと思われる生首でさえ、このように刃こぼれの鉄片が遺体に残るのである。

まして、いやいや乍らに斬られる罪人の打首に於いておや——である。

高橋お伝の刑死——その模様は、想像するだけに身震いしよう——と云うものだ。

(終)

△強烈な被虐女性△

川路むら子子の狂態

本誌二月号のカメラハントで辻村氏もあつた驚いた典型的なM女。彼女があらゆる被虐の狂態を再び元提供することになります。

股間縛りにうめく

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
一糸もまとわぬ裸身に只腰をのけよう。熱帯な裸目だけが柔肌をのけわじわと痛めつけてやまない。

羞恥責めに泣く女

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
如何に被虐を求めて泣くのか。ええ余りのことに泣き叫ぶのか。それとも悦びに泣いているのか？

妖気溢れる開股責

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
おつとりと脂肪を浮かした素足に妖気を充満して左右に引き開けはる妖気が充満して行く。

全裸縛りの引廻し

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
縄尻をとりて追いついてはるうしろめたくも開陳してゆく。

臀部晒し浣腸責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
後手に縛られたまま、臀部を晒し浣腸責め。近々と迫ってくる。

露出した全裸肢体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
締めつけた表情で若々しい肢体をマニアの眼前にあらわした。

両足挙げ羞恥責め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
自分の顔面より上に両足を掲げ、もたれさせられた羞恥をかくす。

壯絶臀部責の妙技

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
ありきたりのM女であったが、このように責めは許さなかつた。

悶絶海老縛り地獄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
身体が二つ折りになつた苦痛も、さることながら羞恥の個所があからさまになる無防備さはひどい。

片足吊りの全裸像

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
不安定な片足吊りで全身を歪め、るように見られる羞しい苦痛。

再びむら子子の狂態

本誌五月号で本誌三のペンで、川路むら子は再び、被虐の狂態を演じた。その、被虐の狂態を演じたのであつた。お申込みは代金同封の上、大坂市阿倍野区私書箱第14号、天竺社宛へ、どうぞ。

開股責と強烈縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
両足を縛りに開股責にしたり、縛りに開股責にしたり。

緊縛と鼻責め悦楽

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
鼻責め悦楽。鼻責め悦楽。鼻責め悦楽。

トイレの排泄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
トイレに追い込んで無理矢理排泄させる。トイレに追い込んで無理矢理排泄させる。

逆エビ責にあえぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
縄を用いて逆エビ縛り。縄を用いて逆エビ縛り。

棒責めの全裸女体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
棒を用いて棒責め。棒を用いて棒責め。

椅子責めでいためる

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
椅子を使ったグルグル責め。椅子を使ったグルグル責め。

柱に縛る全裸女体

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
柱に縛る全裸女体。柱に縛る全裸女体。

後手縛り顔面玩弄

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
後手縛り顔面玩弄。後手縛り顔面玩弄。

両手挙げ縛り媚態

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
両手挙げ縛り媚態。両手挙げ縛り媚態。

悦楽責めアツプ集

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
悦楽責めアツプ集。悦楽責めアツプ集。

柱縛り利用の開股責め初め

大手札三枚一組 四〇〇円
川路むら子 略号AむつV
柱縛り利用の開股責め初め。柱縛り利用の開股責め初め。

連 載 ・ ア ブ 紳 士 行 状 記

M 派 交 友 録

(15)

鷹野めぐみの巻 (2)



カ ッ ト ・ 岡 た か し

真のサディズム

鷹野めぐみさんみたいなの、たぐい稀なるサジスチンには、私ははじめて出くわした。

日本のサジスチンとして有名なものをあげれば、徳川千姫、姐妃のお百、高橋お伝、阿部定等がすぐ浮かぶ。

だが、これ等のサジスチンといわれる女性もその行動した結果から推してS女性の冠を

鬼 山 絢 策

かぶせられているが、真のサジスチンであるかどうかは疑わしい。

例えば千姫の場合は、秀頼の妻だったのを祖父の家康が勝手に婿を決めたのが面白くない、暇と金と精力をもて余して男を引き入れたものの、外聞をはばかって殺しているうちにサジスチックになってきた。男を殺すために侍らせたのではなく、正常な肉慾を満たすために引き入れておいて、殺した理由は外聞をはばかるためである。

姐妃のお百は、たしかにサジスチックであるが、金を盗るためとか、栄達をはかるためとかの理由がついている。一番サジスチックではあるが、果たしてお百という女性が実在したかどうかは疑わしい。講釈師の創作した或いは脚色した人物らしいところが多分に見受けられる。高橋お伝に至っては単なる淫乱女性であり、後天的にサジスチックになってきているが、やはり金という物慾がつきまわっている。

阿部定は「さだイズム」などという洒落まで、はやらせた昭和のサジスチンとして有名だが、石田吉蔵を殺したのは、愛交を長く保たせるための一手段から生じた過失死とも言えるし、シンボルを切りとったのは、愛着の

発露であって、サジズムとは、かけはなれて
いる。

そこへ行くとも男性の方には真のサジストが
いくらでも、いる。暴帝といわれるネロや、
殷の紂王のように、理由なく惨酷な殺りくを
行ない、面白半分に大量殺人をやったのける
これが、ほんとのサジストである。

前にも、めぐみさんの、ひととなりを書い
たが、彼女は幼女の頃から先天的にサジズム
がある。

それを春木氏が聞いて、本誌に彼女の幼女
から少女時代の告白を投稿するようにすすめ
て、本誌にも二、三度、彼女の告白が載せら
れたが、それは後日のことである。

要するに、理由なく人を殺し、人を傷け、
人を迫害し、人を羞かしめるのが真のサジズ
ムである。理由なくと言ったが、それは社会
通念上であって、理由はある。サジズムのた
めである。

戦前「M」という映画があった。

ピーター・ローレの出世作で、サジストの
心理と、犯罪者の恐怖を、これほどみごとに
描写した映画は、その後、見たことがない。

かわいらしい少女を見ると、ムラムラとナ
イフで殺したくなるサジストの役をやったピ

ーター・ローレ。次々と少女を殺し、謎の犯
罪としてベルリン（たしかベルリンと記憶す
る）市街を恐怖のどん底に陥れ、警察が躍起
となって捜査するため、あおりをくった、や
くざやギャングが「こう取締りがきびしくち
ゃあ、かなわねえから、我々もサツに協力し
てヤツを捕まえようじゃねえか」と警察、や
くざ、ギャング、乞食達から一斉に狙われる
犯人。その名を「M」と言われる。

いま考えればMというのは、ちょっと、ま
ずかった。「S」の方がピッタリしていた。

犯人Mは、連続殺人に当局の警戒が厳重な
ので、少し我慢しようと思っているが、金物
屋のショーウィンドーの前に立った可愛らし
い少女を見て、またムラムラとする。ショー
ウィンドーには十数本のナイフを円形に、ひ
まわりの花卉のように陳列してある。少女が
クルリと、こちらを向くと、恰度ナイフの輪
の中に顔が入って見える。それを見た犯人M
の表情が、すばらしかった。「どろどろまな
このピーターローレ」と言われる、ふだんは
臆病で眠そうな目が、この時、らんらんとひ
かる。

だが今、あの少女に手を出しては危険だと
耐える。だが、ナイフの輪の中の少女。ピー

ターローレの額がギクギクッと上下に動く。
彼独特の演技である。ついに耐えきれず、猫
なで声を出して少女に近づく。風船を買って
やり、キャンディを買ってやる。乞食の一人
が鋭く見つめている。彼は掌に白墨で「M」
という字を丹念に厚く塗る。お菓子屋から出
てくるMにドシンとぶつかり「ごめんよ」と
言って通りすぎる。背中に白墨で「M」の字
がスタンプされている。Mは気づかなかった
が、ふと鏡に写った自分の背中を見ると、洋
服の肩口にベッタリMの字がついているので
愕然とする。

あとは警官とギャングと乞食に追い詰めら
れて、深夜のデパートを逃げまわる犯罪者の
恐怖の描写が凄かったが、これが真のサジス
トの姿である。

顔の上の対談

話が横道へそれて申し訳ない。

要するに、天性のサディストは多いが、サ
ジストは少ない。が、鷹野みどりさんは、
その世にも稀なる天性のサジストである。

いま新宿のクラブ「マスコット」で、親友
の春木氏から鷹野みどりさんを紹介されて、

三人で飲んでゐる。みどりさんと春木氏は、既に何度も飲んでいて、やせぎすが司葉子と江波杏子をゴツチャにしたような、みどりさんに熱を上げている最中である。

春木氏は、この頃、三十八か九ぐらいだったろう。そろそろ額が薄くなりかけていたが今みどりさんの腰かけているソファの前に両手をついて、ソファに顔を横向けて乗せている。みどりさんは、その顔の上にドッシリと腰を下ろし、その当時としては、かなり短いスカートでスッポリと包んでしまった。

めぐみさんは悠然と煙草をくゆらしながら私と話をしている——というところまでが前号である。

それから一カ月間、めぐみさんは春木氏の顔をお尻で押さえつけていた。

ソファから春木氏の顔の分だけ、みどりさんの座高が高くなっている。ホステスはバツがわるくなって逃げ出してしまったし、隣のボックスに客は居ないとはいえ、広い店に客が全然居ないわけではない。もし客が入ってくれば、この異様な光景は、あからさまに見られてしまう。それでも平気で尻に敷いてゐる、みどりさんの勇氣には敬服した。

「あなたは抗抵力を喪失した状態の男性、或

いは劣弱な男性を虐げるのと、権力をふり廻したり、社会的に地位や名声のある男性を征服して奴隷化せしめるのと、どちらを希望しますか」

めぐみさんは目を細めて、ちょっと考えていたが

「そうねえ、両方ね。両方ともいいわ」

この答が、みどりさんの性格を、如実に現わしている。私はSと言われる女性に、同じ質問をしてきたが、他の女性は、みんな「そりゃ権力や財力をかさにきていばってる奴をやっつける方が、ずっと面白いわ」と躊躇なく答えている。

だが、こういう答えをする女性こそ、後天的なサジスチンなのである。

それと、もうひとつ。劣弱な男性を屈服した経験は多いが、実力のある男性を征服した経験は、皆無か、あっても非常に少ない。少ないから困難な方を、より望むのは当然であろう。

それを、めぐみさんは両方とも同じぐらいだと言う。と言うことは、実力者の男性を征服した経験が相当豊富であるということである。もっとも彼女の話を聞いていると、実力者といっても、社会的に誰が見ても大物と

思われるような人物ではなくて、彼女の職業上から見た実力者、例えばスポンサー関係の社員とか、直属の上司とか、そういった関係が多いようである。丸谷君なども、その一人である。

「一番いばってるのはデパートね。一度、あたしのところへ特売の広告のゲラが廻ってきたことがあるのよ。あたしの受け持ちじゃないんだけど、担当が休んでたから、あたしが代わったんだけど、家具の値段に大きなミスがあったのよ。四万五千円が四千五百円になってたし、材料の名称も違ってるの。事前にあたしが発見してデパートの宣伝部へ知らせてやったのよ。そしたら、すぐ来いというのよ。電話で用が済むのを来いというんでしょ。でも得意先だから行ってやったの。そして一時間も待たせておいて、それでいいから帰れというから、確認の判をくれと言うと俺がいいと言ったら間違いないんだから、それでやれと言うのよ。そんなら電話でことが足りるものを何故、呼びつけたのか。大体、誤植のまま刷っちゃったって、こっちに責任はないのよ。原稿通りなんだから。親切に教えてやったのに、まるで怒ったような態度でしょう。そう言ってやったら、生意気なこと

言うとお出広を取り消すぞと、おどかしてきたから、取り消しなら取消しで結構。取消しましょうと言って帰ってきちゃったのよ」

死んだように、じっと動かなかった春木氏が身体をねじるように動いた。めぐみさんはチラと下を見て、うす笑いを浮かべながら、一層、力を入れ気味にして、おさえつけた。

「社へ戻ってきて取り消しの報告をすると、課長が青くなって騒ぎ立てたのよ。向こうがそれで出せと言うなら、そのまま出せばいいじゃないかと言うから、確認の判をおさないうちは出せないと突っぱねたのよ。なぜ宣伝部長が判をおさないかというと、判をおすとあとへ残るでしょう。つまり、デパート側が一本取られた証拠が残るのが向こうにとってはお嫌なのよ。それと宣伝部では、最終的に責任は仕入部にあるというのよ。仕入部に広告原稿の値段を校正してもらっているのだから判をもらうなら仕入部の判をもらえというのよ」

春木氏が、また動いた。もうかなり長い時間めぐみさんの腰から上の体重をのせているのだから、さすがに苦しみに耐えきれなくなっているのだろう。動くたびに、めぐみさんはチラと下へ目をおとし、目を細くして一点

をみつめた。このひとがノーマルな愛を合わせた時の、エクスタシーの表情もこうであろうかと想像しながら、話の途切れた空隙も、この美しい表情の変化を見ていれば気詰まりを感じなかった。

「このトラブルが局長の耳にも入って、事が大きくなったのよ。あたしは局長に事情を説明したら、さすが局長ね。取り消しになっても構わない。向こうが確認するまでは、のせるなど言ってくれたのよ。ところが課長の奴は腰ぬけなのよ。その間に向こうの宣伝部長や仕入部長のところへ行ってペコペコ頭を下げて何とか判をもらって隠便に済まそうとしたのよ。それが分かって局長に叱られたもんだから、課長の顔は丸潰れよ。アハハハハ」めぐみさんは身体をゆすって笑った。春木氏は、またもがいている。

スカートの中のこぶ

「結局、どうなったんです？」

「向こうが折れて、仕入部の主任が局長のところへ、謝りに来たわよ。局長は、とぼけて「私は何も知らないから、担当のあたしに話をつけるように」と主任を、あたしのところ

へ廻してきたのよ。あたしは、取り消しに決まったものを、いままら判を押すの何のと、そんなことでは済まされないとケツ捲ってやったわよ」

めぐみさんは、ぐっと前かがみになり、スカートを、ちよいとめくって春木氏の顔をのぞきこんだ。

「苦しい？ ふふふ。参った？」

「もう降参しました。許して下さい」

細い足も、かなり太く見える。もうちょっと見たかったが、めぐみさんはスカートを下ろしてしまった。

「それで、どうしました」

「留園だったか支那料理屋へ、あたしを連れだって、何だかしらないけれどデパートの包み紙で包んだものを一ぱい出して、まあ今度は勘弁してくれと謝ってきたわよ。こんなもの何のために持ってきたんだと言って蹴ちらかしてやったわ。あたしを収賄罪におとすつもり？ ってね。あたしが意外に強いもんだから、向こうももてあましちゃってね。今度は泣き落としにかかったのよ。しまいには、ほんとに泣き声を出し、土下座して、あたしの足にすがりつかんばかりにして頭を下げてきたわ」

ウ、ウ、とスカートの中で春木氏の呻き声が聞こえた。めぐみさんは、たのしい音楽でも聞くように笑いながら、

「あんた方、お店の女の子をだましてはらせでもした時は、その手を使うんでしよう。見えすいた芝居をするんじゃないよって、膝小僧で頭をコツコツ叩いてやったわ。そして、この広告が掲載されないと僕の責任問題になるんだと、とうとう本音を吐いたわよ」

「金もだめ、泣きおとしもだめと知って、その仕入部の主任さん、進退きわまつたでしような」

「何とか助けてくれと両手を合わせて拝むのよ。其奴は有名な女たらしだってことは、女の子から聞いてたからね。ふだんは女を、けだもの扱いしてる野郎だと思うと癪にさわってね。靴のまま頭を蹴つとばしてやったわ」

めぐみさんは右足をあげて、春木氏の横腹を靴の先で蹴った。「ウッ」という春木氏の悲鳴がスカートの中でこもった。

「で、結局、許してやったのですか」

「許してやらなかったわ。でも、うちの課長から、まあ何とか勘弁してやってくれと頭を下げられたのですね。うちの課長に免じて、勘弁してやったのよ」

この時、めぐみさんは、春木氏に対する折檻も、ようやく許してやったらしくソファの奥の方へお尻を移動させて深々と腰かけた。めぐみさんのスカートが、ポッコリと膨らんで大きなこぶが出来た。春木氏の頭である。

長い間の重石から放免されたが、春木氏はまだスカートの中から出てこなかった。

「なるほど、それは痛快な話ですねえ。私の友人でスポーツ用品を作っている男が居るんですが、デパートの仕入部の横柄さには腹に据えかねて喧嘩しちゃったそうですよ」

「権力の座に、あぐらをかいている奴を見ると無性に腹が立ってくるのよ。また、その反面、権力に媚びてへつらっている奴や泣きべそかいてる意気地なしを見ても、腹が立つのね。そういう奴も、こっぴどく虐めてやりたくなるわ」

めぐみさんは足をあげて組もうとしたが、間に大きなものがはさまっているの、うまく組めないのか、すぐ足をもとにもどした。

「女性が男性を征服するときの武器としてはまず女性としての魅力しかないと思っていたのですが、あなたのように実力で堂々と立ち向かうひとが居るということは、驚異ですね」

「ふふ、要するにファイトの問題でしょ」

めぐみさんの両膝がグツとすばまった。

「女性は、からめ手から攻撃することばかり考えたがるものですが、あなたのように真正面から行くひとは、まことに珍しいですよ」

めぐみさんは、ちょっと眉を寄せて

「いつまでグズグズしてるのよ。もう出なさい」

スカートの上から手を当てて、頭を押し出した。

ようやく顔を見せた春木氏は、満面紅潮して汗びっしょりかいていた。そのまま黙礼すると、ハンカチで顔を拭きながらトイレに立った。

それを、おかしように笑いをこらえて、めぐみさんは見送っていた。

「だいぶ参ったようですね」

「タフだね。こっちの方が、かったるくなっちゃった」

めぐみさんも上気した頬に、ひとつのピークを越した、ひと息ついた様子が見受けられた。

撮影お断わり

春木君が戻ってくるのと入れ違いに、めぐみさんがトイレに立った。

「よくがんばりましたね。くたびれたでしょう」

「参ったですよ」

「でも、あなたも勇敢になりましたね、こういう席で堂々とやってのけるんだから」

「イヤ、否応なしに、彼女にやらされちゃったんですよ」

「でも最後は……自主的でしょう。彼女がお尻をどかしてからは……」

春木氏はニッコリ笑って

「写真の話、しましたか」

「イヤそれが、まだなんですよ」

「彼女、やりますよ、あれだけの度胸があるんだから、今夜は、いままでの中で一番のってきましたね」

「そりゃそうでしょう。文字通り、大乗りに乗ってきたんだから……」

「いや、ほんとにあの調子ならやりますよ」

「それじゃあなたから話してくれませんか」

「イヤ、そりゃやっぱり、あなたが本職なんだから、あなたから言ってお下さい」

「言い合っているところへ、めぐみさんが戻ってきた。」

「なに、お話ししてらしたの」

「いや全く、あなたはすばらしい。得がたい貴重なレディだと感嘆していたんですよ」

「どうだか。ふふふ、何かわけがあるんですよ」

「存外あなたは、ひがむんですね。でなければ疑り深いのかな」

「そうよ、あたしは疑り深いわ。だけどさ、今夜どうして鬼山さんを連れてらしたの。ただ漫然と、あたしと飲みたいというだけじゃないでしょ。それとも単なる見物人だけの役目で連れて来られたの」

とにかく、めぐみさんはズケズケものをはつきりしゃべる方だ。しかも、それはなかなか鋭い観察眼で、ズバリと的を射ている。「イヤ実はね、鬼山さんは写真の大家なんですよ。で、あなたのようなひとを是非、撮りたいと言っているんですよ」

「ふふ、そんなことだろうと思ったわ」

「私は、写真の大家でもボヤでもありませんよ。趣味でやってるだけなんです」

「悪趣味ねえ」

「困ったもんなんですがねえ、ただ、あなたのような方を見ると、ムラムラと意慾の炎がもえあがるんですよ」

「あたし達の、いまやったようなことを撮ろうと言っているでしょ」

「もし、お許し願えればの話ですが」

「お断わりですわ。ばかばかしい、写真撮って何になるの。鬼山さんも存外、子供っぽいのね」

「マニアというのは、すべて子供っぽいものですよ。これを何かに利用しようなんて気は毛頭ないんです」

「あはは、利用したっていいわよ」

「そうはいきません。永年つき合ってる春木氏も入るし、私自身も入るのです。人には見せられないしろものです。もっとも四十年ぐらいたったら、時世も変わるし写真のモデルも実在人物との距離が、かなりできるから何かの形で目の目を見るかもしれませんね。まあ五年や十年は絶対秘密を守りますよ」

「あははは、撮ればの話でしょ。でも、お断わりするわ」

「どういう理由からですか、我々が信用できないからですか」

「そんなじゃないわ。信用してもしなくてもそれは関係ないのよ。公表されたって構わないんだから」

「じゃ、どういうわけですか」

「ばかばかしいじゃないの、そんなこと」
 「あなたにとってばかばかしいくだらないことかもしれないが、我々にとっては、よだれの出るほどほしきんですよ、あなたの美しい写真が。ひとつ我々を哀れと思し召して御協力頂けませんか」

「あはは、いやだわ」

普通断わる時いままでの女性は「困るわ」と言う。それをめぐみさんは「いやだわ」とはつきり言うところが珍しい。彼女は、「困る」という言葉は使いたくないのだろう。

しかし私は、ねばった。断わる理由がどこにあるのかを知りたかったせいもある。

「だってさ、写真のモデルというのは、ああしろ、こうしろという指図に従ってポーズするんですよ。つまり製作者に従属するんじゃない？ そこんとこが面白くないのよ」

なるほど、いままでSの女性に何人もモデルになってもらったが、こういう意見を聞いたのは、はじめてだった。しかし言われてみると、なるほどそういうものかもしれない。

「ごもっともです。じゃあこうしましょう。あなたが好きなポーズ、好きなことをやって下さい。私等はあなたの命ずるままに動きますよ。それならいいでしょ」

「ふふふ、あたしみたいな、やせっぽち、撮したって、しょうがないでしょ」

「いや、あなたのその美しさと、あなたの身辺からだようサデイスチックな妖気が何ともいえない魅力なんです。私等にとっては、あなたのような女性は生まれて初めて見ました。まことに貴重な存在だと思うんですよ。ひとつまげてお願いしますよ、いやになったら途中で、いつやめて下さっても結構です。あまりこだわらずに、リラックスなプレーのつもりでやって下さい」

こうなると私も必死である。春木氏も一緒になって口説いた。

彼女も今夜はかなり酒が入っている。強い方らしいが酔っていることはたしかである。

春木氏が「これから行きましょう」と一気に話をもって行ってしまった。めぐみさんもようやくその気になってきた。

今夜これからすぐと言っても、私の方はちよっと困るのである。カメラ二台、電球、コード、ストロボ、その他の小道具類を用意しなければならぬ。しかし今夜、この機会をはずしたら、彼女も気が変わってやらなくなるかもしれない。とっさにそう判断した私は春木氏に

「それじゃ四十分ばかり彼女の相手をしていて下さい。私は急いで家へ帰って道具を揃えてきますから」

春木氏は、写真よりもプレーそのものに興味の重点がある。だから「今夜のところは写真なしで、とりあえずプレーだけにしませんか」と一度は言ったが、私の方は写真に重点をおいているのだから、そうは行かない。

「なにをゴチャゴチャ言ってるのよ」

私達のヒソヒソ話が長くなったので、めぐみさんの御機嫌が少々わるくなってきた。

「イヤ、何でもありません。私、ちよっと失礼します。すぐに戻りますから、じゃ春木さん頼みますよ」

返事も待たずに私は「マスコット」をとび出した。新宿から中野まではすぐだから往復三十分もあればこと足りる。品物を揃えるのに十分とみたのである。いまは十一時半だから、かんばんが十二時として、何とかなるとふんだのだった。

強い男と弱い男

道具を揃えて再び「マスコット」へかけつけたら、もう店のかんばんになっていて客は

読者ギャラリー 『清 拭』 岡 たかし



一人も居なかった。ボーイが「お客様は最初の初音館でお待ちになっていらっしゃるそうです」と伝えてくれたので館屋へ行き、そこから「富貴荘」というホテルの室をリザーブした。

旅館へ入る時というものは、いつも気まずいものである。男と女と二人きりならきわめてナチュラルだが、男二人に女一人というの

は、どちらの男が女と寝るのかという、女中の目を男達の方は感じるし、女の方は、この二人の男をどういう風に相手にするのかという女中の観察の視線を浴びることになる。

そういう意味では、女の方がより気まずい思いをするのであろうか、倉田由紀さんなどは極端にいやがった。

ところが鷹野めぐみさんは、ここでも異例

であった。

私と春木氏とに均等に話しかけ、案内する女中にも冗談を言ったりしてテレルということをしらない、と言って虚勢を張っている風にも見えない。ごく自然な態度なのである。

「お泊まりですか」

女中のこの質問にも、いつも悩まされる。

前もって打ち合わせてないから、咄嗟に私の判断できなければならぬ。

「ええ一人は帰りますが二人は泊まります」

それが一番ナチュラルだと思ったから、私はそう答えた。めぐみさんから「あたしは泊まらないわよ」と言われるかもしれないが、その時はその時だと思って言ったのだが、ここでもめぐみさんはケロリとしていた。

「まだ飲みますか」

「どっちでもいいわ」

春木氏の方はまだ飲みたそうな顔をしている。酒がないと間がもてないと思ったのかも。酒とおつまみを注文した。私としては旅館では何も注文したくないのである。その酒肴が運ばれる間は、準備にとりかかれないうし、旅館によっては三十分以上、待たされることもあり、時間がもったいないからである。いつ女中がノックしてくるかと思いいな

がらでは、気詰まりで、話の内容もいままでのムードと違ったよそよそしいものになる。そういう点もいやだった。

「何だか満員のようね、こういうところへ泊まりにくるひとって、一体どういう人達なんでしょうね」

「まあいろいろあるでしょう、家庭の事情でね。私なんか地方へ出張すると、連れこみ宿へ平気で一人で泊まりますよ」

「うまいこと言ってるわ、鬼山さんが一人で泊まるなんてこと、ないでしょ」

「いやいや、こないだ神戸の福原の、連れこみホテルへ泊まったら、夜の二時頃になってドヤドヤ入ってきた男女が、ワイワイ騒いで寝られないんですよ。私の室の、すぐそばが風呂場になっていて、そこで騒いでいる。あんまりうるさいので便所へ起きたついでに風呂場の前を通ってみたら戸が開けっ放しになっていて、中で三人の男と二人の女が裸でふざけてるんですよ。湯槽の中で、女一人を男二人がギュッと抱きしめる。女がキャアキャア暴れて湯しぶきをはねとばす。その湯しぶきを浴びながら、タイルの上では男が女を仰向けに倒してキスしている。みんながガヤガヤキャアキャア騒いでいて、私が見ているの

も気がつかしい。もっとながく見ていたかったけれど、そうも行かないから帰ってきてしまいました。ひと晩中眠れなくて困ったことがありましたよ」

女中が酒をもってくる。時計を見ると一時である。あまりぐずぐずもしてられない。

女中が風呂の湯を出して行ってくれたのでめぐみさんにまず入ってもらった。その間にバックをどこに決めるかを設定して、邪魔ものをとり除き、ライトを据える。春木君は機転のきかない方だから、のんきに酒を飲んで眺めている。何から何まで一人でやるのだからたいへんである。

めぐみさんの風呂は長かった。水音がしなくなってからかなり時間がたつ。風呂場はヒソソリとして音もしない。何をしているのか気になった。私の想像では、これからやるプレーについて、あれこれと考えているのではないかと思った。イザとなるとそこはまともな女性としては勇気の要ることもあるし、智性が邪魔をするということもある。

準備が終わって、一ぱい飲んでるところへ、めぐみさんが裸にバスタオルをまきつけて出てきた。まっすぐ鏡台の前に坐ってハンドバッグから化粧品をとり出したところは、

やはり女である。

しかし、ぐずぐずしては居られない。私はすぐ仕事にかかった。

私は、緊縛から入ろうと思って縄を用意してきた。春木君に

「縛りのシーンから行こうと思うんですが、裸になってくれますか」

春木君は洋服を脱いで、パンツ一枚になった。

「めぐみさん、縛ってくださいますか」

めぐみさんはチラとこちらを見たが

「あたし、縛るのなんていやよ」

「じゃ、私が縛りますか」

「縛った男なんていやなのよ。自由のきかない男を責めるのなら誰だってできるわ」

めぐみさんは縛った男自体が嫌だと言う。

「あたしのフィーリングってのは、弱い男を虐めるのも好きよ、弱い男なら縛って、がんじがらめでどうにもならないような状態にしておいて責めるのも好きだけど、強い男は逆なのよ。自由にさせて、いつでもあたしから逃避できうる状態にしておいて屈辱を与えてやる。そういうのが好きなの、春木さんはどう見ても弱々しい男ってイメージはないでしょ。だから縛らない方がいいと思うわ」

「ハハア。すると僕は、強い男と見て下さってるわけですね。光栄ですね。でも見かけだけで、しんは弱い男なんですけどね」

「わかりました。じゃあ、緊縛はやめにしましょう」

私は縄をしまった。

めぐみさんが反対したのは「マスコット」で飲んでる時に言った「製作者の意図のままだに動く」のがいやで、その意味から反対したのではないかと思った。私としてはなんにも緊縛だけに拘わるつもりはない。ただひとつのきっかけをつくるべく、提案したにすぎないのだ。だから緊縛がだめだとすると、何か別のきっかけをつくらなければならない。「それにあたし、裸の男って、あまり好きじゃないの」

また、条件を出してきた。どうもちょっとやりにくい女だなと思った。

「男の肌に、あたしの肌が触れるのが、いやなのよ。何か汚ならしい感じがするでしょ。接触しなければならぬ部分を除いては、触れられたくないのよ」

めぐみさんは化粧をすまずと、パツとタオルをとって私達の前に立ちはだかった。服を着ていた上から見た感じでは痩せぎすだった

が、いまこうして裸体をみると、かなり小肥りに肉がついていて、乳房の形もよく、小じんまりとバランスのとれた肉体美だった。

「どうせ、あたしの方はヌードでしょ。だったら、男の方は何か着てもらいたいわ」

どうやら、きっかけは、めぐみさんの方から、つくってくれた。案ずるより、生むが易しだ。

「あ、すばらしい、からだですな。思ったより、肥ってますね。実に、きれいだ」

モデルの女性は、ワンカット写すごとに、ほめたたえなければならぬ。それがエチケツトでもあり、いい仕事をつくり出す、もとでもある。私は、ほめながら春木氏の尻をついて「傍へ行け」と催促した。春木氏は、どうも私よりワテンポ遅い。春木君は宿の浴衣を着ると

「ほんとにすばらしい。美の女王さまです」と、めぐみさんが足をひらいて立っている前に行つて、平伏した。

むき出しの女豹

私はポーズの注文はつけないことにした。どうせ私が出す注文は、何だかんだと理屈

をつけて、めぐみさんに反対されると思ったからだ。

「寒くありませんか。ライトをつけると暖かくなりますよ」

私は五百ワットと三百ワットの写真電球のスイッチを入れた。

ライトがついたばかりの時は、まばゆいくらいに明るく感じる。素人の女性は、このライトを身体にあてられると、一瞬でも羞恥に身をかたくするものだが、めぐみさんは平気だった。

手を腰にあてがい、足もとの春木君を見おろすポーズも、いたについている。すこし色がくろいと思っていた皮膚も、ライトを受けると、しるく美しく輝いて見える。

頭をあげた春木君の頬に、パシーッ！と一発、平手打ちをくわせた。

「あんたが悪いのよ。あたしに、こんなことさせるなんて」

「ど、どうもすみません」

度胆をぬかれて春木氏は、びっくりしたように、めぐみさんを見上げた。

パン！ パン！ パン！

と続けざまに両手で頬を、響きのいい音を立てて叩いた。春木氏の顔が真赤になった。

息もつかせず足をあげて春木氏の額に足の裏をあてがうと、思いきり蹴とばした。

実にショッキングなシーンだが、こう早くやられては写真が撮れない。

叩いているところを、あわてて二度ほどシャッターを押したが、あとで焼いてみると、二枚とも完全にブレていた。

場面は急ピッチで進行して行く。

めぐみさんは倒れた春木氏へ追い打ちをかけて顔の上にとびかかるように跨がった。二つのライトの一方から、はみ出してしまい、めぐみさんの背後の方から、あてられたライトひとつで、前方は黒く塗りつぶされたような写真になったが、それは、できあがった写真を見て調子が分かったことで、その時点では私もすっかりあわて、夢中で二人を追ってシャッターをきった。

人目のないところでは、めぐみさんは女豹のような激しさを剥き出しにしていた。

もっとも完全に人目がないわけではなく、私という人目があるのだが、すでにここへきては、私は完全に無視された存在となった。

「苦しい？ ふふふ覚悟してたことでしょ。」

途中で、ねをあげたって許さないわよ」

動きが、ようやく緩慢になった。

私はライトに気がつき、ソッと立って、もうひとつのライトを前方に照らした。めぐみさんは平気だったが、下になっている春木氏の目が羞恥を示した。

やっと腰を据えて、ピントもゆっくり合わせてシャッターをきることができた。

すばらしい写真ができるぞとゾクゾクするほどの嬉しさが、こみあげてきた。

だが、それもちょっとした間で、このポーズがこう着状態になってしまつて、私は手もちぶさたになった。離れたり近寄ったり、仰向け、俯かんと、十数枚撮ってしまったら、もう撮るところがなくなった。プレーが主体となつて、写真は従となつてしまった。

しかし、めぐみさんの表情は全くすばらしい。これは演技ではなく真実そのものなのだから、その意味では得がたい写真だ。めぐみさんは、ちょっと唇をへの字に曲げて、目を細めて春木氏を見下ろしている。春木氏は表情に変化の乏しいのが欠点である。めぐみさんが、これだけ真剣になって責めているのだから、かなり苦しいはずだが、むしろ努めて苦痛を表面にあらわすまいとしているように見られる。役者じゃないのだから、まあ仕方がない。

どうやら、めぐみさんは、春木氏を押し潰してしまおうとしているように見られた。

「そろそろ、別のポーズに変えて下さい」とも言えないから、

「そろそろ参りかけてるんじゃないですか。このままで潰してしまうのは、もったいないでしょう」

ジロリと横目で私を見た、めぐみさんは、凄艶そのものだった。その瞳に射すくめられただけで、戦慄に似た刺激が背筋を走った。

「ふふん……」

めぐみさんは含み笑ひして、春木氏を圧しつけていた尻を持ち上げた。私は、その瞬間を捉えた。

「このくらいのことでは参る男じゃないわよ」さっき「マスコット」で、かなり長い間、責めているから、私よりも、めぐみさんの方が春木氏のタフさ加減は、よく知っている筈だ。

だが、解放された春木氏は、意外にも、かなり参っているようだった。時間にしたなら、「マスコット」で乗っかっていた方が、かなり長かったのに、やはり女王さまが潰す気で本気にやられると、こたえるものとみえる。口を大きくあけて犬のように舌を出し、ハ

アハアと荒い息をついていた。その喘ぐ顔を見下ろしていためぐみさんは今度は向きを変えて、頭の方から跨がって、遅い太股で顔をはさんだ。奴隷は僅かな休息で再び暗黒の中に奉仕を強要させられた。

「一ぺん気絶するまでやってやらなきゃ。コラッ、この野郎ッ！ こん畜生ッ！」

めぐみさんは、はずみをつけるように、上半身の重味をお尻の一点にあつめて、叩きつけるように圧しつける。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

さぞ苦しいだろうと思うが、春木氏の表情は見えない。しかし、これは、かなり危険である。奴隷が、どの程度まで痛めつけられているのか分からないからである。私は、ちょっと心配になった。

「もうノビてるんじゃないですか」

レンズに、こっちを向いた、めぐみさんの笑顔が写った。目を細め、唇を細め、唇を半開きにして、責めつけをとめたまま、エクスタシーそのものの表情はすばらしかった。

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんが、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

彼女はスッと目をあげ、片膝を立てて覗きこんだ。哀れ春木氏は、顔中、油を塗ったようにテラテラに光らせ、大きく口を開けてのびていた。ちょうど、そこでフィルムが切れたので、と言ったら春木氏に対して申し訳ないが、いつまでたっても、正気にもどらない春木氏が心配になってきた。めぐみさんも陶酔から覚めて、理性を取り戻した。

「春木さん、春木さん」

と胸をつかまえて、ゆすった。動かない春木氏を見て、不安そうに私を見て、何とかしてちょうだいというような目の色だった。

五、六分ほどして春木氏は元気になったがこのさわぎで今夜はお終まいとなり、めぐみさんは二時すぎだったが帰って行った。

その後、めぐみさんは突然、会社を辞め、我々グループの前から姿を消してしまった。噂では結婚のために、やめたのだと言う。

もちろん、丸谷君と結婚したのではない。あいう類いなき才女の夫となった人物は、いかなる男性であろうか。そして、あの強烈なサジズムによく耐えて行ける男なのかどうか私等は興味があったのだが、惜しいかな、その後の消息をきかない。(この項終り)

S N カメラ・ハント Ⅱ 和泉弥栄の巻

乳房に咲くほりもの桜

辻村 隆

十二月号で発表した『夫婦愛虐図絵』の、三浦純子夫人との、単独プレイの約束が、三浦氏の仕事の方が、年末で多忙になり、夫人の手が空かないという理由で、どうやら来年度に持ちこすことになった。

今回のハントに予定していただけに、私の予定が狂ってしまった。

渡部好美、川路叢子、谷山久美子、村上喜美の各夫人なら、いつでもO・Kなのだが、そうそう同じ女性のハントの続篇ばかりも書いてはおられない。

近頃、憶劫になってしまって、用事以外には殆ど外出もしないし、家でゴロゴロしてい

るものだから、目先の変わったハント女性など、果報は寝て待て”式にもゆかない。

箕田氏に電話で探りを入れたら、九州の佐賀県に一人、神奈川県に一人、徳島市に一人と、いずれも私を名指しの夫婦プレイの方だが、当地まで来てほしいというお便りなのでわざわざ出掛ける程の熱意もなく、来月号は一度、休みますといったら、

「神戸の、いれずみ女性を撮ってみる気はない？」

と、思い出したように、彼は私のプレイ心を誘うようにいうのであった。

「そんな人、いるの？」

「ウン、覚えていないかなあ。六月号と七月号で、『乳房の刺青』という一文をよせてきた、和泉五郎という名前を——。かなりアンタに肩入れしている様子で、奥さんをよかつたらハント女性に提供する、といってるんだが……」

「そういえば、覚えがありますよ。乳房に花片のいれずみをしたフォトがのっていましたね。だけど、あの手記の記憶では、和泉五郎という人、ムチ打ちとかで寝ているんじゃない？ そのくせ、自分の女房のプレイする処を傍らでみていたいとか書いていましたね。第一それじゃやりにくいし、何だかヤクザっ

「ぼい感じだったじゃないの」

「そうだよ。それで余り相手にもしなかったのだが、先日ヒョッコリ編集部あてに葉書が舞い込んでね。ムチ打ち以外に、若い時の不摂生でも祟ったのか、余病を併発して、入院してるんだよ。葉書はその病院からだったけど、ハントの夢は捨てていない。折あらば辻村氏に是非と書いてあったんだよ」

「そんなこと、今日が初耳ですよ」

「いや、連絡しようと思うに乍ら、緊縛



辻村氏に贈る
愛と苦痛の図

和泉五郎より贈られた絵

写真集の発行の方で忙しくてネ、ついこの頃になっていたんだけど、未だ葉書が届いて一週間も経っていないからね。アンタは三浦純子さんを撮るとか言ってたから、ついでの時にでも伝えようと思っていたんだ」

「すみません、気にしないで……それで、若しハントするとしたら、彼の入院している病院にでも行くの?」

「精しいことは、矢張り彼と会って貰わないとね、分かんたろう。経済的にも困っている様子だね。完全看護らしく、奥さん、働いているとか書いてあったけど——。当たってみる?」

「病院は?」

「布引の近くのK病院の内科病棟だよ。ええと、一寸待ってよ。葉書を、探すから……」

私は電話口で、和泉五郎氏の病棟、病室番号、住所などメモする。その時限では和泉夫妻に対する興味は索漠として気乗り薄であったが、電話を切って、早速

バックナンバーの奇クをとり出し、六月号の『乳房の刺青』続く七月号の『いれずみ奴隷妻』の手記を改めてよみ直すうち、俄然SMのプレイのやる気が湧然と盛り上ってきたのであった。

弥栄夫人に対する愛虐の激しさ、乳房はじめ、肉体の秘所へのほりものの過程、奴隷妻へと飼育していった熱意。秘蔵のフォト・コレクションなど妻に焼き捨てられた時の、怖るべき加虐ぶりなどを、夫からではなく、弥栄夫人の口から、その告白をじかに聞き出すことが出来たら、これは事実は小説よりも奇なりを地でゆく、一人の女性の愛憎の半生に違いなかった。二篇の告白には、荒っぽい文章の言外に、私のハントを希望していたが、それは彼自身が、私のSMプレイ振りを見た欲望を、はっきり示していた。病床に伏す半ば自由のきかぬ体の歯痒さから、心は、意馬心猿に燃え立たせ乍らも、如何ともする術もなく、飼育し奴隷妻にした筈の弥栄夫人に養ってもらっている不甲斐なさが、己れ自身の代替者として、私という人間を求めているようであった。プレイ出来ぬ我が身の代わりに、私にやってもらいたかったであろう。そのエゴイズムさと、船乗りや開拓者の群

れに混って相当荒れすさんだ生活をしているのを文中に感じて、私はフトうすら寒いものを感じた。

弥栄夫人は元来はM性ではないが、激しいSの性格の和泉五郎に、無理矢理に、否応なくMに仕立て上げられたのではなかったか。

女の急所の乳房に、一生涯消えぬほりものをほどこされ、それも暴力によって彫られた結果、やむなく彼の言いなりになって、悲しい業に泣いているように思えるのであった。

謂わばこの夫婦は、相互理解の上の、SMの夫婦プレイではなく、彼の一方的な、強引な愛虐の果ての、SM夫婦といえるのではなからうか。

一女性の一生を台無しにした男の酬いといえば、和泉五郎に対して、少し苛酷すぎるかもしれないが、皮肉にも今その女房の働きで細々と生き長らえているということは、何か悲しいカタストロフを感じさせるのである。

和泉五郎は流石に観念したのか、編集部によこした短い便りには、自分自身を押しつけてはいなかった。佗しい病いの床で、秘かに隠し読む奇クに、せめてもの悶々の情を訴えあわよくば、私という人間に会いたかったのであろう。

彼の心情を察すると、何かそくそくとした憐びんの情が湧いてくる。私はいさぎよく、彼に会う決心をした。ハントするもよし、出来なくてもいい。とも角、会って、数奇にみちた彼の半生をきき、慰めと励ましの言葉の一つも贈って、意気銷沈の彼を勇気づけてやりたいと思いいったのである。

× × ×

名神高速道路、西宮インターから阪神高速道路へと入れば、神戸は忽ちである。山の手のK病院を訪れたのは、小春日和の続く、十月中旬の第二土曜日であった。

目指す病室の入口には、八人ばかりのクラシケの名札がズラリと並んでいる相部屋である。これではオチオチとSMバナシも出来そうになかった。

扉を開くと、一斉に克蘭ケの目が私に走る。フト後めたい気持ちにかられたが、勇を鼓して

「和泉さん、いらっしゃいますか？」と声をかける。

入って右側の列の寝台の、入口から二人目の男性が、物頼げに体を起こした。

「和泉は私ですが？」
不審げな面持ちである。ベッドの傍らまで

近づき、声を潜めて

「辻村です、お分かりになるでしょうか？」

やつれて蒼白の面長の顔に無精髭をのばしたその人は首をひねるようにして、じっと私をみつめていたが、呀っという表情に変わって、みるみる蒼白の顔に血の気を昇せると「ああ、あの辻村さん」

と、びっくりしたようにマジマジと私を凝視した。未だ三十才にならぬ筈であったが、やつれと苦勞のかけが表情ににじんで、一寸見には三十七、八才にもみえる老化である。「分かりましたか？」

他の患者に素性を知られては、何かと又、都合も悪からうと、余計なことはいえない。相手の出方を待つだけであった。首をしめつけるように固定したギブスが痛々しかった。

「ハイ、辻村隆先生でしょう」

「先生はよして下さい。気軽に辻村とよんでいただいて結構ですよ」

「まさか来ていただけるとは、夢にも思いませんでした。よくお分かりになりましたね」

「お葉書で知りました」

今こうして彼と直接会ってみると、手記に感じたような荒々しさや、やくざっぽさは全然みとめられなかった。病身のやつれからく



る弱々しさが、彼のすべてを支配していた。唯、吊り上った短い眉が、彼の利かぬ気の鋭さをチラリと覗かせているようであった。

「ムチ打ち症に加えて、カリエスなんです。もう廃人です。どうにも仕方ありません」

自嘲めいた、佻しい笑みを泛かべて、そういうと、辺りを見廻していたが、

「小声なら大丈夫でしょう。ズバリ言わないことにして話して下さい。小さい腰掛けです。隅にありますから、どうぞ——。何もお構い出来ず済みませんねえ」

「いやいやとんでもない」

私は腰を降ろすと、持参したミカンの大紙袋を、そっとベッドの傍らの、小さい置台にのせる。

「何か？」

「いや、つまらないものです。ミカンでもと思いまして」

「何から何まで——」

和泉五郎の目のフチがポツと赤らむと、うっすらと涙がにじみ、瞳の奥がキラリと光った。身寄りとして少ないのか、他の入院患者に比して置台のあたりの身の廻り品も乏しく、見舞品もことさらには見当たらなかった。彼は懼らく人恋しさ人の情に餓えているに違いなかった。

「奥さん、働いていらっしゃるんですってねえ」

「ええ、満足な勤め先もなく、三の宮の食堂で働いています。夜は仕立ものなど少し内職したりしていますが、嘸かし大変だろうと思います。随分はそくなってやつれました」

「大変でしょうね。入院のあなたを抱えて、

随分、御苦労なこととお察します。どうもこんな雰囲気では何もハナせませんね」

「お恥かしいところをお見せしまして……」

「お葉書や、書かれた手記もあって、一応どうかとお伺いしたのですよ」

「本当はどうなっても構わないから、御一緒にしたいのが私の本心です。でもロクロク歩けもしないこの姿に、あきらめました。辻村さんのお書きになったものを読ませていただいで、せめてもの愉しみにしたいのです。叶えていただけるでしょうか」

「私はいいいですが、奥さんがどう仰有るか」

「万一の夢のような、こんな日のくるのを期待して、家内にはいつも口が酸っぱくなる程頼んで、承知させてあります。辻村さんを信じて私は一切、構いません。どうぞ御自由にお好きな様になさっていただいて結構です。痩せて、やつれておりますから、何の魅力もないでしょうが、例の方（ホリモノ）を指すのであろう」の、他人に真似出来ぬそれの一つ見てやって下さい。どんなことにも耐えると思います。是非、お願いしますよ」

私は黙々と、うなづく。

和泉五郎は更に声をひそめて、

「実は私の体がこうなってから、もう二年近

く、夫婦の交わりが途絶えています。或いは燃えると思いますが、私に遠慮せず、充分に飲ばせてやって下さい。それが男性失格の私の、家内に対する、せめてもの思いやりなんです」

暗然として、私はうなされたように、ひそひそと呟くようにいう、彼の口許をみつめていた。

「本当に、本当にいいんです。どうぞ——」

「いや、それは……」

「妻を独占しようとして無茶をした私の、せめてもの罪償いですよ。恐れ入りますが、食堂の方へ電話して、ここへ呼んでいただけないでしょうか——。早退けして、すぐ来いって」

「いいんですか」

「この日を遁して、チャンスはないのです。今日でなくても構いませんから、私の前で約束してほしいのです」

勢いに気圧されて電話番号をきくと、廊下に出て、看護婦控室横の赤電話のダイヤルを廻す。

「ハイ、〇〇〇ですが——」

と、勢いのよい食堂名を告げた、若い声が耳に飛び込む。弥栄さんの名をいつて呼び出

してもらうと、しばらくして、落ちついた声がひびく。

「突然ですが、辻村というものです。御主人をお見舞に参りましたら、すぐ病院の方へお呼びしてくれとのことですので——」

「承知致しました。すぐ参りますから、二十分ばかりお待ち下さい」

事務的な平静な口調がかえり、私はそれ以上いうことなく電話をきる。病室に戻ると

「どうでした？」

と意気込んで彼はきく。

「二十分ばかりしたら来るそうです」

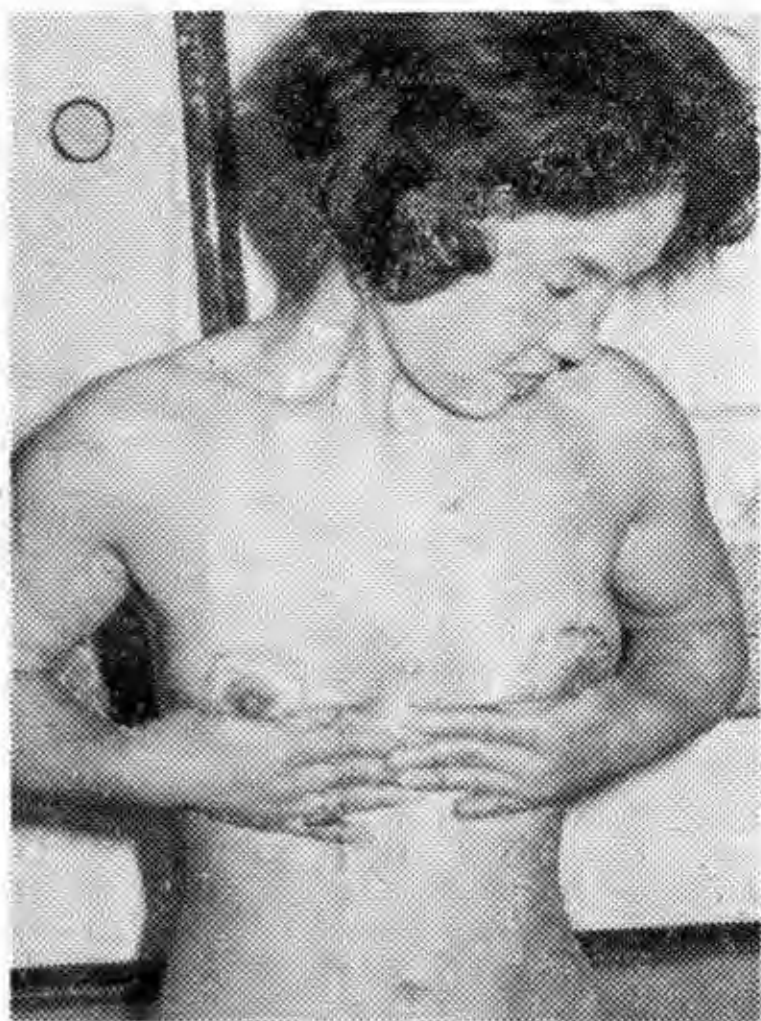
「ああ、よかった——。こんなクスリくさいところですが、お待ち下さいますか」

「ええ」と、腰を落としたが、待つ時間は長い。私はSM的な話を避けて、彼の自動車の故のこと、病状のことに話題を変えて、その合間合間に、チラチラと彼の過去や、素姓経歴などを、きき出していった。

岡山生まれの彼は、若くして両親を失い、孤独にたえかねて、兄の許を飛出し、十五才頃から数年間、開拓地にもぐり込んだり、仲仕をしたりして、荒れたその日暮しの生活をつづけ、友人の契めで内海航路の貨物船に水夫として乗り込み、転々して、怪しい密輸船

まがいの外国航路の船で、渡洋したりしている。人の情に餓えていた彼は、横浜の小料理屋で、たまたま知り合った弥栄さんの、思いがけぬ親切に、若い青年の情愛を傾け、二才上の彼女を口説き落として、横浜で同棲生活を送るようになる。彼女にしてみれば、若い孤独な船乗りの、ひたむきな求愛に、ついほだされて、フト胸をくすぐる母性愛的な愛情を覚えたのかも知れなかった。

友人のアパートの一室で手籠め同然に、がむしゃらに関係をつけて、その友達の世話で四帖半一間のアパートをやっとみつけてもらうと、ひとかど夫婦気取りで暮し始めた。時に彼は二十一才、女は二才年上の二十三才であった。生活のため、弥栄は同棲の後も小料理屋を、やめない。男は船に乗ると、短くて一カ月、長い仕事だと半年以上も帰ってこないないので女が心配でたまらない。もともと幼少よりS気の胚胎していた彼は、遂に思い切って、弥栄の体に逃げられぬよう浮気されぬようにと、あの様なホリモノを自らの手で彫り込んだのであった。元来が絵が好きで独りで嗜虐的な絵を描いていたが、弥栄と一緒にあって以来、想像上の絵の産物を、弥栄をモデルにして、試みるようになる。果ては、



船乗り仲間に教えてもらった、手製のホリモノを彫るようになる。

弥栄の腋毛を剃って、腋の下に、「ごろう命」と彫り込んだのが最初である。

刺青に憑かれた彼は、本名のKを名乗らずイレズミの「レ」の字を抜いて「イズミ」と名乗るようになったが、船乗り仲間では、通称ゴロちゃんに通っている。

手始めに彫り込んだ、腋窩のほりものも、弥栄の腋毛が伸びるに従って、その字を没してしまった。これに味をしめて、次は秘所の剃毛を行ない、ごくちっぴけな相合傘を彫り

ごろう・やえと字を入れる。これらの刺青には、彼のS気を昂揚させるかのように、いつも緊縛がともなっていた。

緊縛の種類は、多種多様だったが、そこまでは場所柄、くわしくは聞き出せなかった。毛が伸びたら隠れて分からなくなってしまう。これはオレの愛情の表現だと独り喜んでいたが、よく考えてみると、隠れてしまえば、ホリモノをして浮気封じをした意味がなくなる。そこで、女にとって、一番よく見える、しかも女の急所といわれる乳房にホリモノをする決意をしたというのである。

幸か不幸か、そのホリモノのお蔭で、和泉弥栄は、彼を捨てて、何処へも逃げてはゆかず、病身の夫を抱えて、健気に働く女と変貌していた。このホリモノなかりせば、日々の苦勞にたえかねて、或いは彼を捨てて、遁れ去ったか、蒸発していたかも知れない。

そんな意味の事を、遠廻しに、或いは私にのみ分かるような表現で、彼は辺りの同室患者の顔色を窺いながら、小声で話した。

「どうもお待たせしました」

低い声に振返ると、はにかみの笑みを泛かべて、和泉弥栄が立っている。あわてて腰を浮かすと、

「どうぞ、そのままです——」

といい乍ら、温かいコーヒー牛乳を三本、袋からとり出して、私や夫にすすめた。

「分かってるね」

夫は、哀願するように妻を見上げる。軽うなずくと、私に視線を戻し、

「ここでは話も出来ませんから、面会室へ参りましょう」

と冷静な表情で、私を促すのであった。確か三十才をこした許りというのに、この落着きは、中年の妻を感じさせる。彼も彼女も本当にこの年令なのだろうか？ フトそんな疑念が湧く。この疑念はあとになって、すぐ私の想念の正しかった事が判明した。

いい具合に、面会室には、年老いた母親らしい人と、四十年配の女の患者が、なつかしように語り合っている一組だけであった。

私に椅子をすすめ、自分も壁際の椅子を運んで来て坐ると、弥栄は静かに改まって頭を深々と下げていった。

「主人が本当に御迷惑なことをお頼みいたし



まして、申しわけございません」
 「いいんです。私の意志でお見舞いに來たのですから——。さぞかし大変でしょうね」
 「頼る人もなく二人っ切りなもんですから、今更、放ってもおけなくなりまして……」
 「御主人は三十何才とか仰有ってましたが、少しふけてみえますね」
 「長患らいのせいでしょう。三十二才なんですのよ」

「じゃあ、あなたは三十四才？」
 「そんなこと主人が申しましたの？」
 「手記では二才上の姉さん女房とか、書いてありましたから」
 「エトがイノシシなんです。どうでもようございませうけど——」
 頭で年令をくると、もう一才上の三十五才ということになる。和泉五郎にしてみても、手記では、妻を三十才という風に書いていたが、やはり幾分は若く思わせたかったのである。こんな素っ破抜きは、必要だったかも知れないが——。
 「いいんですか、御主人の仰有ってるようなこと——」
 「もう、私の顔さえみれば、そのこと許りなのです。こんな貧弱な体で、その上、生活疲れた、こんな私のようなものでもおよろしければ。唯、私の個人の意見ですと、とても人様にお見せするような体でもなし、もう羞かしさと劣等感で一杯なんです」
 うつむいて言って弥栄はポツと頬を染め、ハンカチで、そっと顔を蔽った。確かに本人の口からいう通り、彼女には、世帯やつれの佻しさが、しみついていた。手も皮膚も荒れている。それでいて、今、そっと顔を蔽った

女らしい羞恥心に、私の心は激しい刺激を覚えたのである。
 美しくもなく、体もやつれてはいるが、その女らしさが、泥沼にまみれても失われていなかったのが尊かった。
 黒目がちの大きい双眸、理智的な広いひたい、微笑むとかすかに口辺にくぼみが浮かび白くよく揃った歯列は、稼業に似ず、清潔な印象を与えた。
 「若しお願い出来るのでしたら、光栄です」
 「まあ、光栄だなんて。私のような者に」
 「いえ、本当なのです。お噂にきき、写真で拝見した、あなたの乳房に咲く刺青の桜を、じっくりとこの目で眺めさせていたいただきたいのです。報酬と申す程の額でもありませんが幾分のタシにはなるでしょう。是非お願いしたいのですが」
 「そう仰有っていただきますと、穴があったら入りたい気持ですわ。御覧になって落胆なさりませんように」
 「とんでもない。じゃあ、いいんですね」
 弥栄夫人は、そっと微かにうなずいた。
 「ああ、よかった。御主人をお見舞いたした甲斐がありましたよ。御都合はいつがよろしいでしょうか」

「食堂の公休日は月曜日なんですけど」

「では、あさっての月曜日に如何です」

「主人の容態が急変しない限り、私は差支えないと思います」

「一度、伺っていらっしゃいますか」

「そうですわね」

彼女はそそくさと立ち上ると、面会室から消えた。十分近くも待ったであろうか。平静な面持ちで戻ってくる。

「構わないそうです。辻村さんの仰有る通りになって来いっていいましたわ」

弥栄の私をみる目が心なしか浮々とし、淡い情緒が双眸にしっかりと流れていた。或いは彼は、絶えて久しいセックスの断絶の件にまで言及したのではなかったか。あからさまに口に出しては言わねど、仄かに燃える双眸の輝きの色が、それを物語っているようであった。

「私、近頃すっかりやせまして、余り縄には強くないんです。出来ますれば柔らかい布か何かでお願いしたいんですけど、いけないでしょうか」

「心得ました。充分に考慮します」

月曜日の正午頃、彼女の間借りしている水道筋近くの、灘区役所前で落ち合う約束をし



て私達は病室へと引き返した。

和泉五郎は、哀歎交々の複雑な表情で私達を迎えた。

「あさってだそうですね」

「ええ、拝借します」

「期待しております。可愛がってやって下さ

い」

「御期待にそえるかどうか分かりませんが」

「ハントが愉しみです」

「元気になって下さいよ。いつか一緒の日をつくりましょうね、是非共」

「ハイ、そのためにも頑張ります」

彼の声は上ずり、激しい昂奮のさまが、ありありと視てとれた。

病室を辞した私を送って、弥栄夫人は病院の玄関口まで、ついて来た。

「じゃあ、約束通りにね」

「ええ」

目顔でうなずき、久しく忘れていたかに思える艶冶な、過去の水商売の色香が目許に漂った。女にとっても、私とのプレイのひとつきが、このうつし世の、苦勞の日々のなりわいを忘れさせる、愉しい一日に思えたのであろうか。徐行させて遠ざかる車のバックミラーに、いつまでも見送って立ちつくす女の細身の姿が灼きついていた。

× × ×

年々歳々、この日になると、飽きもせず繰り返しているのが、赤穂浪士の物語である。

十二月十四日、討入りの日の朝、女体に討入るべく、私の車は神戸に向かって軽快に走り

つづけていた。

約束の時間の正午より早く、十五分前頃、灘区役所の前へ到着したが、既に和泉弥栄は時代おくれの長いオーバーに身を包んで、うそ寒い姿で佇んでいた。木枯しに吹かれて、髪が乱れて、そそけ立っている。

私の車を見かけると、彼女は落ち着いた足どりで近づいて来た。黙礼すると、ドアを押し開いた助手席に黙って坐る。

「お食事まだなんでしょう。御一緒にするつもりで私はとっていいんですが——」

「朝食が遅かったので、あまりおナカ空きませんけど」

「よかったら、つき合って下さい」

「ええ」

言葉少なに、彼女はうつむく。

私はこれといったあてもなく、生田町の方に向かって山手通りを走ってゆく。王子動物園を右にみて、やがて和泉五郎の入院しているK病院の建物を過ぎる。彼女はチラッとフロント硝子越しに建物を見上げたが、無表情であった。

「寄ってゆかれますか」

「いえ、いいんです。お目にかかる前までおりましたから」

「何か仰有っていましたか？」

「病室では何も話せません。何かブツブツしきりに申しておりましたが、気にしないことにしております」

とりようによつては妻の言葉として薄情の様にも聞こえるが、長年、病弱の夫を抱えて

孤軍奮斗する彼女にとっては、今更、新しい感懐とて起こらないのであろうか。

駐車場のあるレストランをみつけ、車を止めて入ったが、ランチタイムで階下は満席である。ラセン階段を昇って階上へ行くと、窓際の奥まったテーブルを占める。

この店の特長というランチを頼んで、私達は机を隔てて正対する。どことなく瘦れた、うらぶれた感じが和泉弥栄の全身につきまとっていた。うっすらと薄化粧はしているものの、生気のない表情には、詮方なげな諦観に似た自嘲がにじんでいた。病身の夫の、たつての希望と、幾許かの報酬によって己むを得ず、見知らぬ赤の他人の前で、屈辱と羞恥を



曝さねばならぬわが身が悲しかったのである。半ば強制的に施された、一生消えぬ烙印の運命に、彼女は忍従と屈辱の半生を過ごしてきたものの、今その烙印が、奇しくも私という人間の、興味の対象になっていることに女心は複雑に喘いでいる様であった。

この刹那的なひとときを、イヤイヤ過ごすのも、与えられた快楽の一刻として過ごすのも、すべては本人の心次第である。私にしても、詮方なくつき合って貰うより、せめてものひとときを楽しみ気持で過ごして欲しかった。

毎日々々が貧苦と心労の連続であれば、このひとときを愉しく過ごせといわれても、そ



れは無理かも知れない。精神的、物質的にゆとりがあつてこそ、プレイの甘い陶醉にひたりえても、明日をも知れぬ不安定な心痛の鬱積した今、そうした、たとえ、一刻のかりそめの陶醉にしろ、芯から愉しく酔える道理もなかったであろう。そうした弥栄の心境が、手にとる様にわかりつつも、私としては、何とか、これからの数時間、プレイを通じて、

女の欲びを味わってもらいたかった。

その時、天啓の如くひらめいたのは、彼女が、嘗つて、いな、いまでも水商売に勤めてゐることである。小料理屋に勤めていたのならその仕事柄、幾分のアルコールは摂取出来る筈である。「酒は憂いの玉簪」という、古言もある通り、酒の酔いによって、暫しは現世の苦しみも忘却するかも知れないと思いついたのである。

「少しは、お呑みになるんでしょう」

「ええ、でも昼間から——」

「私ものめる口です。しかし運転がありますので遠慮しますが、あなたはどうぞ、おのみになつて下さい。それで今の悩みが、少しでも忘れられたら幸いです」

「どうぞ、もう御心配なさらないで」

「いやいや、のんで下さい。ビール？ それともお酒？」

「じゃあ、お言葉に甘えて一口だけ、お酒をいただきますわ。本当にお氣を使つていただいて——。女だてらにと、さぞかしあきれられたことでしょう」

「いや、それどころか、私も本当は御一緒にのみたいんですよ、車さえなければね」

「随分わきまえていらっしゃるんですね。お

えらいですわ」

「当然のことですよ。車を運転する者すべてが遵守すれば、もっと交通事故は減るのですからね」

私は給仕に日本酒を注文した。そんなところから話がホグレて、最近、酔っ払いの無暴運転で、トンだミスを出した、漫才界の横山やすしの、旧悪露見の世間話などして、親しみ易いムードづくりに努めていた。

透明の一合瓶の特級酒を、小グラスに次々とついで契める。根が強いのか、契められる俥に一合瓶は早くも底をつく。ランチを運んで来たのをシオに、もう一本、追加をする。

「まあ、お言葉に甘えて、すっかり酔つてしまいましたわ」

酒が心を弾ませるのか、思いがけず浮々した声で言つて、それでも彼女は二本目を辞退しなかった。頬にポツと赤味がさし、フォークとナイフを握る女の手付は、軽やかであった。正味二合の昼酒は、どうやら彼女の心を解放したらしかった。思いついた私の作戦は図に当たった。

「私もどこかに落ち着いたら、帰るまで時間がありますから、少しは安心してのめるのですが、何なら持ち込みましょうか？」

酒で心の憂さを拭払するハラで、彼女の相当イケる口を見越して提案する。

「そうですわね。私はもうダメですけど、どうぞ——。私一人のんでいて、何だか悪いみたいですよ」

あまりオナカが空いていないといった彼女が、盛り沢山のランチを殆ど綺麗に平げてしまった。その旺盛な食欲が、彼女にやる気十分の心を起こさせていることを、私は逸早く見抜き、女は時に応じて、鮮かに変身出来るものであることに感心したのである。

「いろいろと、貴女に伺いたいことがあるんですよ」

「あら、どんなことですか？」

「こんな場所で、お訊ねしてもいいかな」

「私は一向、構いませんけど——」

「何とっていいか、つまり貴女と彼との繋がりなことなど」

「私が夫に虐待されたこと？」

「虐待されたと思っっているんですか？」

「あの人は変態なんです」

「その言葉はイヤだなあ」

「そうですわね。も夫ががそうだと思いたくありません。言い換えれば徹底的なサジストなんです。しかも一方的な……。私は今でも



自分が虐められて飲ぶ女だとは思っておりません。夫が無理矢理に、そんな女にしようとしても、かたちはそう見えても、私の心までは変えることは出来ません。あの人は私を虐めたくて仕様がないらしいけど、私は自分からそんなことを求めたことは一度だってないのです」

「どうして逃げ出さなかったの？」

「逃げ出しました。この俤では殺されると思って、二度ならず三度も逃げたのです。その都度、夫は必死になって私を探し求め、又、連れ戻されてしまうのです。そして死にそうな折檻。もうこれ以上、逃げたら、いつかは殺されると思って諦めました。私は夫の、度はずれた行為によって、子供を産めない体になり、しかも御存知の様に、胸の、もっともよく見えるところに、刺青されてしまいました。これじゃ逃げたくても、もうどうにもならないじゃありませんか」

「今なら、いつでも逃げられるんじゃない」

「入院して、私一人を杖とも柱ともたのむ、あの人を捨てて逃げられますか？ 私はそんな薄情な女じゃありません。もし別れるなら、あの人を、すっかり良くなってから別れますわ」

激しい女の心意気であった。遁れよう遁れようとし乍ら、夫が病いに倒れた今、その夫を捨て去るに忍びない女心は痛い程、分かるのであった。それは古めかしい封建思想の、愛憎のしがらみであろうが、脈々として女的美徳が息づいていたのである。「今こうして私と会っていることだって、貴女が断わろう

とすれば、断られる立場にあったのじゃないですか。何故、いやなら断わらなかったのです」

「夫の不注意の、身から出た錆とはいえ私達は、もう二年近く夫婦らしいこともありません。男の機能の消滅した夫の口ぐせのようにいい続けた夢なのです。せめて一度は夫の願いを叶えてやってもよいと覚悟したのです。でも、あなたにお目にかかるまでは、実の処私の腹は、きまっておりました。病院でお目にかかった第一印象が、この人とならと、私に咄嗟に腹をきめさせたのです」

「光栄の至りです。私という人間を御存知なのですか——」

「お名前は、うすうす存じておりました。誌上ですけど……。すごく腹立たしいことがあって、夫が溜めて大切にしていた雑誌や写真を、すっかり焼いたことがあります。それまでは時々、夫がどんな本をよんでいるのかと、隠れて拾い読みしたりして知っておりました」

「彼が横浜で浮気した時でしょう？」

「あら、彼が、あなたに喋ったのですね」

「いえ、彼の手記が奇巧に発表されて、そんなことが書いてありましたよ。その時の腹立

ちで、三日間、責め続けたとか」

「あの時は、もう殺されると思いました」

「そんな時の彼の行動を、くわしく聞きたいのです」

「私の虐待されたことが、そんなに興味ありますの？ あなたも変わった方だわ」

私は苦笑する。弥栄はハンドバッグからロングピースをとり出して火をつけた。煙草を吸う手付が、どことなく仇っぽい。

「私が食べるものもなく、おナカをペコペコに空かせて、知り合いから僅かばかりのお金を借りて、やっと露命をつないで、夫の航海の帰りを待っているというのに、あの人はママに上陸するなり、以前からなじみだったらしい、つまらぬ女のアパートで、四、五日もいつづけして、首を長くして待っている私の心も知らずに、女に全部お金をくれてやってスッテンテンで戻って来たのですよ。これが怒れずにはいられましょいか」

「随分、ひどいですね」

「だからカッと逆上して、手文庫に大切にしまっていたものの全部を焼いて腹いせしました。それから三日間というものの、体中、青ぶくれになって腫れ上り、全身、傷まみれの、もう息もたえだえの虐待です。とても口でい

えたものではありません」

「その事も書いていましたよ」

「恥知らずなんですわ。よくそんなことが又ケヌケと書けたものです」

「人間の考えつく、あらゆる方法で、縛ったり、吊ったり、殺さない程度に虐めつくしたとありましたよ」

「その通りですわ。狭いアパートですから、





私の悲鳴が聞こえぬように、のどの奥までつめものをして、頬がひん曲る程、口をきつくくくって、ところ嫌わず、叩いたり蹴ったりです。その上、身動きも出来ぬよう縛り上げて、台所のタタキへ転がし、ザブザブと何十杯となく水をぶっ掛けるのです。それが寒い

三月の始め頃です。凍え死にそうになった私を曳きずり廻し、あたたくくしてやるといって、顔中に熱い蜆のしずくを垂らし、私の両目を蜆のしずくで埋めつくし、ダンスの環に逆さに両足を開いてしぼりつけられ、灼けつくような熱い熱い蜆のしずくを、一杯、流し込まれました。襖の鴨居に両手足を縛りつけて吊るし、その下へ布団を敷いて、私の苦しむのを見上げながら、寝てしまうのです。ライターの火で、おしりを焼かれたり、すっかり毛を焦がされたり、もうとても人間のやれそうもない虐待をつづけました。口汚く私をののしり酔っ払っては、返せっ！返せっ！と怒鳴り乍ら、殴るのです。あの人の、執着の深さを、イヤという程、思い知らされました。そのくせ、そうして私を虐めつづけていることの行為に、酔ったようになっていのです」

酒の勢いもあってか、弥栄は饒舌になっていった。私という相手をみつめて、日頃のウツプンが堰を切ったように、いつしか声も大きくなって喋りつづけた。隣席のアベックが私達を興深げにみつめている。辟易して、「いや、凄いですね。この続きは車の中で聞きましょう。じゃあ、ポツポツ」

こちらから誘導しておきながら、酒の勢いを借りる弥栄に気圧されて、ソワソワと席を立つ。弥栄は立ち上って軽くよろめいた。

手を貸して階段を下り、車にのり込む。

福原あたりまでくると、連れ込みホテルも多い。酒店で止めて、二合瓶と袋入りの肴を買い込み、行き当たりばったりとその一軒に飛び込む。手を組んで仄暗いホテルのフロントに立つ。心得た若い娘が、先導して一室に事務的に案内してくれた。

× × ×

酒が弥栄の理性を麻痺させ、ともすれば崩れそうであった。鬱憤ばらしの対象を私に見つけ、苦しきことのみ多い日々のなりわいから逃避して、乱れようとしているのか――。

「ああ、こんな気持、久し振りだわ。毎日クサクサしていて、やり切れないのよ。あなたお風呂へ入りましょう。よかったら背中、流してあげる」

媚を泛かべて、女は開放された、まなざしで私を見上げる。その瞳の色に、すべてを許容した女のナマナマしさが息づいている。

川路叢子の豹変振りに驚いた私であったが和泉弥栄も又、一時間前の彼女とは、ガラリと変わった、なまめかしさを全身にただよ

せた豹変の媚態であった。それは夫への復讐の様にもとれ、抑圧されていたオンナをとり戻した本来の姿のようにも思えた。人妻なればこそ、崩れるとなると、女のサガが人一倍に激しく露骨に燃えて、私を求めていた。

和泉弥栄は、私のプライベートを何一つ聞こうとはしない。路傍の行きずりの人であっても、心の琴線に触れた男性なら、その気になれるものなのだろうか。それは黒い疑惑となって、弥栄の女独りぐらしの今の生活に、怪しい懸念を抱かせたのである。

「脱がしてあげましょうか？」

媚すうかべて女は私の服に手をかける。

「いや、自分で脱ぎます。あなたもどうぞ」

なる様になった気で裸になると、既に八分目、溜まった湯舟に飛び込む。女は前身を猥らに露出させて、浴場に入ってきた。二人入れば、忽ち湯のどろこしそうな小さい湯舟である。しかし無理に入れなくもない。

立ちはだかる弥栄の乳房に、私は見た。ありありと鮮かに浮き上る双つの花紋を——。乳首を花芯に見立てた、八重桜の花びらが、薄鼠色に、くっきりと乳房を彩り、双房の谷間の凹みに、菊花に浪をあしらった、ほりもの、その未完成の浪跡をとどめて彫りつけら

れていた。

女は羞恥しない。無言で隙間に割り込んでじりじりと体を湯に沈めてゆく。湯はドウドウと音を立てて溢れこぼれた。

「ごらんになった？ 私の胸——」

「見ました」

「どうお思ひになって？」

「素人彫りにしては器用ですよ」

「いえ、こんなところへ彫りつけたこと」

「生まれて始めてみました。女人の彫物は何人かみましたが、乳房の刺青は始めてです」

すっかりおっぱいがシボみました。これを彫った頃は、私も若く、胸も張り切っており

ましたから、それなりに見られたものです。

体がこの通り細ってやつれてから、醜くなる一方です」

私は背後から、か細い女体を、そっと抱きしめた。女は、なすが俚に任せて、微かに喘いだ。湯の中にたゆとう白い手が、妖しく映る。

「あなた——世の中にはヘンなこともあるものですわね。夫公認の浮気だなんて……こんなこと、ついぞ考えてもみませんでした」

「今日のことについて、ご主人はどう仰有ったのですか？」

「縛られて、いい写真をとって貰えて。その写真が欲しいそうです。その結果、どうなっても許してやるというておりました。あなたになら何故、許したのでしょうか、あの人」

私は黙して応えない。いつしか指先が胸先の花卉に伸びていた。

「ああ、思い出さないで……。ねえ、仰有って、どうして嫉妬深い主人が許したの？」

「私にも分からない」

「その気になってもいいかしら、本当に」

「分からない。あなたの心次第だ」

「意地悪ねえ。私に何を云わせようとなさるの？」

「今のあなたは、彼が入院中で自由の筈でしょう。私以外でも、あなたがその気になれば誰も分からない」

いきなり弥栄は、振り向きざま私の頬を発止と打った。呀っと、打たれた頬を押えんと弥栄は、湯にすくくと立ち上った。

「見てよ、これを、これを、これを——これでも誰かを相手に出来ると思う？ こんな体で、こんな姿で、誰が相手にしてくれるの。あんまりだわ」

弥栄は胸を突きつけ、腕をあげて腋窩を指し、つきつけた。指先であばかれるそこにも

ここにも、和泉五郎の言葉を裏書きした如く素人くさい彫ものの跡が、あきらかに烙印されていた。

「御免々々、つい勘ぐったりして」

氣勢に圧されて、私は詫びる。男台無しの恰好の悪さである。

「普通の女なら出来ることも、私には出来ないの。誘惑はあるわ。けれど、いざとなると羞恥にまみれて尻込みしてしまうの。こんな刺青だらけの女だったのかと思われたくないから——」

流石にやり過ぎたと思ったのか、弥栄の鋭い矛先は鈍ってきた。

「御免なさいね、いきなり叩いたりして」

「いいんだよ」

ニヤッと笑うと、女は立った俣、迫って来た。隠れていた相合傘が、ごろう、やえの字を隠させた。

擦った濡れた感触が私の唇を刺激した。

この女に、Mというよりも、むしろSに近い行動を感じて、軽くとまどい乍らも、私にも又、内潜する何パーセントかのM性が、彼女のこの唐突の行為を甘く受け入れていたのである。

安っぽいレモン石鹸の泡の匂いを残して、



私達は部屋に戻る。

全裸の俣、部屋の中央に据えられた、ホームゴタツに足を差し入れる。赤外線の高い火の下で、二本の足が戯れていた。

二合瓶で二人だけの、ささやかな酒宴が始まる。もう女は遠慮しない。湯呑みの茶を灰

皿に捨てたあとへ、なみなみと酒をついだのをぐいと一息にのみほし、熱いほてった、まなざしを私に投げかけた。

忘れていたものを急拠、呼び戻した女体。

それは、湯舟の戯れで既に確認済である。この俣で、宴果すると、私のハントの目的であるところのフォトは、一枚もものに出来そうにない。そのことは、私のフォトを鶴首して待つ、和泉五郎への、大きな失望にもつながっていた。ホームゴタツの中の、女の足指がしきりに何かを訴え、求めるかのように、くねくねとうごめいているのが伝わる。その場の成行では、女の媚態に負けて、私はごく平凡な、一人のセックス人間になりそうな気配である。そのあとの白けた、虚脱の状態ではカメラを構える気も起らない。やはり撮るものはとり、プレイしたあと、しかるべくして成行に任ずるのが順当のように思えた。それには、この裸身がいけないのである。女の誘惑に負けそうになった心を取り直して、私はソツと足を抜くと、傍らに投げ捨ててあった衣服を、素早く身につけ始める。

「あら、乱れ簞に浴衣ありましてよ」

「ええ。少し風邪気味なので、一応着ます」
風邪気味は本当で、やっと治りかけて来た

ところである。私の気持は着服と共にシャンとしてきた。手早くカメラをとり出し、ストロボを装填する。和泉弥栄は先日別の別れ際、柔らかい布や縄を希望していたので、娘の婚礼の荷に使った長い晒布を持参し、縄も比較的柔らかい、使い馴れた斑ら縄を持ち込んできていた。

和泉五郎の強烈きわまる虐待にたえ続けてきた女性なれば、他のハント女性以上に強行してもいい筈であったが、わざわざ事前に頼んでいるものを、無理して気分を損ねてもいけないと、気を配ったまでであった。しかし弥栄の告白をきけば、そうした寛容など毛頭不要であった事を知った。それこそ、硬い太縄か、とげとげしい麻縄で、雁字搦目に力限り緊縛しても可能な筈であった。初めての第一回目だけに、一応は彼女の希望にそったものの、彼女は未知の私を、或る程度、警戒し、その言動であったかも知れない。

準備を終わってホームゴタツを部屋の片隅に立てかける。中央に敷いた、コタツの敷物は、あがるのも面倒なのでその俤にして、三脚にカメラを据え、長尺レリーズをとりつける。コタツを取り去られても、ほろ酔い機嫌の弥栄は、依然として、コタツに足を伸ばし

たその俤の姿を保持していた。暖房を奪われて、幾分ふてくされていようにもみえる。「ああそうだ、すっかり忘れていたわ。夫から、辻村さんに渡してくれて、ことづかっていたの。私をモデルにして描いた絵だと思うけど」

弥栄はフラフラと立ち上ると、大きい手提のハンドバッグの横から、円く巻いた、筒になった紙包みを私に手渡した。開いてみると三枚のデッサンの絵が入っている。すべてに

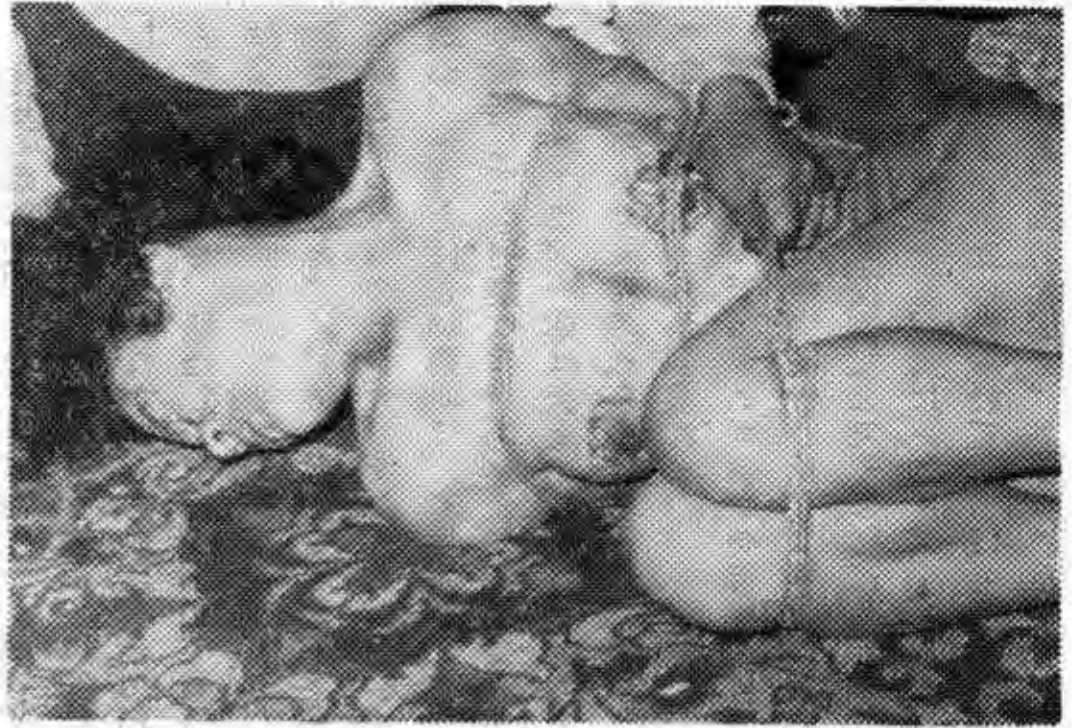


「辻村氏に贈る」とあって、裏に註釈がついていた。

一枚は、弥栄の秘所の細密な拡大図で、色彩を施してある。

一枚は、女体バーゲンセールと銘打って、緊縛された数人の女性があちこちの台上に立って、それぞれ値札をつけられ、禿頭のおやじが品定めをしている。陳列ケースに、大人の玩具や性本、奇巧が並べられ、全裸の女の値段の横に但し書がついている。曰く、特価品——経験豊富、飼育済、少々きずもの。曰く、お買得品——新品同様、老人の玩具に最適。曰く、掘出しもの——年十七才、調教完了、M性強力、若者向etc……。とふるった但し書で、緊縛がそれぞれ違っている。

一枚は、愛妻緊縛図とのみ書かれてあり、乳房に桜を描いてあるのは、弥栄をモデルにしたのであろうか。バーゲンセールはすべて露出で描いているが、この絵は隠れており、しかも現実の弥栄とは、くらべものにならぬ位に遅く、ポリウム一杯に、描かれていた。裏を返すと（妻もかつては、この様にいい体をしていました。すべては、夢の又夢です。これは入院前の徒然に、床に寝そべり乍ら描いたものです。拙筆ですが謹んで進呈し



ます。御笑納下さい」とあった。

「これがあなたですって？」

絵をかざすと、皮肉な笑みを泛かべて、
「私が働いている間、退屈なものですから、
病人のくせして、こんなばかり書いてい
るんですよ。全部破ってやろうかと思いま
した。病人で可哀想だからと我慢しまし
た。下

手な絵を差上げて本当にダメなんですわ。でも今の夫なら、これしか差上げるものもなかったんでしょね」

と、撫然とした顔付きで、犇々と縛られたその絵をみつめている。

「本当にこんなに太ってたの？」

「始めて会った頃はね。でもあの人の虐待で年々やせ細って行きました」

「こんな縛り方をされたの？」

「想像ですわ。でもこの程度ならやさしい方ですわ」

「よろしく伝えておいて下さい。ではソロソロ撮りますから、よろしいですか」

「こんなに細いんですもの、撮ったってつまりませんわよ」

「しかし、御主人がたのしみにしていられしやるのでしよう」

「らしいですわ。自動車事故を起こしてムチ打ち症になってからは、カメラも何もかも売り払ってしまいました。それ迄はそれこそワンマンで、随分撮っておりました。自分で写真が何もかも出来るようになってからは、非道いのばかり撮っていました。フォトは始末しましたが、ネガだけはいくら探しても見当たりません。きっとどこかへ隠しているの

でしょう。私、どの様にしておればいいんですの？」

「胸の花びらの彫ものを中心に、ヌードをとります。その儘じっとしていただければ結構ですよ」

女は微かな自嘲の笑みを泛かべてカメラを視た。全裸の胸の、八重桜の花弁を捉えて、白い閃光が走り、忽ち数枚のフィルムは流れる。ぐいとうしろに反ってもらうと、たるみはじめた乳房が、小型ながらピンと張り、桜の花弁はいきいきと伸びた。長年に亘る虐待と酷使で、弥栄の肌の色合はよくなかったし年令以上に皮膚は疲れていた。労苦でやせ細った肌が、微かなたるみをみせて痛々しかった。

その肌は、数限りない責苦と屈辱と虐待を知っているはずであった。

注文に、弥栄は素直に応じてくれた。これみよがしのおぐらポーズに、弥栄の挑戦を感じたが、さりげなく受け止め、

「乳房の刺青は随分、痛かったでしょう」

と思いやり顔で訊ねる。待ってましたと許り彼女の返事がかえる。それを訴えたかったのだろう。

「痛いってもんじゃありませんわ。何度気を

失ったか知れませんか」

「失神ですか」

「失神」というと、まるで陶酔の果てみたいに聞こえますけど、そんな生易しい感じじゃないんです。乳房の両方の八重桜で丸一週間かかり、一カ月休んで、みぞおちに菊と浪を彫り始めて二日目に航海に出ることになって、命拾いました。どんなに虐められても我慢するから、もう刺青だけはカンニンして欲しいと、泣いて頼んだので、夫は途中でその尽あきらめました。若し航海がなくて、夫の描いた図柄通り彫られていたら、乳房の下の左右へ浪が伸びて、おへソを中心に牡丹の花と芍薬の花を彫り込まれるところでした。背一杯に大漁船を彫るともいつていたのですよ。それこそ、全身にいれずみをする気でいました。今考えてもゾッとします。乳房と、みぞおちで済んだのが何よりです」

怖るべき和泉五郎の独占欲であった。一生涯消えぬ彫ものを、その時その時の感興のおもむく尽に彫られては、彫る本人は面白くても、彫られる女人は堪ったものではない。

幸か不幸か、弥栄の乳房の彫ものは、素人彫りにしては、左程みにくくもなく、とりよ

うにも見えて、幾許かの美的観念さえ感じられた。

「彫ものをする時、ずっと縛られて彫られたそうですね」

「ええ、ハダカにして戸板の上にのせ、手足を四方に引っ張ってくりつけた上、動けぬよう、戸板に沢山カスガイを打ち込み、胸や腹や腰を、縄をカスガイに通して力一杯しめつけ、泣き声や悲鳴の洩れぬよう、ノドの奥まで、口中一杯に布をつめこみ、その上からベッタリと絆創膏を貼って、両目にも絆創膏をはりつけられました。全身をつらぬく鋭い激しい痛みで、死にそうでした。彫り上った乳房の桜の花卉を、鏡でみせられた時、ああもう私は一生、この男から離れられないのだと、ポロポロ涙をこぼして、果ては大声でオイオイ泣きました。お前は俺の奴隷になったんだぞと、夫は、毎日口癖のようにいって、手を変え、品を変えて、よくこれだけ縛り方があるものだ、と、あきれて感心するぐらい、暇さえあると、夜も昼も縛りつけ、苦しさのたうっている私の姿を、長い間かかってスケッチするのです。あの絵のようなスケッチが、忽ち何十枚にもなった程です」

「ああ、話をきいているうちに、早く私もや

りたくなった。こうして縛るのでしょ」

彼女の話に刺激され、行動に移った私の手は傍らの白い晒布に伸び、弥栄の裸身をぐいと押しつけ、柔らかい布で胸をしめつけてゆく。敷物の下に隠して伸ばしたレリーズ球をぐいと膝に力を入れて押しつけると、パッと閃光が光り、自動巻のフィルムを送る音が微



かに流れる。

晒布だから、縄にくらべて、相当力をこめて縛ったところで、さして痛さを感じない筈である。

両脚を持ち上げるようにして、足首を揃えてくくり、結びとめる。

「ああ、やめて——」

と小さく叫んでも、それは前触れなく始まったプレイへの擬態である。

うつぶせの顔をもたげ、彼女の息は早くも荒くなっていった。その低ごろりと転がすと、足が振れたのか腰を浮かし、肉の落ちた骨盤が、ぎくしゃくと、とがって突き出た。

そのポーズに的を絞って数枚とったが、我乍ら余りいい構図ではない。腿の附根の、肉のそげたのが目触りになって、匆々に足の縛りをとくと、布尻をその俣捨てて、別の布を握り、女の顔にホータイを巻くようにぐるぐる巻きに巻きつけてゆく。

視界を奪われた弥栄は、むしろそれで羞恥との隔絶が出来たように、閉じていた両脚をゆるやかに拡げていた。それはどうにでもしてくれという、身を投げ出した挑戦のポーズであった。体を沿わせて、じつくりと、乳房に咲くほりものの八重桜を觀賞する。乳首を

芯として、花卉は素人彫りにしては、かなり巧みであった。器用なその絵心といい、このほりものといい、彼のS性に対するつきつめた執心ぶりが、ありありと窺える思いであった。荒くれ男達と共に、海に生きる彼の、こうしたほりものの知識は、どこでどうして仕込んで来たものなのであろうか。

フト掻き立てられるような思いにかられ、ほりものの先端をひねくる私の指先。弥栄は覆面に閉ざされた羞恥をいいことにして、臆面もなく大仰に歓喜の声を挙げて、長らく鬱積した不満をぶちまけるかのように、自由になった両脚をバタバタとバタつかせた。それは一氣に私の意欲をかき立てようと努めるかのようにみえたのであった。

おなじみのバイブレーターが、いよいよ出番とばかり黒革の袋より登場する。

一瞬、弥栄の体が飛び上った。呻きは一入高まる。この大胆なポーズで呻く弥栄に、私は判っきりと彼女のM性をみたのである。

緊縛ともいえぬ、柔らかな布の縛りは、緊縛に対する反語の、柔縛という語が当て嵌りそうである。

その柔縛は、弥栄の琴線を快く刺激し、あられもなく乱れて、私の心をそそろうとして

いた。そこには、長年和泉五郎によって飼育された、被虐の想念が、無意識のうちに覗けていることを果たして弥栄自身気付いていたであろうか——。

バイブは唸る。一挙に弥栄の快楽は突っ走ってゆく。抑圧の性が時を得て、凄まじく爆発し、待て暫しもなく、むしろ途迷う私を尻目に、彼女の被虐は一氣に恍惚と陶醉を求めてヒタ走りに走る。

激しい抑揚をつけて、自由の唇がわなないて唸り、呻吟は部屋にこだまして、とぎれとぎれのうわ言は、男性を求める言葉の連続で綴られていた。

性の鬱積の門戸が開かれた時、それが如何に激しいものか、私は感嘆の思いで瞞めていた。

× × ×

「何年振りでしょう、こんな気持——。長い間忘れていたものが、蘇った思いです」

しっとりとうるんだ眸が、悩ましげに私をみつめる。柔縛は、激しい女体ののたうちによって、ずれて外れ、帯のように巻きついているに過ぎない。

濃紅のカーペットの敷いてある、窓際に面したフロアに、立たせて引っ張ってゆくと、



改めて、晒布でしっかりと縛り直す。瘦身はそれを甘受して、くねらせて身を擦りよせてくる。酒の香の漂う紅唇がしまりなく開かれこの晒布の縛りによって、再び起こり得る可能性のある愉悦を、あからさまに期待していた。

た。

カーペットが汚れているので、その上に湯上りを広げ、それに寝かしつける。

快い陶酔の成果が女体に現われ、双房の桜の花弁は、ほんのりと赤味を帯びてきつつあった。

「痛くないだろうこの布なら。あなたの注文通り持ってきたのだよ。本当は、もっと硬い麻縄か、ゴワゴワした太縄で、ギリギリ縛り上げたいのだけどね」

「構いませんわよ、思いきりくくって……」

「そういわれても、今日は残念乍ら持ってこなかった。残るは柔らかい縄だけだ」

「縄の痛さが、総身にしてみても懲りていますから、つい柔らかなのをお願いしたのです。でもこの方が縛られていても気持ちいい」

「縛られて気持ちいいというのは、あなたがいつか無意識のうちにマゾ性を帯びている証拠だよ。そうじゃない？」

「女はエキサイトすれば、誰でも男性の自由になって、好きなようにされてみたい——そんな気持を持つものじゃないかしら。いやいや縛られたり無理なポーズとらされたりするのはイヤだけど、この程度なら、帯をしめてもタスキをしても締まりますわ。手出し出来

ない私を、あれこれと自由になさる——そんなことを考えるだけでも、女は昂奮するものですわ」

「どんな男性にでもかい」

「いやね、その選択は女の自由よ。好意の持てない人となら、最初からこんな場所へは来ないと思いますわ」

女の目は熱っぽく私をみつめた。早く私の次の加虐を求めている目の色である。

仰向けに倒れた体に、のしかかるように近づき、ぐいと片足を膝で折ってもちあげる。

股縄が引き締まり、和泉弥栄は熱い溜息をもらした。今のこうしたプレイは、彼女の乳房の花びらがあってもなくても、最早何ら関係のないことであった。描いたものなら消して改めて書き改めしようが、どのようなプレイをしたとて、刺青はプレイにとって、垣間みた刹那の、ハッとした驚愕はあっても、時間と共に、それは消えていった。ここにあるのは、快楽のるつぽに狂奔することをこいねがう、在りの尽の赤裸々な姿の女人が存在しているということだけであった。そして私も亦、この乳房のほりものとは、何ら関連のない、嗜虐のムチを加えることに、強い意欲を燃やしていたのである。

乳房を責める指先に力をこめる。愛撫は過ぎて、ひねくり、つまみ上げ、爪を立て始めていた。快虐と苦痛の交錯した叫喚と呻きが絶え間なく流れ、女は身をのけぞらせて喘いだ。

「どうだ——。どうして子供を産めない体にされたのだ、いうのだ、早くいえ。いわないと、もっときつくするぞ」

嗜虐の血をたぎらせて、指先に力は加わってゆく。いつしか言葉は吐く息に比例して荒々しくなっていた。

「あッ、やめてえ、きつくしないで——。いっうわ、いっうわ。夫は腹を立てた時、逆さに吊るして生きた蛙を何匹も……。その上から酒を注いだのです。雑菌が侵入して、子宮内膜炎を患らい、すぐく熱が出て、命だけはとりとめたものの、それから、ダメになりました」

「彼の大事にしていたのを焼き捨てた時？」
「それより前です。二度目に逃げ出して捕まった時——」

苛責はゆるやかなローリングにかわる。恍惚のいろが流れ始める。しゃべることによって弥栄は自虐の欲びをかみしめて、それが尚更に恍惚の度合を昂めてゆくようであった。

それは紛れもないMの心理状態である。もっとしゃべらせてやれ、そして思い切り酔わせてやれと、私の心がしきりにけしかける。

「それは凄——いや無茶だ。それでどう、一番すぐく虐められた記憶は？」

「憶えてるわ。今もありありと憶えているのよ。忘れようとしても、忘れられないもの」

二人がハマ（横浜）にいた頃である。余りの虐待に、この尽では死んでしまうと、三度び逃亡を計り、夫始め仲間の必死の探索で捕まって引き戻された夜の出来事であった。形相の変わった和泉五郎は、可愛さ余って憎さ百倍の心境だったのであろう。

彼は弥栄の衣類を全部叩き売ってきて、肌身につけるシュミーズ、パンティなどすべて破り捨てて一片も残さないようにし、四月頃であったというが、裸暮しを強要し、遁れられない様、自家製の手枷で柱につないでおいだ。彼の排泄物はすべて喰わされ、彼女自身のものも、自分で始末させられて胃袋へと押し込まれ、その時、腋の下に始めてスミを入れたのである。旬日ならずして、その効果がないことを知り、剃毛の上、相合傘に二人の名前を彫り込まれたのであった。弥栄の体重はこの時、七キロばかり減って、やせ細

り、見るかげもなく、氣息えんえんとして、唯、生きているだけという状態であった。

毎日々々、それから根気よく、乳房へのいれずみを強要し、返事をせぬと、殴る蹴るの暴力をふるい、氣絶するまで続けられた。

彼女は遂に肯定する。彼は始めて一揃いの衣類を買い求めて来て、彼女に人間らしく振舞い始め、食事はかなり活力のつくものを与えた。しかし、逃亡をおそれて、乳房にハリを入れるまでは、枷を外さなかったそうである。乳房に入れられたハリのその一日目、どす黒い絶望感の中で、彼女はいつそ死んでしまいたいと思ったそうである。今、彼がああして、若くして身動きも出来ず、病床に臥しているのも、謂わば、その悪業の酬いだというのであった。

被虐と懷古の綜合作用で、弥栄は、この告白の合間にも、幾度か、恍惚と悦楽の谷間を逍遙し、とぎれとぎれの告白が、陶醉を助長させていた。

そして今、我が身に対して悪業の限りを尽した夫を捨ててもせず彼女は面倒をみ、せめてもの罪滅ぼしと、夫は妻を私の許へ送ってきている。まるで目にみえぬ糸にあやつられる輪舞のように——。

告白と共に、私の嗜虐の想念は、いよいよ燃えたぎり荒れてきつつあった。

痴呆のように瞳孔を開き、生ぐさい酒の息を荒く吐いて、女は横たわっている。矢庭にひざまずかせると、長く余った晒布の端を握って、双臀を撃つ。これくらいで音を挙げる女でないことを、私は彼女の告白から十分に感じとっていた。

果たして——アッ、アッと軽い呻きをあげつつも、彼女はこの柔らかいムチを甘く受けとめていた。

「どうだ、痛いかな——」

「ああ、少し……でも構わない」

「はっきりと例の相合傘をみせて欲しい。刺しても構わないだろう」

「ええ、構わない」

うわごとの様に、返事はこだまとなつて還ってくる。

「よしっ、縛り直しだ」

手早く布をとくと、改めて、目と唇をぐいとしめあげ、首縄から段々に下って、ドサリとソファに押し倒し、腿で布をとめる。別の布で両足をソファの左右の肘掛けに、ぐーんと引っ張って絞る。

洗面所へ行ったが、生憎と軽便カミソリの



準備がない。仕方なく私は、弥栄をその俚にして部屋を出ると、入口の係員の溜り場まで行き、一挺の軽便カミソリを求めてきた。

昂奮にわななく作業は数分で終わった。和泉弥栄は、身動きもせず、私の為すが俚に、

じっとしていた。

「終わったよ——」

声もなく、うなずく。思い切りしめつけたから、声は出ないのだろう。顎のあたりの皮膚が、締めつけた布の強みでたるんでいた。

先刻、湯船で迫られ、間近すぎて確認出来なかった相合傘に、ごろう、やえの名前の薄彫りが、判然と露呈していた。

薄鼠色にかすむ相合傘の、傘の尖端が長く尾を曳いていた。よくよく目を凝らして熟視すると、やえの「え」の字の下に、ごく豆粒ほどの黒い点が数カ所に見える。五ミリ間隔ぐらいで、字体も怪しげだが、目を近づけて確かめると〇〇〇と読みとれた。卑猥な言葉である。

「〇〇〇と彫ってあるよ、知ってるのかい」女は首を振った。何か猿轡の奥でモグモグいっているが聞きとれない。

この作業は、私の探求欲と猟奇癖を充分に満足させてくれた。それは紋模様の、八重桜の乳房の花弁よりも愉しい発見であった。

解放してやると、フーッと大きく息を吐いて、彼女の表情に始めて羞恥が泛かんだ。チラリと目をやってから、体をすくめ、

「ああ、困ったわ。公衆浴場へいった時、

「タオル一枚じゃ足りやしない」

と、ぶつぶつ独り言を言い、そのくせ、さして困った風もなく、じいっと淫らな瞳で、私を妖しく、にらむのであった。

「あなたの形見にもらって行くよ」

私は剃刀作業の結果をちり紙にくるみ、更にその上から、数枚のちり紙でくるんで、袋に入れた。

「知ってたの？ も一つ、別に小さく彫ってあるの」

「相合傘を彫る前に、いれずみの手習いをしたのよ。字にも形にもなっていないと許り思っていたのに、いやね、そんなこと彫りつけてあったの？ 私、知ったの始めてだわ」

「何もわざわざ、ここはそうですと改まらなくてもいいのにね。まあ、間違いはないけどさ」

「思い出すとだんだんハラが立ってきたわ。いっそ病院へおっぱり出して、トンズラしてやろうかしら。いい気味だわ」

「気持は分かるけど、それじゃ、私の立つ瀬がない。それに彼は、今あなたに逃げ出されたら天涯孤独なんですよ」

「そうよ。勝手なことばかりしているから、しまいいには誰も相手にしなくなったわ」

「じゃあ、我慢してあげなさいよ。ここまで面倒みただから。私のせいと思われても困るからさ」

「それもそうね。あなたに御迷惑かけてもいいけませんわ。毎日を考えると、ユーウツそのものよ。それだけに、今日はハレンチだったけど、何だかとても愉しかったわ」

「じゃあ、これから縄で縛って苛めてやる」

「どうぞ——。でも少し寒くなったわ。もう少し、いただいていいかしら」

酒の要求である。水商売の本性を暴露して一旦のみ出すと、流石に強かった。持ち込んだ二合瓶は、既にカラップである。冷蔵庫を開くと、一合瓶一本と小瓶のサントリーホイット、それにビールが三本、並んでいる。

一合瓶とウイスキーの小瓶をとり出し、コップについてやると、弥栄はさも旨そうにのみほした。酒の肴を余りたべないのは、真の上戸だからであろう。忽ち一合瓶をカラにすると、坐り直してウイスキーをチビチビやり始めた。酒の酔いを借りて、日頃のウサを忘れ、この刹那にすべてを賭けるかのように、女の目は微かに血走って据わってきた。

× × ×
ウイスキーのポケット瓶が転がっている。

その側に弥栄は、仰向けに長々と、伸びていた。酒臭い匂いを撒き散らして、肩を震わせ呼吸している。少し苦しそうであった。

私は殆ど呑んではない。とすればレストランで始まった酒が、二合瓶、一合瓶、さらにウイスキーと続いては、流石に強い弥栄も酒気から久しく遠ざかっていただけに酔いが全身に廻ったらしかった。

やや、白けた気持になって、女を見下ろす私——。好き放題に吞ませたことに、軽い悔いを覚え乍ら、酔いにまどろむ彼女の、あらゆるもない痴態に、私のプレイの念願は次第に冷却してゆくようであった。

もうこうなれば、何をされても弥栄は、自己の意志では動かず、されるが俚に木偶の棒になって、緊縛の束の間にも、夢路を辿るであらう。

ポンと一つ、尻を蹴飛ばしてやると、ウーと寝返りを打って、その俚、軽い寝息を立てている。魂を奪われた女を縛っても、それは人形を縛るに等しかった。

「おい、起きろよ、酔ったのかい——」
「ウーン、ああいい気持——、酔ったわ。介抱してエ……」

それは水商売を渡り歩いた女の昔に還元し



た媚態であった。始めて出会った私の眼前で酒に魂を奪われた女の裸身は、余りにも放埒そのものに思えた。そうした女のさがが、和泉五郎をあままで苛酷に追いやった一因のようにも思えるのである。この女の正体を知っている彼にとって、長い航海は不安以外の何ものでもない。女には留守間をいい事にしていつ崩れるかも知れぬ脆さが多分にあった。それが彼の心配のタネとなり、遂にはこうした結末を生んだのではなかったか。彼ばかりを責める前に、弥栄自身の心の在り方も咎めねばならなかったのではなからうか。

手持ち不沙汰に立ちつくしていた私は、こ

の尽では、夜に到るまで昏々と眠ってしまいそうな弥栄の姿に、ついに業を煮やした。

続けさまに平手で弥栄の尻を引っぱたく。覚醒を求めて、平手打ちは、つづいた。

「あーん痛いよう」
ぼそぼそと、目を

つむった俤、弥栄は片手で、打たれている尻を蔽おうとする。その手を引き寄せて、縄がまきつき、忽ちに胸をしめて、両手は背後でぎしりと縛り上げられていった。

「ねえ、寝かせてえ」

「ダメだ。起きろよ」

洩々目を開いた弥栄は、トロンとした眸で私をみつめ、いやいやという風に体をゆすった。レリーズで合間々々にストロボを光らせ乍ら、私は弥栄を縛ってゆく。酔ってドタリとしている体が重く、縄捌きも尽ならない。両足を屈曲させ、何とか縛り終わったものの無茶苦茶な、八方破れの縛り方である。体を

起こさない女体は縛りにくい。

縄を束にして、力をこめて臀部をムチ打つと、弥栄はたまらず眉をしかめ、ヒイヒイと酒くさい声を立てた。

私は容赦はしない。晒布の縛りとこの縛りぐらいで、未だ満足な緊縛らしい緊縛はなかったといってよい。

立ち上ってぐいぐい踏みにじり、軽く舌打ちして、さて、これからどうしてやろうかとしばし途迷うのであった。契めた酒であつても、度を過ぎされては、おしまいである。

私は弥栄の髪を束ねて握み、ぐいと吊り上げる。痛さでヒイと悲鳴をあげ、それをシオに女は、やっと正氣づいたようであった。

「御免なさいね、すっかり酔っ払っちゃって――。あなたがすすめるからだわ」

「のむところだから、彼が心配するんだよ。」

あんたの方にも原因がありそうだね」

「かも知れないわ。でもこんなのんだくれの女を承知で、一緒になった仲じゃない。仕方ないわよ」

「のんだその勢いで、なるようになったものの、あんたは、ほんの一時の浮気のつもりでも若い彼は真剣だった。そうだろう」

「その通りよ。彼と同棲する前に、二度ばか

り男を変えたわ。私って可哀想な女なのよ。それがいけないっていうの」

女は酔って絡んで来た。その挙句、どなるように、

「なんなのさ、あんたは男でしょう。裸の私を抱いて、ズボンはいいて、シャツ着てさ。脱いだらどうなの——。何も出来ないの……あいつが怖いっていうの。一体どうなのよう」
体をゆさぶって、その目が射るように私をにらみつける。

抱き上げてなだめる。こんなに乱れた女性もハントした中では珍しい。たまり溜った日頃の鬱憤が、酒の勢いをかりて爆発したようであった。

私は奉仕者の立場に追いこまれた。

女は微かに身をふるわせ乍ら、

「ねえ、キスして……ねえったら」

と熱く咬いた。熟柿くさい匂いに辟易し乍ら、唇を合わせる。待ち兼ねた様に女の方から激しく吸う。唇を離すと、

「どうだ浣腸してやろうか——」

「あれはキライッ」

「きらいなことをしたい」

「粗相してもしらないわよ」

「始末してやる」

「夫も私が厭がるのに、よくやったものよ。おなががボンボンに膨れるまでよ。苦しいったらありゃしない」

「どうしても好きになれなかったんだね」

「浣腸の好きな人ってあるかしら」

「あるものだよ、広い世間にはね」

「変わってるのよ、その人」

「すきずきさ」

「いいわ、もうどうにでも好きな様にして」
女はあきらめたか、うるさそうに応えた。

この酔い加減では、到底こらえきれそうもなくここで行なえば、不始末しかねなかった。

私は再び裸になると、晒布の一本を捨てる気で短く引き裂くと、縄にかえて布で後手に縛った。短い縄尻を握って、弥栄の体を押し乍ら、風呂場へ向かう。

湯は既にさめて、ぬるくなっていた。熱湯のカラーをひねり、湯をドンドン溢れさせてから、洗い場に女を坐らせておいて、エネマシリンジをとりに戻る。

ザブザブと洗い場に湯を流して温めておいてから坐らせて、ぐいと腰高にさせる。

洗面器に一杯の湯を汲み上げ、ぐいぐいと球を握る。ぐるぐると、特有の腹音がびびき始めた。

ポリ洗面器一杯で、約一・五リットルはあろう。すべてをのみ込んで、弥栄の腹部はポツテリと膨らむ。

立たせて、後手の布の端をシャワーのカラーに結びつける。女体は足許をふらつかせてゆらゆらと揺れている。

「ああ……トイレへ行かせて」

「いいから、そこへ出すんだ」

「いやよ、こんな処へ、匂うわよ」

「構わない」

私は湯舟につかって、洗面器でこちらからザブリと女体に湯を浴びせかけた。女は辛抱出来ず地団太を踏み始める。

「駄目、駄目よ。ああ、苦しい」

「いいから、やれ——」

目を外らさず、じっと女の悶えるのを直視する。私はいつ頃から、この様なクリスタールマニアになったのだろう。女の悶え苦しむ羞恥の姿の究極が、この刹那にあると知ってからだろうか。

弥栄はヘッピリ腰になったかと思うと、もう耐え性もなく、泣くような悲鳴をあげた。

ザーツと激しい奔流。

異臭が狭いバスの中に漂い、それと共に、アルコールの匂いの混った液体が、タイルを

叩いて飛散した。

この観察は、いささかグロだが、私には羞恥責めの終局として愉しいものであった。

プレイ中は、さして羞恥をみせなかった弥栄が、さすがに目をかたく閉じて羞恥した。

タイルに傾斜させた排水孔の小穴のあいた蓋に、水気の流れ去ったあとの残骸が堆積したが、ザブザブ湯桶で水をかけ、穴あき蓋を外すと、下水溝へと消えていった。弥栄の体に湯を浴びせかけ、匂いの消えつきるまで流しつづけて、私の試みは終わる。

シャワーの蛇口から布を外し抱きかかえるようにして、よく洗浄してやってから湯舟へとつける。女の横顔に嫌悪が走っていた。弥栄をつけたまま、私は浅いバス内で立ち上ろうとした。弥栄は、アングリと唇を大きく開いていた。

× × ×

東の間の嗜虐は狭い風呂の中で終わった。

弥栄は上ってきて、やや不満そうに、開かずの襖の彼方の、関の小部屋に目をやっていった。

「使わずじまいね」

「結果においてね」

「折角チャンと敷いてあるのに、何も狭いと

ところで無理しなくてもいいのに……変わった人ね」

「プレイなんて、所詮は衝動的なものなんだよ」

「何だか匂いがいつまでも鼻に残っていて、余り愉しくなかったわ」

「あなたは健全なんだよ、それだけ」

「何をなさっても、過去に皆、夫からされつくしたって感じ。縛られることも、先程のようないことも」

「緊縛は出来なかったよね、とうとう——」

「さぞ物足りないだろう」

「それはあなたの方でしょう。私は何ともないわ。あーあ、折角の酔いがさめちゃった」

「悪かったね」

白けた気持でいって、身の周りを片付け始める。

「もう帰る？」

「ああ、そろそろ」

「又、会えるの？」

「彼次第だけど——、何たって病気の旦那さんに悪いからね」

弥栄は口を閉ざして膝小僧を抱えた。刻々と暗い現実の世界に戻りつつある自分を知って、この爛れたひとときを反芻しているよう

であった。

「食堂の方へ直接電話して下されば、何とでもなるんだけど……」

未練げな言葉に応えず、私は身支度を整えつづけた。

幾許かの紙幣を握らせると、弥栄は黙って受取った。

今頃、病床で悶々の情やる方ない和泉五郎にフト思いをはせると、私の心は急速に冷えていった。

弥栄と秘密の時間を持てば持つほど、女の妖しい虜になって、抜き差しならぬように思える。

どこかに魔女めいた、不思議な官能をもった女、弥栄。

私が若し、悪徳の商人ならば、誘いをかければ明日とはいわず、今日にでも転がり込んで来そうな脆さを持った女、弥栄。

それだけに何か危険きわまりない感じがしてならない。

弥栄は、私の住所と電話番号をきいた。電話を掛けてくるつもりなのか——。

宿を出ると既に冬の日はいくらしい。

車にのせて、

「病院へよる？」

「今日はゆきませんわ」

「今頃、きつと気にしているよ」

「多分ね、いいじゃない」

女はぞっとするような冷たい笑みを泛かべ

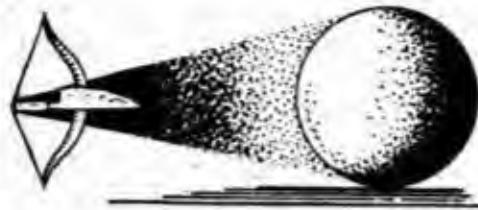
「夕食、御一緒に出来ませんか？」

と誘いかけて来た。

「そうだね」

うやむやに返事して道を引返してゆく。

「今度会えたら、どんな縛り方でもさして上げますわ。だから連絡して——」



——佐野さんに想う——

七分咲の妊婦腹

高野原美

「みなさまの女奴隷であります。みなさまに虐げられながら飼育されてみたいという気持ち……妊娠腹がだんだんふくれてくるに従って、強烈になってくるようです」との告白とともに、多くの妊婦全裸フォトマニアに期待された、佐野みさ子さんの妊婦フォトは、

押されると、心は尚更、引っこんでゆく。

気圧される私もさる事ながら、弥栄の怨ずるが如く訴える目の色は必死であった。

乳房にいれずみされた、秘密を持つ女にとって、すべてを承知でつき合える私という存在は、唯一無二のものに思えたのかも知れない。

会うか、会わぬかは、私の胸次第——。彼女の過去から現在につながる、その生活の暗さ、陰鬱さが、私の心底に滓のように引っ掛

かって離れなかった。

三の宮界隈の夕暮れのネオンが赤い。

最初で最後の晩餐になるかも知れぬ夕食をとるべく、私はレストランの駐車場に車を止めた。

してやったりと、淫靡な翳を落とす、和泉弥栄のプロファイルに、フト軽い憐憫を覚えながら——。

——(了)——

た妊婦にまけないほどのフォトを発表したいと意気込み、更に私の呼び掛けに対しても積極的な羞恥プレイとともに、「全裸でなければ私としてもつまりません」とM女性の本質をむき出しにしていただけに、期待外れの感が強い。

佐野さんの妊娠七カ月のフォトは、カメラアングルの良さもあって、妊婦裸像の美しさの特徴を効果的に出しており、私は、傑作である、と評価している。特に臀部から太腿にかけての量感。ぐっと前に突き出された丸く膨んだ七カ月の妊娠腹とともに、S字状の妊婦特有の輪郭。黒ずんで拡がりを見せる乳輪を持った乳房は、円錐型にムッチリと弾力を

本人も云っておられるように、たったの二回——それも一回はピンボケと云うことで、それが終わりを告げてしまった。

彼女は、「S男性のもとへ行きたい」とSMプレイの呼びかけを行ない、九月号では、「妊娠腹を晒したい私」で、以前に発表され

秘め、垂れをみせず引締つてみずみずしい。

私は、臨月の痛々しいばかりに膨れ上った妊娠腹も好きだが、花で云えば八分咲きとでも云わんばかりの、七、八カ月頃の未熟な妊娠腹の美しさに魅力を感じ、心が惹かれる。

臨月腹については、何故か佐野さんの立姿が誌上に掲載されてないので残念であるし、座像四枚のうち、切腹は全身像でないのと、庖丁の刃が逆向きであるようで悲創美に乏しく、面白味に欠ける。他の三葉についても、カメラ位置が高い上にカットのためもあり、臨月妊娠腹の鑑賞と云うには程遠いフォトとなっている。

折角、撮られた佐野さんには申し訳ない批評となったが、臨月立姿を見せていただきたかった。

今回は、フォトのうえでは成果は少なかったが、別の面で収獲があった。

私は、妊娠腹を無惨に斬り裂く悲劇と、マゾ性、サド性を創作とし、また歴史上の伝説事実をかりて発表してきた。それは、女性の神秘的肉体の生理と官能的な美しさを無惨にあばき、破壊したいと云うサド的欲求からだ、それが、たまたま女性の側からマゾ心理

として提起されたことである。

佐野さんは、告白の中で「自分が丸裸にされ、戸板の上に大の字に縛られ、白い丸々とした下腹を切り裂かれる夢をたびたびみました」と自らの妊娠腹を切り裂かれたいと云うマゾ心理、願望を強く持っていることを告白しているし、一月号では、羽鳥さんが、辻村氏の撮影による金原奈加子さんの臨月妊娠裸像の逆吊りフォトをみて、「腹裂き妄想」を描いていられる。

私は、これらの記事を読みながら本誌に書いた「女性切腹の可能性」で追求した、女性と腹部ナルシズム、その発展としての女性切腹を思い出していた。

女性に潜在していた腹部ナルシズムが、妊娠によって、自らの腹に特に興味と関心が集中して顕在化し、それが切腹とか、腹裂きの心理として具現化したのではないかと理由づけていた。

特にマゾ女性の場合は、その女性だけの特権である、自分にとっても神秘的な腹の中の肉体構造と変化を、自分だけのものとせず、誇らし気に男性の前に晒したいと云う欲求が強く生じるのは当然であろう。

男性の奴隷となり、肉体を晒し、その上に

なお浣腸、排泄と云う普通の女性心理では耐えられぬ程の羞恥を露呈してみたいと云う心理は当然発展して、腹の内部までも晒したいと云う欲求に連なるものである。現実にも、関西ストリップで、内臓までのぞかせるストリップとして女性のマゾ性を満足させ、それを通じて優越感と誇りを味わう女性心理、これらのマゾは、裏返せば男性の弱点をつかんだサド的心理とも云えよう。

男性も、女性を征服した、奴隷にしたと満足しながら、女性の官能的肉体によって支配され、征服されているのである。

私は、女性の腹裂き、切腹は今後の研究課題として楽しみにしているが、その点から佐野さんの妊娠は、一つの問題を投げかけたものと思っている。

女性側からの腹裂きや切腹に対する告白が誌上に発表されることを望み、また佐野さんの妊娠像フォトが失敗に終わったようであるが、第二、第三の佐野さんが出ることを願うとともに、佐野さんには、悪評も混じえたものの、マニアに対する献身的行為に謝意と讃辞を送りたいと思う。

好色訓蒙図彙（古典文庫）より



五、秘本、その限られた伝播

好色訓蒙図彙と好色旅枕

時代をさかのぼった性典的記事の探究・蒐集ということは、単なる雑学愛好のマニヤにとってまったくの手探り仕事で、皆目見当がつかない所が本音である。それでも尚さぐり続ける気持は勿論好奇心ということもあるが物の真相を見たい知りたい、それが絶えず頭から抜けないからだ。以前に敗戦後のカストリ雑誌を一生懸命であつめ、読んでいるうち思わず膝を叩くような痛快な記事にぶつかり

非常に感嘆して、私版の本にそのことを紹介して嬉しがったりしたが、その後段々と色々な雑誌が集って更に沢山読んで行くうち、なんとその感心した記事が、大正末期の秘刊の風俗雑誌からの丸写しだったことが解り、ガッカリした。併し、そうだからといって無智だと自分を責める気にもなれず、まして無責任なカストリ雑誌編集者をうらむ気にもなれなかった。どうも書物や雑誌にはそういう事が沢山あるのである。つまり、研究そのものが知らずに誤りをおかす事が多い。万般に亘って学問のみならず社会生活そのものに於いて

性文献を追って

性典入門

(3)

斎藤夜居

でも然り、だ。

まして、性的出版物など販売上の規制はうるさい程あるが、発売禁止というのは風俗出版物の代名詞化している位だが、内容上の規制も点検もありやしないから、表題がちがうだけで、中味は兄弟姉妹というのは大分ある筈。現代物ならすぐに気がつくが、年代物では学者でないと気がつかない。原典を知らないといつまでも種が分らず、どうしてこう類似した記事がむしかえられるのだろう、と頭にのこる。まして、感銘の深かった記述など剽窃本を先に読んでいた場合、なんというか

処女だとばかり思ってお古と夫婦になったようなもので、幻滅の悲哀をかんじる。性の本は特にそのことが多い。原典を知らなかったり、知っていても入手も被見もできない場合は、貧しき者は妻をえらばずで、有るもので我慢しなければならぬし、それを無上の宝とすれば、それなりの価値を生ずるものである。だから私たち物心共に貧しい人生においては「へ知ること」必ずしも幸福につながらない——、夢が消えてしまうからだ。

『好色旅枕』とは、書名が良いので、西鶴の一代男流の読物だとばかり思っていた。復刻書も見当たらないので内容に就いてはまったく知る所がなかったが——『日本艶本目録』

(大野卓編)には、

『好色旅枕』横小本四冊古山太郎兵衛画、元禄八年(一六九五)と、『旅枕』横本一冊師宣画、貞享年間(一六八〇年代)に刊行されたものとの二種が載っている。

大正年間に、秘密出版で住川某氏が本文の一部分を、挿絵を省略して謄写版で発行した『旅枕』があった。

日本艶本大集成では、好色旅枕の内容を示す総目次と序と後序が紹介されている。また本文活字化は『奇書』(昭和29)十四号および、『日本性典大鑑』(上)に収録されている。

『好色重宝記』『好色旅枕』『好色床談義』これらを称して『好色三部書』と唱えられ、好色床談義(元禄二年、一六八九)の序に、この三部の書を知れば、好色の一道においてくらきことなし、とまで自讃しているが、何分とも稀本で、私は高橋氏の刊本で初めて内容の実際に接したのである。

読後に痛感したことは、好色・色道の秘事を記述した書については、やはりなるべく刊年の古いものへ遡らねばいつ迄も堂々めぐりの繰り返しになる、と思った。なぜ、そう思ったかということは、好色旅枕と同じような似た記事が、実に江戸末期の通俗性訓物に至るまで綿々として続いているからであった。つまり、一種の剽窃記事をそれまで先に読んでいたのに気付く羽目になってしまった。

次に、当時の自写のノートをそのままに掲げると、

大姪

「淫汁たくさんに生れえたるに、面相一ならず、第一肥肉(こえじし)、第二中肉也。世上にいふ飽(にきび)のばらばらといでたる

を、実情の女といへども、血気さかんの時はたとへ虚弱の女にも出るなり。先づ目の内すみきりていさぎよく、鼻筋とをり、又は鼻おほぶりにして、こばないかり、鼻先あぶらぎりて、あな大ぶり也。耳大也。歯なみよく、歯あらあらとして、歯あい隙間なし。肩尻大きに、爪大ぶりなり。毛髪ふとく、或は縮み、いねる時はやく寝入るなり。右の通り残らず具足せずとも、いづれにても、二三色うまれ付たるは、中実の女と知給ふべし。大実には、大腎の男ならではふさはず。虚弱の人は妻となさば、夫の命根を損ずる事、鋸のごとく、鋸のごとくなるべし、みるがうちに親仁殿ころり山升みそ」

これは所謂精力のつよい女性のタイプを列記したもので、全部そろってはいなくても、これら条々のいくつか当てはまれば有資格者だといっている。

虚性

「虚性(きょしょう)の女、第一顔小さく、鼻筋とをりても細く、鼻小ぶりにして目のほころびせばく、口もとちいさく唇うすし、目のしょう(性)宜しからず、夜敏(よさと)にして、物におどろき小食也。かやうの女大腎の男にあふときは、虚する也。身やせ或は

足冷え、肌さらさらとし月水不同なるは虚したるゆへ也。養生の油断有るべからず、又虚弱にして瘦地の女に一会、御好物にしてよくたつが侍り、血氣さかの壮年にはかくあれども、ほどなく腎水へりて大虚人となり、床のうちに眩暈がおこり、安心散をたよりにて諸分けをたてるやうに成也。若しかやうのをかついで持ち給はば心得てあしらい御内儀心え給え」

大姫の女の反対で、よわいというよりむしろ病弱のタイプで、神経過敏の婦女にして強精の男子と配偶されたら命とりとなること、昔も今もおなじであろう。

大腎

「実性の男、色しろからず、或は少し赤みあり、目少したれめにして、わらふときほそくなり、目のうち涼やかにして明らか也。耳おほきくあな大き也。鼻大にしてさき丸くこばな大にして、こばなのはだへ蜜柑のごとくにて、油ぎりてひかり有る也。足大にして背ひくからず、惣体ゆるやかにして、しゃんしゃんとりこうげには見え、大鳥のありくやうにして、ぶ(醜)なり也。意(こころ)も又其れに相応してはしり智慧なく、頓にあいさつせず、おししづまりて物いふ也。此の相具

足する人は、大腎にて道具大也。或は二三色を生れ付く人も常の人よりは実性なり。しかしそのが実性にはこりて淫乱なるときは大虚人と成る事、油へりて灯火滅するがごとし。生れつき虚弱の人一行の後心おもく、むねつかへ不食などする故に、かねて養生しければ身は弱うしてもいのちはつらなれり。たとへば柳の枝に雪折なきが如し。姪虚火動のやまひは、大実の人に有る事おとし。よくよく心え給ふべし」

強淫強精の男のサンプルで、これまたその全部を具備しなくても、そのうちの二三に該当適合するだけでも強いおとこの資格があると述べているが、「大鳥(おとし)の歩りくようにして、しかも醜男である」とか、「また、それにふさわしく血のめぐりが悪い」ようなのは腎ばり型だといっている所など、人獣といった感じもして、い得て時代を別にした妙があり、ちょっと不気味な表現である。併し、そのような男でも節制をむねとしなければ、たちまち次項の如く虚精人となるとあって、女色を戒めている。

尚、世俗にいうことだが、長寿者はいつも年齢より若く見られる型に多い。そして常

に肌艶よくあぶらぎった感じで、眼が澄み鼻の穴が大きい。この種のタイプは精力も強いとされている。

腎虚

「虚性の人第一瘦地なり。たとへ中年に一旦ふとるといへども、ぶたぶたとして遠路を歩行む事成がたく、食後又はありく時汗出、こえ小音にして、齒の間すき、齒の根よりさいさい血いで、足ひゆるは虚性の人也。又色わるく身にあぶらけなく、足ひえ小便しげく食あたりやすく、さいさい腹くだり、或は腹はり目しばつき、何事にもはやく退屈し、髪につやなく身に垢すくなく、手のうちさらさらとし、不食し胸さきつかへ、かやうの人は大虚人なり。一儀の事、西の海へ、さらりさらり」

昔の人は腎臓をもって性欲生殖を司どる臓器だと考えていた。それで精液のことを腎水などともよび、したがって不足したり涸れたりするのを腎虚とよんだ。古川柳艶句に腎虚の滑稽句の多いことは、よく人の知る所である。

せいをもらすに段々ひじゅつ有事

「むかし男のいはく……(略)……とむるやうの口伝有り、……(略)……身をのべてひ

だりの手の人さしゆびにてきんのねをおさへ
両足のおやゆびを成ほどつよくそらし、十度
びかさねていきをつくべし。……(略)……
十度が一どに、むかふひじゅうつありて、……
(略)……一二寸のあいだあそばせて目をふ
さぎ、せぼねをすこしかがめて、かたをすば
め口をとじ……(略)……十分の一ツにもお
よばぬほどすくなきゆへ、男の五たいくたび
る事なく……(略)……一度のくたびれに
もおよばずして、おもしろき事かぎりなし。
是一大事の秘密也」

この記述は実に珍しい事柄で、ゆっくり読
まないと、意味が通じかねる所もあるが、
こうした具体的に記された秘術が果して実
際に有効か否や、これは判らないけれども
男女の交合が争ひみており、愛欲行為の
強弱が夫婦和合の根幹をなすこと、古今お
なじであることの真実は不変である限り、
この件はもっと多く考えられて然るべき所
だが、性典、性文芸ともに例証が少い。態
位とか、強精剤とかを云々するよりも、も
っと直接的なことだと思ふが……。

〈性典〉なるものが、生殖器の部位や機能
の説明である限りは、この種の実情に即し
た事柄のありがたさがわからない。まるで

腫れものに障るような子供相手の性教育よ
りも、態位だけの遊戯的性知識を普及させ
ることよりも、本当の意味での性教育とは
成人にも老人にも納得のいくものでなけれ
ばなるまい。

○

これら二三の項目を抄録しただけでも、少
なからぬ興味を感じたのである。が、最近に
なつて『好色物草子集』西鶴学会編、古典文
庫刊(昭和43・11)のうち、好色訓蒙図彙の
複製版と本文を見るに及んで、『好色旅枕』
もまたそのうちの大部分を『好色訓蒙図彙』
からの剽窃が、含まれていることを教えられ
た。

そして、書名の『旅枕』の意味もその後序
の、

「好色の一大事伝授、秘密の品々を書きつけ
題号を旅枕と名づく。この草子小さくこしら
ゆることは、旅立つ空に、かさだかなるはい
やなもの、又懷中して、かたすみ物のこかけ
に立寄り、人に知らせず」そつと見るのに便
利なためだ。としているのは、暗に好色訓蒙
図彙三冊本の主要を取りまとめ、旅中の徒然
をなぐさめるに簡便だともいっているよう
である。袖珍版といった所であらう。

併し、だいが遠廻りしてきたが此処に始め
て『好色訓蒙図彙』の存在を知った。この書
は貞享三年(一六八六)刊行であつて、一種
の性学性風俗事典とも眺められ、以後におけ
る平俗な色道書記述のための基本型式をも具
備し、数多くの秘画秘本類の、その限られた
伝播のみなもとを見ることができた訳だ。

好色訓蒙図彙。上中下三冊。半紙半截本。
吉田半兵衛画。銅駄坊三右衛門・高辻昌陽軒
開板。貞享三年三月。

内容。序。天象(七夕)。地儀(比翼連理
・偕老同穴。連理の枝。鹿。鴛鴦)。人倫。
(殿。奥様。嫡子よめ。妾。大臣。大尽。
傾城。太夫。天神。格子。鹿恋。椿かこひ。
半夜。端はし。化契けち。北向。湯娜ゆな。
風呂屋物。猿。茶屋。比丘尼びくに。丸女ま
るた。想嫁。想与女。売女。夜発やほつ。人
置口鼻ひとおきか。出合。――上――

濡者・科者ぬれもの・しなもの。好女すけ
べい。鳴女なきて。大姪たいいん。虚精。大
腎。腎虚。若衆・美少年。了髻かぶる。野郎
呑気りんき。山神やまのかみ。後女打うはな
りうち。嫉妬。千話ちわ。密語。夜奪よばい
新開。入悲。心中。密夫。合淫ともぐひ。卅

せんずり。美惡論。惡女相。へ、論へきろん。——中——

人支。女陰・男陰図多数および髪型の型、眉の図など。衆道意氣智界。上豚じょうとん・よきしりのあな。下豚げとん。理伯へ、歴論りはくへきれきろん。器財之部。会交遺曲之妙術。女道濡界。分たてまじき日の事、禁房日のことである。——下——

細目にわたっては現代語からはだいぶ遠ざかっているので、本来は一語一語の説明が必要となってくるが、略す。例えば、「へき」「れき」など女陰と男根を当時唱えた言葉であるが、今日ではまったく耳遠いというより専門学者の語源探究の素材にまでなってしまった。

次に、さきの旅枕より抄出した以外の二三の項目の概要を記す。

想嫁（そうか）、夜鷹のことである。日暮れを待って、爰の辻かしこの門の傍に立ち、行人の袖にすぎる女たちである。所が少しでも蔭のある所には、意地の悪い番太小屋（辻番）の親爺がわざと水を打っておくので、余り濡れないように、そこを我慢して風呂敷を

地に敷き、打ちあをむきにねて、扱て、客の露転（ろてん、珍しい言葉だが男陰の意味）を、となると、犬が吠え出したり番太に怒鳴られたり、惨々の目に会って、まったく心の安まるひまもない。犬には焼飯をやり、番太には煙草銭を与えたりして、うるさい奴らをたらし込まなければならぬ——。などという生活描写があり、また、

惣嫁につく男をぎうという（牛、妓夫で現今のヒモである）事は、牛は車をひく、車は物をのせる物。従つてのせ物をひき歩くから牛というのである——と。

鳴女、この「なきて」というのは好淫の婦女のタイプを述べたもので、

目はそし、たれ目、或は目のきれ長く、眼もとがパチパチとして、喋るときは舌短かであつて、声高く、或は普通よりひくいのもあるが、口が大きい。唇はうすく、口がちいさかったり、つぼ口もある。いつも少し口をあけているので歯のさきが顕れている。唇は上下がしっくり合わない。しゃくれ顔もある。肥っているもあり、痩せたものもある。そして床の芸たるや、「あげて数え難し、先ず、露転をいらひたがる、くちすはする事すき也、……（略）……息あらく、顔を一所にすへず

（ぢつとしていない）、右左にふり、のびあがる、枕さだまらず、背を折って腰をすへ、尻うきあがる、きびす（踵）がそらにあがる足の指をかがめる、眼が細うなる、ひたいに皺より、目頭（まがしら）で八の字かく、舌をいだす、尻を左右へふる、はなをすする」などと書いてある。大体愛情表出は古今同じだといって良い。

へ、論、へきろん、というのは女性器の美惡を説明したもので、上開の相、下開の相に分け、後者については、留守の家へ「こんにちわ」をするようなもので、努力が無駄だ。などと述べている。

六、出色の自行安味画譜

艶道日夜女寛記

この書は月岡雪鼎の画作とされている。宝暦頃（一七五〇年代）の刊行。「医道日用重宝記」という当時行なわれた日常医学に関する通俗書をもじって、性生活上の案内書としたものである。

徳川性典大鑑（上）に、抄録の際に、必要な箇所は余さず掲げた、と記されているが全容はわからない。また、挿絵もない。横本で『艶道日夜綱目』が表題で、序文や目次には

「女宝記」とのみ記されている由。艶道日夜女宝記——びどうにちやじょほうき——と読む。

以前からよく知られている書名だが、活字化は大鑑のほかに見当たらないのが残念である。但、雪鼎の絵図のみ三十一図柄二十五枚を敗戦後の性出版ブームのどさくさの折に版行されているので便利だ。原典被見以外には、大鑑とその絵図に頼るほか方法がない。残存数の渺い珍書である。

内容。自行安味法（自慰法を絵図で説く）陰茎極上品。拭紙の法。陰脉の法。七表、七裏の事（性相学）。九道具の註（男根の分類）。七開の註（女陰品等）。仕ようの達者。交合妙薬の秘法。交合行いようの術。こんたん道具、附使用法。女用心の図。右の項目が紹介されている。

自行安味法は女体自慰法くさぐさの絵図で仲々奇抜なものもあるが、適度に行えば気分は晴れやかに、血のめぐりを良くし、「貞心をもちぶらず、はづみし開中をゆるやかにす」といっている。自行安味法の安味というのは今日謂うところの「按摩」でマッサージ術を意味する。女宝記にあっては女性における自慰法百態——は大げさだが、その種々を説いたもので、類書とまったく趣きを異に

している点が其処にあった。

「夫れ安味は、男女共に虚損すといへども、血氣めぐらざれば、かへって病をなす也。常に五臓の血氣動揺すれば、血よくめぐるゆへに、腎水（じんすい、大ていは精液を意味するが、この場合には男女の精氣）くさる事なし。淫乱女の曰、自安味は心をなぐさめ、血氣をめぐらすといへば貞心をもちぶらず、はづみし開中をゆるやかにす。張型を調和して其なやみを治す。しかれども……（略）……」本来の目的であるところのへ性マッサージをたのしむことの外に、かえって疲れ果てて本物の按摩（けんべき取）を頼むようになってしまつては、まったくおかしい。といっているが明治時代になってからは、「女性理一代鑑」（明治25、再版による）に、「女子の悞鬱病」「陰密なる悪習」などの項目があり、この悪習（わるさ）より生ずる絶えざる心の衝動の結果として、身体を虚弱にし、記憶力を消失し、メラニコリックやヒステリーを誘発するとして、世間年少女子の保護監督の立場にある者は、義務として此の悪習に陥らしめざるように指導すべきことを説いている——。女宝記にあっては、ひとり安

味は「心をなぐさめ」「血氣をめぐらす」とむしろ推奨さえしているのだが……。自慰に対する悪害・無害については、医家や心理学者の説をきくべきで、今日では過度に行なわなければへ無害だと言われているようだ。

昔からこの実態の調査はむづかしいものとされている。この艶道日夜女宝記の図譜もまったく空想的産物で、女も男に不自由すればこうではあるまいか、とする滑稽と、艶画としての型破りのおかし味を誇張したのと、更には暴露趣味と見るべきであろう。現代流に言えば一種のオート・エロチズムの美学である。

尚、九道具之註と七開（へき）之註は別章でも度々書くであろうから「七ひやうの事」「八裏の事」のみ次に記す。

七ひやうの事

鼻はいたって高くとがりたるは玉門つめたきなり。

同 色赤くひくきは臭し。

眼はいたってほそき女はしたたるし。

同 たれ目の女はすけべいなり。

眉いたって濃きは心ばせう也。

同 うすき女は心あらくさがなし。

唇うすきはいんらんにてひろし。

八裏の事

髪は色黒くしてふとくやはらかに、少しちぢみたる女玉門そなへよし。
容（かたち）いたって肥えたるは玉門味なし。

同 いたって痩せたるもしまりなし。

首筋 はへさがりたる女は毛深し。

同 いたって上りたるは肌（はだえ）あらし。

背 長き女はふうよろしけれど（姿形はよいが）玉門下付きなり。

同 みじかき女は玉門しまりよし。

尻はまん中少しひらりとして、両の尻ぶさ

（尻たぶならん）まるきがよし。

「七ひやう」のうち、心ぼせうというのは常に交合のことを念じているという意味で、好き者の女の型を述べている。

色道の実相を説いた

七、

新撰古今枕大全

林美一著『春信』（昭和39・10）に拠れば新撰古今枕大全は、墨刷中本六冊、明和年間（一七六〇年代）に刊行され、従来挿絵は鈴木春信説が有力だが、「画者は筆致より見て西川祐信を敬慕し、自画の枕絵も出版してい

る小松屋百亀と推定する。恐らく自画作であろう」と述べている。全文の活字化は徳川性典大鑑上巻および『奇書』第六号（昭和28）にある。大鑑には挿絵はついていない。

内容。序文。男女交合始りの事。誓言の始りの事。粹の善悪覚悟の事。色は分別の内の大事といふ事。男女虚実の事。色乃品定上代古風之巻。奪恋（ねとるこひ）。誠恋。地色の品定当世の巻（月見。雪見）。玉茎玉門百物語（歌かるた。物には時節。方便は嘘の替名。夫婦のはかり事。大晦日は価千金。宝の山。御利生の花舞）。助べひ故事之事（交合交悦の大意を説き、八態位を説明）。工夫の巻（女郎買工夫。地色の工夫）。

この書の特徴も又、色道絵入百科全書といった趣きを備えていることであって、高橋鉄氏の解説に「性の大道を該博な文献の裏付けで堂々と説きおこし、又、恋愛のタイプ・雪月花などに応じての性愛雰囲気・性体験記等々をコント風に綴り、コイッスの心理・女性性感・態位・遊里での心得・恋愛結婚の必勝法」など、一応諸般のことを並べ尽しているところから、この時代には珍しく平俗ながら系統的な叙述を示している。

序文のうちにも、「生きとし生けるもの何れか玉門玉茎を好かざりける。力も入れずして家屋敷を動かし、目に見へぬ夜這の足どりを覚え、父母の中を、ぬけいで、しわき老僧のへそくり金をも出さずするは玉茎玉門（やりくり）なり」などという教訓の文字もあって枕大全の作者の個人的な色道批判論で全編が味つけされていて、貝原式より余程進歩した通俗的ながら鋭い諷刺を交じえた性論が随所に展開されている。また性愛生活を家庭の和合と遊所における楽しみとの、二方面から説き、掌編物語り式に説き、交合態位にまで筆を及ぼした点など異色の作である。

「粹の善悪覚悟の事」の章に、

男のうぬぼれと欲心をいまして、あなたを慕わないと書く恋文がないように、嘘を吐きますと書く誓紙もない筈だ。なじみになった遊女の話をつまみうけて、密夫（まぶ）になつてよ、わたしは金づくでさせているのではないの、などといわれそれを女の真実と思うのも、じぶん勝手に都合のよいように解釈した男の欲で、かえって心の汚たなさを見ぬかれ、恥しいことである。素人女にだってそんな根性ではむかない。まして売物（遊女）には沙汰の限りである。お客をあてにして情け

を待っているものに、きまっただけのお金き

りやらないで、分別思案をしようとする、そんな者の相手になる女こそ不便（ふびん）である。といって、続けて「恋は誠の一字をもつてすべし。彼より無欲の誠を運ばば我も無欲の誠にて、無欲無欲（の気持で）交合（とありあえ）ば終に恋慕の骨法を得べし。金詰りの刃物さんまい、行きづまりの首くくりおそるべし、つつしむべし」とあって、あそびとしての色道の在り方を喝破した、心にくい名文句である。交合論と文学との接近を認めることができるし、快楽としての性を家庭外に求めようとする男たちの欲望、あがき、あせり、それはいつの時代でも変りないものだが

よく書けている。

また、色は分別の内の大事といふ事、では「交合の情は人の所業なれば、人道立ての仏法神道。孔子老子莊子列子なり。しからば夫婦こそ世の根元と知るべし」と、夫婦生活が人道の大本だといっている。これなど誠の正論だが、それとは別に「雪見」というコント風の読物では、

「当世の色事は別して銭しだいで美男もふられ、不男（醜男）の老人はむかしおとこのゆかり、業平さまともてはやされし。さる歴々の隠居様に隣所の娘が文をつけたと、人の噂にちがひなく。欲でとはいひながら、あつかましいと、ねたみそねみの、法界恪気（りん

き）も七十五日立てば、町はづれの物しづかなる所へ、下女一人つけて囲って置き、きょうはしっぽりとした雪降。ふたり炬燵で、小鍋立の有味美（うまみ）、小座敷にとごころ。誰はばかりず口をすふやら頬ずりやら、痴話まじりの酒もり。肴には是此やうな松茸をと……（略）……草臥いびきすふ……鳥の声、鐘のこゑモウ夜が明けたマ一つとはつよいおやぢ様」という西鶴風の物語で、皮肉な眼で人性をみつめている。

「女郎買工夫」は、女郎買いを一生し通そうと思うならば、先ず親孝行をすることであつて、随分と孝行しておれば親だつて大目にみしてくれる。又、女郎買いをして女郎にもてるこつは、親孝行と同じく、何をいわれても女郎の悦ぶことのみ請合つてやることだという説。「地色の工夫」素人女相手の恋愛の心得を記したただけのことで、共に全編の附録としてめでたく句を結んでいる。

まことに枕大全の名にふさわしく、色道全般の虚実を述べ、挿絵、また四十八図（見開き）を副え、画品には古雅な味わいがあって流麗である。全六冊とは当時にあつては、珍しい大部の書といわねばなるまい。

〔伝言板〕

○分譲品録目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚、フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛に願います。○御送金は、現金書留、小為替、振替（切手代用は一割増）にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留（封筒は郵便局で売っています）にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分（前篇写真と絵画特集）第二回分（続篇小説絵画特集）第三回分（前篇続篇収録小説特集）のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依つてのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社へ願います。

病院の夜の思考

闇に咲く花

告白



カッタ・秋 勲

美 田 子 雉

苦しい想い、悩ましい想い

病院の夜は長いものです。

それは夜というものが、また、昼とは別の生き物の如く、そしてその生き物は暗い暗い底の知れないような深い穴を掘って、僕を、

僕たちを待ち構えているのです。

そして僕の過去の嫌な想い、劣等感、屈辱

感……この世で恐らく自分だけが受けたのではないかと思われるような腐ったような過去の思い出の断片が、解決のつかないまま執拗に思考に絡みついて、次第に僕を、その深

い穴の中に陥し込んでゆくのです。病院の夜は、とても長くて恐ろしいものなのです。

しかもその夜が、一週間が七日、一ヶ月が三十日あるのと同様に間違いなくその数だけやって来るのです。

昼間はそれでも、夜に眠れなかったためもあって、また夕方飲んだ睡眠剤が夜間は、あまり利かずに朝方から利く場合もあって、殊に九時から十時頃にかけて、快い窓外の——但し鉄格子の嵌まった——小春日和の愉しさをどこかに感じつつ、恰度、阿弥陀如来の招く極楽浄土とはこのようなものかと思われる眠りに誘われる瞬間があります。

しかしそれも束の間で、まだ自分の忌わしい腐り切った頭に戻るのでありますが、それでもやれ昼食だ、新しい入院患者、などと目先きの変化に時を過ごし、またノイローゼに疲弊した頭に、二階の廊下の突き当たりの僕の好きな窓——これも鉄格子入り——より遠く箕面から摂津に連なる、冬紅葉に彩られた山々を眺めるとき、淋しい乍らも何か人間を生きて行く愉しみといったものが、どこかに在るように思えてならないのです。

夕刻のばたばたとした、これは看護婦だとか看護人の廊下、階段を小走りに行くスリッ

パの音につながりますが、その五時と云う早い夕食に近い頃、

腸猛り俄かに昏ると知り乍らしばし灯点^{とも}さぬこの刻ぞよき

などと云う短歌の一つも作ります。

夕食後、云ってみればどこかに愉しさが隠されているような、そんな感じの一刻です。

一般人であれば、読書、雑談、テレビなどゆっくり愉しむに何の外部からの煩わしい介入もない落着いた時間の筈です。僕も寝台にあってトランジスタラジオのスイッチを入れます。音楽、歌謡曲……暫くするうちに自分の頭の中の悩み、憂鬱感が拡がってきて、またそれを解決せねばならぬ、と云う意識が強^く働いて、気持ちは苛立つばかり。とてもラジオなど聴いている余裕もなく頭をかかえて蒲団の中に潜り込んでしまうのです。

一日中の腐ったような思考の累積が、どろどろと頭の中を解決しないままにどうどう巡りする一方、決して頭を休めさせて呉れない鋭いひっかかりが頭の中を引っ掻き廻し、恐らく鏡でも見れば眼の隅が赤くなる程、神経はすり減り疲弊しているのですが、妙に眠れないのですからその苦しさは倍增するばかりです。そうしてどうしようもない刻が過ぎて

行くのです。

工場で、家庭で、僕を嘲笑し、面罵し、何かにつけて人の良い僕を悪い立場に追い込んだ人々の言葉が生々しく、今現実の如く蘇って来て、僕は思わず泣声を洩らし、お恥かしい話ですが性的な衝動さえ、覚えるのです。そして、今度はその衝動に責められ、身を揉むようにして苦しむのです。

疲弊した思考の中で、そうするとオアシスの如く、侮辱を受けた場面が、懐しいような好ましきで思い出されるのです。

夜もかなり更けてきたのか、時折、所在なさそうに二階の廊下を往たり来たりするスリッパの音が聴こゆるのみの静けさです。いや案外まだ宵の口かも知れません。恐らくベッドの中に居ても殆どの患者は眠りについてはいないのです。世の中の一般人の風習に従って一応ベッドに入ることになっているのです。そしてその各々が、各々味の違った苦しみに悶々と悩んでいるのです。その悩みの精のよ^うなもの、恰も幽鬼の如く病室の中をさまよっている、とでも云えましょう。

僕の居る病室は、以前は事務室であったものを病室にしたもので、ベッドは三つ在るのですが階段下で日当たりも悪いので余程他の

病室が詰まっていけない限りいつも僕一人の病室なのです。稀に精神分裂症等の患者と一緒にになると、幽鬼のようなものを感じます。

深夜ふと目を覚まし、隣りのベッドにこの幽鬼のような気配を感じる時、寧ろ僕は安堵にも似た安らぎをすら覚えるのです。肉体から遊離した、世の人から捨てられてしまったような腐敗した二つの魂が、なんの遠慮もなく宙に絡み合うのです。一度妙なことがあったのです……が、これはまた、いつかお話をさせて貰うとして、この病院に入るまでのことを少し追っかけてみましょう。

哀しい悦び、哀しい愉しみ

ある一件以来、僕は年上の男の人の眼差しを意識するようになったのですが、そうすると、今まで嘲笑だとはかり思っていた笑いに別の意味があるのを発見したのです。僕の劣等感から、全ての笑いが嘲笑の如く思えていたとも云えます。しかし、と云っても大勢に影響なく、嗤^{わら}い者にされるのは従来とも何ら変わりありませんでした。

それから、恥かしいことですが、僕は自分を愛する妙な気持ち芽生えてきたのです。それは二十も半ばにもなり乍ら、女とは一度

も未だ遊んだことがない、と云うよりそんな甲斐性はないのですが、鬱々とした頭を抱えながら下宿の二階で悩み抜いた果てに、一時の快楽を貪る、その時のことです。そんな時は頭の中は苦悶と情慾でどろどろになり、鏡の中の可愛い男の眼は、狂人の如く血走り、自分が他人か他人が自分か判らぬままに、畳の上をのたうち廻るようになって喘ぐのです。他人が見れば恐らく本当の狂人と思うことでしょう。そして精も根も尽き果てて工場を休む日も多くなりました。

その頃、僕は競輪に凝りだしていました。工場を休んだにしても、一日中下宿に居ても益々気が滅入るばかりだし、公園などで時間をつぶすのも長すぎる。映画は観ていても、絶えず頭の中の憂鬱感が邪魔して画面に気が入らない。偶々、人の話から想像して時間つぶしの目的で競輪場に足を運んだのが病みつきになりました。

その競輪場は海峡を見降ろす小高い城趾に在って、興奮のルツボと化している場内と対照的にのんびりとしたその風景も僕は堪まらなく好きなのでした。

海峡は淋しいものです。一日の競輪も漸く終りに近づく夕昏になると、巨きな船が哀

しそうな汽笛を空に響かせながら海峡を抜けて西に赴きます。対岸はすぐそこに淡路島が見えます。お元気の好い日ですと、島の港の家々までが手に取る様に見えんばかりです。競輪で何がしかの金を取られ、あまた今日も無為に過ぎて行くのか、と云った切ない哀感の中に、この海峡を見降ろす光景は何故か身に染みて訴えてくるものがあるのです。

邸を処分した折の幾許かの貯金も三千円、五千円と引き出し、残り少なくなった、それは晩春の頃だったと記憶します。

その頃、僕は穴狙いが専門で、人の混んでいない穴場、穴場と足を向けるのです。お金持などは本命、または本命に近いのに金額を纏めて張るのですが、穴の方は貧乏人、若しくは世の中の生活にくたびれた感じの、敗犬、と云った感じの人達が多いのです。そのような人達の間に混って、眼を血走らせて、あるいはと云った僥倖を追い廻すのです。

と云うのは、一つには競輪に通いはじめて間もない頃、その日の優勝戦に穴を五枚ばかり流し、百円で七千数百円を射止めたその味が忘れられなかったとも云えましょう。

その日は久々に持つ大金に、日頃欲しいと思っていたあれも買えるこれも買える、食べ

たく思っていたお寿司でも食べようか、お酒を少し飲んでみようか、と思つて飲食店街をうろついてみたり、と云つても気が弱くてその様な処には足を運び入れることも出来ず、夜の街をうろろろするだけでしたが、遂に街の出外れの港の方に来てしまいました。

そして岸壁の処に暫く腰を降ろして足をぶらぶらさせ乍ら島の灯台の点滅を眺めていたり、それに豪華絢爛たる灯に船体を飾り乍ら海峡を下って行く、恐らく別府航路でしょうが、その夢のような美しさを眺めていて、ふと僕の幼い頃、裕福だった頃には汽車も当時の二等に乗って、坊ちゃん、坊ちゃんと云われて旅行したものだ、還らぬことを想い起こし乍ら、かけ離れた今の環境を淋しく味わうのでした。

潮の香の夜風が少し寒いと思つた頃、「あんた、なにしてんの、そんな所で」

と女の人に呼び掛けられました。僕はとても応対する勇氣など、ありません。少し年上の感じの、ぽっちゃりとした着物姿。手首を握られた、その柔らかい温みは心まで温もる感じ。そのような印象を心に残し乍ら、振り切るようにその場を逃げてしまったのです。その夜、下宿に帰って、そのおばちゃん

肉体をいろいろと想像し乍ら、また狂気じみた一刻を繰返しました……………。

穴、穴、穴、

大穴を射止めた時の爽快感、思わぬ大金を握って街をうろつく愉しみと、公園のつつじが紅に、真紅に、白色に、とりどりの花を咲かす、と云っても眼を血走らせた競輪ファンには関係のないことかも知れませんが、兎に角、そのような甘い香りの風に、僕の憂鬱に閉ざされた頭が、ああ世の中には愉しい季節があるのだなあ、と茫漠と感じるのです。

第十レース、B級の優勝戦、僕はとてつもない大穴を狙い、二と四の組を一枚買うことにしました。その窓口はあまり人気が無いためか、一つの窓に、二と四の組と、二と五の組の二つの札が掛かっていました。恰度、僕がその窓口の前に来た折、締切前のベルが鳴って、人気のない穴場と云っても若干の人々が馳け廻っていました。

二一四、と云って僕が窓口に入れた時恰度、横から女の人が二一五、と云って手を入れて来ました。僕の手も小さい方だし、片方は女の人の手ですから、二本がすっぽりと窓口に入ってしまったのです。混雑している

時はこのようなことはよくあることでべつに気にもしませんでしたが、歩き出して何の気なしに渡された券を見ると、なんとそれは女の人に渡すべき二一五だったのです。

窓口の売りも、締切前で慌てていて逆になってしまったのでしょうか。が、文句を言っていくだけの勇気はなし、二一四の券を貰った女の人に取り替えて貰おうか、とその人の後を暫くつけて行きましたが、果たしてどちらが入るとも、またどちらも入らないとも——この可能性が大きい——判らない。案外、間違って貰った二一五、が入りそうな気もする。それに女の人に言葉を掛ける勇気が……

その女の方は、僕より五つ六つ年上でしょいか、料理家のおかみと云ったタイプで、さっさと、人混みの中を観覧席の方に行きます。どうしようかと迷い乍ら、結局、僕もその人と少し離れた所に立ってレースを見ました。女の人には連れがありました。土建業の社長と云った恰幅のいい人で、女の人が頻りに何か話しかけているのに、時折、頷いていました。最早、女の人に言葉を掛けるチャンスは全く失われた感じでした。

ところがそのレースは僕にとって全く不運な、その後、度々夢にまで見た、このような

ことが有ってよからうか、と思われる程の結果に終わったのです。

二一四が的中して、なんと一万三千円の大穴になってしまったのです。

わーわー、とその大穴の出現に興奮するファンの喚声の中に、僕は気が顛倒せんばかり胸の動悸は高鳴り、意味のないことを口走って辺りをうろろするばかりです。

すぐその女の人が、当たり券二一四を持っているはず。しかし、なんと云って、その券を女の人から取り戻すことが出来るでしょう。一笑に付されるか、変な云いがかりとばかり、側の男に喚かれるのが関の山でしょう。

しかし、しかしです。ふと僕は気付いたのです。女の方は頻りに談笑していますが、或いは自分が間違って二一四の券を持っていることを知らず、当たらなかった、と思って捨ててしまう、と云うことです。今の彼女の様子では、その可能性は有るようでもあり、ないようでもあります。若し券を捨てれば、それを拾ってしまえばよいのです。捨てる前に確かめられれば、どうしようありません。

兎に角、僕としてはその人の一挙手一投足に注意を払い乍ら、券を捨てるのを待たねば

仕方ないのです。

背後を近々と回り、観覧席に腰掛けている前を下から見上げ乍ら通りました。女の人の着物の裾が少しはだけて、真白い脹ら脛がちらりと見えました。と、こともあろうにこんな時に僕は激しい慾情を感じたのです。大体に女の人はあまり好きではありませんが、やはり興味と云うか、慾情を覚えるものがあります。

やがて、スタンドから人々が殆ど散ってしまつた頃、二人は、やおら腰を上げ動き始めました。スタンドを降りた処で女が、ちょっと待っててね、と云つた素振りをして小走りにトイレの方に走りしました。僕はついて行かなければなりません。トイレの中で券を捨てないとも限りません。それに………実は咄嗟にトイレの中における女の動作の一齣が頭にちらついたので。牝犬を追う牝犬の如く従つて行つたとも云えましょう。

女の人は小柄でしたが肉付きは豊かで、お臀を振り乍ら小走りにトイレに入つて行きます。僕も何気ない風で後に続き、バラックと云つた感じの便所の一つにその女の人の入るのを確かめました。そして僕も、その隣の便所に、そおと音のしないように忍び込んだ

のです。

そこには先程、車券を間違われた不運と反對に、とてつもない幸運が、待っていたのです。元来、板ばりの粗末な便所ですが、その女の人の入っている側の壁板に小さな穴が明いているのです。

或いは誰かがある目的を以てこじ開けたのではないかとも思われます。と云うのは板壁に不自然な汚れが沢山附着していることから想像されるのでした。そして僕は、二つの目的を以てその穴に感謝し、その目的の一つ、見てはいけないものを見てしまつたのです。生まれて初めての経験でした。

女の人はゆっくりと終わり帯の辺りを探しじめました。夢の中にあった僕の頭は、もう一つの目的、車券を捨てるのではないかと、ということに早急に回転しました。僕は太いにあわてふためきました。後で考えてみれば、女の人は落とし紙を探していたのかも知れません。が、その折は、てっきり捨てられると僕は思いこんだのです。そして狂人の如く、女の人の入っている便所の戸を開いてしまったのでした。

女の人が、内から留め金を落としておいてくれれば、少しは様子も違っていたでしょう

に、不幸にも戸は抵抗なく開いてしまつたのでした。

「あれー。ちよっと、誰かあ。なにすんのよお」と、女の人は立て続けに大声で喚きたてました。

僕は、その、貴女が今、便所の中に捨てようとしている車券は一万何千円かの当たり券であるから、捨てないようにして下さい。たとえ半分ずつでも分けましょう。……といった内容のことを言いたいのですが、先程よりの異状な興奮と、金切り声に気圧されて、口をばくばくして、トイレに半身、這入りこんだままだったのでした。

その僕の襟首が、いきなり後から掴まれました。例の連れの男が僕を引きずり出したのです。

パシッ、ピシッ

僕の頬が無慙な音を立てて、男の大きな掌の中に鳴りました。

「いや、そうじゃない、僕は痴漢じゃない」

といっているつもりでした。しかし、それは言葉にならず、僕は男に引きずられるように警官詰所に突き出されてしまつたのです。

「ふんふん、この頃、公園の中におかしなのが居る、とは聞いていたが、まあ本署の方で

僕のイメージ画『蓮の花笠』室井亜砂路



充分、取り調べることにしましょう」
年輩の警察官が、既に一言も物が言えなくなつた僕を舐めまわすように見て、連れて来

た男の説明に応えました。そして僕はジープに乗せられて、その年輩の警察官と共に本署に連行されたのです。

それからのことは多く語る必要もないと思います。

僕を連行した年輩の警察官は、その方の主任であり偶々その日は競輪場の方に出張していたのです。訊問する警察官の中には面白半分に、

「それで、覗いたら、何が見えた」

「それで、どんな気持ちになった」

などとかからかう人もいましたが、その主任はどちらかといえば僕の性格自体に同情的で、僕としてもその主任に対しては、あからさまに一部始終を話し、抛りどころのない自分の魂と、不快な悩みの尽きることをない気持ちで打ち明けて涙を流してしまつたのです。

そして主任は、

「君の精神面は相当疲れているし、思わぬ妄想から犯罪に繋がっても可愛そうだから」といって、今の病院を紹介して下さつたのです。

「精神病院に入院」……そのことを聴かされた時、僕は他の人と反対に、何か冴え冴えとして果てしない冬空高く、自分の魂が舞い上って行くようなすがすがしさを覚えました。

それは諦感というより、自分を待っている何か、遠い処より自分を呼んでいる、といった感じでした。

今までも、ふと何かの折に、刑務所の独房でもよいから、独りで誰からの干渉もなく、居られる所を望む気持ちになつたりしたのですが、思わぬことから自分の希望に似た生活が実現することと、なつたのでした。

ささやかな計画

病院の夜は実に長いものなのです。

半ば夢のように過去のことなど想い起こし乍ら、それでも意識の半分以上は起きております。

このようにして、これからまだまだ続く、恐ろしい長い夜は少しも進まないのです。

静かなようでも患者の殆どが眠っていないのです。その夫々の人が苦しみ乍ら何かを考えているのです。

その想いは遠く娑婆を馳け廻っているのかも知れませんが、しかしそれは風船玉のように現実と融合することのない単なる空虚な思考とでもいべきでしょう。

そして遂に堪まらずベッドから降りて、檻の中の虎のように廊下を歩き廻る者、水を飲みに行く者、トイレに行く者、月明りの夜景を眺める者、それに他の患者のベッドに潜り込む者……など、入り乱れ、殆ど明け方まで続くのです。

僕自身、一日中のどろどろとした暗澹たる思考の果てに、生理的な欲望の高まるものこの時刻です。そしていらいらとした神経作用は、自棄的にその充足を僕自身に迫り、自制心なんて全く、なくなってしまうのです。

ガタリ、

とドアが開かれて誰か覗きます。

「起きてんの。ラジオがあいてたら……」

途中まで言って海島さんは、ドキッ、としたように言葉を止めました。今、何があったか、男性ならば容易に知ることが出来る筈です。

海島さんが一瞬、戸惑った末、ドアを閉ざして出て行こうとした瞬間、僕は勇を鼓して言ったのでした。

「海島さん、僕の下着、海島さんの洗濯機で一緒に洗ってくれない？」

海島さんは古い入院患者で、洗面所に自分の洗濯機を置いていました。日頃は温和な人柄ですが、時折、狂暴性を帯びるのです。何か戦争の時にそのようになったまま、未だに治らないということです。

海島さんは、日頃僕に出合っても知らぬ顔をしている時もありますが、時には別人の如く優しく覗き込むように笑います。そしてパジャマの下まで見透かす如く、しげしげと眺めることがあります。内気な海島さんが僕に對して何か言いたいことがあるように思えてならなかったのです。

また一度、鉄砲の傷跡を見せてあげる、といって大腿部を見せてくれた時、僕はその傷痕よりも、こぶこぶとした力強さに魅せられてしまったのでした。

そのような海島さんに、僕は一か八か、このチャンスを、ぶち当てたのです。

「とっても汚れちゃって……」

僕は強いて羞かしそうに、ブリーフを海島

さんの方に差し出しました。すると、操り人形の如く海島さんが寄って来て、そのブリーフを大切そうに両手で受け取りました。そして彼の眼は、僕に、ちらっちらっと注がれるのです。

「ああ、寒くなっちゃった」

僕は見られるのが羞かしい、といった風に蒲団の中にもぐり込みました。病院の夜は長いのです。そしてその夜は、これから気の遠くなる程に長い月日の毎日々に必ずやって来るのです。

その夜に少しでも人間らしい、いや逆に人間として浅ましい、というべきかも知れませんが、幾許かの潤いをこれから僕は海島さんとの間に見出して行く、という張り合いが芽生えたのです。

海島さんは、ゆっくりとドアの方に姿を消しました。

けれど恐らくドアの外で——これは僕の自惚かも知れませんが——僕のブリーフを顔に当てて、口づけを行なっているであろう姿を僕は想像して疑いませんでした。

——（おわり）——

濡れ鼠のゴムマント

感激の...

...あの日

文と絵 梅川幸子



真紅のゴム引レイシコートにくるまって、三面鏡に映った自分の姿にうっとりしている女…。魔法使いのようにまぶかにかぶったフード。レイシコートと同生地収納袋を裏返しにして、ゴム引きしたほうを顔にあてがい、上から大きな白いマスクで押さえ、両手にはお台所で使うオレンジ色のゴム手袋。そして両足にはお百姓さんなどが使う総ゴム製の茶色で腰まで届く、つま先が二つに割れたゴム長。螢光灯に異様に光るゴムにスッポリと包まれている女！これが私の姿ですが、ゴムの独特の臭いと息苦しさ、私を夢の世界へ連れていってくれるのです。

こんな私とても、なにも、ある日突然にゴムマニアになったわけではございません。

私が小学六年生の時のことが、それまでもゴムマントに憑かれ気味だった私に、決定的な愛着を覚えさすようになったようです。

当時はゴム引雨具の全盛期でして特に小学生は多く着ていたものです

が、女兒用は赤か水色で特徴はそのフードでした。ちょうど昭和初期の婦人帽のようにスッポリと頭を隠し、かざりのヒダが付いていて、それに大きく折返したひさしがあり、雨のはげしい時には、このひさしを立てるのです。

私はこの赤いゴムマントを持っていました。が、フードや肩を打つ雨の音、テラテラとした光、ぐっしょりと雨がしみこんだ冷たく重い感じ、ひさしからしたたり落ちて顔を濡らす雨水、歩くたびに素足に当たるゴムマントの裾などに、何かとても好ましい想いを持っていたのでした。

さて、昭和10年のはじめ頃だったと思いますが、六年生の私は小柄ながら発育がよく、既に初潮を体験していたのですが、受持の光生（三十幾つかの女の先生）に、大変好意を持っていました。この先生はいつも和服にハカマをはいて自転車を通っていられたのですが、雨の日には大きな男物の黒いゴムマントに男物のゴム長で、ペダルを踏んでいた姿がとても素敵だったのです。

用件は忘れましたが、ある雨の日の夕方、私はゴム長をはき、赤いゴムマントにくるまって先生の下宿を訪ねたのでした。玄関に先

生のゴム長が濡れたままニュツと立っていて自転車の上に脱ぎすてた黒いマントが掛けてありました。好きな先生でもあり、欲待されるままに楽しい時間を過ごしておいとましようとする、どうでしょう。外は真暗になり車軸を流すような土砂降りになっていたのです。しばらく様子をみていましたが小降りになる様子はなく、私は思いきってゴムマントにくるまりました。

先生は、私を一人で帰すのが心配になられたらしく「送るから」といって、手早く着物の上にモンペをはき、ゴム長とゴムマントを着て下さったのでした。私は胸がドキドキするほど嬉しかったのを覚えています。

表へ出ますと、道は流水におおわれ、溝は雨水がわき立つようにあふれて泡をたてていました。滝のような雨の中を、二人はぴたりと寄り添って足を早めました。ゴムマントの裾をバタバタとはためかせながらしばらく行くうちに、私のゴムマントはぐっしょりと雨を含んで重くなり、裏地は濡れ雑巾のようになって体にまつわりつき、ゴム長の中にも水が流れこんで溜りました。

まるで濡れ鼠みたいになりましたが、私はいやどころか、先生と一緒にだということがと

ても嬉しくてしかたがなかったのです。先生は時々振り返っては優しい笑顔で励まして下さいました。

私達は近道を選んだのですが、その道には幅五メートルぐらいの小川があり、ふだんは深いところでも一メートルぐらいの浅い川ながら、着いてみると、この集中豪雨で水かさが増えているのが夜目にもわかり、流れの音に雨と風の音が混って、さすがに少し不安になりました。しかも、この川に架けてある橋は、ごく簡単な吊り橋なのです。

先生は橋の前で立ち止まり、「しっかりついていらっしゃいよ」といって、ゴムマントのボタンをいくつか外して両手を出されました。男物のゴムマントには、学童用のように手を出す孔がないのです。だから手を出す時には前ボタンを外して、雨に濡れるのを承知でひろげなければならぬのでした。

先生は吊り橋の針金を両手でしっかり掴んで渡り始めました。私も同じようにして従いました。二人並ぶだけの幅がありませんのでどうしても後からついてゆかねばなりません。真中に近づくに従って二人の重みで橋板がしなって、水かさの増した水面すれすれになるのです。横なぐりの風雨は容赦なく吹

きつけてきますし、ゴムマントは重く、もう着ているものはグッショリで、まるで水の中に浸っているように思うように動けず、その上、グショグショのゴム長が、ユラユラと揺れながら弓なりに吊橋の板が撓うばかりでなくつるつると滑るのですから、走るところか足速になることも出来ないのです。

先生は後ろの私を励ましなが、針金を掴む腕で私の手を庇うようにして下さり、ボチボチと進みました。

それでもどうやら渡り切れそうに思えた時でした。グーッと撓った吊橋の板が川の水面に浸り、足首に激しい水の流れを受けたのです。それだけでなく滑ろう滑ろうとしていた足許なのです。私は必死に針金を握っていたのですが、足許をすくわれるのはどうにも出来ず、とうとう吊り橋の上へ尻もちをついてしまったのでした。

ピッタリと体を包みこんでいるゴムマントが重い上に、前の孔から出している両手は肘までで、まるで上膊部を縛られてでもいるように動きがとれません。その上に溢れるように一杯に水を呑みこんだゴム長は鉛のように重い上にどんどん流れる水流に押されるのです。尻もちをついて両足を投げ出した形で、



腰から下を水の中に浸ったままの私は、ありったけの声で先生に助けを求めました。

もちろん、先生はすぐに助け起こそうとして下さったのですが、片手は針金を放すわけにゆかないので、片手だけでは力が足りないのです。私は何度か腰を上げかけては滑り、また尻もちをつきました。

遂に先生は両手で私のゴムマントの肩を掴

もうとなさったのです。引っぱるだけでは駄目なので抱き起こそうと思われたのでしようが、これが反動となったらしく、吊橋がグラグラッと揺れたかと思うと、あっという間に二人は、水かさの増した小川に、ころげ落ちてしまったのでした。

ゴボゴボ…ゲボゲボ…

小川に落ちこんだ私は、したたかに水を呑み、死にものぐるいで浮かび上ろうとしました。でも、何しろゴムマントを着た上にゴム長で、橋の上でも起き上がれなかつたくらいです。思うようになりません。それこそ死ぬ思いであがいて、やっと水面に顔を出しても、激しい水流に押されて、またゴボゴボと沈みそうになるのでした。

夢中で小川の岸にしがみついていたようやく気がつく、ちゃんと川底に両足がついて顔は水面上に出ていたのですが、あごのところで別れて流れる水流の怖さに、へなへなと気を失いそうに思いました。

そのとき、ポッカリと目の前に浮き上ってきたのが先生の黒いフードでした。それはすぐにグッショリと水浸しの先生のお顔に押し上げられ、テラテラ光るゴムマントにいっぱい水を流しながら胸ぐらいから上を水面に現

わしたのでした。

先生は、ざぶざぶと流れをかきわけて私の側まで来てくださり、今度はしっかりと抱いて下さいました。「怖かったでしょう。でももう大丈夫よ」といわれた時、私は物もいえないで、しがみついてゆき、冷たい先生のゴムマントに顔を押しつけてしまいました。

そして、先生が抱き上げるようにして私を岸に押し上げて下さり、今度は私が先生の手を引っぱって、どうにか二人とも川の中から上ることが出来たのでした。

でも、すぐには立ち上がれず、二人は抱き合ったまま、相変わらず豪雨の叩きつける中で横たわっていました。

「よかったわね」……先生はそう言って、私の濡れて頬に貼りついていいる髪をかきわけるようにしてくださいました。

私は急にたまらないような衝動を覚えて、先生に抱きつき、フードを後ろへ押しやり、がむしゃらに先生の黒いフードも押し開いて濡れた先生の頬に、私の頬をすりつけていたのです。先生はべつに驚かれたようすもなく、しっかりと私をゴムマントの上から抱いて応えて下さったのでした。

私のゴム愛好は、これが口火なのです。

六回完結 S 小説
△その一▽

パノラマ島秘譚

藤見郁

作者・註Ⅱこの小説の前半（約三分の一）は、すでに六年ほど前、某誌に発表しましたが、今回はそれを全面的に書き改め、補筆して新しく書き下ろしたものです。後半（三分の二）は、全く新しい内容です。

美少女と醜女

華やかな真紅の絨毯が、目に痛いばかりに敷きつめられた部屋だった。

高宮美香の白い清潔な肉体は、左肩を下にした、ややうつぶせの姿勢で、その赤いしずかな波のなかに沈んでいた。

美香の肌をおおっているのは、純白のスリッパだけだった。そのスリッパは、いまだきめずらしい上等の絹製品だったが、美香のさ

らけだされた皮膚の色は、その絹よりも白く
しなやかに光り、真紅の絨毯から浮きだして
いた。

美香の両眼はかたくとじ合わされていた。

まつ毛の数が多く、塗ったように黒くて長い。品よく鼻すじのとおった、愛らしい顔立ちだった。その鼻と、よく釣りあいのとれたあどけない唇が、咲きかけた花のように半分ひらき、白い歯がのぞいていた。

意識はねむり、目とはじられているが、この少女の容貌の美しさと、まれにみる気品は

容易に察しられた。

「かわいい顔ね」

美香の人形のようにうごかない顔をのぞきこんでいたシコが、金属的な黄色い声で、ひとりごとをいった。

「こんなにかわいらしい、品のいいお嬢さんを教育しなくちゃならないなんて、あたし、つらいわ。いやだわ」

いやだわ、などと言ったが、そんなに、いやでもなさそうな顔だった。

美香を突き刺すように眺めている度の強い



近眼鏡が、つめたい色で光った。シコは、めがねをかけなければ、歩行も不自由な女だ。小柄な体格で、からだ全体の肉が、うすく、一見して、貧相だった。

ナイロン生地を使ったジャンパーとスラックスをはいていた。ナイロン製のスラックスとジャンパー姿、というと、いかにもスポーティーで、スマートにきこえるが、その色は上下とも、どぎつい赤紫である。

この赤紫色に、ナイロン特有のあの安っぽい光沢を加えると、一見あかるい派手な印象を人にあたえるが、すぐにその印象は、嫌悪と変じる。

つまり、暗鬱、懷疑、狂気、陰険などの感情を裏側にひそませた不吉な色彩を、シコは全身にまとうているのだ。

これはしかし、シコ自身の好みではない。

この女は、この女の主人の命令によって、この赤紫色の品の悪いコスチュームを着せられているのだった。

——いいかね、このキチガイじみた色と、陰険な艶をもつ服が、お前のその貧弱で、醜悪な性格には、いちばんぴったりののだよ、シコ。つまり、お前は、お前の性格を全身にまとうているのだ。わかってるね？

そういつて、シコの主人は、にんまりと笑い、自分で満足そうにうなずくのだ。

高宮美香の長いまつ毛が、ふいに、おびえたようにけいれんした。形よくとがった顎がうごき、半びらきの唇が、なにかを求めるようにふるえた。

シコは、あわてた。美香の目ざめる前に、自分の役目を果たしておかねばならない。

この真紅の絨毯の部屋の片隅には、一見、衣裳だんすに似た、小粋な道具棚がそなえつけられている。

そのマホガニー製の道具棚の、淡いクリム色に塗られた一メートル四方ほどの扉を、シコは両手で、手早く左右にひらいた。

「まず、手枷を……」

シコはつぶやいた。ひとりごとを言うのがこの女の癖らしかった。

「それから、足枷……」

道具棚のなかは数段に区切られ、各種各様の手枷、足枷、首枷のたぐいが、整理よく納まっていた。

「どれにしようかしら。そうだわ、社長のいちばんお好きな、黒くておもたいセットがいわ」

上段の左側に整然と納められているその枷

具を、そなえつけの踏み台にのり、さらに背のびして、ようやくシコは手にした。そして少女が人形を抱くように、そのひと揃いの枷具を、よいしょと胸に抱きしめた。

ふりかえると、しずかに眠りつづけている白い清潔な少女のそばへ寄っていった。

「高宮美香さん、とおっしゃったわね。これが、これからの、あなたの素敵なアクセサリよ」

機嫌よくつぶやきながら、シコは美香の腰のうしろへひざまずいた。そして、美香の白い両手をとると、背中へまわした。右腕をまわし、さらに左手首をつかんで、ねじりあげるように背後へまわしたとき、

「む、む……」

と、美香が、かすかな声をのどの奥であげた。が、意識はまだ不明のままだった。

「ほんとに、きれいな肌。人間の肌がこんなにも美しいものだなんて、私には信じられないわ。若いつてことは、うらやましい」

シコは、つねにぶつぶつと、ひとりごとをもらしながら、手を敏速にうごかす。

背中へまわした美香の細い両手首へ、黒い鋼鉄製の手枷を、かちりとはめた。その手枷の鍵をぬくと、シコは自分のジャンパーのボ

ケットへ無造作に突っこんだ。

つぎは、足枷だった。

美香の左右の足首をつかみ、膝をのばすようにしてそろえた。そうしておいてから、黒塗りの枷具を、片手でひき剥がすようにしてひらいた。

少女の愛らしい二本の足首を、半円型にひらいた固い枷具の穴のなかにはめこんだ。そして、上からがっちりとおろして、はさみこんだ。

シコの手つきは慣れていた。錠をおろし、鍵をひきぬくと、シコはその鍵をまた、ジャンパーの胸ポケットへ入れた。

なんの抵抗もなく、意識を失ったまま横たわっている美少女の四肢に、完全な手枷と足枷がはめられたわけである。

なめらかな細い手首、すっきりと形よく肉づいた白い足首にはめられた頑丈な鋼鉄製の枷具は、苛酷な対照をみせていた。

両腕が背中へねじあげられているために、肩のあたりの白い肉が、小さく盛りあがっていた。それが、ひどく痛々しいゆがみにみえた。

足枷のさきには、左右の足首が行儀よくそろって並んでいた。十本の白い指も、小さな

人形の顔のように愛らしく並んでいた。

スリップの短い裾がまくれあがっていて、透きとおるように白い太腿がのぞいていた。それは白いというよりも、むしろ青かった。過不足のない、女らしい肉のついた太腿だったが、卑猥な感じはすこしもなく、むしろ神聖な美しさを誇示しているようだった。

重い枷具

それから五分ほどの時間が経過したとき、ようやく、美香の意識がよみがえった。

「む、む、む……」

美香の白いのどがかすかにあえぎ、あまえるかかのような声が小さくもれた。長いまつ毛が、上下にひらいた。美香の目にはいったものは、まず、燃えるような真紅の色だった。まぶしかった。美香は反射的に顔をしかめた。

両手首が背中中で固定されているために、からだは、うつぶせになっていた。

左右のてのひらを床にあてて、ともかくも身を起こそうとしたのは、めざめた人間の本能だった。

だが、美香にその自由はなかった。膝をま

げて、立ちあがろうとした。しかし、足首にも重い不気味な足枷が固く噛みこんでいた。

「あッ」

はつきりと、美香に正気もどった。

自分の両足と、背中にまわされた両腕の自由が、不気味な重い枷によって奪われていることを、ようやく自覚した。しかも、いつのまにか服をぬがされていて、うすいスリップだけの恥かしい姿なのだ。

むきだされた素肌に、なまぬるい、どこか不透明な感じの空気が触れていた。

ここは、どこなのだろうか？

こんな赤い部屋なんか、私は知らない！

未知の世界へ迷いこんでしまった不安が、

美香の全身をおしつづんだ。

「まあ、おめざめね、美香さん」

目の前に、みたこともない女の顔が、慣れなれしく笑っている。

めがねをかけた細い目。まるめた粘土を、そのまま無造作に顔のまん中へのせたような形の悪い鼻。そして、大きな口。

いや、口そのものは、たいして大きくもないのだ。上顎と下顎が、前方に突きだしている、つまり出ッ歯である。その出ッ歯をかくすために、唇をいつも歯の前で合わせる努力

をしている。大きな前歯を、うすい唇でかくそうと常に意識する結果、口ぜんたい、そして顔全体が、ひどく醜く、不格好にみえてしまっているのである。

鼻の両脇から、唇の左右の端にかけて、きざんだような皺が寄っている。まるい鼻と大きな口のバランスがむなしくずれて、彼女の器量を、この上もなく醜いものにして、接する者に不快感をあたえずにはおかない。

さらに、艶気のない髪の毛。青白くむくんだ、不健康な顔の色。その奇怪な顔が目の前にせまったとき、美香はぞおツとして、思わず目をとじた。が、はげしい不安のために、また、おそろおそろ目をあける。

「まあ、美香さんのおめめは、ぱっちりとしていて、本当におきれいな。すてきだわ。そのかわいらしいおめめをえぐり出してスプーンにしてたべたら、どんなにおいしいことでしょう。社長さんも、とてもおよろこびになるわ」

シコは、めがねの奥の針のような目を、いっそう細くしていった。

「ここはどこです、教えてください。私はどうして、こんな所にいるの？ 私の手と足にどうしてこんな重い固いものがくくりつけら

れているの？ お願いです、教えてッ」

恐怖に襲われた美香は、シコにむかって、絶叫のような声をあげた。

手足は重い枷具で締めつけられていて動かせない。腹ばいのまま、美香は顔をあげ、視線だけで、シコにすがった。

「お願いです、ここはどこなんです。おしえて！」

「うるさいわね。おだまり！」

シコのとがった声が、美香の顔にたたきつけられた。

いままで本心をおさえて、柔和な口のききかたをしていたのが、セキを切ったように、きゅうに意地の悪い声音になった。

「あなたが、なぜこのお部屋に、そんな姿でいるのか、それはすぐわかりますよ、いやでも……。私の口からそれを言うのと、私が叱られるの。でも、本当にすぐわかるのよ。わからないほうが、あなたのしあわせとも言えるんだけど……」

「でも、でも……」

美香は、全力をふりしぼって起きあがろうとした。絨毯に肩をこすりつけ、髪の毛を左右にふった。歯をくいしばって這い、腰をくねらせた。

スリッパの裾がまくれあがって、白いパンティに包まれた尻がみえた。しかし、両腕の自由を重い鉄枷でうしろ手に奪われていては結局、無駄な努力でしかなかった。おまけに足枷まではめられていては、膝をまげるのも容易ではない。もがいたために、少女のまるい尻は、いっそう、さらけだした。

度の強いめがねが、美香のそんなむなしいあがきを、ひややかに見おろしていた。

美香の清潔な青白いえり首に、うっすらと霧を吹きつけたような汗がうかんだ。目の上に乱れた髪の毛が、おおいにかぶさった。

「そう……。そんなに起きあがりたいのは、あなたのからだだから、もう麻酔薬が切れた証拠ね。それでは、社長さんをお呼びしましょうね」

底意地の悪いシコの声音が、美香に降りそそいだ。不吉な予感に、美香は肩を小さくして、おののいた。

目につくものは赤い色だけで、ほかにはなんの装飾もないこの部屋に、たったひとつドアがあった。そのドアの、すぐわきの壁に、ぽつんと黒いボタンが貼りついている。

シコは五、六歩あるいて壁ぎわまで近寄ると、指さきでその黒いボタンを押した。

すると、三十秒ほどたってから廊下にひくい足音がきこえ、ドアは外からあけられた。「社長——」と、シコがいった。「美香さまが目をさまされました」

シコの報告に、社長とよばれた男はだまっとうなずき、この真紅の部屋へ足を踏み入れた。そしてスリッパの足を、腹ばいになっている美香の鼻の前まで運んだ。

このとき、美香の心から恐怖は消え、むしろ怒りの目で、男を見あげた。長いまつ毛をはっきりと見ひらき、おそれもなく、男の顔を凝視した。

手枷足枷をはめられ、床にころがされていても、この男の無礼はゆるせないという自尊心が、少女の心にあった。

男の視線と美香の目が、まったくべつの意味と感情をもって合致した。

男の目が、あらためて美香の美貌と、女らしく発達した新鮮な姿態を確認して、まんざくそうな笑いに細くなった。

とくに男が気にいったのは、少女の膝の上から、きゅうにむっちり肉のついた、それでいて清潔なエロチシズムをただよわせている太腿だった。そのういいういしい太腿の白さは、その奥の秘められた部分の新鮮な魅力を

確実に暗示していた。

この少女のスリッパをぬがし、パンティをはぎとったときの感動を想像して、男は少年のように、うっとりした表情になった。

「社長、いかがですか。みればみるほど、いい子でしょう？」

下卑た追従の顔で、シコがいった。

「うむ、いい子だ。当分たのしめる」

素直に男は、うなずいた。

スリッパにかくされてはいるが、この美少女の乳房のまるみ、腹部の魅力的なくびれ、臀部の隆起が、すべて男の目にみえる。下腹や太腿のすべすべしたならかな感触が、男の指さきをむずむずさせる。

「本当に、いいお嬢さんだよ」

男は、ひとりごとのようにつぶやいた。

パノラマ島観光株式会社社長——というのが、この男の肩書である。

そして、この男のもうひとつの名は「Q」といった。

狂った運命

「ウフフフ。気分はどうかね、美香。麻酔薬の効果は十分だったようだね。あの薬は、

効いているあいだじゅう、バラ色の夢がみられるはずだから、そんなに不愉快な気分ではないだろう」

いいながら、Qは傲慢に胸をそらせ、皮のスリッパのさきで、美香の白い頬を軽く小突いた。

「お願いです、教えてください。ここはどこですか。私はなぜ、こんな部屋にころがされているのですか」

美香は、顔の筋肉を陶器のようにこわばらせてQをみあげた。スリッパで頬や鼻をなぶられた屈辱が、彼女の表情を蒼白にし、戦々然なものにしていた。

「ウフフフ、知りたいかね。だが、そんなにあわてることはない。すこしずつ、自然にわかってくる」

Qのスリッパは、つぎに、美香のやわらかい顎の下に触れた。

猫ののどをくすぐるように、スリッパのさきが、美香のやわらかい白いのどくびを、ぐりぐりと、こすった。

「ううッ、失礼な！」

怒りと屈辱に、少女の眉のあたりが紅潮した。顎をせいっぱい横へねじまげて、Qの足を避けようとした。だが、固くて重い手枷

と足枷の束縛が、身をのけぞらせる自由すら奪っていた。

Qは、美香ののどをたっぷりとくすぐりなぶってから、つぎに、うつぶせになっている胸もとをねらった。まず皮スリッパのさきを腋のあたりから、こじいれようとした。

「ううッ、やめてッ」

美香は自尊心を忘れて、反射的に悲鳴をあげた。この苦痛も屈辱も怒りも、美香にとっては、まったくはじめての経験だった。

「おとうさまッ、おかあさまッ」

スリッパの胸をふくらませ、大きくあえがせて少女は絶叫した。髪がいよいよ乱れ、愛らしい目鼻がくしゃくしゃにゆがんで、泣きだしそうな顔になる。

「ウフフ、美香はもう十七歳にもなるのにまだそんなに、おとうさんやおかあさんが恋しいのかい」

Qは、美香の顔をのぞきこんで笑った。

さんざん揉んだ末に、スリッパの足を少女の胸の隆起からひきぬく。男の心を十分にまんぞくさせる量感であった。しかし、いつまでもなぶることはしない。

泣き声をあげて両親に救いをもとめるような純情な娘を、いまからこんな汚しかたをす

るのは性急すぎる。もったいない。Qは自戒した。

あわてることは、ひとつもないのだ。おいしいたべものに、いそいで箸をつけることはない。

Qにはもう、この美香に関する身上の一切はわかっていた。

東京に本社をかまえ、全国主要都市に八つの支社をもつ、高宮物産株式会社社長、高宮慶一郎。これが、美香の父親の肩書と姓名である。

母親の名は志津子。慶一郎、志津子とも健在で、きわめて標準的な上流家庭をいとなんでいる。美香は三人姉妹の中の二番目の娘で一カ月前に、十七歳の誕生日をむかえた。

高宮慶一郎という人物には、古風な貴族趣味があり、三人の娘たちは、すべてその貴族趣味によって育てられた。

「美しい。本当に美しいよ、美香。ただ顔たちがととのっているというだけではなく、骨の髄まで、高貴な気品がしみこんでいる。わたしは金を儲けるよりほかに、なんのとりえもない人間だが、女の子の美の素質をみる目だけは、不思議にそなわっている。わたしの点はいつものからだが、美香には文句な

く、九十点を進呈しよう。百点満点を目標として、あとの十点は、これからのわたしの教育によって追加されるのだよ。ウフフフ。とにかくお前は、まるでわたしのためにこの世に生まれ、育てられてきたような女の子だよ」

Qは、感にたえた声を発した。

自分をおとし入れた畏の仕掛けが、そのとき突然、美香の脳裡にひらめいた。

「わかったわ！ ここはまだ、パノラマ島のなかなかのね。私はまだ、パノラマ島のなかにいるのね！」

「うむ」Qは、にっこりと、まるで父親のようになやしくうなずいた。「そのとおりだ。まったく、そのとおりだよ、美香」

不安のために呼吸をとめた美香を、Qは目を細くしてみつめた。それからゆっくりと、美香の周囲をまわりはじめた。

「お前と、お前の両親の三人がこのパノラマ島へやってきたのは、おとこの午後一時三分すぎだった。一時到着のフェリーボートが約三分おくれたね。お前たち親娘は、まず空中観覧車にのって、このパノラマ島の全景をながめてから、未来の国、過去の国、ミステリ・ゾーンをまわった。童話の国の迷路で、

さんざん迷ったあげく、地獄めぐりの洞窟へまぎれこみ、お前たちは半分目をとじて、そこを抜けだした」

「……………」

美香は、Qの顔を凝視した。それにちがいないのだ。

「お前たち親娘は、その夜はパノラマ島第一ホテルで宿泊した。夜食後、ホテルの庭園でダンスパーティがあり、お前はそれに参加したいと希望したが、両親はゆるさなかった。そして、お前たち三人は、きのうの昼、パノラマ島のほぼ中央に位置する『鱈の海』という大きな濠で、ボート遊びをしたね」

「……………」

「その『鱈の海』のまん中に浮かび、高くそびえているのが『夢の城』という、ごく単純な名の古城だ。十一世紀イギリスのベディンガム城を、そっくりわたしが模してつくったお城だ。お前も案内板を読んで知っているだろうが、この城の内部を見学したい者には、ひとり十万円の入場料をとる。すこぶる、高価だ。常識をはずれている。だから、よほどのもの好きでなければ、この城にはあがってこない。せいぜい一時間千円の貸しボートで城のまわりを囲んでいる濠をぐるぐる漕ぎま

わるだけだ」

まるで自分がそのボートになったように、Qは美香のまわりをふらふらと歩きまわる。

「この赤い部屋はね、美香、じつは見学料十万円の、その『夢の城』の城内につくられた部屋のひとつなのだ。そして、いまは午前一時、つまり一般の常識でいえば、真夜中というわけだな」

「ああ……」

美香は、驚愕とも、あえぎともつかぬ声をあげた。

このひとの言ったことが、もし本当なら、自分の運命は、ふいに、どこかで狂ってしまったのだ。なんの予感も前触れもなく、そして原因も理由もなく、いきなり狂ってしまったのだ。

それとも、これは夢だろうか。おそろしい悪夢が、執拗に連続しているのか。

それならば、早くさめてほしい。どうしたらこの不気味な夢を追いはらうことができるかしら。

美香は息をつめ、全身の力をふりしぼって胴体をひねった。しかし、両腕はたしかに背後にあり、手枷で締めつけられていた。背中与腰の皮膚には、鉄枷の固くつめた感触が

夢でも錯覚でもなく密着しているのだ。

足首には、膝を折ることもできないほどの重い足枷。

美香はもう一度、肩から胴体をひねった。同時に、肩のつけねから二の腕の筋肉がぬけるほど痛む。この疼痛と、鉄枷の冷酷な接触は、けっして夢でも幻影でもないのだ。

夢ならば、どんなにおそろしい悪夢でも、さめてしまえば、また幸福な美香の生活にもどれるのだ。

しかし、どのように努力しても、美香の力ではこの鉄枷から脱出できない。この固く密着した現実からは、逃避できないのだ。

移動いす

「さあ、それでは、真夜中の散歩としゃれようかね」Qがいった。「といっても、この城内だけの散歩だね」

すると、シコが、心得ました、という表情で、一礼してドアから廊下へ姿を消した。

「城のなかだけ、といっても、ずいぶん広いのだよ。すみからすみまで、全部をまわったら、十時間はかかるだろう。だから、当分のあいだ、毎日すこしずつ順々に案内してあげ

ようね」

なめらかな美香の肩から二の腕を、やさしく指で愛撫しながら、Qがいった。

ドアの外から、シコの声がきこえた。

「社長、移動椅子のしたくができました」

「うむ」

と、なおも美香の素肌に指をすべらせながら、Qはうなづく。

その移動椅子は、この真紅の部屋のすぐ前の廊下に、まるで主人を迎える高級車のような、もののしいポーズで待っていた。

そして、移動椅子といっしょに、ふたりの女性が、直立不動に近い姿勢で、廊下に立っていた。

ふたりとも半袖のブラウスに、極端に裾の短いスカートをはいている。ブラウスもスカートも、ほとんど透明の生地を使っていた。

だから、このふたりの女の肉体の起伏は、ひと目でわかる。堂々たる肉づきの、魅力ある体格だった。ふたりとも非常に美しい容貌をもっている。が、不思議なことに、その顔立ち、ほとんど同じだった。一卵性双生児のように酷似していた。からだのプロポーションまで、そっくりだった。

「おい」

と、室内から廊下に目をやって、Qがふたりの美女を呼んだ。

「はい」

ドアの前で待機の姿勢をとっていたふたりは、同時にこたえた。

「このお嬢さんをな、移動椅子におのせしなさい」

と、Qは傲慢な、しかしその傲慢さがすっかり身につけている口調で命じた。

「はい」

ふたりは、ドアから同時に、機械的なすばやさで、はいってきた。

足には、透明ビニール製のブーツをはいている。この靴は、まるで裸足のように歩いても足音がしない。

「待て」と、Qが女のひとりに不機嫌な目をむけて言った。「お前は、だれだ。足首がすこし、ふとくなっているようだな」

指摘された女は、顔をあからめた。羞恥のためらしい。靴は透明だから、足首のふとさは、外からもよくわかる。

「A子でございます」

そういって、女はQの前で、くるりと自分の背中をむけた。そして、透明ナイロンでできているスカートの裾を、自分でまくりあげ

た。「A子」という文字の刺青が、女の左側の尻に、しるされていた。

「A子か。お前はもともと足がふとい。足首の手入れをなまけるな。日課の訓練を確実につづける」

Qは、にがい顔でいった。そして、そのまゝ、もうひとりの女にも、不機嫌な視線をむけた。

「お前は、だれだ。ウエストがすこしふとくなっているようだぞ」

「B子でございます」

こたえて、女はA子と同じように、Qの前でうしろむきになり、スカートの裾を、ひょいと、まくりあげた。臀部の左側に「B子」という刺青が、くっきりと刻まれていた。

「B子か。精神がたるんでいるぞ。気をつけろ」

Qは叱った。B子はスカートをおろした。

いちいちスカートをあげて見せなくても、スカートの生地は透明なのだから、Qの目に常に刺青は見えるはずだった。しかし、Qに「お前はだれだ」ときかれたとき、この城の女たちは、かならず自分の手でスカートをあげて、刺青を見せなくてはならない規則になっていた。その義務を怠ると、ひどい刑罰を

受けなければならないのだ。

「申しわけございません。これから気をつけます」

B子は緊張した顔で、頭をさげた。

このふたりが、双生児のように酷似した容貌をもっているのは、Qの命令で、顔面整形手術をおこなったからである。

A子とB子のほかに、この「夢の城」にはあと五人の娘が、勤務していた。

C子、D子、E子、F子、G子と呼ばれている。この二年ほどのあいだに、美香と同じような手段で、つぎつぎに、この古城の奥室へつれてこられた娘たちである。Qは、この七人ぜんぶの顔を、自分の好みの容貌に変えさせた。パノラマ島には、優秀な整形外科医を雇い入れてある。

A子とB子の顔は酷似しているが、A子とG子とを比較すると、さすがに、いくらかの差異がある。

最も古く施術したのはA子であり、G子の顔を改変したのは、つい三カ月ほど前であった。この間、Qの好みに多少の推移があったとしても、当然といえよう。

しかし、この七人の美女が同時に並ぶと、ちょっと見たくらいでは、とうてい個別で

ない。

そこでQは、女たちの臀部に、それぞれの名を彫りつけたのである。名前というよりは記号であり、一種の番号でもあった。

とらわれ、顔を変えられ、その上にこの屈辱きわまる刺青は、もうQの奴隷という位置から、絶対に逃げられない最後の烙印という意味もあったのだ。

うしろむけにして臀部をみなければ、人間と名前を確認できないのは不便であったが、いつでも女たちの美容衛生状態を監視できるという、よい面もある。

屈辱的な動作をとらされて、主人に自分の名を確認していただくという女たちの心理を思うときQの心にはこころよい支配者意識が湧きあがり、ときには、ぞくぞくするような快感をおぼえるのだ。

「ぐずぐずするな。この娘を早く移動椅子へ運ぶのだ」

やや声を大きくして、Qが命じた。

「はい」

A子とB子は、赤い絨毯の上に横たわっている美香に寄りそい、左右から手をさしのべて抱き起こした。

「う、ううう」

少女は、ほそい悲鳴をあげた。手錠の角が手首の皮膚にこすれたのだ。

A子とB子は両側から美香のからだをかかえあげ、ドアの前に置いてある移動椅子の上まで運んだ。

「よろしい。お前たちふたりは、もうむこうへ行け」

Qがいった。

A子とB子の役目は、美香のからだを室内から廊下へ運びだし、移動椅子へ坐らせるだけだった。それから先は、またシコの仕事になるのだ。

移動椅子は、軽金属製であった。病院で歩行できない患者を運ぶ担送車に似ているし、理髪店にある、あの散髪台にもよく似ていたが、さらに複雑で巧妙な仕掛けを、そなえていた。

まず、美香の両足首をとらえている長方形の足枷が、そのまま、ぴたりと移動椅子の足台にはまりこんで、固定された。

移動椅子の背中の寄りかかりの部分にも、ちょうど美香の背後の手枷が、ぴっちりとはまるような長方形の穴があいている。

さながら、マンホールの穴へ金属製のふたを、ぱちんとはめこむような調子で、手枷も

足枷も、美香の意志におかまいなく、椅子の各部へ機械的に吸着したのだ。まさに、それは密着というよりも、吸着という感じであった。手枷も足枷も、もたらこの椅子の構造の一部であったかのように、寸分のすきもなく、みごとにおさまったのである。

「ああ……」

一瞬、乳房のあたりをこまかくふるわせ、背すじをのけぞらせるようにして、美香は声をあげた。

冷酷な感触と衝撃が、十七歳の全神経につたわり、ひびいたのだ。

「あばれないでね。動けば動くほど、あなたが痛いよ」

シコはいいながら、こまめに足を運んで、椅子の正面にまわる。椅子の正面は、つまり美香の正面ということである。

「こんなものを、お胸につけるのよ」

シコは、椅子に設備されている胸枷を、美香の乳房の上にあてた。

その胸枷は黒い鋼鉄でできていて、左右びらきのドアのように、ひらいたり、とじたりできる。左右からそれをとじると、椅子に坐っている人間の胸へ、ちょうどびったり吸いつくようにできていた。

この椅子に坐るのは、女性だけである。ふたつの乳房があたるところには、むろん、まゝるくくりぬいた余裕があった。腕型の空間である。

このサイズより、すこしでも大きな乳房をもつ女性が、ここへ坐ってこの胸枷をあてられると、柔軟な肉塊はつよく圧迫されて、激しい苦痛をおぼえるはずである。

しかし、Qははじめから、そんな女をこの古城へつれてこむような、無駄な、無計画なこととはしない。

Qの審美眼、鑑識眼は、女たちの衣服の下にかくされているプロポーションを、いつも正確に判断する。ブラジャーもコルセットもQの視線にあったら、無にひとしかった。

美香のふたつの乳房は、鋼鉄製の胸枷に、すっぽりとまわった。絹のスリッパを肌につけているから、こまかくいえば、その絹地のあつさだけ、美香の乳房はこの鉄枷の乳型より小さい、ということになる。

だが、その非情な感触は、美香の皮膚の内側にある全神経、全筋肉を凍らせた。

手枷のまま両腕は背後に固定され、両足首もコンクリートのなかに埋められたように椅子の足台に密着され、そしていままた、厚い

つめたい胸枷が肌身を締めつける。

「どうして、どうして私は、こんな目にあわされるの？ おしえて、おしえて」

美香は、透きとおるような細い、哀れな泣き声でいった。

「それはね、美香」Qが、にやりとしていった。「美香が、百人にひとり、いや、千人にひとりの美しい娘だからだよ。この人間世界では、美しいということは罪悪なのだ。一種の、悪徳なのだ。ひとりの美しい美香のため、あとの九百九十九人の娘は、醜い女という残酷なレッテルを貼られてしまう。そして彼女たちは、すこしでも美しくなろうとして無駄な、はかない努力をするのだ。そしてその結果、嫉妬ぶかくなり、世をすねたり、絶望したりする。いいかえれば、美香はたくさん若い女性を、不幸にしているのだ。だから、このお城につれてこられて、こんな椅子に縛りつけられてしまうのも、当然の運命といえるのだよ」

「そ、そんなー！」

Qのめちゃくちゃな言いがかりに、美香は目をまるくひらいて、あえいだ。のどの奥から悲痛な嗚咽がこみあげてくる。

「うるさいな、おだまり」と、Qは声を大き

くした。

「あまり大きな声で泣くと、そのかわいなお口をくくってしまうよ。さるぐつわで呼吸をしめつけられては、せつかくの散歩が苦しいものになってしまう。それでは、あまり美香がかわいそうだ。ウフフフ」

Qは、シコに目で合図をした。

それは、出発せよ、という命令だった。シコは心得て移動椅子の背後へまわった。

「いやです。散歩なんか、いやッ」

美香はもがいた。首から下が、鑄型にはまったように固定されているので、もがくことのできるのは、顔だけであった。

深夜の散歩

美香をのせた移動椅子は、醜い女奴隷シコの手に押されて、ゆるやかに動きだした。

この移動椅子の動力は、もっとも素朴にして単純な、人間の腕力であった。かなり精密な構造と能力をもつ機械のくせに、モーターもエンジンもとりつけてない。

ただの手押し車なのである。この車を押すことも、つまりは女奴隷の苦役のひとつであった。

シコは従順に——苦役どころか、やや得意げに、車の後部にあるハンドルへ手をかけて運転するのだ。

「ごめんなさい、おゆるしください。私は散歩なんかしたくありません。それより、早くここから出してください。お家へ帰らせてください！」

美香は首をのばすようにして訴えた。風に吹かれる可憐な花びらのように、美香の唇がふるえた。

「ウフフフ。かわいい。まったく、かわいいよ、美香は」

移動椅子の緩慢な進行に歩調を合わせながら、Qはまぶたをほそめて、美香を見おろした。

Qには、こころよい予感があった。この処女の馴致は、ずいぶん困難をとまなうだろうという予感である。

世話をやかせるにちがいない。てこずらせるにちがいない。

しかし、むろんそれは、Qの望むところなのだ。美しい少女の世話をやくことが、Qの趣味である。

Qの嗜好にすぐ調和し、羞恥を忘れて屈服するような女だったら、Qには興味がない。

そんな下賤な女に、用はない。

美香は、貴族趣味の実業家、高宮慶一郎の娘である。下品な卑しい強制や命令に対しては、しぶとい反抗をみせるにちがいない。

それは可憐で美しく、けなげで魅力的な抵抗にちがいないのだ。

このパノラマ島における、これからの生活に、美香の心と肉体は、どんな反応をしめすだろうか。

それを空想するたびに、Qの胸は希望にふくれ、美香の白い横顔を見おろしていると、自分の全身の皮膚が風船のように内側からふくれあがって、はじめてしまいそうな期待に充満する。

シコは両腕を突っぱらせ、足腰に力をこめて移動椅子を押した。

上質の軽金属でできている車椅子は、それ自体では軽いものであった。しかし、いまは重い枷具をつけた美香がのっている。

四個の車は、すこしのきしみもなく快適に回転するのだが、小柄で非力なシコにとって、やはり重労働であった。だが、Qの命令を拒否することは、絶対にできない。

こうして「鯉の海」のまん中に浮かぶ巨大な「夢の城」城内の、深夜の散歩は開始され

た。

この夜、パノラマ島遊園地内に設備されている五館のホテルに宿泊している約三千人の客は、もちろんそれぞれのベッドで、平和なねむりについていた。『夢の城』の内部で、奇妙な散歩が開始されたなどは、それこそ夢にも知らないのである。

恥ずかしい欲望

十一世紀イギリスのベディンガム城をそっくり模したこの『夢の城』の構造は、地上四階、地下二階である。

地下二階の外観は、むろん『鱈の海』の水のなかに没して見えない。

さっき美香がめざめたのは、四階の一隅にある真紅の小部屋であった。その小部屋の前廊下から、移動椅子は出発したのだった。

「いま、なん時だ？」

Qはふと、シコにいった。シコの左手首には、鶏卵大の腕時計がはまっている。

「はい。午前一時三十分でございます」

美香を押す手の力をやすめずに、シコはこたえた。

「わかっているな。まず、三階からだ」

「はい」

移動椅子は、水の上をすべる船のように、廊下を三十メートルほど進んだ。

進行方向の右側に、小さな昇降機のドアがあった。定員は五名ほどの、いかにも軽快そうな昇降機である。

ボックスの中へ三人がはいり、シコの手が昇降装置のボタンをおしたとき、美香が消えているような細い声をだした。

「水……あの、お水をください」

このことを耳にすると、Qの唇が熟したいちじくのようにほころびた。Qは、その要求を待っていたのである。

真夜中の散歩は、美香にただ城内の見物をさせるだけが目的ではない。

「のどが、かわいたのです、とても。すみません、お水をすこし、ください」

これだけ言うのにも、美香は頬をうす赤く染めた。

現在の美香にとって、Qもシコも、敵である。その敵に、たとえコップ一杯の水といえども、乞い求めることは、美香の心にとってやはり屈辱があった。

「よし」

Qは、シコに目で合図した。

「はい」

昇降機が、三階についた。一組の男女と、移動椅子に固定されたひとりの少女は、廊下に出た。三人の背後で昇降機のドアがしまった。

シコは、移動椅子の腰部の下に手をのばした。ちょうど美香の尻の下にあたるその部分は、小さなボックスになっていて、液体のはいったコップが五個ほど並んでいた。コップには硬質ビニールのキャップがかぶせられている。

シコは、そのキャップをとって、美香の顔へコップをさしだした。

「どうぞ、お水よ。お口をあけなさい」

美香は、やや憤然としたまなざしで、シコを仰いだ。

「私、自分でみますわ。この椅子から立たせてください」

「だめよ。あなたは、いま赤ちゃんと同じなのよ。おのみなさい」

シコは、黄色い声をあげて叱った。そばから、Qがいった。

「のみたくなければ、のまなくてもいい。そのかわり、今後二十四時間、一滴の水ものませない」

美香は、唇を小さく嚙んで沈黙した。

のどは、さっき目がさめたときから乾いていたのである。その渴きを意識し、口にだして要求したとたんに、渴きは急に速度を増してきたようである。

目の前のコップには、透明な水がゆれていった。美香は本能的に唇をひらいた。一秒を経過するたびに、のどがひからびていく。耐えられなかった。

「のませてください」

美香は目をとじ、かすれたような声をあげた。

ひらいた美香の唇へ、シコは静かにコップの液体をそそぎこんだ。シコの手つきは熟練していた。一滴もこぼさずに、コップ一杯の液体を、美香にのませてしまった。

美香も、よほど欲していたのだろう。のどを鳴らすようにしてのみほした。

のみ終えると、大きな呼吸をひとつして、「ありがとうございます」

と、礼をいった。こんなところに、美香の素直さと育ちのよさが、ふいに現われるようである。

胃のなかが液体で充たされたため、これまでの緊張感がいくらかうすれ、心もおちつ

いたのか、少女の表情に、軽い安らぎのような余裕が浮かんだ。

移動椅子は、ふたたび、にぶい進行を開始した。

「左側をごらん、美香。三階の中央部はこのとおり吹きぬけになっていて、二階の大広間まで見おろせるようになっていく。三階にはこの吹きぬけに面した廊下の外側に、八つばかりの部屋があるのだ。その八室あるなかの一室が、今夜の美香を待っているのだよ。楽しみにしているほうがいいね、ウフフフ」

Qは説明し、微笑をもらした。

美香を待っている一室……？

もちろん、美香に、Qのことばの意味はわからない。ただ漠然とした不吉な予感が、美香の心身をおののかせた。

美香の肉体の内部が不安をおぼえだしたのは、それからわずか数分後のことであった。

下腹に、鈍痛がうごめきはじめたのだ。いや、鈍痛というほどの痛みではなく、重苦しい感じといったほうが正確である。

その不快な重圧感は、刻々と不安を増していった。当然の生理といってしまえば、それにちがいない。美香は人形でも機械でもなく生きていく人間であった。

この数時間、少女は一滴の排泄すらしていない。健康な人間である以上、ときがくればその欲求をもよおすことに、なんの不思議もなかった。

重圧感は、まぎれもなく、心理的なものであった。いまの美香は、その自然な生理の欲求を、自分の意志で、自由に処理できない固い拘束のもとにあるのだ。

「あ、あ……」

思わず少女は、かすかな、しかし切実な感情のこもった吐息をもらした。

Qの敏感な鼓膜が、すかさずその吐息をとらえた。

——ウフフフ、効いてきたな。

Qは微笑した。つい数分前、シコがのませたコップの液体のなかには、強力な利尿剤が混入されていたのだ。その薬が、効果を発揮しはじめていたのだ。

「あ、あ、あ……」

ききとれないほどのせつない吐息とともに少女のくびれた腹部が、微妙な呼吸にあえいでふくれ、またへこんだ。

少女の小さな愛らしい膀胱に、非常なスピードで尿がたまっていく。少女はおそろしかった。その要求を、口にだすのは、あまりに

もおそろしい。

ついさっき水を望んだとき、彼らはなんとこたえたか。こんどの要求にも、きっと同じ返答があたえられるにちがいない。

屈辱の極である。これ以上、自分の心を虐めることはできない！

しかし、美香の心とは関係なく、下腹部の圧迫感、じわじわと確実な速度をもって増してくる。その生理の切実な膨脹感、美香のけなげな抵抗心とはまったく逆に作用していくのだ。

——ああ、お救いください、神さま！

移動椅子に縛りつけられたまま、美香は祈った。

その祈りも自尊心も無視して、まるで自分の肉体ではないようなだらしなで、少女の臀部がぐねった。

排泄の欲望はますます激しくなり、少女の唇が半ばらきになり、顎がななめ上にあがった。うすく脂肪ののった白いのが、まないたの板にのせられた魚の腹のように、ひくひくと動いた。

そんな自分の表情を恥じたり、反省したりする余裕は、もうなかった。可憐な少女の全細胞は、狂おしい悲鳴をあげていた。

「おねがいです……」

舌がもつれた。羞恥やためらいのためにもつれたのではない。舌の神経と膀胱の神経がこのとき直結しているためだった。あまり大きく口をあけると、下のほうが洩れだしてしまうのだ。

「なにかね？」

さりげない表情で、Qがききかえた。少女の願いのすべてを、むろんQは承知していた。切実な時機に至っていることも察している。それなのに、なにかね、などときくのである。

「あの……」

少女のことばが、口のなかで消えた。

「なんだね、また水でものみたいのかね。はつきり言わないと、わからない」

吹き抜けの手すりから二階の廊下のあたりを見おろしながら、Qはいった。

「あの……お化粧室へ行きたいのです」

こらえにこらえていたことばが、少女の唇の外に出た。

「なんだって？ もうすこし、大きな声でいなさい」

Qは、わざと声を高くした。

「……」

美香は息をのんだ。屈辱と羞恥心がよみがえり、髪の毛がこまかくふるえた。スリップの紐の片方が、白いまるい肩からすべり落ちた。

「なんだ、ひとりごとかね。それでは、これから三階の各部屋を案内してあげよう。めずらしいものが、たくさんあるんだよ」

せっぱつまった少女の欲望に、わざとそしらぬ顔をして、Qがいった。

「あの……」美香は、思わず哀願に似た声をあげた。

「おトイレに行かせてください」

少女の顔面が紅潮した。首すじから、胸のあたりまで赤くなった。

「そうか、そんなことか。早く言えばいいのに」

Qは微笑した。そして、シコに命じた。

「それでは、このお嬢さんを、れいの部屋へご案内するんだ。静かに押すんだよ。だいがせっぱつまっているらしい。粗相させてはかわいそうだからな」

「はい」

こたえて、シコの近眼鏡が、不気味な反射で意地悪く光った。



テレビ局を出た節夫は、ふうーと溜息とも深呼吸ともつかない、大きな息をしながら目を細めた。スモッグもなく、抜けるように青い晩秋の空が彼の瞳に映った。

街路樹の葉もあらかた散って、オブジェのような枝が天に向かってふるえている。風は冷たかった。

「おお寒む……」

節夫は、ちよっと首をすくめ、出掛けに気がつきながらコートを着てこなかったことを悔いた。

「店に出るにしても少し早い時間だし……よし、元ブラでもして安いダスターコートでも

テ

レ

パ

シ

ー

創

作

林 たけし

カット・JON画

買うか……」

洋服ダンスに何着もかかっているコートのあれこれの思い浮かべながら、節夫はなんとなく苦笑した。

あなた、今日は寒いからこれ着てらっしゃい。マフラー忘れてやしない？ などと世話を焼いてくれる人がいないと僕は駄目だな。と独りぐらしの不自由さを痛切に感じるのである。

彼は今、強いられた孤独のわびしさを味わっていた。

番組のインタビューの尾山女史はやさしい目で彼を直視しながら、開口一番こんなふう

にいったものだ。

「彼女と別れて、淋しい？」

節夫は、はいともいいえとも答えられず、照れた表情で笑った。

尾山女史とは、今日まで一面識もなかったが、以前から好感を抱いていた。なぜなら評論家でありセックスカウンセラーでもある女史は、レスピアンのよき理解者であったからである。

テレビ番組の「話題の女性たち」に出演をOKしたのも、女史に話ができるからだ。しかし短時間のインタビューでは思うことの万分之一も語れはしない。形通りの質問

内容に形通り答えて終わりだった。

節夫は少々がっかりした。

あの時以来、彼はマスコミに追いかけて、いろいろな相手からさまざまな質問を浴びせられたが、あからさまな興味と好奇心のみ感じられるそれらの質問に、真実を語る気にはなれなかった。

よしんば真実を語っても理解してもらえないとは思えない。しかし、尾山女史になら自分の不思議な性のすべてを話し、また今後の生き方などについて、相談にも乗ってもらいたい。女史ならきっと親切なサジェスチョンをしてくれるだろうと思っていたのである。

—○—

レスビアンクラブのホストだった節夫が、急に世間の注目を浴びるようになったのは、人気タレント茜美々子あかねみこの失踪事件の、せいであつた。

人気が下降しはじめたタレントが、ある日突然に行方をくらませることはよくあることだ。しかし美々子は落ちめどころか、まだまだ伸びる素質があるといつて期待されているくらいだった。それで失踪当時、一部では誘拐説までとび出したほどである。

茜美々子は、健実な公務員の家庭で育った

が、高校在学中に父の友人の映画監督に口説き落とされ、ある青春ものに主演して、一作でスターになってしまった。

彼女の清純な顔立ちや上品な身のこなしはなんとなくがつついていてタレントの多い中で特に目立ち、大型新人現わる、などと騒がれたものだ。

家族の猛反対を押しきってプロの道を選んだ時、彼女の人間としての自由は失われ、華やかな不幸が始まったといえた。

一度、手に入れたスターの座は、なかなかの魅力で、その甘美な酩酊感には、たいていの人間が執着するものだ。彼女も、ご多分にもれなかった。

しかし、やがて男の誘惑の手がのびたり、いまにも後進の者から追い越されそうな恐怖感にとらわれたりして、精神のバランスが崩れかけた。

万国博の終わった頃、京都でのロケが済んで東京に帰る美々子は、伊丹空港で最終便のムーンプライトを待っている時、ふいに虚しいものが襲ってきた。

これといって特に理由があるわけでもないしいていえば彼女は疲労していたのである。ただただ疲れていたのである。独りになりた

い、どこかへ行つてのんびりしてみたい、と痛切に思った。

付き人が手洗いに立った隙に、彼女は前後の見さかぬもなく、ふらふらとタクシーに乗りこんでしまった。

「神戸まで行って……」

布引に友だちのマンションがあつた。

「あそこなら誰も気づかないわ。あのヒトなら気のおけない友だちだし、当分お世話になっちゃおう」

美々子はシートに頭をのせ、トンボ眼鏡をはずしながら考えた。阪神高速に入ると行きかう車も少なく、うすい霧の中にライトが濡れて光っていた。

関西での唯一の親友、悠子の許に時間をつくってよく来たものだが、深夜の訪問は初めてである。

インタホーンのブザーを押すと、中から眠そうな声が聞こえた。

「誰？」

「悠子さん。ごめんなさい、こんなに遅く。

あたくし、美々子よ」

「まあ、美々子さん？ ちょっと待って……」

驚いた顔をして悠子が、とび出すように玄関に出てきた。

「どうしはったん？ あんまり、びっくりさせんといてよ……。あんた、ひとり？」

「そう。ごめんなさい、本当に。迷惑だわね突然やってきたりして……」

「ううん、そんなこといいけど、まあとにかく、上って。お付きもなしで一体全体、何ごとが起こったの？ まさか、あんた、雲がくれしに來たのと違うやろね」

「悠子さん、勘がいいわ。その通りよ。ね、しばらくかくま匿って……」

美々子は声を低めていった。悠子の、信じられないというような目が、まじまじと美しい顔に注がれていた。

悠子の部屋には、先客があった。節夫と透だった。

「いつもやったら、わいわいいって明方まで起きてるのやけど、今夜はちょっと宵寝してたんやわ。さあさあ、あなたたち。お客さんや、早う起きて」

といいながら悠子は、乱暴に彼らをたたき起こしてしまった。

気楽な独り住まいで、陽気な悠子の許にはよくこうした泊り客があった。麻雀したり飲んだりの遊び友だちだったが、その殆どが女性である。男友だちも多かったが、彼女は同

性の友だち、特にボーイッシュな女の人と好んで付き合う傾向があった。

節夫と透が奥の部屋で、あわてて洋服に着替えていた。

「悪いわね、せっかく寝んでらっしゃったのに。ねえ悠子さん、あの方たち、そのままにしていっていただいて……」

「いいの、いいの。あなたに紹介してほしいのよ。ねえ、そうでしょ？」

「はあーい」

透の浮き浮きした声がした。

やがて身繕みつくろいした彼らが、照れくさそうに出てきて、細いストラックスの膝を揃えて、かしてまった。

「茜美々子さん。知ってるでしょ？ ホホホ節夫と透。二人ともレスピアンクラブにお勤めなんやけど、うちが、今夜サボらせてしまったの」

「茜です。よろしく」

「はア……光栄です」

丸顔の、まだ幼ない雰囲気を残している透が答えた。

節夫は黙ったまま頭を下げ、視線をおとした。口が利けないほど、彼の胸が突然ぎゅっと痛くなっていた。

「あ、またいつもの、あれだ……」

節夫はどういうものか美しい女性を目の前にした時、鋭い靈感テレパシーを覚えるのである。その火箭ひやのように熱いものを押し殺すことは不可能だった。

節夫の性衝動は不思議だった。自分の意志ではない何ものかが、リモートコントロールで操っているような感じさえるのである。説明しがたいその奇妙な衝動は、あきらかにテレパシーテレパシーというようであった。しかも驚いたことには、独り寝の熟睡中や、仕事町を歩いている時ですら、突如として性感を覚えたりするのだった。それも、ただ欲情するのみでなく、確かなものまで感じてしまうのである。

また、健康状態は極めて良好であるのに、ふいに下痢をしたり頭痛がしたりということもあった。

—○—

節夫が家出して神戸にやってきたのは十年ほど前である。

家出の原因というのは、大学受験の際に見た戸籍謄本によって、自分が養女だったのを知ったことである。彼女は何も知らずに、我儘一ぱいに振舞ってきたことを恥じると共に

養父母に済まない気持ちでいっぱいになった。全く幼い頃から男の子のように乱暴で、養父母に迷惑のかけ通しであった。彼らの実子である幼い弟妹のことを思うと、自分の存在が邪魔になると考えて、節夫は家出にふみきった。

それからの彼女は本名の松村節子を抹殺し中岡節夫と名乗ることにした。

男に交身してみても、今まで借りもののようには思えた人生が、充実した重い存在となったように感じた。はじめて自分が自分として実在する、と思った。

レスビアンクラブに働いていると、必ず不思議そうに質問する客がいる。どうして女性であるのに男になっているのか、と。

節夫は面倒くさいのでニヤニヤ笑ってやるだけであるが、心の中ではいつもこう思っていた。

「世の中に男と女しか存在しないなどと決めてかかるのは、あまりにも古い観念だ。中性だって、無性だって存在しているのだ。今や宇宙時代ではないか。もし宇宙に他の生物がいるとすれば、きっと中性か無性、あるいは両性であるだろう。それこそ最も進化した生物なのだ」

節夫の美貌は、宝塚の男役といえども敵わないほどである。聡明そうな広い額からノーブルな線を形づくった鼻稜が続き、きりっとひき締った薄いめの唇、顎は少し張って意志的である。ふっと考えに沈んだ時など、形の佳い眉が愁いをおびる。そして湖水のような瞳が神秘的な魅惑をたたえるのだった。

すらりとした長身をつつむ衣裳、華奢な手にはめられた腕時計、もちろんみな高級な男ものである。下着さえも西ドイツのシーサーを愛用しているほどだ。

声がまた、すばらしい。ひびきのいいアルトでシャンソンなど歌うと、女たちは一様にぼおっとなった。

— —

「ところで美々子さん、さっき冗談で、雲がくれやなんていうたけど、心配やわ」

悠子が真面目な顔できいた。

「何でもないので。ただなんとなく東京に帰るのが厭になったの。ふっとそう思ったのだから不思議ね。ここところすっかり不眠症になっちゃってるからかしらね」

「美々子さん、疲れてるのやわ。うちはいいけど、東京では大騒ぎするわ。連絡だけは、とった方がいいのと違う？」

「連絡すると、すぐお迎えが来ちゃう。何もならないわ。ねえ、あなたには申し訳ないけれど、しばらく厄介にならせて。お願い！」

「問題になるわよ」

「いいの。誰も理解してくれないなら引退するわ」

「うわア、もったいない。美々さんは、これからじゃないの。せっかく、お家の反対を押しきって入った道やないの。ほんまに、うちが代わってほしいわ。誰かて、なれるものならスターになってみたいと思うわよ」

「スターなんて、つまらないものよ。非人間的な生活だわ。まるで機械なみに扱われるのよ。スケジュールでぎっしり固められた機械だわ。あたくしだって生身の人間だもの、自由がほしいわ。自由になりたいのよ」

節夫は二人のやりとりを聞きながら、スターもなかなか大変なんだな、可哀そうに、と思った。

ポールモールに火をつけながら悠子は、しばらく黙っていたが、

「美々子さん、どうもノイローゼ気味やな。まあいいわ。あとは野となれ山となれや。よっしゃ、うちが一切ひき受けますわ。まかしとき！」

ぽんと胸をたたいて、
「透、コーヒーでも入れて頂戴」といった。

ほっとしたように、微笑を浮かべた美々子の長い睫の翳が美しかった。

その夜から美々子は彼女を拘束する、もろもろの事柄を忘れて、悠子のマンションで暮らすことにした。

悠子たちはハイミナールを、また始めていた。毎日のように節夫のクラブの連中が入れかわりたちかわり遊びにきては、みんなでラリった。

三日目の夜、節夫はレコードを、激しいロックからムード音楽にかえて、美々子をダンスに誘った。

「節ちゃん、ここに居続けしてたら、麻里さんが怒らへんか？ 又大へんやで」
透が心配そうにいう。

麻里というのは節夫の二年ごしの彼女で美容院を経営している。ハイミス特有のやきもちやきで、節夫はそろそろ鼻につきかけていた。麻里は嫉妬を露骨に表わしはしないのであるが、抑圧されたそれが片頬にチックとなつて現われ、節夫は見るたびに厭な思いが嵩じてくる近頃だった。

「お婆さんか。当分お婆さんは放つときましよう。僕も、美々子さんと一緒に、自由がほしいの」

「まあ節夫さんたら、そんなことおっしゃつて、いけない方……」

美々子が媚を含んだ声でいった。

節夫はくすぐつたい思いで、巧みにリードしながら腰に廻した手に力を込めた。

クーラーのきいた部屋には残暑もなかったが、二人の身体は次第に汗ばんできた。薬のせい、美々子はぐらりとよろめいて、節夫に重心を預けた。

香水がふんわり匂い、まるで重い花のかたまりがなだれこんできたようだった。節夫は強い昂まりを覚えた。

美々子に未知の新しい世界が開けた。生まれて始めての妖しい官能のとりこになった。

倒錯の節夫を、本物の男性のように錯覚した。いや男性より性的アピールがあると思うほどだった。

ラリっている連中をしりぬに、節夫と美々子は奥の部屋で二人きりになった。ベッドの上には明るい花模様のタオルケットが、少しめくれ気味にかかっている。仰向けに倒れこんだ美々子は、唇を寄せてくる節夫のするが

ままになっていた。巧みな接吻だった。滑らかで執拗な、その誘惑的な接吻には罪を忘れる甘さがあった。

節夫は美々子の下着に手をかけた。

「いけないわ。駄目！ それだけはお止しになって……みんなが隣にいますのよ。ね、いやいや……」

「許して……僕、あなたが好きなんです。愛しているの。最初会った瞬間から本気で愛している……ああ、許して！」

喘ぎながら節夫はいった。

「悠子さんが、なんて思うかしら……ねえ、お願いだから止して……」

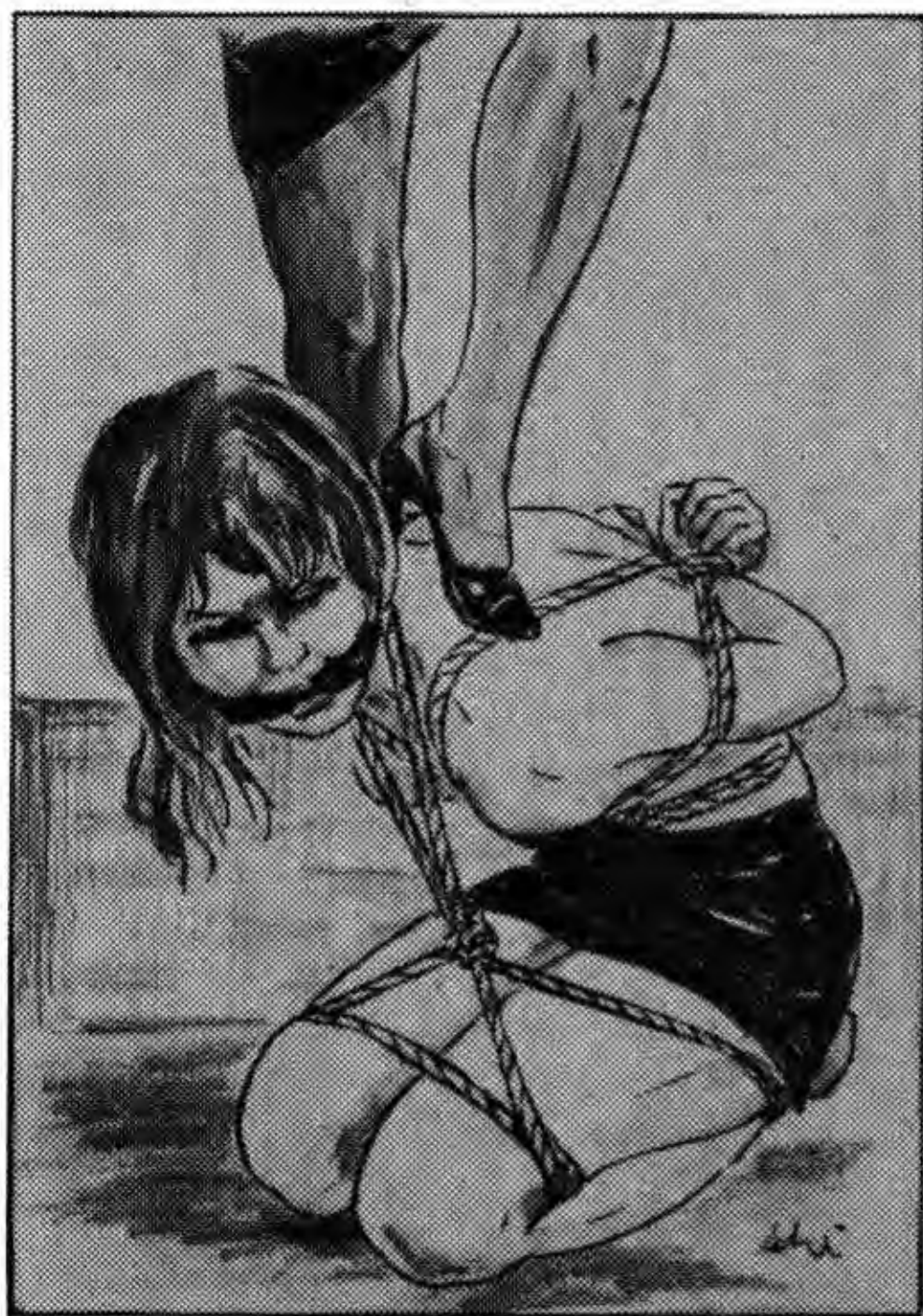
「僕のこと嫌い？ 僕がこんなに、あなたのために死んでもいいと思ってるのにさ。ああ愛してる、愛している。あなたのように美しくて優しいひとと会ったのは初めて。ね、わかってくれる？」

節夫は力いっぱい抱き締め、接吻した。

美々子はもう抵抗できなかつた。ますます甘美な感覚が全身に拡がり、節夫の強引さを望んでいた。

ひき込まれるような深い陶醉であった。どのようにして節夫がこの陶醉をもたらしてくれたのかは解らなかつた。ただ、美々子は思

読者ギャラリー『さあ始めるよ』志羽利也



わず小さな叫びを連続してあげていた。

長い嵐に酔い痴れた想いの余波が、ゆっくりと美々子から退いていった。

「恥ずかしいわ……」

美々子は甘えた声を出して節夫に囁いた。

節夫は無言のまま彼女の肩を抱き、額に小さなキスをした。しばらくしじまが流れた。美々子が思いだしたようにいった。

「ねえ、節夫さん、あなた本当に女の方？」

あたくしには、とても信じられませんか？」

「僕は男性のつもりですよ。男として美々子さんに恋しているの。僕にとってはその方が自然なんです」

「あたくし達、これからどうなるのかしら？もう東京には帰れませんわ。いいえ、帰りたいの……」

「僕だってあなたを離したくない。どう？」

よかったら二人で暮さない？」

「麻里さんとかいう、今の方はどうなさるおつもり？」

「別れる。でも美々子さんは普通の人と違うから……」

「あたくし、普通の人間になりたいの。もう芸能界は厭になったのよ。どこでもいいから連れてって……」

「後悔しない？」

「ええ！ あたくしを幸せにして……」

「もちろん……。僕、大至急アパートを探すから、しばらくここで待っていてくれる？」

本当に大丈夫ね？ 絶対だね？」

節夫は両の手で美々子の頬をはさみ、濡れたような瞳をじっとみつめて念を押した。

隣室から、ロレツの廻らなくなった連中がだべっているのが聞こえてくる。あい変わらず自慢話だ。僕は今、何人の女がある。かけもちはしんどい、とか、あの金持の奥さんを欺して車を買わせるのや、とか勝手な熱を、ふいているのである。

レスピアン、いわゆるタチ（男役）は、ほとんどが自信家でプレイボーイたるを誇りにしている。それぞれ決まった女性を嫁はん

とかカアちゃんとか呼んで家においておき、職場で知り合った他の女性と浮気を楽しんでる。

節夫は、こうした仲間たちの他愛ない自慢話を軽蔑していた。彼は、誰よりもよくもてるのであるが、決して多くを語らなかつた。容姿にも才能にも自信はあつたが、自分で誇示して、ねうちを下げるような愚はしなかつた。そんなことが彼には虚しいのである。それにレスビアン夫婦の寿命は大に短かつた。一カ月で別れるようなものザラにある。節夫には、自分を含めてそれが残念でならなかつた。彼は永続する愛を望んでいた。望んでも不可能とわかつてゐるのに、望まずにはいられなかつた。パラドックスだが、望むからこそ、なお次々と遍歴を重ねてしまふのである。

世間にはレスビアンであることを隠して、何年、何十年一緒に暮してゐる人があるらしい。それはほんの限られた一部分であろう。法律からも保護されず、社会からも認められない、そんな不安な関係で何十年も愛しあつて行けるものだろうか？ 奇蹟としか思えない。一般に不潔視されてゐる同性の愛を、同性愛こそ、純一無雑な愛である、という人の

言も当然かも知れない。

— ○ —

節夫は、麻里と話をつけなくてはならなかつた。

自尊心の強い麻里にしては珍しく取り乱してしまい、節夫の膝下に崩折れて哀願するのである。節夫は閉口した。

棄てないで、お願い……新しい人、どこの誰だか知らないけれど、あなたがその人を好きなら好きでもいいわ、けれど私を棄てないでほしいの……涙で顔をくしゃくしゃにしてかき口説くこの年上の麻里を彼は可哀そうだとは思つた。しかし、あのセンチティブで、大らかで豊かな美々子のすばらしさと思うとどうしても麻里と別れなければならぬ。

女と別れるいつもの手で、節夫は麻里をなだめにかかつた。決して君を嫌いになつたのじゃないんだ。君のようによくしてくれる人を知らない。悪いのは僕だ。許してほしい。僕にいつまでもくっついてゐると君は不幸になるばかりだ。これ以上不幸の道連れにはしたくないから誰か男の人をみつめて結婚でも……などと体裁のよい言葉を並べたのである。

こんな時、女が逆上して殺してやる！ な

どと掴みかかつてきたり、冷淡をよそおつて私だってこんな生活、厭だと思つてたわよ。などと負けおしみをいったりすれば、彼はむしろ気が楽になるのであつたが、メロメロ型には全く当惑する。

麻里はなかなか諦めなかつた。きつと帰つてきて、いつまでも待つてゐるから……いつか必ず帰つてきて！ 必死になつて取りすがるのであつた。

レスビアンの世界に、撚りの戻つたという例はあまりない。一度別れたら完全な終止符である。レスビアン終末は、ネコ（女役）がほんものの男に走り、タチを棄てるケースが多い。常にそうした危機感に直面してゐるタチの嫉妬心や独占欲は恐ろしいくらいで、硫酸の小壺を持つてゐるのやら剃刀の刃をしのばせてゐるのやらがゐる。しかし節夫のようにはスマートなタチは、破局に到る斜面に立つ前に、さつと身をひるがえしてしまふのである。だから泣きを見るのはいつもネコの方という訳だ。

節夫は美々子と、まもなく鈴蘭台の新築マンションに愛の巣を構えた。神戸電鉄の沿線にあつて、薄の多い草原だったその土地は、今や団地、マンションが立ち並び阪神のベッ

ドタウンとして開けつつあった。

くねくね曲った有馬街道を、愛車コロナに乗った節夫は、口笛を吹きながら神戸の店に通った。

美々子は奥さん業に満足した。買物一つにも新鮮なよろこびが湧いた。彼の世話をすることに生きがいすら見出した。初めて人間らしく人を愛したからである。共通する愛の感覚によって、お互いはお互いを百パーセント理解できるのである。

が、悠子が東京での騒ぎに驚き、二人を裏切ってしまった。彼女の連絡によって血相交えたマネージャーや家族、それに週刊誌の記者たちがやって来た。軽はずみだ。無責任だと、さんざん二人を叱責する。

私たちは愛し合っている、夫婦になる、そっとしといて……いくら声を大にして叫んでもノーマルな彼らに通じるはずはなかった。気違い呼ばわりされたあげく、たったふた月で仲を裂かれてしまったのである。

はかない、うたかたのえにしであった。

—○—

ゲイバーの薔薇館は今夜も大賑いである。
上手に螺旋階段のあるステージで、ナンパ
ーワンの眉子が歌っていた。黒いパンタロン

がよく似合う細身の眉子は、妖しい美しさで世間を驚かせているシャンソン歌手、山草二郎に似ている。広い店内は豪華そのものである。白っぽい色で統一したロココ風のインテリア、大きなタペストリー、グランド・ピアノ、輝くシャンデリア、皮張りの柔らかな椅子、いたるところに大束の薔薇が惜しげもなく投げ入れられていた。

歌を終え拍手が鳴り止むと、眉子はあてやかな微笑をたたえて客席についた。初めて来たらしい客は、彼女をまじまじと眺めた。

ええ、初めての方なら皆さん眼を円くなさいます。無理ありませんわ。わたくし、どこから見ても男には見えませんかでしょう？
ほんとに、どうして女に生まれなかったのかしらって、自分でも不思議なんですもの。

いえ、転換してらっしゃる人もいますけれど、生まれたまま、気持だけ女になっている人がほとんどですよ。中には女装マニアで奥さんや子供のいる人もありますけれど、そんな人は特別ですわ。わたくしは男の人しか愛することができません。

どういうことでしょうか、何やら目に見えない力が働いて、女の人のような心理になってしまうのですわ。それにおかしなこと

がわたくしには起こりますの。時々何もしていませんのに、突然、セックスの感じがいたしますのよ。変だと思いいなるでしょう？
女になりたい、女になりたいという思いが昂じて幻覚が現われるのでしょうか？

男性遍歴？ ええそりゃもう……数えきれませんわ。わたくしだって一人の男性と家庭を持ち、奥さん業に専念したいと思えますわよ。でもそれは理想にすぎませんわ。現実には厳しくて、いつもいつも失恋ばかりしておりますのよ。ついこの間も、失恋しましたの。それも本当に好きな方と、せっかく一緒になれたと思ったら、ある事情で無理に引き離されてしまったのですわ。今は、だから孤独ですわ。淋しいのよ。

家族？ わたくしの家族ねえ……高校の頃に家出して、音信不通ですの。出来損いだの厄介なものだと冷遇されておりましたもの、別に恋しいとも思いませんわ。けれども、まだ一度も見たことのない姉さんには逢ってみたいと思えますわ。姉とはわたくし一卵性双生児だったとかで、生まれおちるとすぐ彼女はどこかへ養女にやられたらしいのですが、今頃どこでどうしておられますことやら……。

——（おわり）——

カット・ユミヒコ



第一景 紳士たち

シャンデリアの下の五人の男たちは既にかなりの酒量を重ねていた。しかしながら男たちの口調は確かであったし、また足元もしっかりしていた。男たちはタキシードを着込んでいる。男たちにタキシードは似合った。タキシードをいわゆる着こなしているというのがふさわしいだろう。

~~~~~ 飲びの育つ館 ~~~~~

## 紳士たちのための

## 人間浄瑠璃

宇光

仙

(前)

~~~~~  
男たちはグラスを傾けるほどに饒舌に走った。その話題は、

『明日に生きる理由』

を模索するものに終始した。ところが男たちの努力にもかかわらず一向に『明日に生きる理由』は煮つめられなかった。そのことは男たちの酒量を増した。その内に話題は、

『現在を美しくする方法』

に移り、そこにもとどまらず、

『今夜の夜会を充実させる方法』

に移った。

「待たすということは凍りついた血を溶かし

暖め燃やすために、最も有効な手筈である」
AはKを睨んだ。KはAの赤く充血した眼の薄汚さにたじろぎもなかった。

「畜生めは、今お着換えの最中である。くだけていうなら、おめかしの最中である。なにしろ畜生めといえども、一応は人間であり、女であり、御婦人でありますからね」

「もう一つ、付け加えるべきだね」

Tがいった。

「ええ？」

Kは振り返ってTを見た。

「そして、わしの妻である」とね」

Tは口元に微笑を浮かべた。Kはにが笑いをした。他の男たちは目を走らせた。そこに緊張が生じた。そのことを察知したSは大形に咳ばらいをした後で、

「わしの趣味からいうなら、おめかしし終えた畜生ではなく、おめかし中の畜生の方が興味深いね」

とグラスの酒を震わせながらいった。

「Sに楯突くわけではないが、わしはおめかしし終えた畜生の方が興味深い」

Tはカーペットを一步一步踏みしめて歩きながらいった。

「ほお、それは初耳である」

とSは活氣を得てTに歩み寄った。

「君は、おめかしの前の畜生の方に興味を持ってるとばかり、わしは思っていたね」

「人の心は移り気なものですよ」

とTはSに答えた。

「昨日、権力に最も鋭く刃向かっていた者が今日はその甘い汁を羽根布団の中で吸っている。そんなことは日常茶飯事ですぞ。本来であるなら目の玉を円くして驚くべきことであるが、時代が時代であり、世の風潮が風潮であり、今日はとりたてて『ああだ、こうだ』という方が非難される。わしもその非難に賛

成である。理由はこうである。弱い心をカモフラージュするためには、つかまえどころのない煙幕を張るのが一番である。右翼がやってきたら右翼になびいているという風にみせかけ、左翼がやってきたら左翼になびいているとみせかける。そして決定的な時に利のある方に駆ける。二十世紀末期の凡人の取るべき道はこれしかないね。生き残るためには最高によいでだてだよ。もっとも、もはや生き残る必要がなくなったら、事はいたって簡単だがね」

Tは最後に肩をすくめた。

「言葉は偽りに満ち、行為も偽りに満ちる。

それでは、わたしたちは一体どこを、よりどころにしたらいのかね」

SはTにつめ寄った。

「君には、わしがいる。さらにAとMとKがいる」

Tは微笑を絶やさなかった。

「そのことを、わしは忘れていた」

Sは堅い表情でうなずいた。

「度忘れということはよくあることですよ」

Tは、いった。

「度忘れ……か」

Sは苦笑してからTに背を向けた。

「K。いったい『欲びの育つ館』とは、いかなるシロモノかね」

MはSの心情を無視して、大きく陽気な声を張り上げた。

「わしの聴覚はすこぶる良好な状態にある。今少し、節度を持って欲しい」

KはMを横目で見つめながらいった。

「節度？ 君、氣は確かかい。声を張り上げたところでどうだというんだい。すべてをふまえたツラをした奴ら程に腹黒い奴はいないさ。わしは断じて声を低めないぞ」

とMは、さらに宣言した。

「『欲びの育つ館』とは、人の心を強迫と暴力によって支配しようとする調教師と、その一派の住む館さ」

KはMの宣言には触れずに通った。

「それは面白い話だ」

Tは話に飛びついた。

「そう、確かに面白い話である。しかし悲しく辛い話でもある」

KはTの目を正面にとらえていった。Tは答えなかった。

「それは調教される立場にある者に対していつているのか、それとも調教する立場にある者に対してか？」

AはKの背後に質問を浴びせた。

「君はどちらだと思ふかね」

Kは後ろを振り返ってからAに対して逆に質問した。

「まず最初に、わしの質問に答えを貰ってからにしたい」

Aは抜け目なくいった。

「調教師たちも畜生たちも両方ともにだ」

とKは、Aに背を向けて歩き始めながらいった。磨かれ黒光りする靴がカーペットを踏みつける。

「わしはこう思う。調教師たちは、人の心を強迫と暴力によって支配できるかどうかについて、畜生たちを手ごめにする以前にわかっているはずである。支配できるわけがないのだ。それでも調教師たちは畜生に相對し、その心を支配することを試みるのだ。畜生がいかに己れに屈服したとて、それは単なるみせかけにすぎないことを承知の上で、支配したと手放しで喜ぶのである。そして己れを嫌悪し、そんな己れにした周囲の環境、とりわけ畜生に対する腹いせの報復を強めるのだ。その心は陰惨でありさえする。畜生たちも同じことである。己れの生命をいとわずに調教を受けるのではなくては、所詮マンネリであり、

すぐに快楽は快楽でなくなり、うつろな目が見えらるゝのは「絶望」という二文字である」

「こんなことは、はなはだ失礼な質問かも知れないが、わしの心に引っかかってならないことなので話さしてもらふ」

SはKの側に歩み寄ってからいった。Sは右手にタバコ、左手にグラスを持っている。

「わしはそのような館は実在しないと思う。さらにいわしてもらふなら、Kが今日のこの夜会で、おれの妻の裸を見せる」といったことも、夜会を演出する上でのゼスチャーだと思ふ」

Kはボルトを持ち上げ、空のグラスに酒を満たした。Sに対して一言の反論も試みる様子を見せなかった。

「いや、わしは館は実在するし、Kが自分の妻の裸をわしたちに見せるものと思う」

TはSにいった。Kは依然として何の反応も見せなかった。

「ペートルーベンに実は偉大な才人である。そうじゃないかね、諸君」

Aはステレオをいじくりながらいった。Aが皆の方に向き直った時に、テーブルが回転し、アームが下降し、レコードの溝にダイヤモンド針が滑り込んだ。ペートルーベンの『田

園』交響曲の第二楽章の、いわゆるのどかな小川の畔を彷彿させる調べが流れ出した。

「おや、お気に召しませんでしたか」

Aは意外そうな顔つきで皆を眺め回した。

「わしは、こう思う」

MはSにいった。

「館は実在し、Kは自分の妻の裸を見せる」

AはMの言葉に失望してシャンデリアを仰いだ。すぐに気を取り直した。

「わしたちが文明というシャベルでゴミ箱へ投げ捨てた、失われた自然が開ける。そうではないかね、諸君」

しかし誰もAに同調しなかった。Aは、さらに気を取り直した。

「諸君は、文明の爪の引っかき傷が膿んでウミを持っていることを知らずに過すことはできない。わしたちは、たかが森、たかが山、たかが河、たかが海」という。しかし、緑の濃い森や山、水の清らかな河や海なしに、わしたちは生きてはいけんのだ。わしたちはそのことをよく認識する必要がある。右を向いても左を向いても、人であり車であり家である。それでは下を見る。そこは埃の吹きだまりであり、アスファルトであり、コンクリートであり、黒い大地の素顔はない。それでは

上を見る。そこは、月並な言葉でいうなら本当の意味での青空がなく、煤煙がただようにまかせている」

Aは皆の淀んだ目つきに気づいたが、話の腰を折らなかつた。

「そんなことは故意にヘソを曲げた奴の考えることと決めつける者がいるかも知れない。しかし昨日も今日も、また明日も『たかが、たかが』と問題意識なく過ぎては、近い未来にきつと後悔することになるのだ」

「この前の夜会は、わしが主催し、わしはKにわしの妻を捧げた」

MはAに背を向けながらいった。この男は四十は過ぎてゐる。

「Kはわしの眼前で妻を凌辱した。そして皆はわしとK、そして妻を結ぶ三角形の煌きを楽しみ、時を充実させたはずである。それゆえに、わしは思う」

Mは、ふいに振り返り、Kを見つめた。Kは微動だにしなかつた。

「館は実在する。そしてKは、自分の妻の裸を見せる。しかも、わしに対して何か特別な心遣いをしてくれるはずである」

Mは、いった。

「わしの心は高鳴る」

Tがゼスチャーを混えて皆にいった。

「それはことごとく、Kの妻の裸を見たいという、わしの望みが叶えられようとしていることによる。諦めていたことが思いがけないところで叶えられることになったのだ」

Tは、そこでグラスを空にした。

「Kの妻は当年十七歳である。セーラー服を着けていることがふさわしい少女が、三十男のKとの結婚生活を見事にこなしていること自体、わし達の興味をそそり、好奇心をかきたてる。そうではないかね、諸君」

TはMを見、Sを見、Aを見、それからKを見た。Mは嘆息をし、Sはムツとし、Aは音楽に浸り、Kは酒をあおった。

「わしはこの夜会に礼服用という取り決めがあることを呪いたい」

Tが呟くようにいつてから黙り込んだ。

「十七歳の少女の最も麗わしい姿が、わしを手招いているような気がする。わしはKを憎むだろう。『この可愛い少女を、初めて女にした男め』と吐き捨てながら」

とMは熱っぽくいった。

「きみたちが、かくも感傷主義者だとは驚いたことだ」

Sはタバコを喫いながらいった。

「わしは先程のKの話題に水をさしたことの無理押しを意地でするものではない。むしろわしは今、館は実在する。Kは自分の妻の裸を見せる」という考え方が、適切であると思う。しかし、なあ諸君。わしが考えるに、いかに一つのことを他者に伝達するとはいえ、もっと単的に表現できないものかね。『十七歳の少女の最も麗わしい姿』なんて言葉には反吐が出る思いがする。飾りすぎる。飾りは素顔をそこなう。わしたちの目を狂わせる。わしたちは正確に物事を観察し、そして判断する必要があると思う。そのことなしには何事も欺瞞の欺瞞にすぎない。ことに性的情景に対して、冷たい目を持つとうではないか」

「Sに尋ねる」

とTはテーブルの上の酒瓶を見つめたままいった。

「KがMの妻を凌辱する状態を築いた時、舞台の傍に陣どったのはS一人であつた。だからわしは、Sは熱い目の持ち主であるとかばかり思っていた。わしの思い違いかね」

「ひどい思い違いである」

とSは反論の唾を飛ばした。

「君、考えてもみたまえ。余すところなく、また隠すところなく展開された明瞭な状況は

もはや風景写真と同じ効果しか持たない。そのことを煽情的刺激のと思う者は、性的情景にうとい自分に気づくべきである」

Aは音楽の流れに合わせて身体を揺り動かしながら、四人の間を縫って歩いた。この男は夜と踊っているのかも知れない。四人は無表情な目でAを見守った。

「わたしたちの夜会のお開きは、ヴェトナム紛争ではなく、カンボジア紛争が話題になった時にしような」

Mが、うつろに呟いた。

「お開きにしたいのかね」

とSはMに尋ねた。

「したくはないね」

Mは、きっぱりと答えた。すると続いてTがいった。

「畜生めのおめかしは随分と時間を浪費し、わしの心を苛立たせる。畜生めの分際で」

Tは、特に「畜生め」という言葉を強調した。そうしておいて彼はKの反応を窺った。

第二景 畜 生

理加は、自分を淫乱的な性格の持ち主かも知れないと思う。それは正しいかも知れない。たとえば理加はまだ十歳にもならない頃

から、自分の身体を公衆の面前に晒すことが大好きであった。中学校を卒業した時に、彼女の血は燃え、彼女を決定的な桃色遊戯にかりたてた。それがもとで彼女はKと面識を持つことになったのである。

Kは理加が挑発的な衣装を着けることを楽しんだ。その楽しみを自分一人が独占するために、Kは理加を妻の座にすわらせることにした。もっともKには、その時には既に妻の座にいる女がいたのである。Kはその女に金を与え、金の重みで口を封じた。その女、つまりKの先妻はどのような心境の変化からか十六歳の新妻がやがて乗り込んでくるという邸に小間使いとして残りたいということを希望した。そのことはKを驚かした。

しかしKにとっては不快なことではなかった。どちらかといえばKは冷血であったし、たとえ昨日まで妻であった女に対しても、今日からは小間使として命令を発することに何らのためらいも感じなかった。Kは小間使いを、金を貯めることにとりつかれた三十女としか見ていなかった。事実、小間使いはすべて勝手を知った邸である理由から、非常に生々と働きKを満足させた。

理加にとっても、小間使いの存在は決して

けむたいものではなかった。理加は小間使いを、親身になって相談を持ちかけられるお姉さんとみなしていたし、その認識は期待を裏切ることがなかった。さらに小間使いは理加がKとの性生活を充実させるための小道具ともなってくれるという献身ぶりで、そのような奇妙な生活は破綻もなく続けられた。

ところが一年程たったある日、理加はKによって突然、「欲びの育つ館」へ送り込まれた。それは性を技術的に強めようという者の屯する館でもあった。

理加にとってそのことは好ましいことではあったが、その反面、余りにも技術的に強めようとするその理由から将来に対して一抹の不安を感じずにはいられなかった。ともあれ理加は水槽の中に、猿ぐつわをかまされ、後ろ手に縛られたまま閉じ込められて館へ送り込まれたのであったが、調教師の饒舌に随分と悩まされたものであった。言葉数が多く、その数だけ唾が飛んできた。その上に調教師の身体つきは決して男らしさに満ちてはいなかった。そして何よりも理加を悩ませたのは調教師はKと大の親友であるということをついつ、A感覚を責めることであった。

調教師は眠さえあれば理加をベッドの上に

うつぶせにした。そしてその都度、多数の接待嬢が理加の苦渋に満ちた作業の一部始終を傍に控えて見守るという不自然さであった。

調教師によって理加は作業の前には決まってポルノ・グラフィを見せつけられた。ポルノ・グラフィはA5版の大きさに全頁がカラー写真であった。しかし表紙と裏表紙を含めて三十二頁中、文字は表紙の表題（英文）と三十一頁の隅の総代理人のアドレス（独文）だけで、いわば文字のない絵本でもあった。

調教師が絵本を最初に見せつけてきた時、理加は好奇心と天性の性格から充足した。

「表題の文字が読め、その意味するところを理解できますか」

と調教師はいった。

理加は文字が読めなかった。というのは理加にとってこの種の絵本を見るのは初めてであったし、内容のあまりな大胆さに、つい冷静さを欠いていたためである。文字は上段と下段に分離されて印されていたが、その中央を埋める絵に理加は半ば頬を赤らめながら見入り続けてしまった。

「どうしたんですか」

と調教師は尋ねてきた。

「あたしには読めません」

と理加は、あわてて答えた。

「それは残念です。でも読めなくてもその意味するところは理解できるでしょうね」

調教師の口調は事務的であった。医者が患者を前にしているのにも似ていた。

「は、はい」

と理加は、とちりながら答えた。

それは性的によほど、うとい者であっても理解できるようであった。

仁王立ちの男がいる。その前に跪く女性がいる。その二人の中間の向こう側にも女性がいて、同じく跪いている。最初の女性をAとし、後の女性をBとしよう。絵は男の持つ凶器が、Aに洗礼をさすけるかのように火炎砲を浴びせている瞬間を描写していて、BはAを妬ましげに見つめている。三人共に裸体であり、火炎砲の発射する炎は多分照明のライトのせいと思うが、煌き美しかった。でもそのことより理加にとって忘れがたいのはBの目が、彼女は金髪であるが、赤く充血していて物憂い表情であることであった。

「COLOR SPERMA 1」^{カラー スペルマ}、そう読みます。

意味するところは、御婦人ゆえに上品さで飾り立てて申すなら、宝石箱から進った宝石、第一号“となります”

と調教師は理加に説明した。

理加は調教師を見た。調教師は理加に微笑んだ。理加は傍に控えている女性たちの中でも、助手の存在が気になった。高いハイヒールをはき、クリーム色の袖なしのセーターを身につけているだけの助手は眉をひそめているのだ。

「どうかなさいましたか」

と調教師は理加の目を見た。

「いいえ、別に」

と理加は、無理に微笑みを見せるべく、頬をひきつらせた。

「御婦人よ。おれはあなたが気に入った。だから、あなたに、宝石箱から進った宝石の妖艶さを、とくと説明したい」

調教師は頁をめくらずに、絵本をひっくり返し、つまり裏表紙を表にした。そこで理加は実際のことをいって、「進った宝石」の光る様を見る機会を持ち、真に、

——美しい——

と思った。

その「進った宝石」のすべてを伝える裏表紙は、Aの左頬を拡大した絵が紙面の左半分、他は灰色の空間となっていた。Aは目を閉じ、口を半ば開き喜悅している。そのAの

左頬は、理加が見ている方向からいうならAの右頬となるのであるが、調教師の言葉通り「進った宝石」は「宝石」にふさわしく輝いているのである。輝きはこめかみから始まっている。それは表紙でわかることであるが、こめかみに的を合わせていたせいであった。ガラス窓の雫が流れるように「宝石」はAの左頬を流れる。一部は半ば開かれた唇を越え口にこぼれ込んでいる。付け睫毛とその周辺さえもが、涙で濡れ光るように「宝石」が輝きをつくってさえいる。理加は自分もAの立場にありつきたいと思った。

「お気に召されましたかな」

調教師は説明することを忘れたかのように直線的に理加を求めながらいった。

理加は答えなかった。助手の方を窺った。

助手は鞭をしならせ、唇を噛んでいる。

「おれの目を見ろ！」

と調教師は急に言葉を荒々しくした。理加は驚いて調教師を見た。調教師は、いつでもこうであった。ヒステリックでさえあった。そして、この時は「御婦人」という言葉が、「畜生」もしくは「畜生め」と変わる時でもあった。

「おれに楯を突きやがる。この売女。畜生」

と調教師は一人で芝居をし、一人で動き廻り出した。理加は啞然としているのみであった。調教師は、さらに

「接待嬢よ、この畜生めを押さえろ」

といいながら、いきなり理加の臀部を右足で蹴り上げた。

理加は翻筋斗を打ってベッドの上に仰向けになった。素足で蹴られたとはいえ、それは足加減のない力のこもった一撃であったために、痛みはすぐにはやわらぎはしなかった。調教師の命令に忠実な接待嬢の四人が、理加を押さえ込んだ。それは理加を仰向けにしてその両手を上方で固定し、両足は左右に引き伸ばすという方法であった。

理加はここで思う。理加にとってそのような辱かしめはどういう事ではなかった。しかし理加はここで羞恥に打ち震えずにいたら館から追い出しをくらわされるような気がする。理加は館にきてからまだ三日目にすぎなかった。館について色々な知識を持ちたくもあった。それゆえに、ここで理加は女という弱さや羞恥心を露わにして、調教師に調教の必要を感じしめなければ、いけないと思う。そのことによって理加は館に留学し、留学し続ける理由を持つことができると思う。

だから理加はあらがいを続けることにし、実際にあらがった。

「何をなさるのですか。あなた方はそれでも人間ですか。獣。あたしに何をしようというのですか」

と、さも真実味を込めて理加は、口をひし曲げて叫んだ。

「喚け。そうすれば調子よくなる」

と調教師は、どなり上げた。

理加は面白くなった。徹底的に嘘の上塗りをしてやろうと決意した。調教師に手玉に取られているふりを見せておいて、逆に手玉に取ってやろうと思う。そのことは理加の頬を紅潮させた。

「汚らしい、触れないで。獣。犬」

と理加は、また叫び、手足をよじらせた。

「この畜生、十七歳の人妻だってことよ」

と助手が日頃の憎しみを沈積させていた腹いせをにじませて汚ならしげにいった。

「畜生の分際で男にいい思いをさせて貰うとは何事よ」

助手の鞭が理加の胸にヒットした。理加は助手を見上げた。

——嫉妬しているな——
と理加は思った。

読者ギャラリー『エンヤコラ』鈴鹿野次馬



理加は自分に女としての魅力があふれているという自信があった。桃色遊戯を始めた時から彼女は乳房が二十歳の女よりも豊かであったし、少年たちの憧れの的であり、ちょっとした女王でもあったのだ。理加の見たところ、助手は自分より二つか三つ年上であると思う。しかし女は年若い程に魅力があり、ま

た未知なる魅力も期待できると思う。「何かいったらどうなのよ。それとも急に啞にでもなったというの。それともわたしに楯を突こうというの」というなり助手は、やたらとみさかいを失い、鞭を振り下ろした。そのために、理加を取り押さえている接待嬢にまで、鞭が流れる

始末であった。

「やめろ！」

と調教師は助手の腕を握んだ。

「畜生はまだ過度の鞭打ちに耐えられる身体ではない」

しかしその調教師の心遣いは助手を一層の憤りにかり立てることになった。

「あなたはこの畜生がきてから、わたしには冷たくなったわ」

助手は憤然としていった。調教師は苦笑した。助手はさらに、

「わたしのかわりにこの畜生を助手として、わたしを畜生としてくれた方が、わたしにとっては嬉しいことだわ」といった。

「畜生になり下りたいか」

と調教師は冷たくいった。

「わたしはただ、あなたに愛してもらいたいだけだわ」

と助手は少したじろぎながら答えた。

「おれはそんなことは尋ねなかった。畜生になり下りたいか」って訊いたんだ」

調教師の語調は刺々しかった。

「あなたは変ったわ。この畜生がきてから」助手は、しゃくり上げるようにいった。

「答えろ！」

と調教師は助手の顔面に顔を近づけ、唾を飛ばした。

しかし助手は、涙にむせび出して答えなかった。そのことは調教師を狂暴にした。理加はあたかも夫婦喧嘩を見せつけられるようないやな気分がした。

「ああっ——」

というなり助手の体勢が崩れ落ちた。調教師の平手を頬に受けたせいであった。

「立て！ 畜生にしてやる」

調教師は助手を引き上げた。そしてかつぎ上げ、理加の足元にほうり出した。ドサツという物音に、理加を押さえ込んでいた四人の接待嬢は、一様に腰を浮かせてしまった。

「誰が手を解けといった」

と調教師は接待嬢を睨みつけた。彼女たちは、すぐに元の体勢をとった。

「愚かなる畜生よ。どうしてあげたら一番に気に入るのか」

と調教師は、うづくまる助手にいった。助手は濡れそぼった頬を上げて、首を振った。

「答えろ！」

調教師の声は部屋にこだました。

助手は再び首を激しく振った。調教師は助

手を見、四人の接待嬢を見、再び助手を見、理加を見、さらに助手を見た。

「おれの好きにしてやる。もっとも愛をこめて愛してやる」

調教師は口元に笑みを浮かべていった。

助手が調教師によって命令され、無理に強いられたのは理加の身体中を隈無く清める作業であった。

「愚かなる畜生よ。ここにいる畜生は年も若く、その皮膚は極めて繊細である。それゆえにタオルなんかを用いることは控えなければいけない。そこでだ」

と調教師は満面に笑みを浮かべて助手の背に言葉を投げつけた。

「特に舌の柔らかかなお前をお願いをしたいというしだいである。そうそう、その調子でいいのだ。その調子を最後まで保つのだ。これ程の幸運な役割をいやがりはいないな」

理加は助手の舌が足に触れた時から、例によって例のごとく身体をものがかせた。理加は美徳家でなければならぬし、このような作業は思いもよらないことであり、消え入りたない羞恥心で息も絶え絶えにならなければいけなかった。そんな自分を理加は滑稽に思い、それゆえに今にも吹き出しそうにもなった。

だが耐えた。そんなことをしては何もかもおしまいとなるのである。

「畜生よ、畜生の太腿は食欲である。それならば、いかにふるまうべきか説明を必要としないはずである」

と調教師は命令を続けた。

「多くの時間を費やせ。より一層のいとおしさをこめろ。そんな自分を幸運と思え」

理加は伏せていた目を開いた。理加の足を支える接待嬢の目は、くい入るように助手の舌の動きに注目していた。調教師は少し離れた所で肘掛け椅子に身体を沈め、タバコを喫っていた。

理加は身体をものがかせた。助手の舌を妨害した。実際は妨害はしたくない。しかし妨害をしなくてはならないのである。自分は希望せずしてされているのであって、その理由から汚されまいとしなければならなかった。

助手は、舌のみではなく両手までも動員した。それは調教師を満足させた。また理加にとっても好ましくあった。

「そろそろ調子良くなったろう。舌の縄れがなくなり、それは舌の滑りにつながり出したはずである」

といいながら、調教師は助手の肩を軽く叩

いた。

「さあ、畜生も、愚かなる畜生も、さらには接待嬢もおれのために褥を広くしろ」

理加は押えを解かれベッドから降りることを許された。理加は涙こそうまく出なかったものの、おめおめと責め上げられた十七歳の人妻ではなく、屈辱の少女として、しゃくり上げる必要を感じ、そうした。

調教師は褥の上に仰向けに横たわった。そのために理加は調教師の身体つきを細かな点に至るまで見る事ができた。理加は調教師が気に入った。

「畜生よ、おれの胸を褥として仰向けに横たわれ」

と調教師はいった。

理加はここでしりごみする必要がある感じ、いやいやをした。すると予想通り接待嬢が無理やり理加をベッドの上に押し上げ出した。

「何をなさろうというのです。いやです。お離しなさい。皆さんは犬です。獣です」

と理加は口から出まかせを並べた。

それでも理加は手加減をした。適当に区切りをつけて接待嬢のいいなりになった。調教師はまず理加の右膝頭を右腕で下からかかえ込み首元まで引きつけた。左手は理加の乳房

の上に置かれた。頭は理加の左脇腹に位置した。理加は助手の目がけわしくなったことに無関心ではいらなかった。

「愚かなる畜生よ。お前は自分の立場と自分の役割りを素早く理解しなくてはならない時がきた。事を運べ」

と調教師は命令した。

しかし助手は命令に応じなかった。すると調教師は声をあらだてた。

「接待嬢よ、事を運ばせろ」

助手はつんのめるように褥の上に乗せられた。理加からは助手の悔し涙にむせんだ顔がしばらくの間だけ窺えたが、じきに髪の毛より見えなくなった。

息苦しさは十分続いた。唐突に調教師が叫び、理加を驚かした。

「仕事にかかれ」

理加には、何のことなのか良く理解できなかった。

「仕損じてはならんぞ」

と調教師はいったが助手は答えなかった。彼女は無表情であった。

理加はその直後に非常なる戦慄を覚えた。

A 感覚に異常をきたしたのである。手違いではないかと思った。しかし手違いではないよ

うであった。助手は憎々しげに事を運んだ。

「いやです。いけません。そんなことは、いけません。やめて下さい。よして下さい」

理加は演技ではなく、本当に驚き、本当に泣き叫んだ。

「きたないことです。やめて下さい。よして下さい」

しかし調教師も、助手も、攻撃の手をゆるめなかった。

「そう嬉しがらずともよい。最も畜生にふさわしい仕事ではないか。お前は畜生であり、おれは主人である」

調教師がそういう終わらない内に、理加は身の毛のよだつ如き戦慄が吹きすさぶ中に、自分が異常に喜びを感じていることに気づいた。

「よして下さい。早くやめて下さい。いやです。いけません」

と理加は叫んだが、この時は既にまた元の演技にすぎなくなっていた。理加はこれまでに得られなかった喜びを手の内において、それを手離すまいとしているのであった。

理加が自分をまさしく「畜生」にも等しいと最初に感じたのは、この時であった。



(1)

ホロ酔い機嫌で、私が新宿駅の週刊誌販売店の屋台の前に立ったのは、もう夜の十時を過ぎていた。

会社の帰りに同僚と一杯が二杯とのみすぎたが、新宿でわざわざ途中下車して、よく行く書店に行ったのはその日が二十五日だったからである。二十五日は、毎月の本誌発売の日である。

私がお目当ての本誌を鞆にしまいこみ再び新宿駅に戻って来て、週刊誌を売る屋台の前に立ったのは、超ミニスカートのハデな若い女性が二人立っていたからである。駅をちょっと離れたこの売店の台上は何十種類という

ある夜のハプニング

M の 裏 側

馬 場 好 男

カット・あらいかず

グラマーな女の写真や絵やマンガの雑誌でいっぱいである。それらを二、三冊買ったこの二人の女の一人が、

「ね、おじさん、奇譚クラブはないの」

と突然訊ねた。私は若い女性のそばに立ってみるだけでもいいという気持ちでしかなかったのに、数秒後にこの言葉を聞いて、内心アツと驚いてしまった。

「ああ、あれはおいてないんだ、ごめんよ」

愛想のいいおじさんはすまなそうに答えたが、その女も氣にとめないように、

「ああ、そう」と立ち去って行った。

私は、電気バネにかけられたみたいになった。手早く鞆の中からさきほど買った本誌をとり出して追いかけていたのだ。

「もしもし、ちょっと」

「……う……なアに」

「これ、よかったら、さしあげます」

けげんそうな女達は、チラッと顔を見合わせて一人が、その本をパラパラとめくった。

二人とも背が高く、早くいえば、やせ型のタイプだが、夜目にも化粧が濃いいし、一人は黒いワンピース、それも肌がすけてみえる様な編みの荒い刺しゅうのような洋服だ。もう一人は赤いセーターに白いスカートである。ひと目で夜の仕事をしていることがわかる。私の本を受けとったのは黒いワンピースの女であった。美しい顔だ。

「アラ、いやだア、聞いてたの？」

くったくの顔で笑ったその女に私も笑

い返して、

「もう見たから、さしあげます」

と私は柄にもないウソをついた。

「どうも有難う、頂くわ」

「じゃ、さよなら」

私はそれ以上、話の進展しなかったことに後悔はあったが、わざと振りむきもせず改札の方に向かった。内心では明日また買うことにしようと思っていた。あんな若い女性がこの本を読んでいるんだなアと、感心しながら十数歩も歩いただろうか、パタパタと駆けてくる足音と一緒に呼び止められた。

「おじさんッ、おじさんッ」

ふり返った私の前に、たったいま別れた黒いワンピースの女が駆けよって来た。

「?.....」

今度は私の方が面くらって言葉が出なかった。女の手には本はなかった。別の女がもって待っているのだろうか。

「うっかりしたけど、お金を払うわよ」

女はニコッと笑って大声でいった。

私は手をふり首をふって、しばらく言葉が出なかったが、

「いや、いいですよ。本当は捨てるつもりでしたから」

「家にもって帰れないから?」

「え? ええ、まあそうです」

「毎月みてるの」

「そうね、殆ど」

「私もの」

「連れの女の人は?」

「ウン、先に帰ってもらったのよ」

「もし、よかったらお茶でもどうですか」

「いいわ、でも、私、お酒がいいわ」

私は内心、その調子のよさに、キャッチガールかなと考えたので、

「じゃ、僕の知ったところが、すぐそこにありますから行きましょう」

と先手をうったつもりだったが、その女は

「ええ」と返事をしてついてきた。

(2)

駅のそばで、小さな飲み屋の割に上品な店である。私と女は、向かいあって椅子にかけた。おせじぬきにきれいな女である。

「貴女はきれいな人ですね」

「まあ、どうもありがとう」

気がつく、笑う頬に笑くぼが出来る。

本当は長い髪を左右にわけて肩にたらしめているのだけれど、うしろで結んでいる。

「僕のような年よりが読むのは仕方がないけれど、貴女のように若くてきれいな人が読むのは変な気がするよ」

と笑いながらいうと、

「変じゃないわよ、面白いもの。ね、おじさん」

「趣味はなんなの?」

「趣味って?」

「マゾとかサドとかよ」

「それは、そのお」

「私、あててみましょうか」

「ウン」

「おじさんは、女の人をしばってみたいのでしょう。ぶったりして」

「?.....」

「なによ、笑ってばかりいて」

私と女は、たちまち酒を三本ぐらい飲んでしまった。

「残念でした」

「アラ、反対なの?」

「そう」

「マゾなの」

「ね、余り大きな声でいわないでよ」

「ふふふ、そうね」

「貴女は?」

「どう思う?」

「貴女みたいな人にいじめられるといいだろうなア」

「ね、どっちよ」

「うーん、ズバリS」

「ザンネン、Mよ」

「えッ、本当？」

「そうよ」

「じゃ僕ではダメか」

「ね、男のMって珍しいんじゃない？」

「そんなことないよ。だって、あの本を読んだって判るだろ」

「それはそうだけど」

彼女は眼のふちに酔いの赧味がさしはじめてきた。知らない同志が、たった本一冊のことで、知己の様になれなれしく話せるなんて不思議な気もするが、考えてみると面白い。

「私、おじさんがどうみるかしらないけど、結婚したことないのよ。いまバーのホステスをしているんだけど、ううん、今夜はお休みしたの。でなきゃあ、今時分こんなところに居られないわよ。……さっきの話だけど、うちのバーテンも、他のホステスもみんな結婚とか同棲してるらしいんだけど、どの人も男が女をなぐるわよ。アケミさんなんて、この間左眼を紫色にしてきたけど可哀想みたい。彼

氏が、お客さんとあまり馴れ馴れしくしすぎるっていうんだって」

「だからアケミさんっていう人がマゾだというの」

「ううん、そうじゃないけど、なぐられてもけられても、そのうえ稼いだお金をとられても、別れないからヘンだと思うのよ」

私は、彼女の名前を聞きたかったが、きっかけがつかめず、そのまま話しつづけた。

「じゃ、貴女はさっきMといったけど、やはりなぐられたい？」

「なぐられるのはいや。でも私って、古いかな、女性上位時代なんていうけど、頼れる男の人にしがみつきたいわ」

「頼れないから女性上位とか、頼るから古いってことはないよ」

「ううん、頼るっていうのはちがうのよ。私のいうなりにならず、私をリードして、ひっぱってくれる人がほしいのよ」

「まあ判るけど、結局どうなるのかな。とっつけたみたいだけど、貴女をいじめるのも面白いような気がするよ、なんだかしらないけど」

私達はお互いに酔って、お互いに言いたいことを言っている恰好になってきた。話はS

とMにはなかなか進展しなかったが、私の胸の奥底には、Sでない女性でも、いざとなるとSのマネ位はしてくれるだろう。自分もSではないが、若い女性をしばってみる経験も味わってみたいと、チラッとかすめるものがあつたのである。

彼女は二十三才というから私の娘のようなものだが、何か手離すのが惜しくなつて、とうとう一大決心をして私は訊いた。

「ねえ、僕は決して悪いことはしない。ただプレイのマネをしてくれたらいいんだ。これからどう？ それとも都合が悪い？」

「MとMのプレイ？ レスビアンみたい」

「大丈夫だよ、きつとうまくやるから」

「おじさん、本当にMなの」

「そう。でも今夜は、いやひょっとしたら転向するかもしれない」

「てんこう？」

「MからSにかわるかもしれないってこと」

「ほほほ、調子がいいわア」

「さ、行こう」

「これもなにかの縁ね」

私のいうセリフを、小娘にいわれたみたいでいささかとまどったが、私にはこれは又とないチャンスに思えて、彼女をせきたててそ

の店を出た。

(3)

彼女は、みよ子といった。

バスつきの豪華なホテルにちょっと目を輝かせていたが、キラッと違ういろで目をひからせて云った。

「ね、ヒモがないじゃないの」

私はホテルに来る途中でもそれは判っていたのだが、いざとなれば帯紐でかまわないと思っただけだ。私はとぼけて、

「ああ、そうか。でも、この帯紐でいいじゃないか」

といったが、彼女は不服そうに、

「だめよ、ムードがないわ。買って。私、買ってくる」

と立ち上った。

「いったん入って、また出るの」

「平気よ。すぐそこでロープのあるとこ、知ってるの」

私は心の中で、『逃げるんじゃないか』と思ったが、口には出さなかった。

然しその表情をよみとったのか、

「大丈夫よ、必ず帰ってくるから。折角のムードをこわしたくないのよ」

と真顔で言った。

私はなんとなく、恥かしいような、それでいてサド的にふるまわないといけない——そうでない、みよ子に逃げられてしまう！

といった複雑な感情に迷ってしまったが、思いきって云った。

「判ってるよ。断っておくけど、ヒモをもつて入る時は、口にくわえて犬のようにして入ってこいよ」と、まではよかったが、「ね、そうしたほうがいいでしょ」と、つけ加えてしまつてハツとなる。

みよ子は私の顔をみすかしたようにみていたが、意味あり気にウインクをしてドアをきめて出ていった。

みよ子と二人でいると感じなかったが、街の灯を窓から眺めていると、いまこまでおきつつあることは、私にとっては大きな一つのハプニングである。欲望こそあったが、平凡に暮してきた私の転機ともなるようなことにもなりかねないな、などと大げさに考えられてきたりもして、改めて緊張するような気持ちに襲われたのだった。

テレビをつけたり、ふろのお湯を出したりしているうち、みよ子は小さな包みをもって帰って来た。

ホッとしてみよ子を見ると、後ろで束ねた髪はヒモ？ をといて左右にたらしめている。肩の横辺りまであるその髪形のせい、もっと少女じみて見えた。

「早かったでしょう」

包みをあけてみると、真白い柔らかそうなロープだ。三本位の細紐をよって、つくってあるのだろう。

「バスの用意が出来てる。キミ先に入れよ」

「ううん、私、あとでいいわよ」

「僕は、あと湯のほうが好きなんだ」

「でも」

といって小声で

「ドレイはあとよ」

と、いたずらそうに笑う、髪が半分、顔をかくして可愛い。

「じゃ一緒に入ろう、ドレイは体を洗ってくれないとね」

「うまくやられたわ」

と、みよ子は首をすくめて立ち上る。

私はちよっぴり本性が出て、長いみよ子の素脚を抱えるようにしてうずくまり、白い足の甲に唇をつけた。

「汚いわよ」

みよ子はいったが、別に体を退けようとは

しないで立っていた。

私は我慢出来なくなり、ガバツと四ツ這いになった。

「ちょっとでいい。僕を馬にしてくれ。な、頼む。さあ乗ってみて」

という、みよ子も私のマネをして四ツ這いになった。

「いや、私が馬よ。あなたから乗って」

私は、おじさんからあなたに呼称が代ったみよ子の言葉がピンと響いた。仕方がない。

「よし！」

と叫ぶようにいうと立上って、ズボンにワイシャツ姿のままみよ子の背中に跨がった。

細い体で大丈夫かと思ったが、背の高いせいか割とがっちりしていて、ちょっと体をぐらつかせたが、ゆっくりとみよ子の馬は這いはじめる。

私は、みよ子の肩を両手でつかみ、はじめは重みをもたさないように足をじゅうたんにおろしていたが、じわじわと両足をあげて、七十キロの体重をかけてしまう。

這い廻るみよ子のお尻を、軽くだがムチ代りに左手で叩いてみる。三回も部屋を廻るといささかぐらついて、

「ああ、もうダメだわ」

と悲鳴をあげる。

私は、尻の下に始めて敷く若い女体に、日頃の夢想とはべつの魅力を覚えた。

「つぶれるとひどい目にあわすよ、もっともって廻れ」

と声をあげる。私はみよ子の髪を左右の手に適当に束ねて持ち、手づな代りにする。

私の全身をくすぐる不思議な感情は、まぎれもなくSに遊ぶ一人の男の気持だろう。それはしかし、戸惑っていることが自分自身でよくわかったが、決して悪い気持でなく、むしろ面白い味わいを新しい血で感じていたのだ。

(4)

むっちりした乳房が、私の引き絞るロープの間でくびれた。しかし女体をしぼるのはむつかしい。女体には限るまいが、やはり馴れていないとダメらしい。片方の手首にロープをかけて結び、うしろ手にして両手を結えたが、背に高々とは仲々ゆかない。仕方がないので、片方ずつ肩にロープをかけるようにして、うしろ手をつりあげ、左右に張った両の腕を、体もろともロープをかけて巻いたのだが、なんとなくすぐとけそうな感じがした。本誌

の写真でみるようなしぼりは、相当場かずをふまないといけないのだと気がつく。

ええい、ままよとばかり、グルグル巻きにしばりつける。手首と手首の間にロープを通して、ズルズルとひっぱると、

「あッ、い、いたい！ いたいわよッ」と叫ぶ。

やわらかいロープとはいえ、やわ肌にくいこんで引っぱられたので痛かったらしい。

「ごめん、ごめん」

と思わずあやまってから気が付き、慌てて「コラッ、ドレイのくせに！」ときめつける。

「ごめんなさい。だって肌が挟まってヒリヒリするのよ」

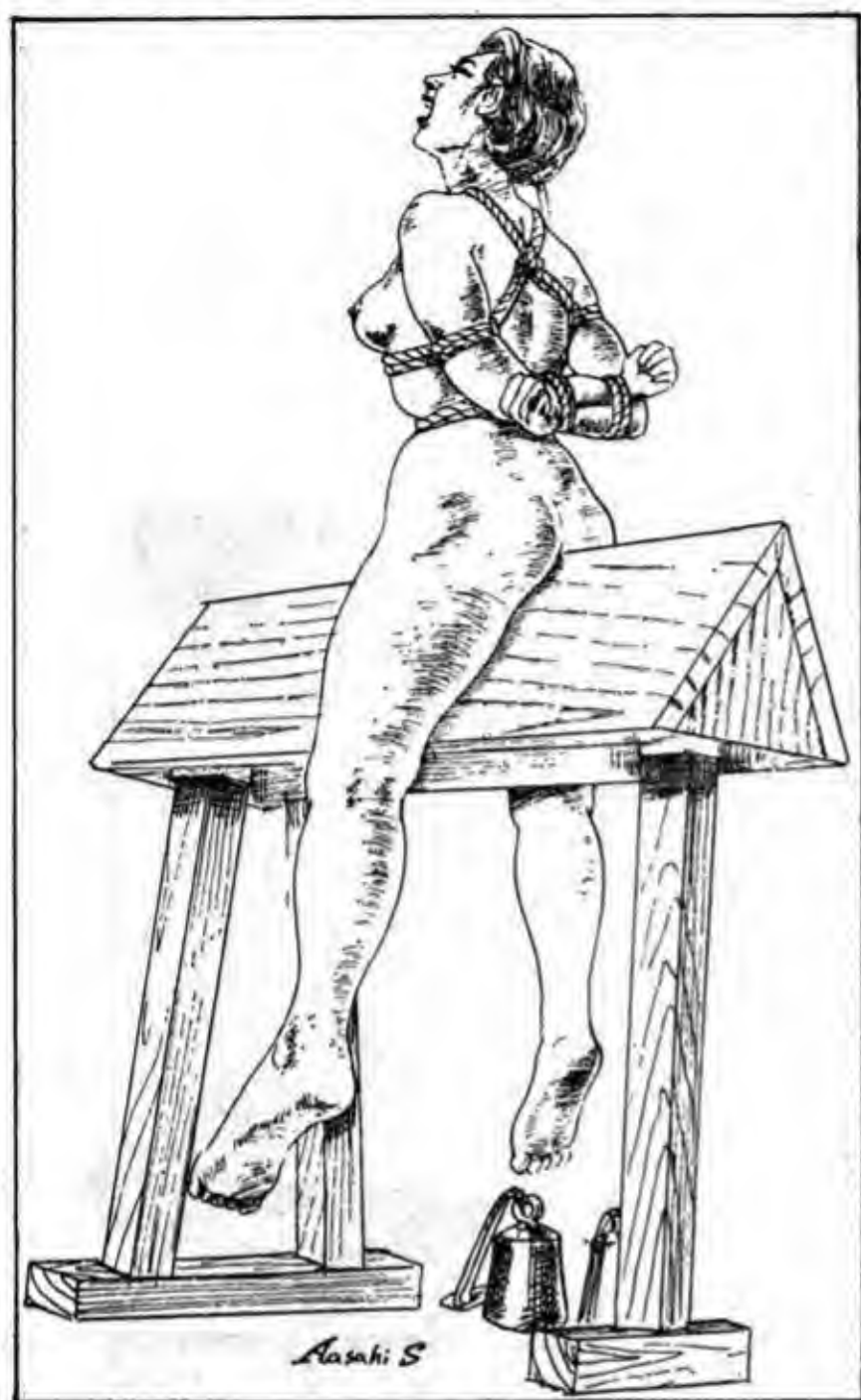
みよ子は情なそうに笑う。

背中に高く両手を結ばれ、顔が見えないくらいに長い髪がたれさがってうつむいているみよ子の姿は可憐という感じがした。

ふと心の中で、みよ子の年令に近い自分の娘が見知らぬ男にこんなことをされたら、どうしようか、と考えてしまった。

きつと男をつきとばし、娘をかばって、大急ぎで縄を解き、「何てことをするんだ、このヘンタイ野郎！」と叫ぶことだろう。

読者ギャラリー『木馬』須坂 旭



だが、そんな時、もし娘が「パパのバカ、私が頼んでやってもらっているのよ、放っておいて！」と答えたらどうなるだろう。おそらく逆上して「お前という娘は……」と、私は娘のほおに平手打ちを何度も何度もくわせることだろう。

「ごめんなさい。いたい！ いたい！」

娘の悲鳴と思ったのは、私の手に思わず力が入って、みよ子の縄尻をたぐしあげた悲鳴だった。私は頭を振って邪念？ を払った。

「さあ、引き廻しだ。歩け！」

私は縄尻をひきたてて、みよ子を立たせた白い裸身は、うっすらと赭くなって、ところどころが赤くなっていた。ロープと、じゅうたんにすれたのだろうか。

助けおこさずに、縄尻をつりあげて無理にみよ子をひきおこす。みよ子は縛られた不自由な身をよじるようにしてけんめいに自分の体をおこす。起きあがりかけては倒れそうになるみよ子を、私はじゃけんに蹴つとばして

ひっくり返す。

「痛いッ！ ごめんなさい！」

みよ子はもう謝るだけだった。そこには演技もプレーもなく、ひたすら被虐を噛みしめようとする全身の表情だけがあった。これが女のMというものか？ と私は眼をみはる思いだった。

私はふと、またもや自分の娘との錯覚を感じた。

なんでお前は、こんなつまらないことをする男にひっかかったのだ！

私の心が、そう叫んでいた。それは私自身に対して叱咤するえんさの声であったに違いない。自責の気持が、みよ子のほおに平手打ちとなつてとんだ。

「あッ！ ゆ、ゆるして」

と悲鳴をあげるみよ子の両ほおを、私は交互に叩き続けた。みよ子はそれをよけもせずじっと目をつむり、口をつぐんで必死でこらえていた。

私の錯覚は、更に錯覚を呼び、みよ子と娘が交互に現われ消えた後に、私自身が浮かび上って、責めたてられている痛覚を味わったのだった。

す み 子 の 告 白

パーティの二人のドレイ

清 川 純 平



カット・岡 たちし

夜八時。楽しいわが家のだんらんが、はじまろうとしています。

テレビを見ていた夫は、キッチンの片づけを終えて手を拭きながら居間に入った私を仰ぎみながら、

「まだ、おかんはつかないかなあ」
甘えるみたいに言います。

「かん、かんで、うるさいわねえ。そうやすやすとは出来ないのよ。冷蔵庫に、ちゃんと冷えたのがはいってるわ。あれを先にのみなさい。今夜のあたしは、ゴキゲンナナメよ。おとなしくしないと、ひどいわよ」
「きくよ。おとなしくするから、そのかわりあとでたのむよ」

主人は、まるでネコがじゃれるみたいに、私の足もとに、ひっくりかえります。

いつものように、素足をもちあげて、彼のヒタイを踏みながら、

「わかったのね。ママはまだご用があるの。冷や酒でガマンなさいね」

「おれ、冷や酒はあまり好きじゃないんだ。やはり、できたての、人肌のほうが香りがいいんだものな」

「おれ？ おれとはなによ。あれほど教えてあるのになぜハワタクシ！と言わないの」

「わかったよ。お前のことは女王サマと言やいいんだろ。言いますよ。ワタクシ！」

「お前なんていったら、あたし、おりちゃうよ。おまえは、こうやって乗られてるのが、いちばんいいんだろ」

「ハイハイ、女王サマ。そのとおりでございますです」

「わかればいいのよ。そろそろ自動販売機のおカンもついたらしいわ。ハイ、一合千円。代金は前払いよ」

「千円は暴利だなあ。原料は、水道の水なんだからタダみたいなのに」

「いやなの？ いやならおよしになっていいのよ。そんなこというのなら、トイレへ捨て

「ちやうから」

「払いますよう。すてるなんて、意地悪しないで。ねえ、女王さま」

私は、べつに、わが家の甘ったるい風景をスケッチして、みなさまにごめいわくをかけようというのではありません。ただ、夫の、善二の趣味を、ちょっと紹介してみようと思うだけです。

×

善二が、ひるまは、冷暖房会社のセールスエンジニアとして、バリバリ働くモーレツビジネスマンであることは、私もよく知っています。

エリートコースの花形社員で、月収十八万円。三十そこそこの若さでは、まずヤリテのほうです。おかげでめぐまれたサラリーマン生活に、私はまんぞくしきっています。

こどもは、まだありません。

会社から帰宅するのが、たいてい七時ときまっています。

結婚前から、マイカー族だった彼は、愛車のVW（ホルクスワーゲン）で、まっすぐ帰ってきます。

彼が、みちくさもせずに、まっすぐ帰ってくるのには、わけがあるのです。この世で私

しかつけれない、ごちそうが、彼をマイホームに、釘づけしているからです。

その善二に、体の不調を訴えられたのは、結婚一年目の、この春のことでした。おなかを抱えて帰宅した彼が、

「ハラがいたい」

マユをしかめ、ミゾオチのあたりをおさえていました。

実は、これはあとでわかったのですが、私をあざむいてマイペースにのせようとの幼稚な伏線だったのですが、そのときは、こちらも、本気になってしまいました。

胃腸薬をのませ、痛むというおなかをさすってやると、

「ウン、よくなったよ」

と、その日は、それで治まったのですが、それから二、三日すると、また腹の異状。

「どうも、ガンという年ではないがポックリ病の前兆ではないか。と、会社の同僚に言われた」

と、元氣なく帰宅しました。

「ポックリ病てのは、突然やってくるんだってさ。まだ特效薬はないのだが、よくきく漢方薬を教わってきた」

その漢方薬の原料は、と善二が手帖をひろ

げながらいうのには、私は、まったくびっくりし、呆れ、そして、顔が赤くなりました。

「恥ずかしいけど、ポックリ病にや代えられないから、思いきって言うよ」

前置きが、すごいと同じように、その原料も、妙なものです。

「ズバリ言うと、小水なんだよ」

ほんらいならトイレへ流し去るべきお小水に五、六種の漢方薬を加え、いったんフットーさせてから、人肌にさまして、一日に三回服用する――。

漢方薬うんぬんは、よくわかりますが、なぜ小水を使わなければならないのでしょうか、わけがわかりません。

「小水には、あれで、ホルモンが含有されている。その量もわりかし多いんだそう。それが、ポックリ病に特別、効くそうだよ」

と、わかったような、わからないような話を、私は、ただじっと聞くしかありませんでした。

動物の尿には、ある種のホルモンが含まれていることは事実のようです。

とくに、妊婦のそれには、特別すぐれた要素が存在し、薬剤の原料として、製薬会社に回収される、ということも聞いたおぼえはあ

りました。

ですから、ほんらいなら流し去られるべき小水ですが、薬用に用いられないこともないという、この善二の聞いてきた話もうなずけます。

「ボク、決心したんだ。まだ三十一歳。やりたい仕事がある。ポックリ病なんかで倒れるわけにやいかない。死にたくないんだ。だから、この療法を、思いきってやってみる」

真剣に打ちあけられ、私もそうなさいと同意したわけです。でも疑問があります。

「そのおしっこ、誰からもらうの？」

「きまってるよ。こんなこと他人にたのめるわけがないだろ。健康体の異性というのだから、キミのさ」

「いやよ、あたし。いくら夫婦でも、恥かしいわ。だいいち不潔だわ」

「不潔なんてあるもんか」

「それに、ハレンチだし、毒だわ」

「ヘーエ。毒なの？ キミは、毒をおなかにためてるのかい？」

さすが、セールスエンジニア。くちでは、とても、かないません。

しぶしぶ私は、原料の提供を、やくそくさ

せられたのでした。

×

でも、善二のいうポックリ病の特効薬というのは、真っ赤なウソであることが、たちまちバレるのですから、ハ上手の手から水が洩れるVとは、まさにこんなことをいうのでしよう。

出勤支度に忙しい彼が、忘れものをして行った朝のことでした。

その忘れものは、いつも彼が肌身はなさず持ち歩く、ビジネスダイアリー。ポケットにおさまる、その日記帖にこんな文章を発見したからです。

○

○月○日 夜、すみ子にアタック開始。腹痛ということにする。彼女、信じて疑おうとせず。第一期計画成功。

○

○月○日 朝、ハあなた、おなかどうですか？Vと問われローバイ。このところ得意先廻り殺到アタックについて手が廻らなかつた。ハうん、忙しくて、痛いけどガマンした。売れっ子は、つらいよVと、ごまかす。いけない。すみ子に疑われぬよう、ドラマつづけること。

○

○月○日 ついに、ポックリ病の特効薬と称して、漢方薬をもちだす。彼女、しぶったのちOK。目的着々すすむ。一パイ千円ぐらい払うシステム、研究のこと。

○

どうやら善二には、人が口に入れるべきでないものを、積極的に求めたがる、奇妙な性癖がありそうです。

Mとかいって、相手から踏まれたり、けられたりすることに惹かれる人は、たしかにこの世に存在していると思います。そして、それらの人は、日常の職業の上では、すぐく積極的で優秀な、いわゆる模範社員タイプの持ちぬしとか。

私の善二は、このタイプにピッタリのように思われてなりません。

会議、とくい廻り、打ち合わせ、見積りといかにも忙しい彼のスケジュールのなかに、ときどき、病気のことがでてきます。

一パイ、千円のシステム？ このナゾの文字に、私はクビをひねりました。

○

○月○日第一回採取成功。おれはなぜ、こんなものに惹かれるのか、いささか自責。で

もよい。べつに毒ではあるまい。彼女を女王とあがめ、その足もとにひれ伏し、そして服用を許されたときの感激！この味、おれをとりこにする。おれは永久に服用するぞ。

○

細いケイに、ビッシリ書きこまれたノート、私を女王と呼び、屈伏を楽しみ、あの恥かしさをこらえて与え、目の前でむ、苦渋を伴ったその表情の思い。

善二は、どうやら私を女王と呼びたがっているようです。私は記念に、このビジネスノートを、手箱のすみに忍ばせました。

私のような平凡なおんなの足もとにひれ伏し、あんなものをのまされることに、大きなよろこびを抱く男性がいるとは！そのダイアリーは、彼にとって、仕事の上で重要なものであることはわかりますが、彼が仕事の上でこまることよりも、後日のため、愛の証拠として、私の手のなかにかくしておくことのほうが、いっそう重要だ、と、私は思ったからでした。

×

きょうは土曜日。

彼と私の待ちに待つ、ウィークに一回のS Mパーティーの日です。

いまは午後四時三十分。

近所の食料品店から届けさせた、材料を使って、今夜のためのごちそうづくりに、これからかかるそうです。

彼が、ポックリ病でもなんでもなく、漢方薬なんか全然必要としない、健康体であることは、私がいちばんよく知っています。

ただ、ひとつ。そうです。彼がもっとも欲しがる、私しかつくることのできない、あの高貴な「おさけ」が、今夜のごちそうのたいせつな材料になるわけです。

お料理にとりかかる前に、私はコーラやジンジャエールやアルコール分を抜いた、ソフトビールの「S」など、清涼飲料水を、何本もカラにします。「材料」をつくるためにはまず水分を、じゅうぶんに体内に送りこみ、排泄をうながす必要があるからです。

ピフテキに、サラダに、オムレツ、カツレツ。これらは、善二の大好物。

材料の下ごしらえをしてから、さっそく調理にかかります。

フライパンに、口中から、ぽちっとタンをおとし、そこで焼くテキを善二は、うまいうまいと平げるのですから、おもしろいと思います。

サラダにもつなぎに、たっぷりと、私の口中にためたツバをおとすなどは、どこのキッチンスクールでもおしえない、私独特の調味料を使った、わが家特製のすばらしい味覚です。

このまえ、こんなことがありました。

オムレツをつくるため、たっぷり卵黄、つまり、タマゴの黄みを用意して焼いたのですが、どうした加減か、黄みが固まってこないのです。ふと思いついて味をよくしようと、れいの、善二がのみたがるものをたっぷり入れた、その水量が多すぎたためようです。しかし、みすみす捨てるのはもったいないし、私の出したもので味つけしたのを、食べるのはいやだし、けっきょく、サラダに盛って彼に与えました。

「やや。まるで、赤ちゃんのウンチ！」

なるほど、うずたかく積まれた、タマゴの黄みは、オムツにとった赤ちゃんのそれに、そっくりです。

「うまい！」

一と口、味をみて、彼はいいました。

「女王さま、とても気に入りました。こんどは、女王さまの黄みで、オムレツをつくってください」

ああ、なんてことをいう主人でしょう。少量を、二滴、三滴くらい求めるのなら、まだよいとして、そんな固いもので、ほしがるとは精神異常としか思えません。

×

しかし、精神異常の人間が、会社で将来をやくそくされた、エリートになれるわけはないでしょう。事実、善二は今度の人事異動で同僚を抜いて係長に抜てきされ八人の部下をもつように、ライバルを追い抜いたのですから、精神異常者というには当たらないと思います。

「スモンか、ポックリの前兆と、おどかさされたボクだけど、女王さまから、たっぷり、おくすりを与えられてから、よけいアタマがよくなったし、ファイトも湧いてきたよ」

善二は、毎夜、私が与えるものに、ますます熱をあげ、仕事もバリバリやります。

そして、どちらから言いだしたともなく、一回与える毎に、私に支払われる「報酬」は千円。いったいなら、ただトイレを通過して下水道に流し去る、しがない廃水のおかげで私のヘソクリが、月に三万円。

善二のアタマがよくなり、そして、私のヘソクリが三万円もよけいにできるのですから

文字通り双方がトクをすることになります。まさに、小水さまさまと、思います。

テキを焼き、サラダを仕上げ、オムレツをこしらえ、カツを揚げ、お料理を手順よく進めるのは楽しいもので、ことに、それぞれの調味に、つばやなにか、私のものを混入させるのは、なにかスカッとした快いものです。

ガスの火を消さないで、スープのこしらえにかかるところで、用意してためておいた、私の調味料は品切れ。でも、あわててスーパーマーケットへ買いだしにゆく必要はありません。そのかわりに、ステンレス流し台の下に用意してある陶製の口の広いつぼに、みたせば、準備はオーケーなのですから。

いま、私の下腹は、かなりふくらんでいます。といっても、赤ちゃんが入っているわけではありません。そうです。善二のためのフランスパンを、私は肌にあてて、あたためているのです。体臭と、アセと皮膚のアブラとつまり私のからだから排する不用の老廃物をたっぷり、パンに吸わせるためなのです。「バターや、ジャムや、マーマレードなんかぼくはいらないよ。女王さまのおだしになった、とおといおアセのほうに、ずっとうまいもの」

そこまで言われれば、女としてわるい気はしません。

テレビの七時のニュースがはじまります。さきほど、善二から電話が入り、「急に、全体会議になった。オリエンテーションでは、ボクがリードマンだから、逃げられない。でも六時には終わるから、今夜のパティの用意だけは、しといてくれよ」まわりの社員を意識してでしょうか、口早やにいいました。

×

門の前で、クラクションが短く二回、鳴りました。

善二が帰ってきたのです。

「ただいま。お客さまだよ」

玄関から、善二が大声をあげます。

「副社長だ。そそのないように」

善二は、緊張して、私に告げました。いつもなら、

「ただいま帰りました、女王さま」

とか言って、廊下にひざまずき、

「おかえり」

と、つめたく一言だけ答えた私が、つと片足をあげて足のうらを彼に与え、ドレイのあいさつを許すところですが、副社長とあって

読者ギャラリー『新 型 便 器』春 川 ナミオ



は、そんなことはできません。

副社長は、善二より一歳年上の、現社長の養子さんで、ゆくゆくは事業のあとをとる人ですが、そんなえらい人が、一介の社員にかすぎないわが家へ見えるとは、どうしたことでしょうか。

「さっき電話したのを、副社長がお聞きになって、ウチのパーティーの客になりたいとおっ

しゃるんだよ」

あっと、私は思わず声をのみました。心をこめて、パーティー料理をつくり、待ちわびたのは、善二のためにやってあげたことであって、いくら副社長だからといって、せっかくの土曜日に、他人を、入れたくはありません。だいいち、パーティー料理には、すべて独特の、他人には絶対明かすことのできな

い、私のからだでつくった、調味料が加えてあるのですから、こんなものを、会社のえらい人にだせるわけがないでしょう。

「こまったわ。副社長さまがみえるならみえると、そうしらせてくれなきゃ！」

思わず、善二にいいました。

「シッ」

お通しした応接間で、ゆっくり、たばこをくゆらしていらっしやる副社長に気をつかいながら、善二は私のくちをふさぎます。

「いいんだよ。わけを話そう」

×

善二は、手みじかに、わけを語りました。パーティーのことを問いつめられ、つい、私のこしらえる調味料の秘密まで、すっかり、白状させられたら、副社長は目をぎらつかせ、へい話じゃないか。社員中、いちばんの美人おくさまと評判のたかい、きみの、すみ子夫人の調味料なんて、どんなレストランへいったってありやせんだろう。ぜひ、おしよっぱんしたいな。

と、言うのだそうです。

そうになったら、善はいそげだ、今日のオリエンテーションは中止だと、せっかく集めた四十人の営業部員には、車代の千円ずつを支

給して、会議は来週の水曜日と、勝手に変更したのに、部長以下、誰ひとり異議をとねえるものはなかったそうです。

「副社長は、四十人の社員のおもわくなんか、いちいちかまっちゃいられない」と、さつさと立ちあがるんだ。すみ子の魅力は、たいたものだよ」

善二は、一生けん命に私をおだて、さらに言うには、

「みちみち、副社長と、話してみてもわかったんだが、彼も、ボクと同じ趣味の持ちぬしで女性にぶたれたり、踏まれたり、のまされたりするのが好きなんだそうさ。そうさう、ウチへきたら、副社長なんて呼ばないでオレもキミも、シロさんと呼んでくれといっているんだよ」

勝川志郎という、ステキな名をすてて、シロさんとか、シロと呼んではしいと、リクエストするあたりにも、このひとのMの度の進んだことがうかがえます。

「そういつちやわるいけど、副社長は養子だろ。家つきむすめのおくさんは、いばりかえって、彼を人間あつかいしないのださうだ。夜なんか、へいきで、おくさんが肩をたたかせたり、足もみを命ずるさうだよ」

いくら養子だからといって、ご主人にマッサージを命ずる妻なんて、下級だと思えます。でも、養子というものには、ごく少数ですがおくさんの苛酷な命令を、ハイハイと聞く人がないとは、いえないでしょう――。

その夜のパーティは、シロというニューフェイスのドレイを加えて、賑やかでした。

男たちは、私が、即席でおかんをした「オサケ」をふるまうとすっかり酔ってしまい、調子にのった善二は、

「女王さま。いつかの、赤ちゃんのウンチオムレツ」をつくってくれないかな。いや、材料は、タマゴなんかでなく、キミのほんもので……」

と求める、しまつ。

でも、こればかりは、即座にまに合わすような器用なマネは、浣腸でもないかぎり、そうかんたんにはゆきません。だいいち、こっちは、千円ばかりのお金では、与えられないくらい貴重なものなのです。

オミヤゲといって、ウイスキーのポケットびんに、みたしてあげた、例のウォーターを大切に持って、シロが、重たいミコシをあげたのは、夜もふけた十二時すぎでした。

×

いま私の善二は、二週間の長期出張で、北海道へいっています。

「シロのやつ、あのパーティ以来、すっかり女王さまのお味にネツをあげてしまい、ボクが、じゃまになったんだ。ウチの市場としては大して重要でもないのに、わざとボクを、北海道へ飛ばすなんて、女王さまを横取りするハラらしいのだ」

出発まえに善二は、くやしそうに言いました。

これは、まんざら善二のひがみだけでなくたしかに、シロの野心のあらわれと、私も思っています。

「へたすると転勤命令で、北海道か九州の、パツとしないテリトリ（営業担当区域）にとばされるかもしれない。あのとき、いくら副社長でも、ウチへなんか連れてくるんじゃないかった」

羽田空港の国内線のロビーで、千歳ゆきの定期便をまちながら、善二は、しきりに私との別れをおしみました。

飛行機にのるお客さまらしくもなく、超特大のジャージを、大切に持ちながら。

そのジャージのなかみについては、いまさら説明の必要はないでしょう。北海道へ着いて

淋しい出張先の一人ぐらしに、私のつめてあげた「特製酒」を毎日たいせつそうに口にしておいて、私を思いだすためののだそうです。ちょっとかわいそうで、わずか二週間の出張とはいえ、私も、センチなきもちにおそわれるのでした。

やっぱり、サラリーマンは弱いもの。

でも、いいのです。

同じ調味料に、善二は千円しかよこしませんでした。金もちのシロは、十倍の一万円です。私から私のヘソクリは、どんどん大きくなります。

今夜は、善二を北海道へ追い払った、はじめての土曜日。

「ボクですよ。すみ子女王さま。善二の代わりに、今夜のパーティのドレイは、このシロです。たのみますよ。原料を用意して、赤ちゃんオムレツ」を今夜こそつくってくださいね」

電話のむこうから、シロの声が、はずんできこえてきます。

六十五人の社員のうえに悠然としてたち、私の善二をアゴで使い、必要となれば命令一本で、北海道へでも、九州へでも四国へでも転勤を命ぜられる、高い地位に立つシロでも

ひとたび私の前に現われれば、床に頭をこすりつけて、踏まれることを哀願し、お風呂やトイレのお供を喜々としてつとめ、はては調味料に酔い、忠実なドレイに化すのです。世の中は、まったく楽しいものです。

善二のやつは、いまごろ北海道のどこでうろついているでしょうか。きっと、せっかく大切に持っていたジャアのなかみを、カラにしてしまい、女王さま恋しさに泣いていることでしょう。

.....

「ボクを、北海道へ追っ払った、憎いヤツ、シロ。女王さまのご前にひれ伏したら、ボクの恨みもこめて、鞭なりアップパーカットなり存分に呉れてやってほしい。ただし、いくら求められても、調味料だけは、与えないでくれ。あれは、ぼくだけのものだから」

善二から、はがきに走りかきた、こんなたよりが届いていますが、ドレイの分際で、ご主人さまに指図するとは、なにごとでしょうか。

だいいち、恨みをはらすために鞭をふるえば、それが、かえってシロの喜びになるのだから、善二のはがきは、ばかっていると思います。

叩こうが、のませようが、それはいい。私の自由。私はヘソクリが大きくなってゆくの、いちばんの楽しみなのです。

善二もシロも、私を肥やす栄養剤だけの存在。おかねをたくさんくれるほうを、かわいがってやるだけです。

×

玄関で、ブ、ブーと、ブザーが二回。

シロがきたのです。

私は、いまやとてできあがったドレイのためのパーティ料理の食卓の用意を終わったところ。

実は、今夜は、どうしても、シロに八万円の奉納金を出させる必要があります。

そのお金は、ジャルパックで、ヨーロッパ旅行のための費用で、前納金の最終回ぶんです。あしたは旅行会の締切り日ですから、どうしても今夜じゅうに、つくってしまわなければなりません。

それに備えて、こちらから電話をかけ

「今夜のパーティには、小切手帖をもってらっしゃいね。そのかわり、おのぞみどおりあなたのお好きな、赤ちゃんウンチオムレツ」を、たっぷりつくるとききますわ」と、やってみただけです。

「ハイ」

と、すぐく、はずんだ声。

このぶんでは、八万円の小切手を書かせることは、わけなくできそうです。

×

「女王さま！ まいりました」

顔をまっ赤に紅潮させ、ハッスルした表情でシロが入ってきました。

「あたしトイレもがまんして待ってたのよ。小切手帖もってきた？」

これから勝負どころです。とにかく、れいのオムレツをえさに八万円の小切手を書かせなければなりません。

ゆっくりと立ちあがった私は、言葉もなくひざまずくシロの前にたちます。

.....

またブザーが鳴り、ドアが開きます。

せっかく、これからシロを、羞かしい目に会わせ、八万円を奉納させようと、アクションを開始したのに、いったい誰の訪問でしょうか。

せっかくずり上げたスカートをおろし、プンプンしながら振り返ったら、そこには、思いがけなく、善二が立っていました。

「まだ、訪問先は残ってるんだが、どうにも

女王さまの「特製酒」がほしくなって、シロにはないしよで帰ってきた。今夜は土曜日だもの。パーティがすんだらスグに引返す。だから、とにかく、オムレツだけでもたのむよ」

本気表情で、手を合わせるのですから、呆れます。

「ね、だから、たのむよ」

ドアのかげに、そのシロがひざまずくことなど知りよう筈もなく、善二は哀願します。

「シッ！ だめよ！ おまえなんか」

私は、つめたい口調で、あがりかけた善二を押しとどめました。

「オムレツは、シロがいには与えないわ。

だって、シロは、あんたより、ずっとハンサムで、お金持ちよ。八万円の小切手を、スグ書くわね。シロ！」

「ここが勝負！」

というハリつめたきもちで迫った私の気迫に押されたのでしょうか、シロは、その場へ小切手帖をとりだし、金額欄に、私のいつけたとおりの¥80000、の数字を記入するのでした。

「よし、よく書いたわ、いい子。じゃオムレツは、のぞみ通りシロに与える。善二は、だ

め。今夜のパーティにも招んでやらないわ。スグ北海道へかえりなさい！」

無情な女王ぶりをきめこみ、善二の胸をドシン！ と押してドアの外へ押しだしてしまいました。

「待ってくれ。せっかく北海道から帰ってきたんだ。せめて夕食ぐらい……」

ドア越しにきこえる、善二の悲痛な声なんか気にすることはありません。

「シロ、オムレツをやる。覚悟おし！」

私は、女王さまの威厳をくずさないように注意しながら、足をあげて、シロの胸をけり廊下に入りました。

副社長という、えらい人を、と一しゅん思いましたが、これが、シロのおのぞみなのだから、かまわないわけです。

「すみ子！ シロがいてもかまわないよ！ せめて今夜のパーティだけは、やらせてくれよ！」

腹の底からしぼりだすような、善二の絶叫を伴奏に、これから女王さまとシロの水いらずのパーティが始まります。

——（おわり）——



(一)

同僚の松田君と二人で夜勤の時であった。

松田君は私より六つ年上の四十七才で、あまり警備員向きではない痔せ型のヒョロッと背の高い男で酒好きである。私と一緒に勤務するようになってから一年足らずだ。

「ウイスキーを持って来たから一杯やろう」

松田君はニッカの小瓶を振ってみせる。私は酒は駄目な方であるが、つきあいに小さなコップで一杯だけ受けた。

「松田君、君んとも子供さんがないそうだね」

「そうなんだ。少し淋しいがねえ」

「奥さんは、身体が弱いんかね」

「どうしてどうして。家内は僕と正反対で、

やたら肥っているのさ」

「肥ってる人は気が優しいだろう？」

「いやあ、うちの家内ときたら、ひどいもんだよ。僕がこんなヒョロヒョロだからナメてくれるんだな。肥えてるだけさ。まったくあれでは女相撲だよ」

私は、松田君が女相撲と言ったのでドキリとして思わず訊いた。

「君は、奥さんと相撲をとるのかね」

「とんでもない。そんな事したら、たまっ

お 艶 奮 戦

女 房 相 撲

文 と 絵

椿

寿 郎

たもんじゃないよ。まず一突きで、コテンコテンにやられてしまうだろうな」

「実は、僕の家内も背丈は五尺二寸ぐらいだが、体重は十七貫もあるんだがね」

松田君は眼を見張った。

「驚いたね、僕の家内と、大体同じじゃないか」

「君は、ずいぶん恐妻家らしいね」

「そう言われても仕方ないね。一度こらしめてやりたいんだが、なにせ口八丁の上に腕力が強いからどうにもならんだ。残念だね」

「それは君の方が一寸分が悪いね……。僕は

この頃、時々家内と相撲をとってゐるんだが、君も奥さんと相撲をとって負けければ、そんなに威張られんだろうになー」

「そりゃ、無理だよ、とてもあいつには勝てそうもないさ。しかし本当に君の奥さんは相撲なんかとるのかい」

「僕の家は秋田の生まれで娘時代、百姓をやっていたし、あの地方には戦前は女相撲があったそうなんだ。だから子供の頃、見物していたらしく、何となく要領を知っていて、僕も油断すると直ぐ敗けるよ」

松田君は感心したように呟いた。

「そう、君の奥さんはそんなに強いのか」

松田君は思いついたように言った。

「僕は一度、家内をペシャンコにしてやりたいのだよ。僕はいつもやられ放しでね。君の奥さんに思い切り投げとばして貰えたら、胸がスーッとするじゃないかと思うがねえ」

「酔ったのかね。まあそんな事は考えない方がよいよ。とにかく一息寝たまえ。僕は一廻りして来るよ」

と、私は懐中電灯を手にして立ち上った。

(11)

翌朝帰宅して、いつものように二時間ばかり

ゴロ寝すると、爽やかな気分になり、相撲がとりたくなった。

「おい、お艶。又始めようぜ」

と、洗濯物を干していた妻に言う。

「一寸、待っててね」

可愛いヤツである。私の言葉を待っていたように、大急ぎで仕事を片づけ始める。

お艶は真赤な禪とサガリ、私は黒の禪とサガリで、二人とも一ぱし関取取りである。取組前の諸作法もテレビで覚え、ひいき力士の仕切りの癖などもいろいろ知って、真似をしてみる。

この日の二人の取組は、十番取って約三十分で終わり、浴室で汗を流してサッパリした気分になり、昼食を済ました。

松田君が「一寸、頼みがあるんだが……」
 といってやって来たのは、それから一時間ばかり後であった。

「何かね、頼みと言うのは」

「実はその、一寸無理な頼みなんだがどうにも己むを得ず、こうなってしまうんだよ」

と、前置きして松田君は、いい出した。

「恥かしいことだが今朝、会社から帰るなり一喧嘩やっちゃってねえ。女房は僕に組みついて、ねじ倒すと押えつけ、このへボ野郎、

口惜しかったら妾に勝ってみろ」とほざくんだ。いつものことなんだが腹がたってねえ、つい「お前なぞコテンパンにやつてくれる女の人を俺は知っているんだぞ」といっちゃまったんだよ……」

と松田君は情けない顔付きになってペコペコ頭を下げた。

「誠に君には済まない。どうか君の奥さんに一肌脱いで戴きたい」

売り言葉に買い言葉で、松田君の奥さんが連れて来いといったのは当然のことだろうしその後のことは容易に想像がついた。

私はお艶の顔を見た。お艶は上気した顔で聞いて居た。先程私と相撲をとり十番の内六番勝っていたためかも知れないが、私はこの上気したお艶の顔に、何とも言えぬ美しさを見た。そしてこのお艶が自分と同じ位の体格をした大年増と揉み合って相撲を取る姿を想像して身内がブルブルと慄えた。

「お艶、どうだろう。松田さんの頼みを聞いて、相撲をとって呉れんか」

お艶は返事もせず、うつ向いていた。

「奥さん、お願いします。家のヤツは相撲も何も知ってはいませんが、やるというんですから是非ひとつやつつけてやって下さい。頼

みます」

松田君は真剣な表情であった。泣かんばかりの頼み方は余程口惜しいとみえる。

私達は遂に松田君の熱心さに動かされ、赤い褌とサガリを風呂敷に包んで松田君の家へ行くことになった。

(三)

「おい、お客さんだよ」

私は初めて松田君の家へ来たので、細君とは初対面である。

玄関の襖を開けて現われた松田君の細君を見て私は驚いた。

背丈は五尺三寸、体重十七貫もあるという松田君の言葉通りの大女であった。

「会社の春木さんと奥さんだよ」

「いらっしやいませ」

松田君の細君は、それでも一応の挨拶をした。

「どうも突然お邪魔いたしました」

「上って下さい、どうぞどうぞ」



松田君に、せき立てられて私達は部屋へ入った。細君がお茶を持って来た時、松田君が改めて私達を引き合わせる。

私はそこに坐った松田君の細君を眺めた。

髪の毛がやや赤茶けているが、小綺麗にセットしている。眉毛は濃く、眼は所謂どんぐり目というヤツ。鼻は小鼻の開いた型で、唇は上下共厚くて幾分しまりが無く、顎が張っている

ので四角い顔である。身体付きは眉がいかつく、和服の胸が大きくふくらんでいる。大きな腰が畳にどっかと坐っている。どんぐり眼がジロリと私の傍に坐っているお艶を見た。

とたんに「あんた一寸」と松田君の腕をとって勝子が立ち、次の室へ入ってピシヤリと襖を閉めた。

「あんた！ あれが妾をコテンコテンにやつける女かい！」

細君の上ずった声が聞こえてきた。

「そうだよ、俺に同情してきて呉れたんだ」「なにが同情さ。あんたもあんたなら、あの女もあの女さ……妾は負けないよ。相撲だってなんだって負けるものか！」

なるほど気が強いらしい。私は家内と顔を見合わせた。

襖が開いた。そして金壺眼を見開いた細君が松田君を押しつけて出て来ると

「おい、その年増女！ 来るなら来い！」と叫んだ。私はビックリして

「待って下さい奥さん。そう喧嘩腰に言われでは困ります。松田君に頼まれて相撲をとりに来ただけなんだから」

「どっちにしたって勝負をつけるんでしょ！ 相撲だって喧嘩だってかまわん、同じようなものよ。サアかかっておいでよ！」

今にも、お艶に飛びかかりそうな勢いである。

「松田君、奥さんによく言ってくれ」

「勝子、落ち着け。相撲なんだよ。着物を脱いで、堂々と相撲をとるのだ」

「裸だってなんだって、なるわ」

というなり、勝子はさっさと帯を解いて着物を脱ぐと丸めて部屋の隅へほうり投げた。

松田君が解いた帯で勝子に褌を締めてやり始めたので、私もお艶をせきたてて、持ってきた赤褌を固く締め込んでやった。

続いて松田君と二人で、襦を全部外し、二部屋通しにして、掛け蒲団を二枚真中に敷いた。

そして私はお艶を、松田君は勝子を、それぞれ蒲団土俵の両側に蹲らせ、私達は向かい合って土俵の外に坐った。

「三番勝負だ」と松田君。

「お艶、負けるな！」と私。

チラリと流し眼で私を見たお艶は、型通りチリを切った。勝子は、そのお艶の仕草をにくくしげに見ていたが、お艶が立ち上って四股を踏むと、負けじと自分も立ち上ってドシンドシンと始めた。

そしてお互いに睨み合いながら蒲団の中央へ進み、お艶は型通りに、両手について仕切った。

勝子は両足を開いて手も降ろさずに構える

やいなや「こい！」と叫んで、お艶に突っかった。「ヨオッ」と叫んでお艶も立ったが、先手を取った勝子は、いきなりお艶の髪を掴むと引きずり倒そうとした。

この思わぬ急襲に、お艶は危くツンのめって腹這いになるところを、勝子の腰にしがみつこうようにして褌を掴み、辛うじて踏みこらえたが、勝子は右手で掴んだ髪を放さず下へ押しつけ、左手を伸ばしてお艶の背中越しに立褌を掴んで吊り上げたのでたまらない。お艶の足は宙に浮かんで、投げ出されてしまった。

「ざま見ろ！」

息をはずませながら勝子は、にくくしげにお艶を見下ろした。

さんばら髪になったお艶は、下唇をかんで口惜しそうに勝子を見上げていたが、すっと起き上って私の方へ来た。私も余りに乱暴な勝子の取り口に啞然とした。

「お艶、大丈夫か」

「すみません。一寸油断したからね。今度は勝つわ」

「ヘン、勝てるものか」

勝子が、つつ立ったまま言う。

再び、両女は土俵の中央で向かい合ったが

お艶はもう両手を着いて仕切ろうとはせず、中腰でお互いが相手の隙をねらったの睨み合いとなった。

さんばら髪のお艶は顎を引いて蛇のような切れ長の眼を吊り上げ、勝子は、どんぐり眼をギラギラさせて互いに、じりっじりっ詰めて寄った。

突然「ヤアッ」という声と共に、お艶の右手が勝子の左乳房を突き上げた。「アッ」と不意を突かれてたじろぐ勝子に、さっと右を差して組みつくとお艶が右下手投げを打つ。

勝子はタタラを踏んで耐え、左腕でお艶の右腕を抱えこんで絞りながら右手でお艶の左乳房をいきなり捻り上げた。お艶はひるんだ。ここぞと勝子は尚も続けて捻り上げる。

「キイ……」とお艶は歯を喰いしばって、左手で勝子の乳房攻撃の手を外そうとするが、勝子も必死で放さない。ついにお艶も左手で勝子の右乳房を掴んだ。

二人はお互いに相手の乳房を攻め合う形となったが、やがて「ウ……」と勝子が痛みに耐え兼ねるようなウメキを上げた。そして乳房を掴んでいた手を外すとお艶にしがみつきにいった。その瞬間、お艶が下手投げを打った。これが見事にきまって、ドスンと勝子は

投げ倒された。

「畜生！ 口惜しいッ！」

勝子は乳房を両手で押さえて蹲み込んだ。

「お艶、やったぞ」

私は思わず歓声を挙げた。松田君はこの激しい年増女の荒相撲に度肝を抜かれたか、ものも言えないようだった。

にっこりしたお艶は私の前へきて蹲み乍ら言った。

「勝ったでしょう」

「よくやったぞ」

私は手拭でお艶の汗を拭いてやった。

勝子も漸く乳房の痛みが引いたらしく、立ち上るとヒステリックに叫んだ。

「今度が勝負よ！ 負けるものかい！」

全く気の強い女である。

「さあ、お艶、やれ。負けるな」

この一番こそが本当の勝負、絶対に負けられんとはかりに、両女は土俵の中央で中腰のまま睨み合い、両腕をすばめて乳房をかばいながら、じりじりと互いに詰め寄った。

「ヤア！」「ヨオ！」

気合と共に両者は互いにむしゃぶりつき、揉み合ったかと思うとガッキと胸を合わせ、右四つに組んで上手下手に禪を引き合った。

互いに乳房攻撃を用心したらしい。

お艶が腹櫓に乗せて吊り上げようとするのを、勝子は大きなお尻を振り、ズリ下って防ぐ。なかなかやる。

今度は勝子が下腹を突き出してお艶を吊りにかかった。お艶はすかさず右足を勝子の左足へ外がけにして倒そうとした。勝子は危なく後方へ倒れそうになり、再び四つに組んで腰を引いた。力まかせの吊り合いで両方とも前禪は太鼓腹の上にズリ上ってしまっていた。

互いに相手の肩を顎で押えている顔には乱れた髪の毛が汗に濡れて粘りつき、からみ合った二匹の蛇のように、口を大きく開けて眼は吊り上っている。意地の張り合いのようなこの一番、このままでは精根尽きて兩人とも倒れるかと思われた時、兩人の腹が突き合わされ、互いに腹櫓に乗せようと争い始めたと思うと、さすが相撲経験の違いか、お艶がグイッと腹櫓に勝子を吊り上げた。



吊り上げられた勝子は、両足をばたつかして暴れたが、二人は重なり合って土俵の外へ倒れ込んだ。

しばらくは倒れたままで二人はひっくり返っていたが、ややあってゆっくりとお艶が立ち上りニッコリと笑った。

勝子は眼をつむって口を開け、仰向けのまま動こうともしない。すると、やはり心配なのか松田君が勝子の傍に膝をついて、いかにも重そうに抱き起こした。それまで耐えていたとみえて勝子がワアッと泣き出して抱きつく。それを「よしよし、お前もよくやったよ」と松田君が優しく慰めている。やはり夫婦である。

私はお艶の汗を拭いてやると手早く着物を着せ、乱れた髪をなぜつけて「松田君、あとは頼むよ」と云い置いて早々に玄関を出た。

外は静かな夕方であった。「あれで松田君達も仲良くなるだろう。お前、ほんとによくやってくれたよ」私がお艶の肩を叩くと、お艶は嬉しそうに肩をすり寄せてきた。(終)

夏次郎は美津子の縄尻を引きながら、得意そうに云い、

「お化粧も終わって、こちらは花嫁の支度はすっかり整ってるのよ。お姉さんの方も、そろそろ仕度にかかったらどうなのよ」

夏次郎は清次達の振舞い酒に酔ったらしく舌をもつらせて春太郎に云うのだ。

京子のすぐ隣に立っている鉄柱へ美津子の背を押しつけ、キリキリ縛りつけると、夏次郎と春太郎は京子に近づくのだ。

「最近の京子ったら、随分と泣き虫になっちまったじゃない。さ、お化粧するから、ちゃんと顔を上へあげて頂戴」

大粒の涙をばたばたとし始めた京子の顔を上へあげさせ、ハンケチで涙を拭いた春太郎は、馴れた手つきで京子に化粧をほどこすのだ。

口紅を引き、耳たぶから首筋まで香水をふりかけた春太郎は、更に腰をかがめ、麻縄にきびしく上下を締め上げられている形のいい乳房から臍、そして、ぴったり閉じ合わせているむっちり肉のついた太腿、また、その周囲に香水を面白そうにふりかけ、こすりこむのだ。

京子は、憂いに沈むもの哀しげな横顔を見

せ、薄く眼を閉ざして、そうした春太郎の行為を甘受している。

煙のように片頬へ垂れかかった京子の黒髪を夏次郎は櫛を使ってときながら、

「まあ、すっかりきれいになったじゃない、京子。これなら清次さん達、大喜びだわ」

春太郎の手で隈なく化粧された京子の顔は妖しいばかりの美しい輝きを湛えている。

「美津子、姉さんを恨まないでっ」

京子は突然、わなわなと頬を慄わせてそう云うと、肩を落とし、激しく嗚咽し始めたのだった。

「ちよいと、せつかくの化粧が台なしになるじゃない。もう泣くのはおよしっ」

春太郎はヒステリックな声を上げ、京子の肩を両手でつかんで揺さぶった。

「お姉さん、もう泣かないで。美津子は、美津子は、もう覚悟しています」

そう云う美津子もこらえきれず、髪につけたりポンをふるわせて慟哭するのである。

「このまま、殿方の前へ連れて行くのは何だか不様だわね。だから、こういうものを用意しておいたわ」

春太郎はテーブルの下から長い布を二本と取り出した。

「京子は水色の褌、美津子はピンク色の褌、美人姉妹がこういう色っぽい褌姿で、寝室へ入りゃあ男達はきっと大はしゃぎするわよ」

さ、私達が締めてあげるわ、と二人のシスターボーイは手に手に布を持って哀れな姉妹の傍へ再び近づいて行く。

京子も美津子も涙に潤んだ瞳を気弱にしばらくたき、やがてその眼をゆっくり閉じ合わせていく。

「さ、京子。もう少し肢を開かなきゃうまく締められないじゃないの」

「美津子もよ。そう何時までも恥ずかしがってちゃ駄目。このままにされておくよりずっといいじゃないの」

春太郎と夏次郎は、大笑いしながら、姉妹に褌を締めつけようとするのだ。

やがて——京子も美津子もいさぎよく肢を割って布をくぐらせる。

春太郎も夏次郎も渾身の力を振り絞るようにしてキリキリ布をねじ上げ、京子と美津子にそれぞれの褌を締めさせて、ほっと息をついた。

「フフフ、二人ともよく褌が似合うわ。でも奇妙な花嫁ね」

二人のシスターボーイは顔を見合わせて吹

き出した。

水色の褌とピンク色の褌をかたく腰に締めつけた京子と美津子は、頬を熱く上気させながら唇をかたく噛みしめている。

その時、ドアが開いて、大酔した清次と五郎、それに三郎の三人が、なだれこむように入ってきた。

「そろそろパーティを開こうと思うんだ。寢室の方の支度も出来たからな」

そして、鉄柱を背にして立ち縛りにされている京子と美津子の姿を眼にした清次は、大声をあげて笑いこける。

「おい、皆んな見ろ。今夜の花嫁は褌スタイルだぜ」

五郎も三郎も手をたたいて笑いながら

「京子姐さん。水色の褌がよく似合うぜ。締め心地はどうだね」

男達は鉄柱を背に縛りつけられている二人の美女へ貪るような視線を注ぎながら、近寄って行く。

「美津子のピンク褌もなかなか、いかすじゃねえか」

三人の男達はしばらく腰をかがめて京子と美津子の腰にぴったり喰いこむばかりの六尺色褌を面白そうに眺めてから、

「じゃ、行こうか」

と、二人の縄尻を鉄柱から解き始める。

「もうパーティを始めるのですか」

春太郎が聞くと、「俺達のコンディションも今が丁度いい頃だからな」と、清次は笑い五郎と三郎に縄尻をとられている京子と美津子の顎を指でつついて

「今夜は姉妹仲よくさめざめと明け方まで泣かせてやるぜ。腰を抜かさねえよう気をつける事だな」

さ、歩きな、と五郎と三郎に背中を押されて、京子と美津子はよろよろと緊縛された裸身を泳がせていく。

廊下へ出ると、京子と美津子はぴったり肩を寄せ合うようにしながら、しいんと凍りついた表情のまま、ゆっくりと歩き始めるのだった。

廊下の向こうから森田組のチンピラである竹田と堀川が顔を出し、ニヤリと顔をくずして、

「兄貴、これからお楽しみってわけですか」と近づいてくる。

「何ならお前達も仲間に入んなよ。数が多いほど面白いや」

清次は片頬を歪めて笑った。

「それじゃ、お言葉に甘えさせて頂きましょうか。俺達は、その美津子に煮湯を飲まされた経験がありましてね。何とかして一度、思いを遂げたいものだ、機会を狙ってたんですが――」

と、チンピラ二人は美津子をものにしようとして果たせなかった時の事を語り出す。

「それじゃ、いい機会だ。俺達について来なよ。お裾分けしてやろうじゃねえか」

如何にも愚連隊の兄貴分らしい云い方をした清次は、顎をしゃくするようにして先に立って歩き出すのだった。

清次の部屋は酒やビールや喰べ散らかした食物の皿などで乱雑を極めていたが、竹田と堀川はそれ等を足で押しやるようにして隅へ片づけ、押入れからいくつかの夜具を引っ張り出した。

五郎と三郎に縄尻を取られて、部屋の隅に立つ京子と美津子の世にも哀しげな表情を、清次は心地良げに眺めながら

「男は五人だ。少し骨は折れるだろうが、姉妹でうまくさばく事だな」

三つばかりの夜具が乱雑に敷かれると、「それじゃ、姉妹仲よくお寝んねして頂こうか」

と清次は、硬化した表情になる京子を見てニヤリと笑った。

「二年前、お前に受けた恨みを利子をつけて返してやるつもりだよ。五人がかりで骨身にこたえる程、可愛がってやるからな」

さあ、二人とも禪をとってもらいましょうか、と五郎と三郎が身をかがめる。

この野卑な男五人にこれから死ぬより辛い羞かしめを受けるのだ、と思うと京子は血管から血が噴き出すばかりの口惜しさが、こみ上って来たのだ。

自分だけならともかく、何の罪もない妹まで巻添えにする、この卑劣な悪魔達——恨みとも呪いともつかぬ火のような憎悪感が喉元に熱っぽくこみ上り、死んだようになっていた京子の神経が急に昂ぶり始めたのである。

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しませんでした。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円

楽しそうに口笛を吹きながら、禪の結び目を解こうと腰に手を回して来た五郎に、京子は思わず、どんと体当たりを喰わしてしまったのだ。

あつ、と五郎は横転する。

つづいて京子は、美津子の禪の結び目を解こうとしていた三郎を足で蹴上げた。

悲鳴を上げて三郎がつんのめると、京子は美津子を背にかばって、鋭い視線を清次に向けて、ジワジワ後退していく。

「くそ、手前、まだ俺に刃向かう気なのか」

清次は眼をつり上げてポケットから飛び出しナイフを出した。

これから、夜具の上へ姉妹揃えて大の字に縛りつけ、ゆっくり料理にかかるつもりであった清次は、急に冷水を頭からぶっかけられたような衝撃を受け、狼狽したのである。

竹田も堀川も、あわてて京子に対し身構えるのだったが、禪一本の哀れな姿で、しかも後手に縛り上げられたままの京子を見ると、何もあわてる事はないと笑い出す。

「今更、じたばたしたって仕様がねえじゃねえか。ヒステリーを起こすのはよしな」

ニヤニヤして近づいて来る二人のチンピラに、京子はキツとした視線を向ける。もう破

れかぶれといったような血走った気分です。「卑、卑劣にも程があるわっ。妹にまでいたい何の恨みがあるというのっ」

はじき出すようにそう云った京子は、次に清次の方へ鋭くて冷ややかな視線を向ける。

「あなたも男なら、以前、私に受けた恨みをどうして男らしく戦って返そうとしないの。

自由を奪った女をなぶりものにするしか、あなたは能がないってわけなの」

興奮して今にも泣き出しそうになるのを京子は必死になってこらえながら、そう云うのであった。

「何を吐かしやがる。俺達の前で、あれだけ恥をさらしながら、よくもそんな口がきけたもんだ」

清次はナイフを構えながら、じわじわ京子に近づきつつ毒づくのだ。

「そうよ。私は死ぬより辛い恥をあなた達の前でさらしたわ。私は、そして、二年前の詫びも入れた筈よ。そ、それなのに、どうして美津子まで——」

京子は、遂に大粒の涙を流しながら、声をつまらせるのだ。

「お姉さん、お姉さん」と、美津子は京子のうしろで、おろおろするばかりである。

「美津子、逃げるのよ。さ、早く」

京子は、気も顛倒している美津子をせき立てるようにして、開いているドアから廊下へ出た。

「くそ、そうは問屋が下ろさねえぞ」

京子に蹴り上げられた三郎も五郎も起き上がり、京子と美津子を追って廊下へ出た。

後手に縛られたままの京子と美津子は必死になって廊下を走り、縁先から庭へ飛び降りた。

「ねえ、お姉さん。捕まったら、いよいよ今度は私達、最後だよ」

美津子は恐怖に顔をひきつらせて京子に云うのだ。

「逃げても逃げなくても、もう私達、最後のよ。いい、美津子。塀の外へ向かって大声で助けを呼ぶのよ」

京子は、気がくじけそうになる美津子を励まして先へ走らせると、追って来た清次達の方に向かって体を向け、立ち止まった。

幾つかの懐中電灯の光波に京子の緊縛された白い裸身が、くっきりと浮かび上った。

「畜生。逃亡を計った奴隷は、どんな折檻を受けなきゃならねえか、お前はよく知ってる筈だったな」

竹田は棍棒を横に持ってジワジワと京子に迫るのだ。

「待ちな」

と清次が竹田を押しとどめる。

「この阿女、そんな姿のまま追手を喰い止める気でいやがる。よし、二年前の恨みを空手で返してやるぜ」

清次は下駄を脱ぎ捨てて、空手の構えを見せた。

五郎も三郎も、奇妙なうなり声を上げながら手を中段に上げ、京子の背後の方へ回る。

自由を奪われた裸の京子に対し、清次達は本気で打ってかかる気味なのだ。

京子は、必死な眼を三人の男に配りながら身体をゆっくり廻転させていく。

「両手が使えねえといっても、この女の足蹴りは油断がならねえぞ。気をつけろ」

清次は油断なく構えながら、五郎や三郎に声をかけた。

「なーに、あれだけの調教を受けりゃ、空手の技なんて、とっくの昔、忘れていきますよ。心配する事はねえと思えますがね」

竹田はそう云って笑ったが、「誰か、助けて下さいっ」という遠くで叫ぶ美津子の声を聞くと舌打ちし、

「くそ、美津子の奴」

と、あわてて声の方へ走り出す。

すると、京子は、草を蹴って走り、竹田の走る足を、足で払ったのだ。

もんどり打って転倒する竹田を見て五郎と三郎は、くそっ、と左右から京子に飛びかかった。

「あっ」

京子の右足は大きくはね上って五郎の脇腹を蹴上げたのだ。

つづいて京子の左足は、三郎の急所を蹴りつけ、そのまま、両手の自由を奪われている京子は身体を中心を失って芝生の上へ転がったが、すぐに立ち上る。

しかし、五郎も三郎も、身体を折り曲げたように芝生に俯伏したまま苦しげに呻きつづけるだけであった。

清次は慄然とした。

もう心身ともに爛れ切り、反撥の気力などとうに失せたと思っていた京子が死物狂いになって飛鳥のような空手の技を今、見せたのである。

「たしか、京子に仕返する気で空手の修業をしたと云ったわね。その結果がこれなの、清次さん」

京子は大きく息づきながら、妖しいばかりに美しく光る瞳で清次の方を見るのだ。

「今夜は五郎達は酔い過ぎていゝんだ。俺はそうはいかねえぞ」

清次は、普通ではかなわぬと見たのか、再びナイフを取り出した。

「ね、清次さん、聞いて。弱い女をいじめていたって男を売る事にはならないわ。田代のような悪人とは早く手を切って、ここにいる遠山家の奥様達を救って上げて頂戴。そうすれば私、そのナイフで殺されたってかまわないのよ。ね、清次さん」

「うるせえ。手前に説教される程、俺は毫（ちろ）くしちやいねえぞ」

清次は、カッとなってナイフを振りかざし京子に突進した。

「これほど云ってるのが、わからないの」

京子は清次の体当たりをさける。

やはり清次も酔って身の動きは鈍かった。

更に突きまわって来るのを京子はコマのように身体を廻してさけながら、急に身を沈めて、清次の脇腹に力一杯、肩先をぶつけたのである。

うっと苦しげに身を曲げた清次の腰を、京子の片肢は、したたか蹴り上げる。

地面に転倒した清次のナイフを持つ手を京子は踏みつけ、

「ね、清次さん。私の云う事を聞いて」

「くそ、誰が手前の云う事を聞くものか」

清次は、京子に打ちのめされた口惜しさにポタポタ涙を流しながら、駄々っ子のように足をばたつかせるのだった。

新しい感覚

鋭い心地良さとでも表現するものなのだろうか、伊沢は生まれて始めて味わった感覚の中で、気が遠くなる程の痺れを感じるのだ。

静子夫人も、伊沢が突然、挑んで来た不自然な行為に

「そ、そんなの、嫌。ねえ、嫌ですわ」

と、最初のうちは甲高い声で全身をくねらせたりしたが、やがて、熱い悦びの戦慄に双臀をふるわせ、その異様な陶醉境に自分を没入させていくのだった。

充分、夫人には練習をつませてある、と鬼源からは聞いていたが、それとは別の場所ですんなり行為が演じられるなど伊沢は信じられない思いになる。

「は、はずかしいわ。ああ、死ぬ程、はずか

しいのよ」

静子夫人は、上ずった涕泣を洩らしながら全身をのたうたせた。

これも一つの快樂の源泉なのか、と伊沢もその甘美な桃源境に溶けるように浸りつづける。そして、背骨まで貫くような痺れに遂に自分を失ってしまった。

しばらくそのままぐったりになっていた伊沢は、やがて、ゆっくりと身を起し、その跡に好奇の眼を向ける。

静子夫人は、象牙色の美しい頬におくれ毛を垂らして、切なげに息をはずませ、うっとり眼を閉ざしたまま伊沢の食るような視線を受けているのだった。それはいじらしいばかりに可憐な感じさえするのだった。

「よく御覧になって。静子って、こんな変わった事の出来る女になったのよ」

夫人は薄く眼を閉ざしながら、小さく口を開いて云った。

「こんな時の感覚ってのは、どうなの、奥さん。随分と燃え上ったようだけど、そんなに素ばらしいのかい」

伊沢がからかうように云うと、夫人は赤らんだ顔を横へ伏せ、すねるように「存じませんわ」と云うのである。

最初、春太郎や夏次郎に強引に教えこまれた時の恐怖と、切り裂かれるような痛覚は今でも夫人ははっきり覚えていた。しかし、その時の何とも云えぬ羞恥感が、被虐性の異様な快感を呼び覚まし、むしろ、こうして責められる事によって肉の痺れに早く到達出来るような気がするのだ。

伊沢は優しく、

「美貌と教養に恵まれた遠山家の令夫人が、こんな芸当を覚えられとはね」

と、笑い、高々と吊り上げられている夫人の優美な二肢に頬ずりして

「ね、今まで奥さんは色々な調教を受けたろうけど、自分で一番素ばらしいと感じたのは何だい」

「そんなものはありませんわ。みんな苦痛でしたもの」

「嘘ついちゃいけないよ。以前と違って奥さんは肉体が被虐の快感っていうものを感じずるようになってきている。ね、参考のため聞いておきたいんだ。今のような方法がいいのかい」

伊沢は夫人の尻たぶをつねったりして告白させようとするのだ。

「云わなきゃ、千代さんに奥さんの悪口を云

って、いじめさせるよ」

「嫌、嫌、そんなの」

夫人は、甘えかかるように首を振って

「静子、もう伊沢さんには、完全に負けましたわ」

と艶めかしい色を浮かべた瞳を伊沢に注ぐと

「きつと誰にもおっしゃらないと約束して下さいますか？」

と、羞恥の混ざった表情でひっそり云うのだった。

「ああ、誰にも云わないよ。男ってのはね、好きな女の一番悦ぶ方法をどうしても知りたいのなんだよ。さ、遠慮せず云ってごらんよ。奥さん」

「静子がそんな事を悦ぶからと云って、それを実行なさったりしちゃ嫌。ね、お約束して下さいますわね」

「ああ、約束するとも」

伊沢は、幾度もうなずくのだ。

静子夫人は、そっと伊沢の耳に口を寄せ、小さくささやくと、

「ね、おわかりになったでしょ」

と、媚を含んだ美しい瞳を、ねっとり開いて、高貴な感じの鼻先で伊沢の耳元をくすぐ

るようにし、次に花のような唇を伊沢の方へ向け、静かに眼を閉じて接吻を求めるのだった。

「わかったよ、奥さん」

「きつとお願い、誰にもおっしゃっちゃ嫌ですわよ、伊沢さん」

伊沢は夫人の求めに応じて、夫人の唇に唇を合わせた。

甘くて熱い接吻を交し、互いの舌を充分に吸い合せて唇を離した伊沢は、

「しかし、その方法を田代社長に云えば悦んで、早速次のショーに採用するだろうな」

「嫌。ね、お約束を破っちゃ嫌よ。伊沢さん」

「それじゃ口止め料に、そろそろ奥さんの濃厚なフレンチキッスをお願いしましょうか」
伊沢は夫人の吊り上げている肢の縄を解き後手に縛った縄も解いてやる。

夫人は、しばらく両手を腕の上で交錯させるようにして、その場に身を縮めて休んでいたが、伊沢が夜具の上へ仰臥すると、ゆっくりと身を寄せつけていき、伊沢の胸毛に柔らかく頬ずりしながら、顔を移向させていく。
「上手にすっきりした思いにさせてくれないと、さっきの事、皆んなに吹聴するからね」

作六鬼

蛇と花

決定版

昭和37年8月号に端を発してより絶筆を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の絶筆集刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る！

● 番号「花決定版」● 定価一、〇〇〇円（送50円）

第一章 一千万円の身代金
第二章 地獄に落ちた女
第三章 華やかな夜の失物
第四章 密室の秘密
第五章 落し子
第六章 美人の死
第七章 色慾の罠
第八章 淫婦の執念
第九章 恐怖の地獄
第十章 悪魔の誘惑
第十一章 狼狽の果て
第十二章 援手の来り
第十三章 探偵の活躍
第十四章 美人の死
第十五章 恐怖の地獄
第十六章 悪魔の誘惑
第十七章 狼狽の果て
第十八章 援手の来り
第十九章 探偵の活躍
第二十章 美人の死
第二十一章 恐怖の地獄
第二十二章 悪魔の誘惑
第二十三章 狼狽の果て
第二十四章 援手の来り
第二十五章 探偵の活躍
第二十六章 美人の死
第二十七章 恐怖の地獄
第二十八章 悪魔の誘惑
第二十九章 狼狽の果て
第三十章 援手の来り
第三十一章 探偵の活躍
第三十二章 美人の死
第三十三章 恐怖の地獄
第三十四章 悪魔の誘惑
第三十五章 狼狽の果て
第三十六章 援手の来り
第三十七章 探偵の活躍
第三十八章 美人の死
第三十九章 恐怖の地獄
第四十章 悪魔の誘惑
第四十一章 狼狽の果て
第四十二章 援手の来り
第四十三章 探偵の活躍
第四十四章 美人の死
第四十五章 恐怖の地獄
第四十六章 悪魔の誘惑
第四十七章 狼狽の果て
第四十八章 援手の来り
第四十九章 探偵の活躍
第五十章 美人の死
第五十一章 恐怖の地獄
第五十二章 悪魔の誘惑
第五十三章 狼狽の果て
第五十四章 援手の来り
第五十五章 探偵の活躍
第五十六章 美人の死
第五十七章 恐怖の地獄
第五十八章 悪魔の誘惑
第五十九章 狼狽の果て
第六十章 援手の来り
第六十一章 探偵の活躍
第六十二章 美人の死
第六十三章 恐怖の地獄
第六十四章 悪魔の誘惑
第六十五章 狼狽の果て
第六十六章 援手の来り
第六十七章 探偵の活躍
第六十八章 美人の死
第六十九章 恐怖の地獄
第七十章 悪魔の誘惑
第七十一章 狼狽の果て
第七十二章 援手の来り
第七十三章 探偵の活躍
第七十四章 美人の死
第七十五章 恐怖の地獄
第七十六章 悪魔の誘惑
第七十七章 狼狽の果て
第七十八章 援手の来り
第七十九章 探偵の活躍
第八十章 美人の死
第八十一章 恐怖の地獄
第八十二章 悪魔の誘惑
第八十三章 狼狽の果て
第八十四章 援手の来り
第八十五章 探偵の活躍
第八十六章 美人の死
第八十七章 恐怖の地獄
第八十八章 悪魔の誘惑
第八十九章 狼狽の果て
第九十章 援手の来り
第九十一章 探偵の活躍
第九十二章 美人の死
第九十三章 恐怖の地獄
第九十四章 悪魔の誘惑
第九十五章 狼狽の果て
第九十六章 援手の来り
第九十七章 探偵の活躍
第九十八章 美人の死
第九十九章 恐怖の地獄
第一百章 悪魔の誘惑

第二十二章 身代金奪取の失敗
第二十三章 運命の逆転
第二十四章 奇妙な三々九度
第二十五章 悪魔と悪女の悪戯
第二十六章 悪魔の地獄図
第二十七章 逃走の恐怖と失敗の結末
第二十八章 悪魔の残虐な所業
第二十九章 淫花無残の修羅場
第三十章 淫らな美女の国教
第三十一章 汚水にまみれた宝石
第三十二章 華々しき美女の屈辱
第三十三章 対峙する美女と美女
第三十四章 あくどい陥穽
第三十五章 清純な令嬢の屈辱
第三十六章 人身御供の令夫人
第三十七章 深夜の美女とズベ公
第三十八章 小夜子への執拗な調教
第三十九章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 淫しいスターへの調教
第四十六章 低級男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 悪魔と悪女の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 淫靡な時代劇シヨ
第五十二章 珍芸を調教する令夫人
第五十三章 淫靡な時代劇シヨ
第五十四章 淫靡な二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め
第五十六章 悪魔の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪魔の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪魔一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の涕泣
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続け
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい餌食の到来と静子の狂態
第六十八章 あくどい汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに調教開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱気を帯びたマソの脱走
第七十二章 女盛りの妖艶な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号
〒558 晩出版株式会社宛

「もっと、情熱的に出来ないのか」
伊沢は、全身、痺れたような思いになって
いるのだが、歯を喰いしばったような顔つき
になって叱咤するのだ。
夫人は、ふと顔を起こし、艶々した黒髪を
かきわけるようにし、も一度、顔を斜めにし
て押しつけていく。
伊沢は我れを忘れて陶醉しているのだ。
「だって、こんな事、静子、始めてするん
で
すもの」
情感を深々と湛えた、うっとりした表情で
夫人は、熱い吐息を吐きかけつつ、気品のあ
る鼻先で、くすぐったりする。
「如何が。少しはお気に召しまして」
熱っぽい声音で、そうささやきかけるよう
に云った夫人は、大胆に舌を見せて熱い接吻
を注ぎかけるのだ。

(未完)

伊沢は、そう云って笑うのだ。

「ひどい方」

夫人は、甘えかかるように伊沢に幾度も接

吻しながら、その白蛾のように白くて華奢な

指先を這わせていくのだ。

伊沢は、陶然とした思いになって、夫人の

白魚のような指の感触を楽しんでいる。

「僕がさっき接吻したように、奥様も、お返

しが欲しいな」

伊沢は、ふんばるような不自然な恰好にな

った。

静子夫人は、こっくりと頷いてみせる。

羞恥とか嫌悪、それに不潔感といった感覚

は、次第に男の妖気に酔い始めた夫人の脳裏

から消え失せていく。

「僕も奥さんの体を堪能する程、観賞させて

もらったんだ。奥さんも遠慮せず、じっくり

と観賞したまえ」

伊沢は楽しそうに云った。

「こうすればいいの」

夫人は舌をのぞかせて、ゆっくりと近寄せ

る。

旅の収穫



寺の灸

山本一彦

昨年、山陰へ旅行した際、ある寺で泊めてもらった。小さなお寺で、住職は尼さんだと聞いていたが、応待や案内をしてくれたのは百姓のような、寺男のお爺さんだった。

夕暮近くの静かな雰囲気の中で、八畳ぐらの部屋にポツンと一人でいると少しばかり淋しいような気がするぐらいだった。

と、私を案内してくれた爺さんの「ここでお待ちを……」という声と共に、隣の部屋に人の入った気配がし、何かぼそぼそと囁いてるのがわかった。不明瞭だが明らかに女の声だ。時間をもて余していた私は、もちろん襖のすき間を利用してもらった。

頭をあっちへ向けたりこっちへ倒したりして、見辛いのを工夫して覗き、ようやく、その声の主をかいま見ることが出来た。中年の婦人と二十才前後の女性である。どうも母娘のようである。

「お待ちせしました」

という、少し低音気味の女の声私の視界の外でして、母娘の坐り直す様子が見えた。尼さん住職のお出ましに違いない。

「どこかお悪いそうで……」

その尼さんの声から、私は五十前後のオバサンを連想した。

「はあ。これが冷え症で困っております。お医者さんのお薬も飲んではいるのですが、あまり効果もみえませんでした……」

「それはそれは。お若いのにお気の毒な」

さすがに尼さんは落ちついた物のいい方である。私の頭はさかんに動いたが、どうしても尼さんの姿はみえなかった。

「うちのはよく効きますよ」

「そう伺って参りました。どうかよろしくお願いいたします」

僅かな視界の中で、母娘が揃っておじぎするのが見えた。

「では、そこに寝てください。うつぶせになっていて、けっこう」

私の視界から娘が消えた。母親の介添えするらしい背中だけが見える。私の頭は無意識に移動したらしいが徒労であった。仕方なく眼の代りに耳をすき間に押し当てた。

「腰だけで済みますから、少し我慢なさいよ。熱いのは、ほんのひとときだから……」

私の心臓が、とたんに騒ぎ始めた。そうではないか、という予感があったが、熱いのは……という一言で「灸」であることの確信がもてたからだ。カッと上気して、思わず襖に伸ばしかけた手を、あわててひっこめる。

「いい方は、お肌がキレイでよろしいなあ」
 尼さんの声を感じ入ったように、母親へだ
 ろうか話しかけている、私の脳裏にデイトし
 た誰かの聲がかき上った。ドキドキして
 またも手が襖にかかりかける。
 「灸跡がつくのがもったいないが、病には代
 えられませんものなあ」

私には、尼さんのしなびた掌が娘の肌を撫
 ぜまわしているように思えて仕方なかった。

「子供が出来ぬと、たいへんじゃ」

クスッと、娘のらしい含み笑いが湧いた。
 と、プーンと匂ってきたのが、あのモグサ
 独特の匂いであった。いよいよ火がつけられ
 たらしい。私はワクワクする気持を、どうす
 ることも出来なかった。私の腰と下腹に残っ
 ている灸跡が、急にうごめき出したような気
 がするのが不思議であった。

いつの間にか、再び耳と交替していた眼に
 ゆらゆらと宙を這う煙の筋がとびこんできて
 一層、私のワクワクを唆った。

「見たい。一目でもいいから……」

強力な魅力と斗うのは骨がおれる。私の手
 は襖にかかったままで、じりじりしていた。

「アッ！ アアア……」

突然、娘の声が挙がり始めた。

「辛抱するんですよ」

母親の声である。おさえつけたらしい。

「ウーン、あ、あつい！」

俄然、隣室内が騒々しくなってきた。

「動いちゃ駄目！ ガマンしなさい」

「もうチョットですからな、こらえなされ」

私は思いきって、ソロリと襖のすき間をひ
 ろげた。咄嗟に、今なら気付かれずに済むと
 思ったからである。

まだ少し見えにくかった。もう少し……。

見えた！

娘の、熱さに責められる美しいゆがみ顔が
 そり返って、ゆらいでいた。

スーツをまくりあげられ、スカートをずり
 下げた腰肌の一部が、輝くばかりの白さとい
 う印象で、私の目にとびこんできた。そして
 その上の二つのモグサが、とてつもなく大き
 く映る。さらに、乗りかからんばかりにして
 膝と両手でおさえつけている母親の姿。

「もうすぐですよ、もうすぐ」

娘には、この励ましが聞こえているだろう
 か、両肘をはって両掌をしっかりと組み合わ
 して握りしめ、顔を反らしたり、伏せたりし
 て「ウンウン」とうなっている。

やがてモグサが燃え尽きたと見え、娘の波

打つもだえが静まった。それは、正にガック
 リというにふさわしく、顔を落としこんだ両
 掌の辺りから、「フーッ」という溜息が、く
 ぐもって洩れていた。

傍らにチョコンという感じで、黒っぽい僧
 衣が坐っている。これが尼さんなのだろうが
 頭巾みたいなをかぶっているの、頭は剃
 っているのかどうかわからない。私の予想し
 たより若々しい顔付だったが、それがにこや
 かに笑って、事もなげに、娘の腰肌にもグサ
 を乗せかえ始めたのだった。

「弘法灸は少し熱いが、効きめが長続きしま
 すのでな。なに、もういっときの辛抱じゃ」
 その言葉が終らないうちに、新しい煙が立
 ち昇り始めた。私はかたずをのんで、娘の様
 子を注視していた。熱さがじりじりと私に感
 じられるような想いだった。

「ウーン」

可憐な呻きと共に、娘のもだえが再開され
 始めた。私の心臓も高鳴りを増し始める。

と、私にとっては正に突然で、とび上りそ
 うになる衝撃ともいえる声が背中を打った。

「えろう騒々しゅうてのう。見えるかな」

反射的にうろたえた私を、寺男の爺さんが
 ニヤニヤしながら見詰めていた。

「花と蛇」の「京子」に・・・



ついでに要望

中山 二郎

物云わぬは腹ふくるるわざなり、という格言がある。その意味で一月号の前原氏の所説は大いに我が意を得た好論であった。小生も氏同様に熱烈な「京子」ファンなのである。

「花と蛇」の各美女の中で、小生は京子を最も好む。仮に京子への関心度を10とすれば、静子は5、他の美女達は精々2乃至3といった程度であろうか。小生にとっては京子あってこそ「花と蛇」といえる。肝心の彼女が登場しない月号は興味半減に近い。ところがそのような不満な状態が既に一年以上も続いており、これでは前原氏ならずとも愚痴の一つもこぼしたくなるというものだ。

公平にみて、「花と蛇」のヒロインは静子夫人である。物語の構成から考えてこれは順

当な処だろう。小生も残念ながらその点は認めざるを得ない。だが、静子夫人に次ぐ準ヒロインの座は当然京子に与えられてしかるべきだと思うのだ。つまり京子の序列は小夜子や美津子などの上にこなければならぬ。我田引水だと非難されそうだが、京子準ヒロイン説の論拠を小生は以下に略述したい。

「花と蛇」に複数の美女を登場させる意義は何か。それは、単に同性愛プレイの必要からだけではなく、「美女」という観念を類型的に具象化することによって相互対照の妙を発揮させ、併せて物語の鑑賞に巾と深みを与える点にあるといえる。つまり、この作品中の各美女達は「美貌+肉体美」——「美女」という共通の属性の上に、相互に異なる各種の

「特性」を付与されているわけで、その特性——たとえば静子夫人なら「深窓の令夫人」が具有すべき気品、豊麗、矜持、妖艶、知性、教養、女盛り、等々のイメージの複合体——こそが「花と蛇」のテーマたる羞恥責の本質的侵犯対象なのである。換言すれば、単なる美貌や肉体美などというものはそれ自体ではほとんど意味がない。「静子の美貌」「京子の肉体美」となって、始めて何程かの実体的概念が生成されるのだ。

そこで、各美女達の基本的構成要素たる諸特性を順次比較検討してみると、ひとり京子のみが他の美女グループとは別個の顕著な特異性を持ち、ヒロイン静子夫人とはほぼ対等の地位を占めていることがわかる。何故ならこの二人以外の四名——桂子には「特性」がない。彼女は作者が意図的に登場させた人物ではないので、最初から美女のうちに入らない——は、相互に類似重複した特性を持つか、あるいは静子夫人の分身的存在であるかしていずれも京子ほどの独自性を認めにくいからである。

まず、新人の二人（珠江と美沙子）についてみると、珠江は静子夫人の臨時代理、美沙子は小夜子の身替り、といった感じは否めない。同じ出すなら、既出美女とは類型を異にする人物——たとえば以前だれかの提案にあったと記憶するが、映画女優とか外人女性な

ど——を選択してほしかったと思う。作者の団先生から叱られるかもしれないが、小生にはこの二人のダミイ的人物の存在理由が理解できないのである。

次に美津子と小夜子を取り上げてみよう。

二人とも静子夫人や京子の、代役的美女ではむろんないし、両者のイメージもちがう。要約すれば、美津子は「清纯可憐な乙女（女高生）」小夜子は「気品ある典雅な令嬢」と、いうことになるだろう。「美津子型」や「小夜子型」に、読者の好みが分かれる所以である。だが反面、この二人の特性にかなりの共通点が存在する事実も否定できない。そしてその共通特性の最も重要な部分は、いうまでもなく両者の「処女性」である。美津子と小夜子の処女性剥奪の場面を想起すれば、その時期、態様、相手方などに関してきわめて念入りな趣向が凝らされていたこともわかるがそれは又彼女達の処女性が同時に主要な侵犯対象であったことをも意味する。要するに、処女性の特質はその一回性にあるのだから、処女を失った「令嬢」や「乙女」に対しては羞恥責の動機が大巾に減殺されてしまうわけだ。「令嬢」と「乙女」の差異もそれと即応して殆ど消滅してしまうだろう。つまり、共通特性であった処女性が、実は同時に両者の識別を意味づける要因でもあったのである。では、「令嬢」からその価値ある処女性を

差引くと何が残るか。それは「令夫人」である。この引算は、令嬢が結婚して令夫人になることを考えれば、明らかに正しい。故に、小夜子は処女喪失によって静子夫人と等しくなったのである。元来この二人は処女性の有無以外にその特性の差異が認められない——どちらも、典型的な資産階級に属する婦女だ——ので、処女を奪われた小夜子を、静子夫人から区別しうる指標は、たかだか「性技習熟度」くらいしかない。美津子についても前段の理由から大体同じことがいえると思う。

こうみてくると、京子以外の美女達は、大なり小なり皆、静子夫人の侍女の人物に他ならない。静子夫人という太陽星を中心にして廻る惑星群にすぎないのだ。ところが京子だけは例外で、惑星ではなく恒星なのである。

そもそも「男まさりの鉄火娘」という特性は、静子夫人系美女のイメージとはまるでちがう。たとえば、京子には静子系に共通する「しとやかさ」がない。逆にいえば、「じゃじゃ馬馴らし」という成語——これは一つの独立した責めのパターンを構成する——の対象に該当するのは京子だけである。また、処女性を剥奪されてもその特性にそれほど影響を及ぼさない。鉄火「娘」が鉄火「姐御」に変るくらいのものである。更に、その「美貌と肉体美」についても他の美女達とはちがったイメージが浮かぶ。（たとえば、空手二段

という腕前から「たくましい」肉体美が連想される、など）等々……。

以上いささか手前味噌ながら、小生は「花と蛇」における京子の独自性と重要性を論証（？）したつもりである。加えて、次の二つの事実が京子準ヒロイン説を補強する。

第一は、京子の「活躍」を促す、社会的要請（？）である。最近ウーマンリブとか称して女権拡張の機運が再燃しつつあるが、ウーマンリブの高揚は直ちにその反作用・鎮静手段としての強力なるマンリブの反発を買わずにはいけない。それが社会的力学というものであり、我々が弱き男性族の切なくもひそかな願望に他ならない。そして「花と蛇」の世界でその夢を最高度になえてくれる人物が、いうまでもなく「男まさりの鉄火娘」京子なのである。因みに近頃の芸能界ではハレンチものと並んで女上位路線が花盛りの活況を呈している。TV番組だけでもこころ、二年の間に、「花笠お竜」の久保菜穂子、「紅つばめお雪」の宮園純子、「女三四郎」の江波杏子、それに「プレイガール」の沢たまき、桑原幸子以下の面々、といった滅法強い姐御連中が次々に出現し、弱者の男達をさんざん痛めつけてくれた。小生はこうしたフイ女どもを見てみると、M派諸氏とは別の理由で体中ムズムズしてくるのだ。一体男を何と心得ておるのか、それなら一つ「女性の本分」の

意味をミッチリ再教育してやりたい、という親心に駆られるのは小生だけではあるまい。この心情を論理的に云えば、女上位的風潮の増大は京子型女性の「需要」の増加に比例する、ということになるのである。

第二は京子ファンの読者の数である。本誌読者の（おそらく）大半を占める「花と蛇」ファンの中で、小生と同じ「京子型」愛好生は「静子型」に次いで多い比率を占めていると思う。というのも、誌上にあらわれた読者からの投稿がその事実を推認させるからである。しかるに現実の「花と蛇」ではどうか。

京子の出番が最も少なく、最も冷遇されているのである。折角京子専用にと採用したユニークな調教師、春太郎と夏次郎は静子夫人の係へ移籍されてしまったし、以前空手二段の京子にノサれてその仕返しにやって来た三人の不良少年達もずいぶん長い間おあずけを食わされたままである。これでは彼等もかわいそうだ。

小生は重ねて切望したい。団先生、どうか京子をもっと活躍させてやって下さい。毎号登場は無理でも、せめて隔月くらいにはお願いできないでしょうか。

○

不平不満はこの程度にして、前向きの意見や提案を少し書いてみよう。

まず京子に対する羞恥責の場面構成だが、

これは三人の不良達による復讐劇の進展という方式を当分続け、状況に応じて春太郎、夏次郎のプロ調教師の応援を求めることにしたい。責めの種類・内容についてはこれまでに一応基本形が出尽した感じなので、その再演が多くなるだろうがそれでもかまわない。

ここで大切なのは責めを受ける際の京子の態度や反応ぶりである。この点では今まで以上に鮮明な「京子色」を出してほしい。これは他の美女達についても云えることだが、羞恥責の対象は、前節に述べたように、各人の特性（そのイメージの複合体）であるから、責められる側の各種反応——抵抗、反発、憤怒、哀願、観念、諦念など。羞恥感情の表出はいうまでもない——にも各人の個性があらわれなければならない。京子でいえば、その「鉄火的」性格を逆用して責め場の興趣を盛り上げるのである。具体的に例示すると、たとえば責めに対して頑強に抵抗して容易に屈伏せず、反抗的言動を示して責め手の攻撃衝動を煽りたてたり、又責め自体は甘受しても居直りのなふてぶてしさを發揮して相手をたじろがせたり、更には開陳サービスや閨房技巧などの自発的な媚態演技を強要される場面では、羞恥心と憤辱感を隠蔽偽装する目的でわざとことさら大胆なふるまいを演じたり、等々、あくまで京子の男まさりな鉄火ムードを継続させるわけだ。じゃじゃ馬馴らしの本

当の面白さは、実はこうした処にあるのだと小生は思っている。だから、京子がすぐ心理的に参ってしまったたり、悦虐責で簡単に女体開眼などしてくれては困るのである。泣いたりのものも無論よろしくない。この点で従来の京子は幾分物足りない感じを与えた。長らくの休場で疲労も充分とれたことだろうし、再出場の節は心機一転、大いにじゃじゃ馬ぶりを發揮して手こずらせてほしいものだ。

さて、京子に加えたい責めの種類だが、再演種目としては、やはり浣腸に止めをさす。京子が妹美津子と同時に浣腸された場面は、物語の冒頭部分の白眉ともいえる素晴らしい見せ場だったが、それ以降は一回もない（静子夫人は既に四回も経験済みだ）ので、このあたりで前回に劣らぬパンチの効いた名場面を期待したい。そこでその新方式だが、京子のような鉄火娘に対しては、単に羞恥感覚の凌辱侵犯だけを目的とせず、懲戒手段としての効用にその主眼を置くべきだと思う。羞恥責としての浣腸の意義は排出行為の回避不可能性（行為展示の不可避性）に本来の主点があるけれども、更に一歩進めて、「排出したくてもできない」ような物理的拘束状態を併存させるのである。従来の浣腸場面ではこの点の配慮にやや欠けていた。たとえば屈伏の意思表示のさせ方に、①態度反省、②便器使用、③行為観賞、④事後処理、という「四つのお

願い」があるが、排出防止措置を伴わない通常の浣腸方式ではそのような「お願い」を強要するだけの必然性に乏しい。③でいえば、便器の不使用で迷惑するのは黄害をこうむる観賞者であって行為者ではないからである。

まして頑強な抵抗ぶりを身上とする鉄火娘の京子のことだ、単なる浣腸くらいで③や④をお願いしてくれるとは到底思えない。少なくとも小生はそうに考えたいのである。

浣腸以外の責め、特に新種目としては、既に誌上で予告済みだが、未だ実施されていない「美津子との同性愛プレイ」がある。これが果して近親相姦のタブー（小生は陰惨なムードを好まない。たとえば小夜子対文夫のプレイには絶対反対だ）に抵触するかどうかはきわどい処だが、少し工夫して、美津子の他にその恋人文夫を加えた三角関係、つまり2対1の変形プレイにしてみてもどうかだろう。

既に京子は春太郎・夏次郎との関係で2対1方式を経験している。VA両感覚の熟知者でもある。そして前回の男2女1の構成が女2男1と逆転するから、一風変わった新味も生まれよう。三者の結合方式を考えるだけでも楽しいと思う。未実施の新種目には Dog Show もあるが、これは最高に強烈なので当分は留保しておきたい。主役の静子夫人の方へ回してもよいだろう。

当面の課題は不良少年三名の復讐劇の完成

である。浣腸その他の懲戒的羞恥責めのあとは、謝罪反省の記念行為として、当然一人ずつを相手にして閨房プレイを演じなければならぬまい。それもただ観念して肌を許すというだけでは不充分で、心理的にも肉体的にも完全に満足させる必要がある。すなわち、静子夫人が岩崎や伊沢相手に熱演した際の濃艶なお色気戦術が不可欠といえる。本番の前には開陳サービスの付録も要るだろう。そしてその付録にしる本番にしる、三人の相手に同じことを繰り返したのでは芸がないので、彼等の好みに迎合するという口実で、一人毎に異なった方式を、採用したい。たとえば、①付録(P) ②剃毛、本番(I) ③V式、④P ⑤排尿、I ⑥A式、⑦P ⑧測定、I ⑨69式、などのように演じ分けるのである。

京子にとって、このようなハレンチ演技は耐えがたい屈辱にちがいない。時には憤辱のあまり本心を露呈して取乱すこともあるだろう。だが結局において、京子はこれらクズのようなチンピラどもを相手に精一杯の媚態をふりまき、御機嫌を取り結ぶ他はないのだ。何故なら少しでも彼等の機嫌をそこなうと、最愛の妹美津子にどのような危害が及ぶか分からないからである……。

ともあれ、まず何よりも意中の人物京子を再登場させることが先決だ。そしてそれは、ひとえに作者団先生の意向によるのだから、

小生は希望を抱きつつ、その事態を待ち望んでいる以外に方策はない。——団先生、どうかあまりじらさず、京子ファン一同の一つのお願いを実現させて下さい。

最後に京子以外のことで少し要望を書いておきたい。簡略を期して箇条書にする。

一、不要人物の消去。これは昨年7月号の忍頂寺氏の提案と同じ。珠江、美沙子及桂子の三名を除く、多人数だと筋の進展が錯綜して感興を殺ぐ。なるべく少数精鋭主義を貫きたい。

二、静子夫人対文夫の組合せ。いつも同じ緊縛状態で悪役相手の閨房プレイはやや食傷気味。この方式は京子に譲り、拘束なしの自由演技が望ましい。文夫の方はむろん拘束する。プレイの名目は実地指導による文夫の性技上達のための援助。

三、静子夫人及び小夜子のストリップ。台本付きのショー形式。踊りの他に歌を入れた。静子夫人は日本風に、小夜子は洋風（踊りや衣裳を）にする。美津子を前座に出してもいい。

四、文章・用語の修正廃止と挿絵復活。これは編集部への注文。最近の同系誌、一般誌及単行本等の内容を一見されたし。何故遠慮するのか了解に苦しむ。エロスの解放は近時世界的風潮でもある。



マゾに徹した半生 関種通

私は現在或る産婦人科医院に住込みで下働き兼下男として働いている四十三才の男である。

現在の私は全くの不能者で生ける屍に等しい屑のような男であるが、それでも一寸の虫にも五分の魂で、自分並みの楽しみは持っているつもりである。

このような男になってしまった原因はといえば、二十三才の春のこと、工場でかがんで仕事をしていて急に立ち上って腰をいやという程機械の角で強打したことからである。三日程会社を休んで腰の痛みもとれたので、自分でも別に気にもせず引続いて勤めていた。だが不思議なことに、それ以来性欲は十分ありながら全然勃起しないのである。医者を訪ねてみたが気のせいだろう、というくらい

で積極的な治療法もないまま、年が経っていった。当然のことながら、こんな身体では結婚も出来ず三十の坂を越してしまった。

二十才前後には、あれほど元気があったのに、と考えても、も早や仕方のないことだった。それから、人前に出る勇気が次第に薄れて、山の中の寺男、私鉄の線路工、ダム番、沖仲仕、出前持ち、靴磨き、掃除人夫、ビルの清掃夫、植木屋の下働き、等々あらゆる社会の底辺の仕事を行き渡り歩いた末、現在の医院の下男として勤めることになったのである。

男として不能者の私は、いつとはなしにマゾ性を帯びるようになっていた。現在の職場は私にとっては最も適しているのだ。家族は大先生と若先生、それに

大奥様と若奥様、お嬢さん二人、ほかに通いの代診の先生が二人、運転手が一人、看護婦は婦長を含めて六人である。建てこんだ家々の間にある医院なので、いつも大繁昌している。診察室、病室、それに家族の住宅、看護婦の宿舎などが新築されたので、運転手と私は僅かに残っている旧病室を借りて住んでいる。運転手は家族持ちなので八畳と六畳の二間を占領し、独身の私は新館の陰で日当たりの悪い四帖半の一部屋で独り淋しく膝小僧を抱いて寝ているのだ。

私の仕事はといえば、診察室や病室廊下の掃除の外、便所掃除や汚物の始末（産婦人科なので血のついた汚物が極めて多い）、庭木の手入れや病室の周囲の撒水、時には雨漏りの修繕や水洗便所が詰った時にも駆りだされる。いわゆる、何でも屋の便利人夫である。六人も居る看護婦に口きたなく罵られながら追いつたてられるように汚い仕事を強制されるのが、私にとっては秘かな楽しみとなっている。

夏なんか、這いつくばって庭の草むしりをしている私の目の前にサンダルばきの真白い素足をこれ見よがしに晒しているのを見たとき

きは、くらくらと目がくらむような気がして、妖しく私の胸は躍るのである。

今まで何度も自殺しようかと思ったことがあったが、やはり生きていてよかったと、こんな時はつくづく思うのである。

不能者の倒錯した性が、真夜中に光る燐のように、陰湿にめらめらと燃えあがる時、私は私なりの幸福感を味わう。妻もなく子もなく身寄りもない天涯孤獨の私は、いずれ年老いて誰にも看護されず死んでゆく運命にあるが、しかし私はこれからの半生をマゾに徹して生き抜いてゆこうと決心した。幸いこの医院の患者は全部といってよい程女性ばかりである。下働きとして直接私を使う看護婦は勿論女性である。掃除の仕方がまづいといつては叱られ、のろまだといつて罵られ、私は毎日のように二十以上も齡下の小娘に追いつかれてゐる。他人から見れば、なんとみじめなことを、と思うかも知れないが、私にとっては結構これで幸福であり、毎日の仕事も楽しいのである。

私に筆が立つたら、日々の生活を詳しく報告したいのだが生来の悪筆のため、その願いがかなえられないのが残念である。

夫婦プレイ・サロンの提唱

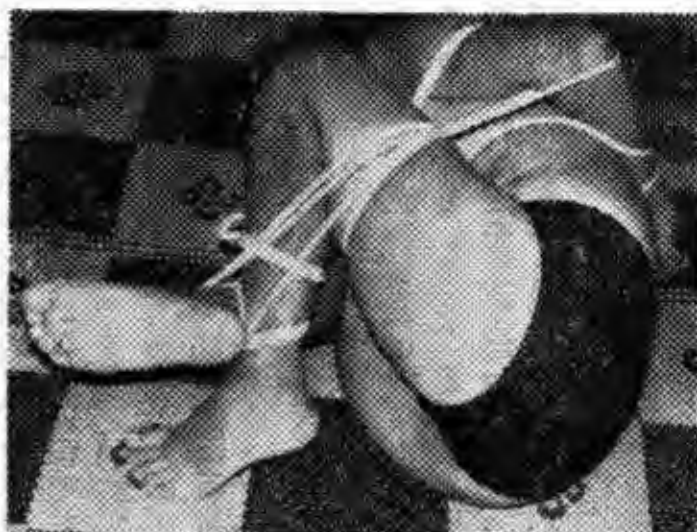
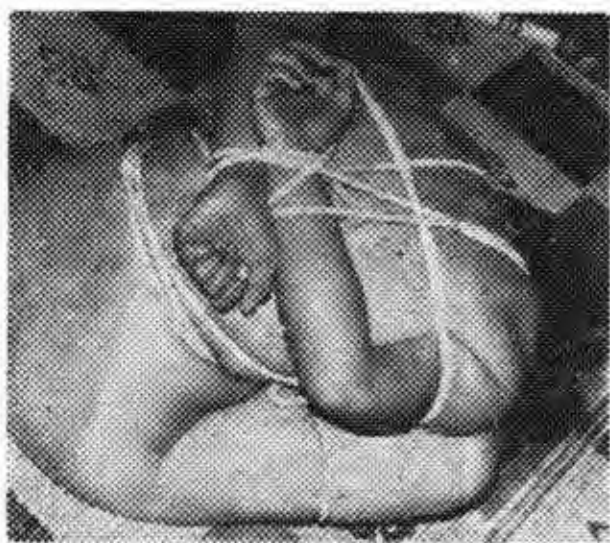
紀川正信

一月号サロン欄に私の送りしました作品を発表下さって、有難うございました。

私の作ったチューブの責具写真は、お送りしたのを妻は知りませんでしたので、あの誌上に掲載された写真を見て、びっくりして居りました。

これから出来るだけ多くのプレイの機会をつくって、これと思う作品を、お送りしたいと思っていますので、どうぞよろしく御願ひします。

一月号の朝野様の御意見はごもつともなことと思います。写真に



変化が出て、ぐっと迫力のあるものになると思いますので、参考にしたい写真を作りたいものだと思います。

城氏のレポ、いろいろ参考になりました。ほんとうにありがとうございます。これからもどうか私たちのプレイに参考になるような写真、及び手記を、もっとどしどし載せていただくようお願いしたいと思います。

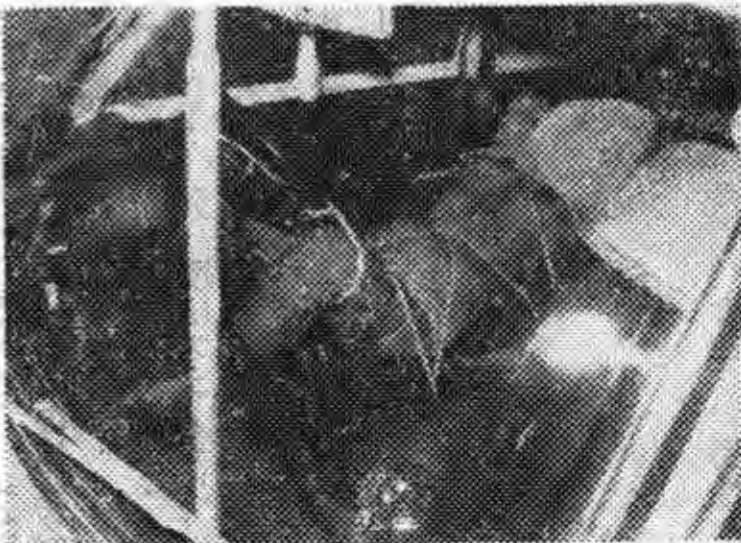
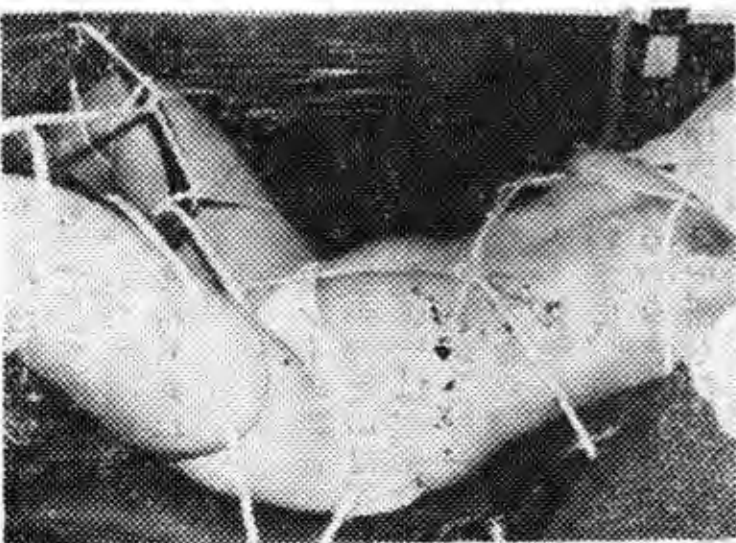
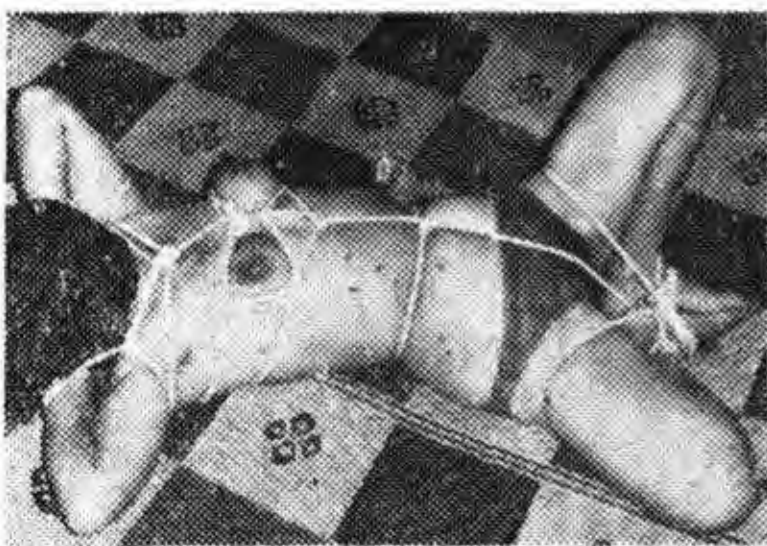
ここに、私たちが今まで行なったプレイの写真をお送りします故

よいものがありましたら、掲載して下さい。

この写真のうちの1、2、3、4は室内プレイのもので5、6、は屋外に出てから自動車内に縛りつけたものを外部から写したものです。が、雰囲気が出るかどうかと思っています。

皆様の御意見等をいただけるよう御願ひします。

又、出来ましたら、全国の同好の御夫婦の方々のプレイ特集として、サロンを編集していただきたいものだと思いますが、いかがでしょうか。





——〈第八十一回〉——
辻 村 隆

私ぐらいの年令になると、次々と推移してゆく服飾界の言葉にどうもついてゆけない。スーツ、ワンピース、ツーピース、ミニスカート、マキシムぐらいの言葉は分かっていても、それ以上の女性の服装は表現しにくく、ハント女性の服装の表現に、いつも戸惑う昨今である。ワンピースと書くといかにも野暮ったいし、服装にも流行の横文字的な言葉もあるうが、そこまで研究する気にはなれないのである。最近では矢鱈に、ネックにリボン巻きつけたのが流行しているが、娘にきいたら「プチネック」というそうである。鈴や金環をアクセサリにとりつけたのも往々にしてみかけるが、まるで可愛い牝猫スタイルというところ。先日心斎橋筋をブラついていたら、このプチネックに、キラキラ

光る石をちりばめ、のど仏の辺りに大きい環をとりつけ両手に金鎖の腕輪（これも「プレスレット」というそうだ）を嵌めて、マキシムで闊歩している。これに鎖でも通せば、その俣そっくり、M的な飼育調教スタイルである。あのプチネックに紐でもつけて、両手首のプレスレットを鎖で連結させて四ツ這いにさせて、心斎橋を歩かせてみたら、家畜人ヤプーの牝それのけで、嘸かし愉しいだろうとあらぬ想像をし乍ら、その三人連れの若い娘達を振り返って見送っていたのであった。

待望久しい「緊縛写真集」の増刊号を手にとって、最初に感じたことは、掲載されたモデル女性が膨大なネガのうちの、極く一部分であるに過ぎないということであ

った。この程度に緊縛女性を發表していったら、それこそ、数十冊次々と発行しても、ネタの切れる心配はなからうと、今更乍ら奇巧の歴史の古さに驚嘆するばかりである。私の「カメラ・ハント楽我記」に掲載したフォトなども、かなり選んでの上であつたが、物凄

が殆どカットされたが、あれなどこの時代をもつてしても尚、無理なのだろうか。いつか改めて發表出来る、その日を待ち兼ねているのであるが……。

北欧のセクソロジーの雑誌も、稀少価値で物珍しかったのは、数年前のことで、近頃では、余りにも出廻りすぎて、又かと、一向に珍奇ではなくなってきた。先日知人がドサリと十数冊を机上に投げ出し、その物量に、些か目をみはり乍ら、パラパラとくっていったが、いいのは何冊もない。そして似たりよったりである。一寸参考までに、セクソロジーの雑誌名を羅列してみよう。

「エピソード」黒白セックス・ストリー。発行所はスエーデン。表紙が色づれてい

「ヤンガーアポロ」男性露出ヌード集でホモ向き。西ドイツ、ベルリンの発行である。

「フレンチワイルドキャット」黒白版の露出ヌード。モデルも、まあまあ。デンマークのコペンハーゲン出版。

「タブー」黒白版のセックス・ストリー。

「ラブ」黒白版。女性三、男性一

のセックス・ストーリー。両誌ともスエーデンの同一発行所のものである。

『サタナガール』黒白版の露出ヌ

ード。紙質も悪く、フォトが不鮮明。デンマークのコペンハーゲン製。

『セックスショット』黒白版のセ



愛妻の

緊縛フォト

和歌山K生

はからずも、それでいて、私にとっては或る種の勇気を出して、そして、懐しい想い出を秘めて投稿した八新妻の縛りフォトVを早速10月号に掲載下さって、本当に有難うございました。

誌上に発表されてみると、自分の手元で眺めているのと又違った新鮮な感覚で、私の目に迫ってき

ます。面はゆいような、晴れがましいような、それでいて、何となく腹の底からむずがゆいような妙な気持です。

妻と私だけの、二人っきりの秘密が、万人の目にあからさまに見られるのかと思うと、たまらない刺激感を受けて、矢も楯もたまらず、再び拙い作品ですが、お送り致しますから、よければ御掲載下さい。10月号に掲載してもらいました分は、和服に白足袋というスタイルでしたが、洋服姿の縛りをお目にかけます。先輩方々の御指導を賜れば幸いです。

ックス・ストーリー。女性がパイパンなのが珍しい。

『ハイボール』黒白版の、セックス・ストーリー

『セックスショット』『ハイボール』『エピソード』の三誌は、い

ずれもスエーデンのマルモという出版社のものである。セックス雑誌としても、三流会社というところ。新鮮味に乏しい。

『プライベート』オールカラー版露出ヌード、セックスだが、他誌に比して拔群。モデルも皆美しく素晴らしい。スエーデン、ストックホルム製の、この誌が断然、斯界のトップクラスであろう。

『ウィークエンドセックス』読物誌で、SMあり、露出ヌードありセックスあり、読者通信ありで、自国語と英語の二通りの記載がある。読破出来れば面白い。デンマーク発刊の雑誌である。

『ニューメイル』郵便夫と人妻のセックス・ストーリーのモノクロ版。この一冊のためにつけられた様な誌名で、ゲテモノ臭く、スエーデンか、デンマークらしいが国籍不明である。

以上は、その時の雑誌の寸評であるが、その他に、『クライマックス』『アフターパーティ』『69

プロウアウト』など、カラーのセックス乱交もので面白い。フリーセックスは、いつしか日本にも蔓延しつつある。世の中も変わったものだ。

× × ×

先月号に書いた『凄絶！片足逆さ吊り』のマゾヒスチックアニマル、谷山久美子が、編集部あてにSの男性を求める手紙を送ってきたそうである。やはり彼女の仮居は東大阪市で、今もM君の下で奴隷的生活を送っているらしい。塚本氏は或いは撮るかも知れないが、私はもう余り気が進まなかった。一人の女性の、可能性の限界に挑戦して、ありとあらゆる嗜虐行為をこころみた結果、彼女に対しては或る種の飽和状態に到達したようである。

被虐を求めて、ひたすら耽溺するのでもいいが、やがて飽きられた時、彼女の未来は、どうなるのか——Mのような無責任な男に谷山久美子を紹介した私にも、一半の責任はあるとしても、SMのプレイのルールをふみ外した男と女にそれ以上の責任はもてない。Mとの交遊もこれ限りのつもりだが、往々にして嗜虐狂奔する男性にはこんなイヤな男もいる。こうなる

と同好の人々とも、充分熟慮して交際しなければならぬとつくづく思うのである。ハントしプレイはしても、谷山久美子のように将来を不幸にしたくはない。それは大正生まれの私の、古くさい倫理だと、一概にいい切れるものであるうか。

× × ×
可憐美貌のOLスタイルのフォトを同封した、私宛のモデル志望の便りを転送してもらい、二十一才という彼女に、大いに期待を抱いて、封筒の宛名に連絡した処、一度お目にかかりたいという返事

＜短歌＞

せり市商品

高村 初子

うしろ手の裸身さらしてセリ台に追い上げられるさだめ悲しや

やわ肌に厳しき縄目の商品に非情の検診、人肉の市

気も狂う羞恥の嵐にさらされて打伏しもならぬ裸身ぞあわれ

○
セリ声に慄えおののくやわ肌の縄目に加えてムチの音呀ゆ

が折返して届く。早速いつものプレイ道具一式を準備して、所定の喫茶店へ出掛ける。約束の時間にK嬢は現われ、幸先よしと、早速話をきり出したが、どうもいつもとは勝手が違う。プレイのモデル志望の便りなど出した覚えはないというのである。では私の連絡でどうしてここへ来たのかと詰問すると、何が何だかわけが分からないうことであった。氏名、住所、年令、学歴、勤務先など、何一つとして間違いはないので、狐につままれたような思いで、やっと誰

谷山久美子を縛る

—— T・T生 ——

「辻村さんの書いておられるほど私は、そんなにひどいMではないですよ」

と、谷山久美子は言っていた。

二月号では辻村氏が「凄絶―片足逆さ吊り」で「続谷山久美子」を書いておられるのを見ると、実際にスゴイという感じがする。

飼育済みのMという見方がびつたりする谷山久美子は、新米のSマニアの稽古台としては恰好の女性（失礼）と思われるが、或る意

かが、この女性の名をかたってイタズラをしたのだということ、さとった。念の為に奇巧の話を触れると、読んだことはおろか、みたこともないという。彼女の父が課長クラスの国家公務員で、その知合いに警察の刑事もいるから、一度調査してもらいますわ、とい

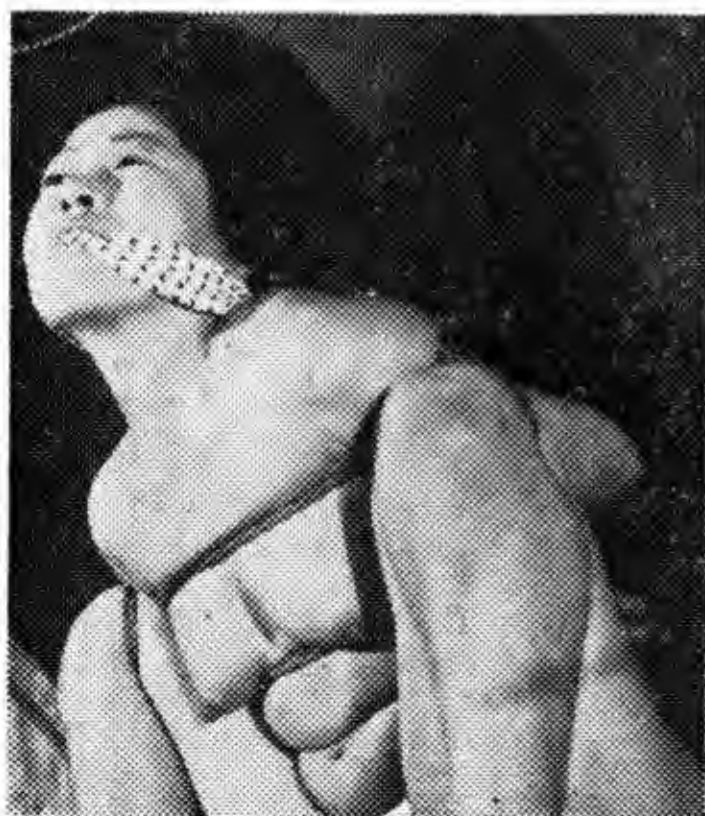
えてか、伶俐な彼女は、精しくは語らなかったが、どうやら会社の男の同僚らしい様子であった。彼女に対する恋慕と憧憬が、こ

味では、私なんかは彼女には役不足ともいえた。

痛さをこらえる

耐性は抜群だから私は至って気にすることなく最初から縦横無尽に縄を

掛け、そしてポーズも足挙げや開股といった極端なものを演出していっ



○ 十八の蕾むざんに縛られて順を待つ身を荒むしろが刺す

○ セリ台にうなだれて立つ艶肌にとび交うつけ値は矢よりも痛し

○ 落札の白き裸身に巻きつきし新たなる縄は杭につながる

○ 改めて摘み撫ぜする買主のみだらな笑みにすくむやわ肌

○ 後手のまま詰めこまれたるトラシクの肌にしみ入る床の冷たさ

○ パウンドのたびに揺られて思い知るひしひしとした縄の厳しさ

○ 縄のみが今後のお前の衣裳ぞといわれし言葉が思い出さるる

○ 動かせてみようとすれど痺れきり思うにまかせぬ指先ぞ悲しき

○ まろやかな肩に頬をすり寄せど流るる涙拭い得もせず

○ もうろうとなりし意識の片隅に妖しき五彩の雲の不思議さ



た。

「私の顔、美しく撮ってネ」

と言った彼女の要求に従って私

は、余裕を持った気持ちでライティ

ングに心を配り、彼女の美しさを

出来るだけ最高度に發揮するアン

グルでシャッターを切った。

ムチを持っていなかったたので麻

縄を束にして、盛りあがるように

ふくらんだ臀部に打ちつけた。

室の外まで響きわたるような悲

鳴が、そのたびに私の耳に快く入

ってくる。悲鳴がただのゼスチュ

アでないことは、真白い臀部の肌

に、みるみるうちに赤黒いシミズばれが出来てくるのでわかった。

でも、わざと私に聞かす

ために大きな悲鳴を挙げて

いるとしか思えない彼女の

態度であった。だから私は

いくら彼女が大きな悲鳴を

挙げてものんびりした気持ち

で、縄の束で尻をぶち続け

ていた。

顔の表情は被虐の悦びに

溢れていた。それで私は時

々思い出したようにカメラ

のシャッターを切

った。両足を頭の

上より高く挙げて

締め上げて、彼女はう

んうんと呻くだけで、頑

張っていた。

谷山久美子は私の楽し

い玩具であった。いや、

悲しい玩具といった方が

よいかもしれない。

飼育済みのM女性はい

いなあと考えた。出来上

った御馳走を只で食べて

いる様な気持ちであった。

只、私の谷山久美子に

してやれることは、少し

でも美しく写真に撮って



やることだけであつた。とてもとでも、私の未熟な腕では彼女が悦虐にむせぶような責めを敢行することは無理で、彼女は大いに不満であつたろう。せめてもの慰めは私に対してのいたわりからかもしれないが、「辻村さんの書いておられるほど私は、そんなにひどいMではないのですよ」と言ってくれたことである。そのやさしい彼女の心づかいに対して、私は母性を感じ、そして、彼女の心の片隅にでも、私が入り込めるかもしれないという野心を一瞬に抱いた。

写真集とタバコ責め

城野道一

本日、美しい△増刊号△入手致しました。数十冊出ている同種の写真集の中でも、一きわ目立つ出来栄えと存じます。その上、安価なのは、さすがは奇巧の良心的な社風で非常に嬉しく思いました。確かに辻村隆先生の言われる様に他の写真集は緊縛の基礎が余りにもなっていないものや、ヌードとしてのディフォルメに緊縛ヌードのポイントの違いを全然考えていない事で、再び本箱から出して見る気もしないし、また緊縛に応用（私が）できるほど啓発されるものはありませんでした。



しかし、この第1号の写真集は美しいものに違いはありませんが奇巧のカラーからすれば月並みなものであったことは、いなめません。私はSMというものは、もっとと静かでひっそりと、またこっそりと楽しむもの（決して陰気、グロテスクではありません）と思います。今度の写真集は、どちらかといえば明るい、週刊誌にでも出ているような雰囲気になります。さて、私として近く出版されるであろう第2集を心待ちしながら注文を述べさせていただきます。一、写真の中でいいなと思うものは必ずカット（トリミング）に無理があります。これはヨーロッパのように陰毛や局部が見せられないため仕方ありません。パンティ（赤、黒など）をつけ無理のないトリミングをするか、ライティングで考慮していただきたいものです。



二、縄尻の処理が気になりましたが、柱へ繋ぐか、吊り下げるか手で持っているか、あるいは全然なくすべきだと思います。塚本鉄三先生の緊縛の基礎にあったように思います。

三、女性を緊縛して責めている人（男女どちらでもよい）の足、手などを一部トリミングして出していただきたいと思えます。縛り上げてタタミの上にかかるがっていい女性を縛り上げて葉巻、煙管、マドロスパイプなどで喫煙させるのです。シガレットは可愛い赤い唇に対して重圧感を与えないからいけないと思えます。

四、アクセサリーを縛り上げた女性の近くに点在させていたきたいものです。たとえばパイプライターを横目でにらむ全裸の縛られた娘。電気カミソリ、剃刀、火のついた葉巻、太いローソクなど責めの小道具は数多くあります。

五、最後に私の趣好をぜひ写真集に取入れていただきたく思います。すなわちタバコ責めです。若い女性を縛り上げて葉巻、煙管、マドロスパイプなどで喫煙させるのです。シガレットは可愛い赤い唇に対して重圧感を与えないからいけないと思えます。

私の最近行っている△責め方△を紹介いたします。○全裸にし

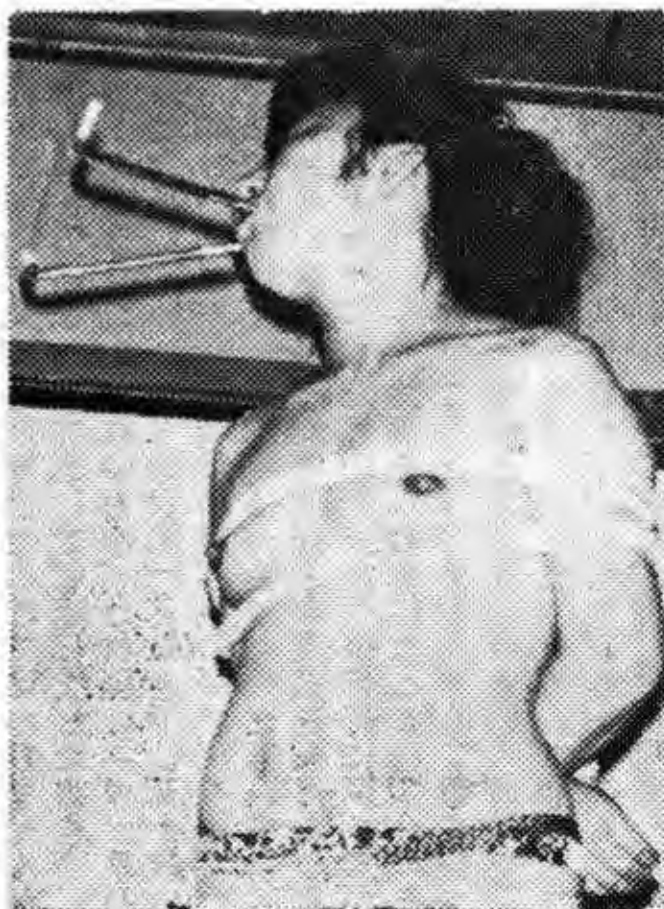
てアグラ縛り（海老縛り）にする
と顔は自然に両股の間に入って行
く。火のついた葉巻を咥えさせて
喫煙させ、背中を足でギュウギュ
ウ押さえ込み責める。
煙は鼻の穴から出すよう強要し
両の鼻の穴から白煙を出す姿をカ
メラにうつす。葉巻を落とせば足
をヤケドするから注意を要す。
○次に柱に後手に縛りつけ、両足
を開かせて別々に繋ぎ、キセルを
二本、咥えさせて喫煙させる。
「グッと吸って」「鼻から煙を出
して」「もっと煙をふき上げて」



などと強要しながら、だんだん足
を開かせて行き、苦しがって両方
の煙管を落とすまで責め上げる。
○全裸で後手に縛り上げ、足の拇
指と中指の間に火のついた葉巻を
挟ませ、自分の口に咥えてスバリ
スバリと煙をふかすまで、連続写
真を幾コマもとる。
○マドロスパイプを咥えた私に、
全裸で縛り上げられた女性がにじ
り寄り、彼女の咥えた葉巻の火を
パイプに火がつくまで吸いつづけ
る。マドロスパイプは仲々火がつ
かないので太い葉巻の先が真赤に
なるまで涎を流しながら吸いつづ
ける。



オフレコ
ードとして
は、次のよ
うなものも
試みていま
す。
○局部で葉
巻を吸わせ
る練習。大
の字縛りに
して葉巻を
吸わせるの
だが、その
ままでは支
障があるので、プラスチックの筒
で長い葉巻用のパイプを作り、腹



式呼吸
で上と
下とで
同時に
煙を吐
いたり
交互に
吐いた
り出来
るよう
飼育す
る。
○椅子
に後手
に縛り

上げ、葉巻を吸わせながら、よく
火がつくと、その火で毛を焼き、
消えかけるとまた吸わせるとい
うように毛焼き責めをしている。部
屋が臭くなるのには困るが、毛の
先の感触が非常によくなる利点が
ある。
オフレコードは余り書いても写
真集としては実現不可能ですから
これ位にしておきます。
同封しました写真は最新作です
が全裸のためパットトリミングで
失礼します。
ぜひタバコ責め（シガレットは
除いて）を一葉なりとも写真集に
お加えいただこう、よろしくお
願い申し上げます。

臨時増刊△写真集▽特集号に想う

麻仁亜 天 狗

我々の渴望していた△写真集▽の増刊が遂に出た。こうした形で△写真集▽の発行を熱願していたに久しい。カラー写真を含めて百葉を遥かに越した数多い大型女体緊縛写真の迫力は、まさに圧巻といってよく、我々の目を奪い魂を抉り、且、胸を躍らしめてくれた。

その上、只、女体緊縛フォトの羅列ばかりでなく我々の敬愛する

辻村隆先生の「カメラ・ハント楽我記」が洒落な筆致で書き綴られているため、我々ファンをこよなく楽しませてくれたばかりでなく、百何十枚かの写真が、正に生々しく息づいてきたことは、この写真集を一段と輝かしきものにしていくといつてよい。

辻村先生のペンは、いつ読んでも鮮魚のようにピチピチと我々の胸奥に迫ってくる魅力を持ってい



る。それは、その背景に奇ク一本に絞って活躍してきた二十年のキャリアと、第一人者としての限らない自信が裏付けされているからに外ならない。

只、単に文章がうまいとか、小器用であるというだけでは、かくまで長く続かないであろうし、また我々マニアを感動させるものも持たないであろう。天才的な器用さを持つルポライターも時には出現したが、その雑誌の短命的な運命と共に没落して姿を消した人も幾人とはなくある。

辻村先生こそは奇クと共に進歩し発展した我々の先達であり、また師表でもある。「カメラ・ハント楽我記」こそは今までの緊縛史の集大成であり、我々はこのあとに続く歴史を、これからも輝かしくあれかしと、大いに期待しているものである。

塚本氏の「女体緊縛の醍醐味を語る」の一文は、辻村先生の文章にも優るとも劣らぬ好エッセイであった。

この人の態度は終始真面目で好感が持てる。華麗な辻村節に比較して一見地味ではあるが、それだけに、巧まざる文章の中には、時々ハッとするような啓発させられ

編集部だより

○SM雑誌のパイオニアとしての本誌は創刊以来二十数年を経て、ここに輝かしい第二の金字塔を打ち樹てることが出来ましたことを皆様と共に、喜びたいと思います。何故奇クのような特殊雑誌が、このように長く続くのだろうかと思議に思うくらいです。

○久方ぶりに臨時増刊として女体緊縛写真の特集号を発刊しましたところ、幸いに好評で追加注文を頂きました。種々の事情を考慮して写真集そのものは、必ずしも全力投球したわけではありませんが本文として収録しました書き下し百枚の力作、辻村隆の「カメラハント楽我記」と書き下し五十枚の「女体緊縛写真の醍醐味を語る」の二篇は出色のものと思います。

○切腹研究家中康弘通氏に対して三島由紀夫先生の自刃に関しての論稿を求めましたところ、今のところショックが大きくて筆を持つ気がともしないという返事を頂きました。しかし重ねて懇望しましたら、それでは短いものならという事で、今月号に掲載した原

るものを感じる。

今回の文章で我々は氏の緊縛写真に対する見解をはっきり掴めたことは嬉しい。とにかく、我々の瞳目した女体緊縛写真集に錦上更に花を添えた観のある二大作家のペンの業績は長く斯界に残ること

仲間入りさせて下さい

土田純一

数年来の奇クの愛読者ですが、始めて投稿します。

私達は結婚後八年になる夫婦です。新婚時代から夫婦でプレイを楽しんでまいりましたが、誌上で皆様のプレイを拝見するにつけ、私達夫婦も是非お仲間入りさせて頂きたく思い、お便りを書いた次第です。

最近のサロン欄に発表されている夫婦プレイフォトの肉体美、成熟美の妻女たちの素晴らしさは羨ましい限りです。さすがにどの裸身も美しいの一語につきる見事さで、いつも楽しく拝見させて頂いております。

特に渡部様ご夫婦の大ファンです。又、紀川正信さんの一月号でのチューブ責め、参考にさせて頂いて私もいろいろ作りました。次

と思われる。

願わくば、我々ファンの渴望を更にいやすためにも、且、両氏の輝かしき業績に更に一頁を加え、後世に残すためにも、第二集以降の発刊に際しても、この種の文章を書き綴って頂きたいものだ。

回にでも自家製のチューブの責め具を妻に着用させて、発表させて頂きます。

一月号のサロン欄はフォトが数少なく期待が大きかっただけに心

写真集の中の写真の一枚一枚についての批評や感想は他の方々に譲るとして、一月号の巻頭を飾った、前田真知子さんの告白／＼陣痛／＼を読み返してみると、この写真集に対する感興が一層深まったことを申し添えておく。

さびしく感じました。

三浦敬一様、阪東太郎様、福井太郎様、他の先輩諸氏や、同好の皆様のお言葉を頂いて、すばらしい写真を作成して発表させて頂きたいものと思っています。

ここに同封しました写真はプレイ中の妻を撮影したものです。



稿を頂戴致しました。

○由利美千子さんの体験小説「被虐の旅シリーズ」は今月号の八赤と黄の衣裳／＼で一応完結となりますが引続いて別のテーマで書いて頂くよう目下交渉中です。

○鬼才藤見郁氏の力作「パノラマ島秘譚」の連載を今月号より開始致します。藤見郁氏には昨年新年号より八地獄ホテル／＼を書き下して貰い、団鬼六先生の長篇小説「花と蛇」に匹敵する長期連載の予定でしたが筆者がSM雑誌を創刊され編集で多忙となったため残念ながら三回にて打ち切りとなりました。今回は筆を新たに意欲的な力作にてファンの皆様に応えたいと張り切ったので、ご愛読賜れば幸いです。

○傑作M小説「壺中の園」は一月号を以て完結しましたが作者真砂十四郎氏よりの連絡により、目下次作の構想中とのこと、何れMファン垂涎の好読物が寄稿されてくるものと思います。

○最近、原稿の応募が急増しておりますが、採否についての回答は出来るだけ早くするように心がけておりますものの、性質上即答し兼ねる場合が多いので、その点お含みおき下さるようお願いいたします。



緊縛フォト雑感

朝野 祐

最近ではSMブームとやらで大変ケツコウな事です。世間にSMに関する問題が多く出回ればそれだけSMが正常に近づくという訳。

その内、モデルといえば、緊縛フォトのモデルを指すようになるんじゃないかなろうか、という気がします。

いずれにしても、マニアにとってSMの資料が豊富に手に入るようになったという事はまことに喜ばしいことです。古書店のアル

ジが、最近の緊縛写真集の普及で風俗文献のバックナンパーが一時ほど高くなかったし、また売れなくなかったというのもモットモなことです。

それにしても緊縛写真集なるものの中身、ナンとかならないモンですかネ。アトカラアトカラ登場する写真集のどれをとってもミナオナナジ写真バツカシジャナイデスカ。

胸の上と下に申し訳程度に縄が

巻き付いているだけ。ユルユルのデレデレ。ハッキリ写っているだけが能じゃないと思うんです。

ここにもモウケ主義の弊害が現われているンデスネエ。カラーテレビの次は緊縛写真集を吊るし上げてモライましょうか。

「緊縛」という言葉は「緊め上げ縛る」ッテイウ意味ジャナインデスカ。

それなのによくもあきずに、ユルユルデレデレの写真集が出ることに。よくも買う人がいるモンだと感心してるんです。

そもそも緊縛写真に興味の無い人が数だけ集め、イクラで売ろうなどというコ

ンタンでマニアの満足するものができる

筈ないじゃアリマセンカ。

自分の満足できる緊縛写真

を作ることには情熱を傾けら

れる人でなければ迫力のあ

る作品はできないと思うん

です。

縄を纏っているだけの写真ナンでモデルとカメラさえあれば誰だって撮れるんです。

モデルが本当に縛られていて、縄のかけ方も、ポーズも、効果的で美しく、しかもプラスアルファがなければ、マニアの琴線ユサブル作品などはできないと思うんです。

縄のかけ方一つとっても、真に効果的な縛り方というのは本当に難しいことだと思ふんです。縄のかけ方だけではなく、縄の材質、太さによっても効果は変わります。無計画にやれば、ユルユルデレデレにもなりますし、またゴテゴ



デにもなってしまう。感極まってメチャクチャに縛り上げたというようなのは、とても見られたものではありません。

撮り方にしても、真正面からストロボをあびせてハッキリ写しただけでは動物図鑑の口絵になってしまふし、照明に工夫がなければ縄に歪んだ乳房もペタンコになっってしまうこともあるのです。写真は目で見た通りには写らないというのは常識ナンデスケドネエ。その上プラスアルファがなければなどと欲張ったら、チョットやソットでは緊縛写真など写せなくなってしまうモンデス。

プラスアルファですけど、これはマニアの心理を満たす或るもの。

S M ジ ョ ー ク

丸出駄目夫

縄 模 様

考古学専攻の彼氏のなすがままになって、素肌に縄目を受けてベッドに転がされた彼女がいった。「こんなに縛ると、私の自慢の滑らかな肌に縄のあとがつくんじゃないかしら？」
「大和民族は太古から、自分のモ

の、マニアだけが分かる或るムーノには素敵な縄目模様をつけるものなんだよ」

豚に真珠

スワップSMプレイをした夫婦が離婚したと聞いて、その相手をした男が驚いて駆けつけた。「キミ、あんな素晴らしいMの奥さんを離婚するなんて……。スワップは理解の上のことじゃないか」「スワップは関係ないさ。ただ、今度手に入れた紐が、アイツの肌に少し不似合なんですね」



ドという様なもの。要は、これを除いたら芸術写真になっってしまう、そんな感じのものを言いたいんです。

テナ訳で、またまた拙作を送りますのでトクとご覧アレ。これがイイタイコトイッテルヤツの作品デスゾ。

前回投稿の際、私のモデルになってくれる方の登場をお願いしましたが、再度お願い致します。

一、私のモデルになってもよいと

箱 入 娘

袖をひいたボン引が囁いた。

「いいコが居ますぜ。なんでもアナタまかせで文句一ついじやなし、縛ろうが叩こうがじっとしてるとてえヤツで、逆吊りでも片足吊りでもお気に召すままであ、泣き言一ついわない保証付。十八の肌が、燃えた軀を冷やしてくれる真正銘の箱入娘でさあ」
案内された部屋には、美しい娘の死体が寝棺に横たわっていた。

いう方、ご連絡下さい。

一、飼育した女性を、お持ちの方で、残念ながら写真を撮る機会がない、うまく撮れないというような方がいらっしやいましたら是非とも私にお申し付け下さい。きつと満足して頂ける作品をお作りします。

(貴重な奇クサロンを私の宣伝に使って申し訳ありません)

一月号に登場した前田真知子さんの告白文、日記というスタイルの為か、いささかブッキラ棒な調子がかえって若々しく楽しく読めました。掲載された写真は多少もの足りませんが、カメラハントのストロボ一発でベタバタになった写真より、数等見ごたえがありました。 (またも辻村大先生の悪口申し訳ありません。反省します)

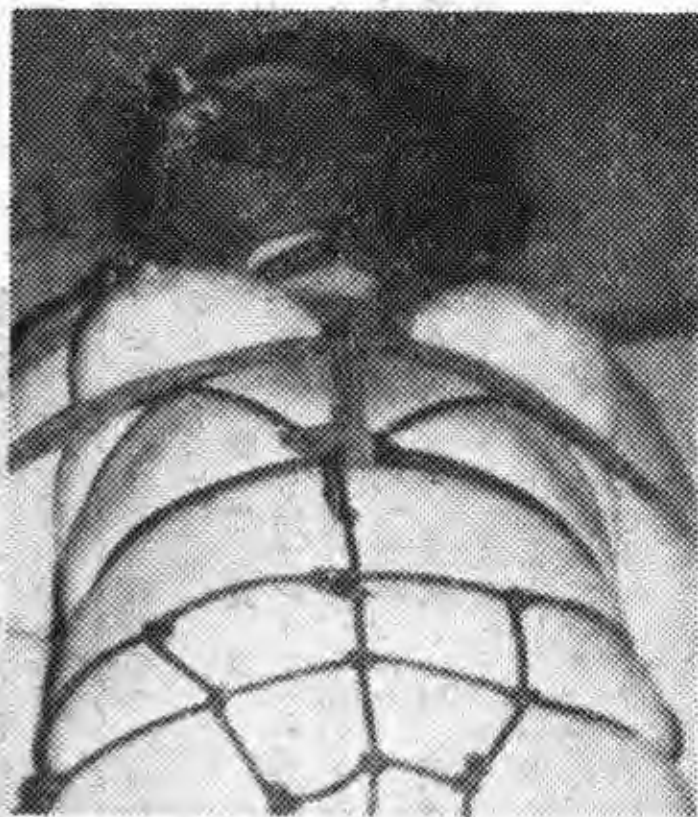
こんな素敵な人を、編集部から「おマエ撮ってみないか」ナンテいつてくれないモンデスカネ。

ともあれ、これを書いてる十二月十三日現在ではまだ発売されていない奇ク増刊号がマニアの期待に届えてくれるものであることを祈ります。

なにしろ、マニアの本当に頼りになるのは、奇クだけなのですから……。

遅くなって・・・
・・・すみません

小 竹 一 浩



使われると、何か面映い。

夏頃から、家の改築やら、慶弔あい続いて「SM日記」もみんな書きかけの俤になってしまいました。「SM日記」は、来月にして今回は、私の名前が出ていた御投稿に対しての返事めいた雑文を書かせて戴きます。

なんだ今頃！と言わずに、御一読願えれば幸いです。本当に遅くなってすみません。

× × ×
辻村御大の提唱された「SMプレイ」を、「SMP」と勝手に略号化して使わせて戴いたのは、もう大分前の事のように思うが、六月号で「SMP雑考」と、改めて



先日、渋谷の某バーで、ホステスのA子に、色々略号の質問をされたことがあった。

「SFってなあーに？」

「サイエンス・フィクションのこと。つまり空想科学映画や小説等のことだよ」

「じゃ、五反田にある今問題のSFっていうのは？」

「あれは、ローマ字だろう。新製品普及会の略だろう」

「なんだ、そうなの」

「ところでA子ちゃん、SFじゃなくて、SMって知ってる？」

（私はこの手で、前に一度ハントに成功したことがある。つまり、

こうした質問をして、イエスという答を得れば、話もし易くなるし可能性も高まるという次第）

「SM?.....ああ知ってるわ」

「本当？」

「Sはスモール、Mはメディアムで.....あとはLでしょう？」

固唾を飲んだ私の期待は、見事に裏切られてしまった。

「SMLじゃなくて、SMPだ」

「聞いた事ないわ。.....パーテンさん、ニヤニヤしてるけど知ってるの？」

「A子ちゃんは、時代遅れだな。SMって、よく週刊誌に出てるじゃないか。でもPっていうのはなんだらう、フォートの略かな？」

「成る程ね、SMフォートという解釈も出来るね。然し此の場合は、プレイの略なんだよ」

「ああ、SMプレイですね。何かの本で見ましたよ」

「ネエ、何なの、そのSMプレイって？」

「後で教えてやるよ」

「意地悪ッ。本当は知らないんでしょ？」

「こいつ。じゃ、教えてやるよ。一口に言うならばだ、君達みたいな若い娘を裸にして、縛ったり、いじめたりする遊びのことさ」

「まあー嫌アだ、エッチ……」
確かに嫌な言い方だ。間違っ
るとも言えぬが、これでは味もソ
ツケも無い。

尤も、私だって、SMPの本質
を一口で言え、と言われたら、心
や体では、わかり乍らも即答は出
来ないかも知れない。

そんなわけで、略号作戦に失敗
した私は、ほろ酔いの頬に風を受
けるべく、バーを出たのだが、A
子の後ろからそっと見送っていた
B子の目に、妙な輝きを見たよう
に思えた。今度行った時は、馴染
みのA子には悪いが、是が非でも
B子とじっくり話してみたいと思
っている。

× × ×



前記「SMP雑考」を書かれた
三条剛氏。貴方のおっしゃる「フ
ォトの併行化」の件は、誠に同感
で、私の「SMD日記」などは、そ
の悪例の最たるものでしょう。

カメ・ハン・フォトを拝見しま
したが、実に素晴らしい。パート
ナーも見事なプロポーションで、
羨ましく限りです。今後、どし
どし御披露願いたいものですが、
こうした野外ならいざ知らず、私
の様に殆どが屋外（街中）でのプ
レイだと、そのフォト撮影は全く
困難を極めてしまいます。

「実存性の証」等と、大それた事
を言い乍ら、フォトを同封し、二
十回近くも「SMD日記」を投稿し
てきたが、明らかに証拠不十分と

いうわけ
で申
し訳な
い次第
です。
大変
難しい
が、な
んとか
屋外撮
影を目
的とし
たプレ

イを行ない、そのうちに充実？
した「SMD日記」を送るべく種々
計画中です。



八月号での、仏山逸富氏。過分
な讃辞を戴き穴あらば入りたき心
地です。然し乍ら、私にもファン
が居て下さるとは心強く、光栄の
至りです。

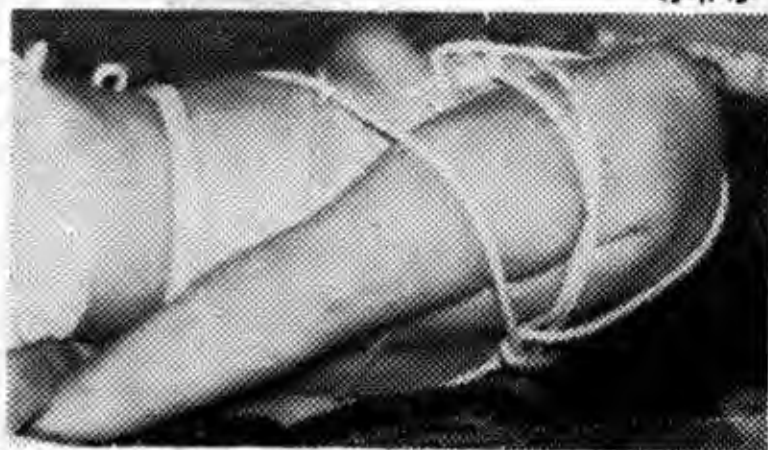
ユキが御気に召した様ですが、
実際は、肥え過ぎた牝豚で、「S
MD日記」にも書いた通り、相当反
抗もします。況んやプレイディ以
外の日常の雪枝は、気も強く、時
には派手に口喧嘩さえする事があ
ります。尤もこれが私の飼育方針
でもあるわけで、「ユキッ」と呼
ばれた瞬間に変身し、奴隷化する
よう努力させ、習慣づけて来たの

です。
指導などとい
う、柄にも無い
事は到底出来ま
せんが、いずれ
私なりの考えや
飼育法等（前に
SMD日記で書い
たこともありま
すが）を書き綴
ってみますので
その節に又御便
りを戴ければ幸甚です。

十月号通信欄の浜口里子さん。
私はこうした通信をしたことがあ
りませんが、何か惹かれるものが
あり、呼び掛けてみる気になりま
した。それは第一に、私も教師を
していたことがあるので妙に親し
みを覚えたこと。第二に、私の好
みである街中プレイや、ネクトプ
レイのパートナーとして貴女が全
く適任である様に思われること。
（私のプレイに就いては、過去の
「SMD日記」を御読み戴ければ、
凡そおわかりになると思います）
お逢いするには、種々難しい事
もあるでしょうが、方法はある筈
です。若し、多少なりと気が動か
れたら、お便り下さい。

妻の縛り写真です

飼育生



＜随想＞

縄の恨み

早木夢二

むかし私の縄につれなかった女の便りをきいた。
いまだに水商売から抜け切れずそれも一ころは小さくても経営者であったのが、旨く行かなくて、今も銀座あたりでつとめているという。もう相当の年だろうと思うが、男というものは、やはり都合のいいもので、豊かな肉体を誇っ

ていた、むかしの女しか思い出さない。
しかし、その豊かな肉体が私の縄を受けつけなかったことが、同時にいまいまいしく思い出され、その当時の私のいらだたしさ、腹だたしさを、まさまざと思ひ浮かべるのだった。
便りによると、別に会いたいというのでもなかったが、会って女の交り方を試してみたい気持が動いた。女の肉体が、まだ私の中に未練を残している証拠に違いないし、とりわけ未だに憑かれています

私のことを思い出してくれたこともあったのではないかと、自惚れた気もするのだった。
いま、その女と会うことがあったら、私は何よりも先ず、私の縄を確かめたいと思うのである。豊かな肉体への未練もさることながら、その肉体に果たし得なかった私の縄の怨念を、思うさま叩きつけてみたい。その時の女の反応の中にこそ、私の女の、むかしの愛情の確認を改めて、かちとりたいものと思うのである。
一糸纏わない全裸の女は、菱縄

私の縄を、いまその女は、どう受けとめるだろうかとそれが、しきりに私の心を動かす。
御自慢だったせいか、多分の露出症気味だったのがその後の永い、まさまざの暮しの中で、案外縄の楽しみを覚えていたのではないかと思う。そしてそんな時、ああ縄といえ、あの男はどうしているのだろうか、

股間縛りを施されて、鏡の前で克明な体改めを受ける。私は女の体のすみずみまでも、まさぐりながら、その後の女の体に印された男のかげを見つめようと努める。
そして、拷問――。
私の一番好きなのは石抱きだ。拷問台の上に坐らせた女の太腿の上にブロック石を三枚ばかり積み重ねる。これも私がむかし、あれこれと、なだめたりすかしたりしながら、ついに果たされなかった夢だった。
いま石を抱いて、うなだれている全裸の緊縛姿を前にして、私の心の底で永い間、燃やしていた怨念の果たされたことに、ひそかな喜びを感じ、こうしなくては女の愛情さえ確かめることのできない私自身の業を、改めて見出すのではないだろうか。
しかし今更、女との愛を改めあっても仕方のないことだ。私はただ、私のつきあった愛した女が、私の欲望を無残にも拒絶したことに対する復讐を、私のいやが上にも積ってきている縄への憧れを以て、果たしてやりたいと思うだけかも知れない。
そんなことは嫌だと、女はいうかも知れない。

サド女性に憧れる

T・H 生

私が貴誌を手にして最初に目を通すのは「花と蛇」です。この地獄屋敷の美囚、静子夫人が、意地悪な千代に今後どのような扱いを受けるのか、楽しみでならな

肥満美を恋うる

赤 畑 修 造



いつの間にか「奇クサロン」は若手読者夫婦の記録写真集化となり「読者通信」にも豊肥女性の活字が見えなくなりました。昨今、二月号の大越照美、写真技術皆無で

奥様のお姿が拝見できず残念。わが豚妻と比較されてどうですか？ 昨年の村上喜美夫人は大ヒットでしたが、今後、豊肥女性が続々登場されるようお願いしたいもの。

代さん”と呼んでいるようですが“御主人様”と呼ばせ、静子夫人を奥様呼ばわりせずに“静”と呼び捨てにして、雰囲気盛り上げてもらいたいです。

そして、奴隷“静”は首輪をはめられ、腰縄をつけられたまま、千代御主人様の身の回り一切、トイレの後始末までさせられ、なんだかだと落度をこじつけられては叱られ、千代のマニキュアの剥け落ちかけた足の指で、高貴な感じのする“静”の鼻をつまみあげたり、千代独自の残酷な折檻の場面をもっと取り入れていただけたらと願ってやみません。

というのも、私の、男が女を責めることより、女が女を責めることに、たまらない憧れを持つ性癖からくる勝手な願望なのですが、私は過去に忘れることの出来ない二つの体験があり、それが、この願望を生んだのだらうと思っています。

その一つは、暴力団の子分として居候をしていた頃、組長の情婦純子姐さん（十八才）の付人として他の二人と共に仕えさせられたことがあり、サド性の強いこの姐さんから数々の加責を受けたり、組の息のかかった売春婦に対する

嫌なら嫌でもいい。私にとって素肌に菱縄を纏うことのできない女なんて、なんの意味もないのである。

彼女の私刑の残酷さを目撃したりしたのですが、組長よりも怖かった純子姐さんの責め方に、マゾの快感を叩きこまれたのです。

もう一つは、この組のデイリに巻きこまれて逮捕され、懲役二年の刑に服した時のことですが、拘留所の雑役夫として、未決囚や女囚を収容している女区の仕事をさせられ、配食や掃除などをはじめ若い女看守にアゴでこき使われたものでした。反則を見付けられた時など、人形のような可愛い顔をした女看守に、容赦なく警棒で尻を打たれたり、スリッパで往復ビンタを見舞われたりしたものです。が、この経験が私のマゾ性に一層拍車をかけたといっても、いいと思っています。

これらの体験記、また、女が女を私刑したり仕置場面の目撃記はいずれ告白したいと思っています。が、純子姐さんの残酷ぶりよりも、女看守の女囚に対する仕置も仲々厳しいものでした。

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

- 遅ましき股に挟まる
大手札四枚一組 略号(あと) 一〇〇〇円
- 素足の脂がべっとり
大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円
- 縛った男をムチで料理
大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円
- 女王様の人間便器になる
大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円
- 蠟涙の雨を全身に浴びる
大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円
- 尻の下につぶされた男
大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円
- エビ責めに弄ぶ女
大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円
- 神酒を与える女神
大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円
- 咽喉輪を股責極楽
大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円
- 素足の足趾と嗅香
大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円
- M男性を尻に敷く
略号(あこ) 一二〇〇円
- 人間犬の芸仕込み
大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円
- 女の尻に顔がつぶれる
大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円
- 足指に挟んだ菓子
大手札二枚一組 略号(あひ) 六〇〇円
- 男を縛って弄ぶ女
大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円
- 尻責めと股責め
大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円
- 大男の訓練風景
大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円
- 男を刺し殺す美女
大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円
- 男を尻の下に敷く
大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円
- 女の足下にうごめく顔
大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円
- 汚物を戴く男
大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円
- 男を馬にする美女
大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円
- 人間椅子の御褒美
大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円
- 飼犬に餌を与える
大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円
- 浣腸器で男を弄ぶ女
大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円
- 股で絞められる首
大手札三枚一組 略号(みな) 八〇〇円
- 芳香を嗅がす尻
大手札二枚一組 略号(まの) 八〇〇円
- 人間馬の調教プレイ
大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円
- 足舐めの奉仕と強制
大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円
- 股責めにあう男の顔
大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円
- 女に縛られて弄られる
大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円
- 踏みにじられる顔面
大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円
- 肩車に奉仕する青年
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 男を縛って玩具にする
大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円
- 首を太股で絞めあげる
大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円
- 灰皿にされた男
大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円
- 裸女の長靴に悶ゆ
大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円
- 美女に飼われる犬の生態
大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円
- 美女の手で縛られる過程
大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円
- 女御主人に使役される男
大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円
- 美女のおいしい足を戴く
大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円
- むしゃぶりつく素足の味
大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円
- 凌辱と美女のなぶり者
大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円
- 素足を舐める構図
大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇〇円
十組十枚 一〇〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴らしい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

1 鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
2 後手は高く縛る(佐々木真弓)
3 八の字の開股縛(左近麻里子)
4 狂う女体の表情(ローズ秋山)
5 縄に苦しむ長身(川越美佐子)
6 弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
7 ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
8 白肌輝く股間責(山原 清子)
9 全身縛りを吊る(大塚 啓子)
10 悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
11 亀甲股間縛り晒(山原 清子)

12 開股強烈羞恥責(木村 洋子)
13 妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
14 縛りの好きな顔(一宮百合子)
15 美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
16 縛りの全裸を見て(金原奈加子)
17 憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
18 前面を晒す裸像(長井葉津子)
19 亀甲縛りの正面(左近麻里子)
20 後手縛りを見せる(川越美佐子)
21 暈ましき臀部晒(左近麻里子)
22 真白の柔肌責め(左近麻里子)
23 ムチ責めの果て(安井喜久子)
24 鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
25 湯責めにあう女(山原 清子)
26 変型高手小手縛(川越美佐子)
27 洋子をいじめて(木村 洋子)
28 緊縛のホステス(佐々木真弓)
29 柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
30 均齊のとれた体(佐々木真弓)
31 蠟涙責めの熱演(ローズ秋山)
32 脚吊りで責める(ローズ秋山)
33 片足吊りの狂態(大塚 啓子)
34 狼轡の開股縛り(木村 洋子)
35 股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
36 妊婦仰臥狼轡責(中河 恵子)
37 二つ重ねの裸女(佐々木真弓)

38 縛られた洋裁生(長井葉津子)
39 椅子開股羞恥責(左近麻里子)
40 責め抜いた挙句(安井喜久子)
41 黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
42 全裸の股間縛り(山原 清子)
43 黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
44 パンティを剥く(大塚 啓子)
45 緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
46 狼轡の妊婦縛り(中河 恵子)
47 全裸高手小手縛(長井葉津子)
48 黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
49 後手の嚴重縛り(左近麻里子)
50 麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
51 炸裂する革ムチ(安井喜久子)
52 剥がされた布片(金原奈加子)
53 浴槽と荒縄の責(山原 清子)
54 髪吊りの操り責(ローズ秋山)
55 高手小手の裸女(左近麻里子)
56 海老縛りに泣く(関谷富佐子)
57 恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
58 悶える全身縛り(一宮百合子)
59 伸びやかな素足(一宮百合子)
60 卓上の人身御供(左近麻里子)
61 皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
62 股間縛を羞らう(金原奈加子)
63 宙吊りにもがく(木村 洋子)
64 裸身を晒す表情(金原奈加子)
65 輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
66 全裸をもがく女(ローズ秋山)
67 豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

69 乳房強調縛狼轡(左近麻里子)
70 媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
71 縄のブラジャー(左近麻里子)
72 逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
73 逆エビで責める(ローズ秋山)
74 美しき緊縛立像(関谷富佐子)
75 悶える緊縛全裸(金原奈加子)
76 鞭で責める女体(ローズ秋山)
77 両手吊りで晒す(金原奈加子)
78 豆絞りの狼轡縛(川越美佐子)
79 あどけなき表情(金原奈加子)
80 敵しい縄目の肌(金原奈加子)
81 白肌にむきき縄(左近麻里子)
82 両手大の字吊り(関谷富佐子)
83 首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
84 美しき全裸肢體(佐々木真弓)
85 柱に繋がれた女(長井葉津子)
86 尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
87 鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
88 荒縄縛りの刺青(山原 清子)
89 股裂きで責める(ローズ秋山)
90 ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
91 後手に縛上げる(ローズ秋山)
92 滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
93 若々しき緊縛美(佐々木真弓)
94 S男がいたぶる(佐々木真弓)
95 強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
96 正面全裸柱晒し(長井葉津子)
97 開股縛りに羞う(左近麻里子)
98 白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
99 尻立て股間縛り(木村 洋子)
100 悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号(むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号(あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号(いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号(せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号(ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号(ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

玉田美佐子 略号(ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号(てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

長野 良子 略号(てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号(てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号(まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号(やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号(ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号(りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号(ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号(ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号(ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号(へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号(いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

関谷富佐子 略号(もい) 四〇〇円

乳房責めの苦悶

関谷富佐子 略号(もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号(もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号(むち) 五〇〇円

裸身の晒し

関谷富佐子 略号(わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号(せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号(そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

一塚 啓子 略号(とう) 四〇〇円

色縛の開股縛り

長野 良子 略号(いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大塚 啓子 略号(はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号(うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大塚 啓子 略号(うい) 六〇〇円

木馬責三態

大塚 啓子 略号(もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号(いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号(もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号(よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

手大札三枚一組 略号(はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 清子 略号(はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

大塚 啓子 略号(のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大塚 啓子 略号(きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大塚 啓子 略号(きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚 啓子 略号(きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚 啓子 略号(きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大塚 啓子 略号(きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚 啓子 略号(きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

大塚 啓子 略号(なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

大塚 啓子 略号(なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号(ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

逆ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)
山原・東浦 略号 (かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けま)

浣腸後カパー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

アイヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

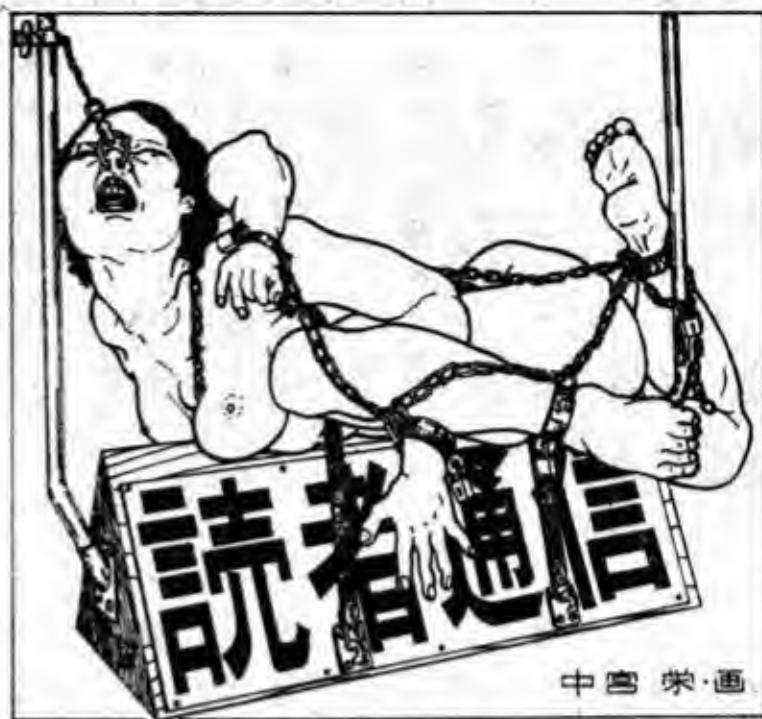
大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



写真集の臨時増刊号が出て休むひまもなく二月号の発行と、編集部御苦労のほど、お察し致します。二月号いち早く入手し早速拝見しました。今年の最後を飾る号としては、近來にない出来ばえにて、本当に楽しいお年玉として有難く味読しました。私の毎月愛読している奇クサロンでは「夫婦プレイ」の写真が今月号でも沢山載っていて嬉しかったです。福井太郎氏の「フォト通信」阪東太郎氏の「初めてのクリップ・プレイ」

と縛り」は挿入された二枚の女学生との縛り写真でぐっと生かされました。二月号を読んだ限り、小説陣も一入洗練されてきたように思います。ベテラン常連の団鬼六氏や辻村隆氏は別格としても、従来真のずぶの素人といった幼稚な文章を時折り見受けましたが、最近はそのような文章も殆どなくなっただけですね。私の主旨として、そうした幼稚な文章をいちがいに排斥するのではないのですが余りひどいものはやはり避けたいものです。座頭木之介氏の「夜の菊」

山本五郎氏「念願の文金高島田」小田原一郎氏の「愛妻を縛る」など盛沢山で、その誌面に現れた文章、写真の背景に私の空想を走らせるとき、その人々の私生活の断面を見たような気がして、ほのぼのとした気持ちに包まれるのです。末広平三さんの「私の愛した縛り人形」もほほえましい文章でした。独身の氏としては、こうした方法もあつたのだと改めて啓発されました。本文中の告白、舟山和男氏の「パンティと縛り」は挿入された二枚の女学生との縛り写真でぐっと生かされました。二月号を読んだ限り、小説陣も一入洗練されてきたように思います。ベテラン常連の団鬼六氏や辻村隆氏は別格としても、従来真のずぶの素人といった幼稚な文章を時折り見受けましたが、最近はそのような文章も殆どなくなっただけですね。私の主旨として、そうした幼稚な文章をいちがいに排斥するのではないのですが余りひどいものはやはり避けたいものです。座頭木之介氏の「夜の菊」

浅羽やすし氏の「嗚咽」の二篇は手馴れた文章で抵抗なしに読ませてくださいますがアスファルトの舗装道路をドライブするような感じ。それにひきかえ虹丸虹吉氏の「まさにたわごと」は、真に奇くらしい文章に接した思いです。素人の手になる洗練された思考と文章が私の最も好むものです。「赤と黄の衣裳」の由利美千子さんの文章はまさに一流といってよい一分のすきもない完全なもので、内容よりも文章で読ませてくれます。この女性が、本当にMだったら、もっとももっと本物の作品（告白といってもよいが）が書けるような気がします。団先生の「花と蛇」に劣らぬ素材さえ与えれば、奇くに向いた一大連載作品が出来るのではないかと考えます。今月号では「辻村隆研究」と「SMカメラ・ハントに思う」の辻村氏に関する作品が期せずして二篇載りました。が、私はこうした真面目な論稿はこれからもしどしどし発表されたいと願います。辻村氏の功績は、奇ク二十年の歴史を築いた今、SMファンとして高く賞讃してよいと考えます。徒らに裏街道の般にとじ籠らずに、私達ファンはファンなりに、同志的な結合の下に、行動を起してもよいと考えますが如何でしょう。姉小路俊介氏の「複婚讚美論」は、豊富な知識を駆使して縦横無尽に論破しています。この文章は只机上の空論では書けないものです。確固たる信念に基づいて書いてこそ始めて読む者の心を動かすのです。今月号は頁数はいつもの号と同じなのに、倍にも三倍にも私には感じました。昭和四十六年は、一層の充実を企て、私達熱烈なファンを楽しませて下さい。（東京都港区・原悦次）

何の気なしに、そして、とても誌上に載るなどとは夢にも考えずに投書しました文章が一月号の読者通信に載っているのを見たとき思わず頬が真赤になってしまいました。冷たい両手で頬を押さえた。熱くなっているの、もう一度改めて、顔を赤らめてしまいました。それから沢山のお友達からのお便りをいただき、なんだか足が宙に浮いているようで、今のところ、お返事を書くというより、ただぼんやりとしている始末です。やはり女って駄目なんだなあつくづく考えこんでいます。とても大それた小説なんて書ける筈もあ

りません。ほんとうは何一つ経験なんて、ないんですもの、駄目ですわ。といって、大胆に行動をする勇氣なんて何一つ持ち合せていない小娘なんでももの。もし新しいお友達とお逢いしても、どんなことからお話ししているのか、自信なんてないんです。だから、せめて文章でも書いてみようかと心がけたんですけど、それも駄目ときては、ほんとうにがつくりです。素晴らしい文章を書かれる方って、どんなに豊かな思想を持っていられるのかと、うらやましいです。一月号のトップで前田真知子さんが「白い陣痛」という立派な文章を書いておられるのを読んで、自分もあれだけ書けたらなあと思いが出ました。でも前田さんは国文科の女子大生、私は中学出の女店員ですもの、無理ないわと思っております。それで、顔に自信はない

〇 御送金についてのお願ひ

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる方も、便宜上「切手代用」にてお願ひ致しますが、必ず「割増」に

んですけれど、モデルになってみようかなあと、気まぐれなことを考へたりしていますが、美人で素晴らしいスタイルの前田さんのお写真を眺めると、自分なんかは月とスッポン以下、とてもお話になりません。世の中には前田さんのような素晴らしい方がいられるのだなあと猛烈にコンプレックスを感じてしまします。それに前田さんには彼氏もいるとか。私には彼氏のカもありません。只、彼女が二十二才といっておられるのに、私は二つ若い二十才、少し若いというのが、とりえといえはとりえですが才能のない私ですもの、それも未熟といってしまうは、それまでです。どなたか、こんな私を啓発指導して下さい。いられないかしら。私は素直で従順です。気はきかないかもしれないが、口ごたえするような性質ではありません。経験がないのでまだ作品はありません。素晴らしい思い出でもあれば別ですけれど。

(堺市・土井悠子)

〇 思えばよく続いたものである。私とて一号かかさず読んでいたわけではなく、時々はいそびれたりして抜ける号もあったが、それ

でももう備えつけの本棚にはいっぱいになって入りきらない位集めてしまった。週刊誌や大部分の月刊誌なんかは、読んでしまえば肩屋お払いにまわしてしまふのだが奇クだけは買った分は全部大切に保存している。私がSMに特に関心が深いからでもあるが、不思議と何度読み返してみても、いつも新鮮な味わいがあり、スルメのようには噛めば噛むほど、味が出てくる。またそれだけに、古本価値もあるのだ。尚一層手放す気にならなないのだ。一月号で前田真知子氏の告白「白い陣痛」はよかった。この緊縛日記の第二頁、第三頁を望むのは私だけではあるまい。水田真紀子という女性の作家は不思議な才能の持主である。はじめは自分の体験を書いているのかと思っていたが、毎月毎月変ったテーマで、変った文体で書いているのを読んでいて並々ならぬ非凡さを見る。それでいて文章は至って素人じみていて、またそれがたまらない魅力となっている。水田真紀子さんがベールを脱いで、その素顔を誌上に出してくる日を待っている。由利美千子さんが辻村隆氏と逢ったということが編集部だよりにか出ていたが、差支えな

ったら、そうした場面の写真を誌上に出してもらえないだろうか。

(愛知県・村川清造)

〇 一月号でプレイレポ「はじめての撮影行」を書いた城章夫さん。辻村さんや塚本さん、それに山本さんのハントやルポには、とても及びませんが、純然たる読者の投稿としては、文章といい写真といい、私は大いに買いました。上手とはいえませんが、撮影行の旅の記録に真実味があり、読者として身近かに感じ、愛読しました。この旅の続篇を大いに期待します。このモデルになった女性の生長の過程を知りたいと思います。写真が豊富に挿入されていたのも大変楽しかったです。私も適当なモデルさえあれば、城さんのようなプレイレポを書いてみたいのですが、いかんせん、ガールフレンド一人ない始末です。今のところ無理です。それで、せめて誌上で楽しみたいと思いますので、どうか、これからこうした読者の投稿を掲載して下さいよう、お願いいたします。

(熊本市・湊守正)

〇 私は丁度今から四年前の四十二年新年号の読者通信にのせていた

だきました大町市の吉沢頼子です。その頃、私は勇気を出して夫婦交換プレイを加味したSMごっこの便りを出したのですが、現在と違ってまだまだ一般化されていなかったし、本誌でも余り話題にならなかったもので、私の独り相撲のような形で、同好の御夫婦への呼びかけも、その反響は二、三の人に限られました。私も当時三十五才に近い年齢でしたが、今では四十才近いおばさんになってしまいました。しかし、SMプレイの方は、その後も度々、経験を持ちましたので、一層磨きがかかったと自分では思っています。

いろいろ事情で現在は交際は途だえしています。他の方々とSMプレイを行なった後の私達の夫婦生活の激しさ愉しさを思い浮かべると、そのときのこと忘れられないのです。それに、私達は露出症の気味もありますので、理解のある方でしたら、独身の男性の方でもお友達になれたらと考えます。私達はお客商売ですが、二、三日でしたら自由に旅行も出来ますから、東京、大阪近辺の方々でも結構です。私は三十八才、夫は三十七才で、子供はありません。お便りいただければ幸いです。

(長野県大町市・吉沢頼子)

大阪の小塚守子様。御元気ですか。小生は、いつの頃からか女性下着、おむつに愛着を持ち、また浣腸にも魅かれております。先日出張の折の旅館で一週間は、私にとっては最大の思い出になりました。そのとき持っていたのは六尺ふんどし一本、おむつカバー(ビニール、ゴム)二枚、メンスバンド、パンティ二枚、五〇CCガラス浣腸器一本、紙おむつ十枚などです。そして石けん浣腸、グリ浣などを行ないました。グリ浣をして紙おむつを当て、アミ目の

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フォト

開股羞恥責めの姿態

安井喜久子 略号△しう▽

髪吊りで強烈ムチ打ち

安井喜久子 略号△した▽

片足首引きつけ縛り

安井喜久子 略号△しち▽

尻立て鞭打ち艶姿

安井喜久子 略号△しつ▽

柔肌に炸裂するムチ

安井喜久子 略号△して▽

エビ縛りの鞭打ち

安井喜久子 略号△しと▽

貞操帯着用鞭打ち

安井喜久子 略号△しや▽

痛打にもかく美女体

安井喜久子 略号△しゆ▽

あぐら縛りの羞恥責

安井喜久子 略号△しよ▽

片脚挙げで晒す裸身

中河恵子 略号△とは▽

強烈エビ縛りで苦悶

中河恵子 略号△とに▽

膝頭縛り開股竹棒責め

中河恵子 略号△とほ▽

竹棒開股足首縛り

中河恵子 略号△とへ▽

股間縛りの裸身表情

中河恵子 略号△とち▽

菱縄縛り猿ぐつわの表情

中河恵子 略号△とり▽

乱痴戯騒ぎの結末

中河恵子 略号△とぬ▽

菱縄縛りで床に喘ぐ

中河恵子 略号△とる▽

浣腸責めの甘い恐怖

中河恵子 略号△とか▽

浣腸液の注入直後

中河恵子 略号△とま▽

強制浣腸の各姿態

中河恵子 略号△とみ▽

浣腸責めの美態開陳

中河恵子 略号△とめ▽

浣腸を待つポーズ

中河恵子 略号△とも▽

メンスバンドで押さえ、おむつカバーをして外出しましたときの快感をまじえた苦痛は、浣腸を愛好する者のみの、知るところでしょう。小塚様も浣腸のとりこになられておられるようですが、貴女の空想を、実現させてあげたいですね。貴女とぼくは同じ年です。同じ悩みを持ち苦しんでいるのも同じ、御友達になられたらと、勝手に思っています。貴女は自己嫌悪を感じると御書きですが、ぼくは他人に迷惑をかけずにすれば自分だけのことでだからそんなに悩まなくても良いと思います。貴女だけの、ささやかな行ないとしていれば良いと思います。貴女と浣腸について御話ししたいですね。

(滋賀県・栗田浣好生)

小生は自分の趣味でやっておりますDPE技術をどうしても皆様のお役に立てたくてペンをとった次第です。本誌を御夫婦で愛読されている方は、奥様がSMの良き理解者であると思います。そのお二人のプレイ中に、かならず一度は、二人の姿を写真に残しておきたいと、お考えになったことがあったと思います。しかし、DPEができないので、その思いを断念

している人が多いと思います。小生は自分の恋人をMに飼育して写真に撮り残しておきます。始めは嫌がっていましたが、最近では自分から写してくれとせがみます。もし皆様の中で困っておられる方がありましたら遠慮なく御申し出下さい。

(東京・木島真樹)

読者の一人として一度はこの欄に投書してみたく思い、勇気をふるってペンをとりました。小生は貴誌を知り、すでに五、六年になります。そして最近では毎月の発売をたのしみにしております。ところで小生は三十才の男性で、小さいときから若い女性のアヌスや浣腸に興味を持っており、同じマニアの女性とプレイをしたく思っております。しかし残念ながら、そうした機会もなく、またプレイメイトもいない現在です。浣腸責めやアヌス責めマニアの女性の方、ぜひ、お便り下さい。きつと満足させるプレイ・メイトになれると思います。十一月号で拝見した小塚守子様、十二月の仲山知子様。一度心ゆくまでプレイをしてみませんか。

(伊那市・ザザ虫)

この前、始めてお便りを差し上

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号△ゆめ 五〇〇円

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号△ゆえ 五〇〇円

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号△ゆひ 五〇〇円

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号△ゆあ 五〇〇円

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号△ゆも 五〇〇円

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号△ゆに 五〇〇円

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号△ゆほ 五〇〇円

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号△ゆみ 五〇〇円

股間縛りで悶える

大手札四枚一組 略号△ゆる 五〇〇円

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号△ゆへ 四〇〇円

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号△ゆわ 五〇〇円

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号△ゆよ 五〇〇円

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号△ゆぬ 五〇〇円

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号△ゆる 五〇〇円

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号△よれ 四〇〇円

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号△よそ 四〇〇円

全裸高小手の麗身

大手札三枚一組 略号△よの 四〇〇円

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号△よや 四〇〇円

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号△よい 四〇〇円

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号△よふ 四〇〇円

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号△よえ 四〇〇円

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号△よぬ 四〇〇円

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号△よあ 四〇〇円

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号△よた 四〇〇円

げましてから何日ぐらい経ちましたでしようか。あのような恥かしい夫婦間の秘密を、たとえ主人から強制されたとはいえ、誌上に発表して頂き、多くの読者の方々の御目に触れましたことは、身を切られるほど辛うございました。とんでもないことをしてかしてしまつたのではないかしら、と後悔をしなから、あるいは編集部で没にして下さるかもしれないと考える一方、心の奥底では、早く活字になつたものを読んでもみたいと思ふ気持ちもございました。あれ以来、ずっと心が落ち着きませんでした。でも、とうとう誌上に、あのように堂々と掲載されましたので、穴があれば入りたいたような恥かしさと晴れがましさと、何とも申し様のない複雑な心持でございます。本誌発行日の夕方、主人が帰宅しまして、まだお風呂も、食事も済まない中に、わたしに直ぐ丸裸になれと言います。いつもは夕食が済んでからプレイを始めますのに今日に限ってどういふわけかしら何かまた、わたくしが失敗をしかして、その罰にお仕置を受けるのかしら、と思いつつも、いつものように素直に丸裸になり主人の前にうずくまり、両手を後ろに回

してありますと「今日は縛るのは後廻しにする。その前にテーブルの上に立って、これを大きな声で読むのだ」と言つて本誌を手渡され、誌上に発表して頂いた、わたしの手紙を、何度も何度も読まされました。その間主人は皮鞭を片手に、お酒を飲みながら、声が小さくなつたり読み遅えたりしますと、直ぐに太腿や乳房に鞭が飛んで参ります。その後は、いつものようにお縄を受けて主人の前に立たされ「どうしてこのような手紙を出したのだ。森田組の静子は羞恥責めが主で鞭打ちの少ないのが羨ましいとは何事だ。俺の鞭が、そんなに気に入らないのか」とか何もかも主人に強制され認めました手紙ですのに、それを種に一晚中、いたぶられました。何もかも夫婦プレイの中の、お芝居とは存じておりますものの、その夜のお仕置は今までになく格別きびしゅうございました。主人は月に一度は必ず便りを出すように、また、写真もぜひ同封するように言いますが、まだ恥かしい写真を御覧に入れる勇氣はございません。しばらくはお便りだけで勘弁して下さいませ。

(北川まり子)

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸裂する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もろ▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

小生は旧刊誌当時から、大の女性切腹ファンで、特に妊婦または肥満腹の切腹を好みますが、ここ数年來というものは、貴誌から女性切腹物が殆ど姿を消し、半ばあきらめていたところ、十二月号で佐野みさ子さんが勇敢にも誌上で臨月腹の切腹フォトを発表して下さいました。思えば、今まで木戸増田、金原、各女史の妊婦モデルが続きながら、切腹フォトは全然なく、カメラハントを読むにつけ何故一枚ぐらい切腹フォトを撮れないのだろうか、非常に口惜しく思っていた次第です。読者欄を見ても、以前は女性切腹ファンの通信が二、三通あったのですが、最近殆ど見受けられません。女性切腹物は貴誌の特徴の一つであり、隠れたファンも多いことを再考されて女性切腹物の記事を多くとり入れる様、おねがいします。佐野みさ子さん。臨月腹切腹フォトの提供、ありがとうございます。た。できれば出産前に臨月腹切腹のポーズを色々おねがいたかったのですが、残念ながら間に合いません。そうにもありません。しかし出産後は一般に女性は下腹部に脂肪がつきやすいと言われておりますし、御自分でも「豊かに脂肪の乗

った腹部」と、言われているぐらいです。出産後も切腹ファンのため、ぜひ記事、フォトを多く発表して下さい。貴女ぐらいグラマーな肢体でしたら素晴らしい切腹フォトができると思います。また貴女は浣腸にも興味をお持ちのようですが、空気浣腸されて妊婦のように膨れ上った下腹部を充分、露出させて正座した貴女を、後ろから抱きかかえるようにして腹を切らす介添切腹など、ぜひ実現させて下さるよう、ファンの一人として今から楽しみにしております。

(宮崎市・女性切腹ファン)

本格的な冬に入ろうとする今日の頃、皆様いかがお過ごしでしょうか。私は毎月、御誌を楽しく拝見させて頂いている一ファンです。つくづく、どなたかとお友達になりたいと悩んでいる者です。堺市の土井悠子様、私と体験してみませんか。私は決して、ひやかしや冗談で、言っているのではありません。私も大人のはしくれです。自分の言うこと、することに責任を持つつもりです。私にはガール・フレンド(恋人)はありません。もちろんSMの経験は一度もありません。貴女はSM小説の

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はわ▽

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はふ▽

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はほ▽

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はあ▽

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はう▽

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はさ▽

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はめ▽

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はし▽

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はも▽

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へむ▽

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へめ▽

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へも▽

ムチ打ちの陶酔境

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へさ▽

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へし▽

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へす▽

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へせ▽

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へゆ▽

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へた▽

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へち▽

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へつ▽

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へて▽

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へと▽

勉強と知りました。私は今までS一本でしたが、現在ではMも味わいたいと思っている矢先ですのできつと貴女に対して不利益じゃないと思います。私はカメラ・ハントのような内容のものが好きです。決して残酷なものは好みません。どうか貴女のお便り、お待ちしております。

(大阪府・ある若者)

奇譚クラブも年輪を重ねまして二七五号とか、四十六年新年号を手にして、いささか感慨無量に存じました。かえりみますと、昭和二十八年、発禁直前の貴誌に連載された土俵四股平氏の「女斗美考現」畔亭数久氏の「娘相撲」あたりで貴誌を知り、その後、バックナンバーをあさったり、白表紙時代をへて今日まで、私の人生の回顧とオーバラップした貴誌の各号に、それぞれの思い出が重なっております。当時、紅顔の美少年(のややヒネたところ)であった私も、すでに中年の扉を開き、先般、辻村隆氏の述懐にもありましたが、年月の早さをかこつ次第です。土俵氏は申すまでもなく、加茂、雪崎、岡平、田中、円山、海野、芦浦、増田、妙花山人、土岐

江波、高川、津谷、椿、月形、浦岸、小西、和智、各氏と、あるいはまだあるかもしれないが、そして奮斗士好太氏と、女斗美の執筆者も、ずい分と多く、それぞれに面白い文章や挿画を提供されてきました。さて一月号では奮斗士好太氏の御作を面白く拝見しました。数年にわたる、力作であった。「花の女斗美たち」も愉快でしたが、今回の御作は女高生の第一人者という制約を離れて作者が第三者として自由に筆を進めておられるので、女斗美観や進んでは女性観? まで拝察できて大変興味深く共感するところ大です。女斗美マニアにも、いろいろのタイプがあります。若い女のすもうを熱愛する男(女の方はないですか)には何か共通した女性観や物の見方があるようですね。もちろん、増田氏のような中年の肥満した女のすもうを好まれる方等とは、またまた違うかもしれません。一月号の御作の中にでも「自然の子」とか「紫の輝」とか「男の様な気性」とか「少年のような尻」とかいう言葉があり、面白く思いました。紫の輝は、私も平素、女斗美に合ったものと思っていまして、かたが雪崎氏の御文章

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女 大手札三枚一組 略号△てき▽ 大塚 啓子	後手裸身柱縛り 大手札四枚一組 略号△てか▽ 大塚 啓子	縄目にあえぐ裸女 大手札四枚一組 略号△てく▽ 大塚 啓子	豊麗な裸身をくびる縄目 大手札四枚一組 略号△てこ▽ 大塚 啓子	後手高手小手縛り 大手札三枚一組 略号△てま▽ 大塚 啓子	長襦袢の緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てみ▽ 東浦 啓子	緋の腰巻緊縛色模様 大手札三枚一組 略号△てむ▽ 東浦 啓子	猿ぐつわに呻く女 大手札三枚一組 略号△てめ▽ 東浦 啓子	柱宙吊り強烈縛り 大手札三枚一組 略号△ても▽ 東浦 啓子	ポリウムを縛りあげる 大手札三枚一組 略号△てん▽ 東浦 啓子	縄に苦悶する裸女を狙う 大手札三枚一組 略号△てる▽ 東浦 啓子
縄に悶える緊縛色模様 大手札二枚一組 略号△うて▽ 東浦・大塚	真紅の腰巻着用縛り 大手札四枚一組 略号△うこ▽ 大塚 啓子	華麗なる緊縛裸身 大手札三枚一組 略号△るむ▽ 一宮百合子	みだらな開股縛り 大手札三枚一組 略号△るの▽ 一宮百合子	責めに疲れた諦観 大手札三枚一組 略号△るお▽ 一宮百合子	真紅の腰巻姿で緊縛 大手札三枚一組 略号△るま▽ 一宮百合子	羞らしい真正面縛り 大手札三枚一組 略号△るけ▽ 一宮百合子	若肌に喰い込む縄目 大手札三枚一組 略号△るふ▽ 一宮百合子	高手小手後手縛り 大手札三枚一組 略号△るや▽ 一宮百合子	股間縛りの開股姿態 大手札三枚一組 略号△れよ▽ 中河 恵子	羞らしい股間縛り 大手札三枚一組 略号△れに▽ 中河 恵子

の中に出てきまして（これはプロ女力士のことでしたが）驚いたことがあり、今回もまたまた現われまして驚いた次第です。先輩、土俵四股平氏は「禪は黒がよい。色禪などは感心しない」と言っておられ、達人の境地とは、そんなものかもしれません。単色であれば、いろいろの色の禪が美しくもあり、とくに紫色は女体に品位を与え、女斗美の美学の実現に何かをつけ加えるように、思っています。女すもうマニヤが、このような、きわめてマトモな美学を持つことに對して、ロープをはじめネクター等、SMの方々は物足りなく思われるかもしれません。かわいくて、りりしくて、上品で逞しくてエロチックというような審美眼が共通するものかと、思っております。奮斗士好太氏の御作の続篇をたのしみにし、御健筆を祈ります。（雄松比良彦）

初めてお便りします。奇くを三年ほど前に古本屋で偶然、手にしてから、毎月二十五日を楽しみにしております。店頭で奇くを手にとって写真があるのをみて胸をドキドキさせたのを思い出します。文章では表現しきれない、美しい

緊縛姿態は、ほんとうに魅力的です。しかし写真の一部が白くカットされていたり、紙質のためか、せつかくの写真が不鮮明なのが気にかかります。辻村先生、いつまでも頑張って私達を楽しませて下さい。その他、貴誌において特に団鬼六先生の「花と蛇」芳野眉美さんの「二対三」が強烈な印象を与えられました。「花と蛇」の静子は、私にとって理想の女性像です。心のすべてをゆだねてしまつたようで、どこか一点をとどめてある、そこに魅かれるものがあります。どうか毎月、静子を登場させて下さい。静子のいない「花と蛇」なんて……という気持です。また「二対三」の絵里子も、好きなタイプです。いろいろ勝手なことを書きましたが、どうか今後も益々御発展の程を。（神戸・馬耳東風生）

一月号の読者欄で、小生が浣腸したあとアヌに栓をすると書きましたので、どんな栓だろうかと疑問を持たれた方もあると思います。浣腸液が石けん水を薄めた食塩水、あるいはグリセリンであれば、訓練次第で十分ぐらい辛抱できますが、ドナンやグリセリン、

双胎臨月蛙腹鮮烈写真 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号△れや▽	双胎臨月腹強烈縛り 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号△れゆ▽	臨月腹裸身の媚態 大手札六枚一組 二〇〇〇円 増田みゆき 略号△れえ▽	黒縄縦縛りの媚態 大手札三枚一組 一〇〇〇円 中河恵子 略号△れぬ▽	立縛りにあうの裸女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号△れね▽	開股された股間縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号△れの▽	豆絞りの猿ぐつわ縛り 大手札三枚一組 一〇〇〇円 木村洋子 略号△れむ▽	柱宙縛りに喘ぐ刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やか▽	高手小手に悶える全裸 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やき▽	緊縛に映える入墨の肌 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やく▽	脱がされた緊縛刺青女体 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やも▽	縄にのたうつ入墨裸身 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やし▽
腰巻一つで縛られる刺青女 大手札三枚一組 一〇〇〇円 山原清子 略号△やみ▽	女相撲迫力投業連続動作 大手札十二枚一組 五〇〇〇円 大塚・東浦 略号△なる▽	恵子の妊孕美観賞 大手札四枚一組 二〇〇〇円 中河恵子 略号△ぬめ▽	孕み若妻の羞らい 大手札四枚一組 二〇〇〇円 中河恵子 略号△ぬね▽	八の字の開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しい▽	足枷強制開股責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しみ▽	全裸強烈逆エビ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しけ▽	両手吊り足枷責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しこ▽	両腕逆手吊り責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しら▽	豊満なる臀部責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しれ▽	大の字縛りと足挙げ責め 大手札三枚一組 一〇〇〇円 愛知葉子 略号△しわ▽	お申込みは大阪阿倍野局私書箱 第14号天星社宛へ願います。

食用酢を、そのまま使えば、たとえ紙や布切れで押さえても便意の方が強く五分ももてば、よい方です。この襲ってくる便意に長時間耐えぬくには直径三センチ乃至五センチ程度のソーセージに油をべったり塗って、押し入れることです。当初、若干痛いのが、数回試みると痛さもたいしたことはなくはいります。そして便を外に出さないための最も適した栓の役目を果たしてくれました。私の彼女を五年間、浣腸責めで訓練しましたが、今ではグリセリンとドナンと混ぜた原液を二百CCの浣腸器で浣腸し、長時間、耐えさせるために直径五センチぐらいのハムを押し込み、耐えさせています。そのため二十分ぐらい耐えています。油汗をかくて苦しんでいる彼女の腹を強く押さえると、悲鳴をあげて泣き叫び、ついには失神することもあります。この強烈な浣腸責めとアヌ責めを併用した方法を、ぜひ試されたいかが。

(東京・浣腸キチ)

○ 小生は貴社発行の奇譚クラブを創刊より愛読している者ですが特に団鬼六先生の「花と蛇」の大ファンであります。毎月お願いして

二十日過ぎに到着する日を待ち遠しく思っており、開封と同時に、「花と蛇」を、最初に開く次第です。現実とはかけ離れた、この夢のような物語を、実際に自分も中に入って捕われの美女達を鬼源達と一緒に調教しているような気持ちです。特にこの中に出てくる美女達のイメージが(桂子、最近誘拐されてきた珠江夫人を除く)小生として最も好きな容姿であり、二十六才の美しい若妻静子を始め、二十三才の均齊のとれた鉄火娘京子、同じ年の大宝石店の令嬢小夜子、十八才の清純可憐な美津子、そして世間を全く知らない十九才の京都娘美沙江など、これだけの美女を一堂に誘拐し、性の奴隷として飼育し、命令に服従させるということは並大抵のことではないでしょう。さて、ファンとして特に感じたことを一、二述べたいと思います。筆をとった次第です。主役の静子夫人が殆ど毎号のように責められ性の奴隷として彼女も自覚を持ち命令に服従している気持が分かりますが、他の美女達は大人しく地下の牢に押し込められていたとは限りません。その後、どうなっているのか、特に美少女の小夜子、美津子の責め悶える姿を記

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号	五〇〇円
金原奈加子	略号	八さめ	五〇〇円
両手吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さも	四〇〇円
若妻初妊婦の哀歎	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さい	四〇〇円
妊婦の全裸縛り全身	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さに	四〇〇円
妊婦腹の緊縛側面	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さみ	四〇〇円
強烈縛り妊婦責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さる	四〇〇円
若妻の緊縛妊孕美	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さま	四〇〇円
膨満の妊婦乳房責め	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さむ	四〇〇円
臨月腹の全裸晒し	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さち	四〇〇円
躍動する妊婦の裸像	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さほ	四〇〇円
妊娠という異常美の女体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さへ	四〇〇円
見てほしい臨月腹	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八さと	四〇〇円
妊婦全裸の全身肢体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
金原奈加子	略号	八ささ	四〇〇円
全裸正面の縄掛け	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	略号	八れる	四〇〇円
柔肌の高手小手縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	略号	八れほ	四〇〇円
後手首を縛られた少女	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	略号	八れへ	四〇〇円
飼育された美少女縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池美喜	略号	八れと	四〇〇円
縛られた美女二人	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池・松山二嬢	略号	八とそ	四〇〇円
全裸の美女を連縛する	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
小池・松山二嬢	略号	八とれ	四〇〇円
白肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	略号	八とわ	四〇〇円
一糸まとわぬ柔肌縛り	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	略号	八とら	四〇〇円
開陳した華麗縛り肢体	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	略号	八とゆ	四〇〇円
縄に喘ぐ諦観の相	大手札三枚一組	略号	四〇〇円
松山真樹子	略号	八とえ	四〇〇円

載して下さる事を望んでいます。また捕われの美女達の逃亡を防ぐために全裸にしているのですが、羞恥心により可憐さを見せるため純白のスリッパ一枚だけとか、今流行の超ミニぐらひは時々着用させてもよいと思います。鬼源や川田たちの馬鹿力によって、常時後手に堅く縛り上げられているので逃亡は殆ど無駄だと思います。最後に、捕われの美女達の容姿を画いたもの（四馬孝先生のが好きです）を載せては如何ですか。

（大分県・高田敏雄）

土井悠子様。お便り拝見しました。貴女のような女性を責めることが私の念願です。「花と蛇」の静子夫人のように素っ裸にして、浣腸、排出プレイをしてみたいと思っています。ぜひ貴女とのプレイを願っています。

（大阪府堺市・武井一人）

二十五才の男。はじめて手紙を出します。奇クを読みはじめて数年になるのですが、おきまりのちゅうちよで遅くなりました。でも断乎、手紙を出しまして、熱狂のまった中に突進しましょう。縛って打って、蹴とばして、開いて

あげくのはてに、やさしく身体じゅうを撫でてあげましょう。―あ、神水も……。さあ……。最初から、うまくいかないのは人生の習いで。美しい婦人よりの便りを待ちます。

（東京・鶴首雄男）

○ 大阪市中川様。貴女のお便り二月号の誌上で大変、楽しく読ませて頂きました。私は三十五才になる平凡な会社員ですが、二十才のとき、はじめて本誌を見て、それ以来、約十五年の間、愛読してきましたSMの大ファンです。貴女は大変、小柄だと卑下されていますが、一五六種もあれば結構です。ヌードモデルの経験があるのとこと、プロポーションも抜群だと思えます。私自身、小柄ですので、身長のことには一向に構いません。要するにM傾向の女性であるということが我々S男性にとって最も大切なことなのです。私も十五年間奇クとおつき合ひしていますのでSMプレイについては、かなりくわしいつもりですが、残念ながらには過去に一度だけプレイをしただけで、M女性に恵まれません、時折妻を相手に真似事をしていような状態です。そこで貴女のお便りを読み、直ぐさまペンをとった

SとMの甘い一瞬	抱擁する美女二人
大手札三枚一組 略号△とさ▽	大手札三枚一組 略号△とや▽
松山・小池二嬢	ミキとマキ
縄に通う愛情の焰	柔肌と柔肌のレス狂態
大手札三枚一組 略号△とけ▽	大手札三枚一組 略号△とよ▽
マキとミキ	ミキとマキ
相愛の極致を描く二女	緊縛麗姿に映えるライト
大手札三枚一組 略号△とな▽	大手札三枚一組 略号△こほ▽
マキとミキ	佐々木真弓
鞭に狂う悦虐表情	腎部強調後手縛り
大手札三枚一組 略号△らて▽	大手札三枚一組 略号△ころ▽
関谷富佐子	羞恥に悶える全裸緊縛
鞭打ちにうねる肢体	大手札三枚一組 略号△こに▽
大手札三枚一組 略号△らあ▽	ホステスの緊縛姿態
関谷富佐子	大手札三枚一組 略号△こち▽
足吊りの被虐肢体	二つ折りで責める女体
大手札三枚一組 略号△らえ▽	佐々木真弓
関谷富佐子	脈打つ全裸の臨月腹
美しきマゾの境地	大手札三枚一組 略号△こふ▽
大手札三枚一組 略号△らせ▽	中河恵子
関谷富佐子	臨月腹の革紐股間縛り
裸後手柔肌縛り	大手札三枚一組 略号△こや▽
大手札三枚一組 略号△こよ▽	中河恵子
佐々木真弓	猿轡の臨月妊婦腹縛り
乳房強烈膨隆責め	大手札三枚一組 略号△この▽
大手札三枚一組 略号△こわ▽	卓上の股間縛り狂態
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△こそ▽
海老責めに苦悶する	羞恥の足挙げ責め
大手札三枚一組 略号△こお▽	長井葉津子
佐々木真弓	大手札三枚一組 略号△これ▽
全裸の緊縛全身晒し	
大手札三枚一組 略号△こる▽	
佐々木真弓	
煙草責めに喘ぐ女	
大手札二枚一組 略号△こぬ▽	
佐々木真弓	

次号(四月号)は二月二十五日に発売いたします

次第です。貴女のプレイについての望みは、誌上でははっきりしません、一度お逢いして色々お話をしてみたいと思います。二十八才といえば女盛りですね。その熟れきった女体を全裸に剥き、縄で縛り上げ、思う存分に責め、もてあそぶ……と考えただけでも、ぞくぞくしてきます。股間縛り、海老責め、開股縛りにされ、貴女は私の手の中で、のたうち廻るのです。素晴らしいではありませんか。どうでしょう、私とプレイをしてみませんか。(尼崎・松岡生)

○ 拝啓、毎号、貴誌を愛読いたしております。最近の貴誌はS女性の書いた手記や投書が全然、なく残念です。私はMの中年男性ですが、Sの女性に腕力で征服され、いじめられたくてたまりません。私と格闘のプレイをして、いじめて下さるS女性の出現を期待しております。私のあこがれているプレイは、次のようなものです。畳の上をマットにして互いに組み合いプレイを開始します。わざをかけ合い、どっと倒れたら寝わざに

入り、相手を押さえつけようと必死に斗います。そして遂に力のまいったS女性によって仰向けにされ下になったM男性は馬乗りに跨がられ組敷かれてしまいます。下になったM男性は跳ねかえそうともがきますが、男性を組み敷くぐらゐの女性ですから体重も重く力も強いので、身動き一つできません。これから捕えられた鼠をなぶる猫のようにS女性の尻の下に敷かれてゐるM男性をなぶり、いじめるプレイを始めます。身動きもできずに敷かれてゐるM男性の鼻をつまんだりして「口惜しかったら踏みかえしてみな！」と言いなから、なぶります。こうして長時間にわたり馬乗りを楽しみながらS女性の征服感を満足させます。M男性は身も心も完全に征服され奴隷となることを誓い、プレイを終わります。男性を馬乗りに組み敷きたい女性の方、私をこんな風にして、いじめて下さい。

(東京・青木雄四郎)

○ 大阪市東淀川の中川堯子様。初めてお便りします。小生、奇クは

数年前より楽しく愛読している者です。ウーマンリブ、女性上位といわれている昨今に於いて、貴女様のようなM的女性がおられることは、誠に喜ばしいことと存じます。SMといえば、とかく変態的と思われがちですが、反面、このプレイを通じて正しく利用していけばフィーリングの時代の現代下に於ける男女両性の円満化、明日へのカテゴリーとなることが多々あると思われまふ。小生も何年か前にこの経験を得たことがあります。仕事は鬼となり、寧日、余暇なく働き続けている内に早や四十年代を半ば過ぎてしまいました。けれども若い人に負けないファイトは未だに消えていないと、思っています。昨今、いささか余裕もできましたので、SMを理解される女性の方があればと心待ちしていた処、偶々奇ク二月号で貴女様の記事を拝見。是非、貴女様とお会いして貴女様の御要望に応えるべく、SMについて語り合い、フォトプレイをしてみたいと思っております。プレイを通じて貴女様の個性の美を探し求め、あわせて女性の喜びを遺憾なく発揮して満足して載けるものと存じます。お互い

○ 東京の小出秀子様。貴女の通信を拝見しました。私も、まだ奇クを愛読してから日が浅いのですが貴女の通信を見て私もお便りをさせていただきます。秀子様。私とプレイをしてみる気はありませんか。私は苦痛よりも羞恥を与えたいプレイを好みます。つまり股間縛り、開股縛り、あぐら縛り等です。もちろん剃毛も行ないます。貴女を乳房強調縛り、股間縛りをして映画を見たりすれば、貴女もスリルがあると思います。如何でしょうか。両手は高手小手で、映画を見ているときは股も縛ります。映画館を出てからは、両手を縛ることだけは許して、股縄はそのまま、お茶を飲んだり食事をしたりすれば最高と思います。如何ですか。これはほんの一例ですが、その他、色々な方法を考えています。(神奈川・山本一夫)

○ 45年7月号で初めて「妻をM性にしたい」と言い、8月号で先輩

編集後記

○年に一度の正月。二度も三度もあったらヤコシイでしょうが、二カ月前に無理して字づらだけにしろ。新年気分をカキ立てた者としては、二度目という想いも無くはありません。尤も、現実に見聞する周囲総てが気を揃えての中で、気忙しい義務感を放り投げ、フンダンに眺められるお淑やかそうな晴着の娘さんの姿に眼尻を下げていられるだけに、やっぱり「本番」の方がワタシヤ好きです。

○味のある毒舌「蟬の斧」ハセトヨシヤを巻頭に採り上げさせてもらった本月号ですが、本文中のカット、読者ギャラリイにイメージ画を収録し、サロン欄は、昨年十月号の

好評に依って、寄せられたオアツイ写真のみにて埋めました……といえはカッコイイのですが、実のところは計画的割振りではなく、誌面の都合上、こうなってしまうのです。勿論、プレイ写真は歓迎しますし、出来るだけ掲載したいと思っておりますが、だからといってイメージ画を軽んじているわけではありません。むしろ、絵に託した告白という意味でより比重を掛けて拝見しているつもりです。手軽といえはいえるだけに応募数も写真の数倍ですが、いざ掲載となると、二の足を踏むのが大部分といって差支えありません。性質上巧拙は無視出来ませんが、自由な着想、奔放なデフォルメが可能だけに、折角のイメージが極端な書込みで、収録不適になつてゐるのが比較的多く、惜しまれます。

懸賞原稿募集

体験、告白、手記

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

創作、小説、物語

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはとて作品は必ず誌上に取上げて御投稿願います。採用篇には賞金十萬元迄贈呈。

感想、論評、批判

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

映画、雑誌、演劇、新聞

単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

☆ 本誌御購読の榮 ☆

予約に限り

一月分(1冊)三五〇円(送20円)
三月分(3冊)一〇五〇円(送共)
半年分(6冊)二一〇〇円(送共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

三月号

(第二十五巻第三号)
(通刊第二百七十七号)

昭和四十六年二月二十日 印刷
昭和四十六年三月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビヤ写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努める各条例に指定されなすいよう充分に注意して編集いたしておりますが、本来成人向として発行を企図しておりま売下さらないよう、特にくれぐれもお願申し上げます。